2017 年度　根力育成プログラム

プロジェクト実習
活動報告書

2018 年 3 月

茨城大学人文社会科学部

巻頭言

人文社会科学部長　佐川 泰弘

茨城大学人文学部は人文社会科学部へと今年度改組しましたが、人文学部時代からいろいろな「学び」の場を用意してきました。今年度「プロジェクト実習」を履修した学生向けのカリキュラムでも、様々な人文科学系・社会科学系の学問分野の講義や演習等に加え、学部共通科目も多く開講しています。その一つが本授業です。

2011 年度以来、茨城大学は学生の就業力育成を目指す教育プログラム「根力（ねぢから）育成プログラム」を展開してきました。当学部は全学プログラム終了後も、それを学部独自の教育プログラムとして存続させてきました。「プロジェクト実習」は PBL 技法に基づく授業であり、同プログラムの中核に位置づけられています。PBL（Project Based Learning）技法とは「課題解決型学習」とも訳され、昨今その教育効果の高さが注目されているアクティブ・ラーニングの一つです。

社会の現状を分析し、課題を見つけ、その課題を解決するため主体的に行動する。自分の意見を発信し、他人の意見を丁寧に聴き、異なる価値観を持つ人たちとチームを組んで課題に取り組む。そのような「社会人」を育てることが「プロジェクト実習」の目標です。

この授業は、人文の学生だけでなく、教育学部や理学部、さらに単位互換協定を結んでいる茨城キリスト教大学、常磐大学の学生も一緒に履修しており、授業がまさに一つの「社会」となって、互いに切磋琢磨する場となっています。直近の 5 年間で、のべ 239 名が「プロジェクト実習」を履修しました。特に今年度は「プレゼンテーション講座」も並行して開講し、事業成果の「見せ方」を習得することにも力を入れてきました。その効果が報告会でのプレゼンにも現れていたと思います。

「プロジェクト実習」授業運営をご支援いただいている地域の皆様の日ごろのご尽力に改めて深く感謝申し上げますと共に、大学で 4 年間を過ごして巣立っていく若者たちの成長をうながす本授業の進化や深化の様子を本報告書によりご確認いただければ幸いです。

はじめに

神田　大吾

プロジェクト実習は、社会人の基礎を育成する授業です。

物事に進んで取り組む主体性や、他人に働きかけて巻き込む力。あるいは、現状を分析して目的や課題を明らかにする課題発見能力や、課題や課題解決方法が抱える影響をイメージする想像力。あるいは、発信力に傾聴力、柔軟性や規律性などに支えられたチームワーキング能力。これらの力を在学中にある程度まで身に着けてほしい、との目標を掲げて始まったプロジェクト実習は、今年で開講 6 年目を迎えました。

プロジェクト実習は PBL（Project Based Learning）授業です。学外ご協力者様からご提案いただいたプロジェクト課題に、5 人以上 9 人以下のチームを作って取り組みます。教室での授業に加え、授業時間外に自主的にミーティングを重ねて課題の考察を深め、チームで課題解決を目指します。キャンパスを離れ、遥か年上の社会人と接することと相まって、若者たちにとって、コミュニケーション能力をはぐくむ貴重な勉強の場となりました。

チームでプロジェクト課題に取り組む過程において、学生は四回のプレゼン報告を行います。6 月の構想報告会を皮切りに、前期末中間報告会、後期キックオフ報告会を経て、12 月の年度末活動報告会と、山を一つずつ越えていかねばなりません。活動の節目ごとに、「今、何が問題なのか」、そして「この問題を解決するにはどうすべきか」に考えを巡らせ、互いに知恵を出し合いながら困難を乗り越えて行きます。時には意見の相違から、ミーティングに緊張した空気が流れることもありますが、それもまた大事な経験です。プロジェクトチームのメンバーが単なるお友達から本当の仲間となり、「チーム」が生まれる瞬間だからです。

このように社会人として求められる各種のジェネリック・スキルをはぐくむ授業がプロジェクト実習です。2017 年度は 8 つのチームが活動しました。学生たちが一年間に何をどれほど学んだか、どのように大人に近づいていったか、若い彼らの「学びの記録」をご笑覧いただければ幸いです。

目　次

巻頭言

はじめに

目次

Ⅰ：プロジェクト実習の概要と 2017 年度の授業改善

１：プロジェクト実習の概要と今後の展開　3

２:2017 年度の授業改善　4

Ⅱ：チーム別活動報告

１：プロジェクト実習　2017 年度の運用　19

２：KITAIBA Art Project チーム　活動報告　25

３：さとみ・あいチーム　活動報告　45

４：D-CEP チーム　活動報告　87

５：Domaine MITO チーム　活動報告　111

６：チームみなと☆ミライ　活動報告　139

７：いばっピ団チーム　活動報告　157

Ⅲ：年度末活動報告会

１：趣旨と経緯　193

２：2017 年度活動報告会のテーマ設定　193

３：2017 年度活動報告会の構成　193

４：ポスターセッション 193

５：活動報告会 194

Ⅳ：成果と課題 239

おわりに

Ⅰ：プロジェクト実習の概要と 2017 年度の授業改善

１：プロジェクト実習の概要と今後の展開

２：2017 年度の授業改善

Ⅰ:プロジェクト実習の概要と2017年度の授業改善

鈴木　敦

1:プロジェクト実習の概要と今後の展開

プロジェクト実習の開講に至った背景、目的、基本設計、本学カリキュラムにおける位置づけ等については過去の報告書でも何度か言及して来たが、この夏に独立の文章としてまとめることができた（鈴木敦・神田大吾「就業力育成支援PBL科目『プロジェクト実習』の6年―地域志向教育科目『プロジェクト演習』への移行に向けて―」茨城大学人文社会科学部紀要『人文コミュニケーション論集』第2号　2018年3月 http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/bitstream/10109/13525/1/20170213.pdf　以下「プロジェクト実習の6年」）。そこで、詳細は上記小稿をご参照戴くこととして、ここではごく簡単にご紹介したい。

(1)プロジェクト実習の概要

プロジェクト実習は、大学生の就業力（社会人基礎力）育成支援を目的に人文学部で開講されている、通年2単位の専門科目である。教育技法の面から説明すれば、アクティブ・ラーニングの中でも最も負荷の高いものの一つとされるPBL（Project Based Learning）技法を軸に、その他の各種技法を盛り込んで展開されている授業である。同授業は、本学を構成する他の4学部に対しては勿論、連携関係にある茨城キリスト教大学・常磐大学・常磐短期大学に対しても、単位互換科目として開放されている。2012年の初開講以来、順次体制を整備・拡充しつつ今年度で5年目を迎えた。2017年度の構成を図1に示す。

図1:2017年度プロジェクト実習の構成

授業科目名		プロジェクト実習 A	プロジェクト実習 B	プロジェクト実習 C	プロジェクト実習 D
テーマ		総　合	地域連携 地域貢献	国際交流 異文化理解	PBL型 インターンシップ
段階	対象学年				
根力強化プログラム	2-4年	プロジェクト実習A スタッフ編	プロジェクト実習B スタッフ編	プロジェクト実習C スタッフ編	プロジェクト実習D スタッフ編
根力実践プログラム	3-4年	プロジェクト実習A リーダー編	プロジェクト実習B リーダー編	プロジェクト実習C リーダー編	プロジェクト実習D リーダー編
	4年	プロジェクト実習A メンター編	プロジェクト実習B メンター編	プロジェクト実習C メンター編	プロジェクト実習D メンター編

(2)2017年春の組織改編と今後の展開

茨城大学は2017年4月を以て大規模な組織改編を行い、人文学部は人文社会科学部へと改組された（ http://www.hum.ibaraki.ac.jp/faculty/index.html ）。

これに伴い就業力育成支援PBL科目「プロジェクト実習」も、「人文学部根力育成プログラム」を構成する一科目から、新たに設定されたサブメジャー専用プログラム「人文社会科学部地域志向教育プログラム」（ http://pbl.hum.ibaraki.ac.jp/ ）の一科目へと位置づけを改められることとなった。プロジェクト実習は2年次生以上向けの専門科目であることから、今年度が人文学部プロジェクト実習として最後の年となる。位置づけ変更に関する学部としての見解については、Ⅲ－5－(1)の後半部分を参照されたい。

2:2017 年度の授業改善

2017 年度も継続的に改善を進めた。ここでは(1)教材の改善　(2)スキル補強講座の拡充　(3)公式ホームページの開設　の 3 種に分けて記す。

(1)教材の改善

以下、新規追加の教材や比較的大きな変更のあった教材に限定して記す。

①「プロジェクト構想書」作成フォームならびに「構想報告相互評価ルーブリック」フォーム

プロジェクト課題は「ざっくりした内容」で提案され、これを履修生たちが「具体的なプロジェクト」に絞り込んで行く。2017 年度から、プロジェクト構想の要件を明確にし、現実的な構想を練り上げていくための補助ツールとして「プロジェクト構想書」作成フォーム（図 2）を、またプロジェクト構想報告会における相互評価ツールとして「プロジェクト構想相互評価ルーブリック」(図 3）を、新たな教材として追加した。この内「プロジェクト構想書」作成フォーム」は、2017 年度の経験を踏まえて一部内容を改めた最新版を提示する。

プロジェクト構想書

作成　　年　　月　　日

＊必要に応じて、適宜枠を拡大／追加して記入して下さい＊

1:チーム名

2:チームメンバー

担当	氏　名	アドレス（@）	備　考
リーダー			
副リーダー			
書記			
会計			

3:プロジェクト名

4:プロジェクトの目的

簡潔・端的に記す

5:プロジェクトの概要

「いつ」「どこで」「なにを」「だれと」「どうやって」を意識して、できるだけ具体的に記す
文章に加えて、概要を示すポンチ絵を貼り込めれば理想的

6:年間スケジュール

できるだけ「○月前半／後半」位まで絞り込んで記す
＊「春・夏・冬の休み」「茨苑祭」「活動報告会」等の日程は、別途配布する学年暦で確認して下さい。

7:成果の検証方法・成功」の基準

個人の達成目標ではなく、プロジェクトの成果の検証。どのような結果が得られれば、このプロジェクトは「成功」と判断できるか？

8:主な支出項目と予算措置(いずれも「現時点で想定される大まかなもの」)

支出項目	金額(千円)	予算措置	調達計画

[項目・金額等に関する補足説明]

●行／列の追加／削除は、行／列を指定]→ [ホーム]→ [セル]→ [挿入／削除]
●セル内での改行は [ALT＋ENTER]

（右）図 2:プロジェクト構想書作成フォーム

（下）図 3:プロジェクト構想相互評価ルーブリック

構想報告相互評価ルーブリック

評価者学籍番号：　　評価者氏名：

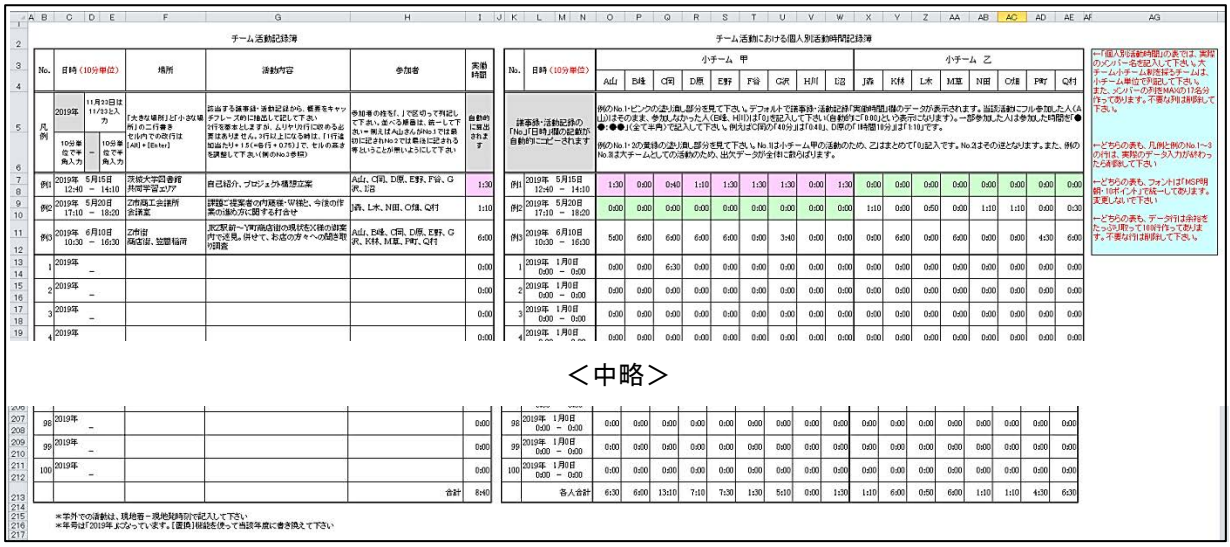
	4	3	2	1	記入例	評価 A	B	C	D	E
プロジェクト概要	プロジェクトの目的ならびに成果の検証方法・「成功」の基準との整合性が十分である。「いつ」「なにを」「だれと」「どうやって」が明確に伝わってくる。計画全体に蓋然性が高く、今後の順調な展開が予想される。	プロジェクトの目的ならびに成果の検証方法・「成功」の基準との整合性は十分である。また、「いつ」「なにを」「だれと」「どうやって」が明確に伝わってくる。しかし、計画全体の蓋然性は不明確である。	プロジェクトの目的ならびに成果の検証方法・「成功」の基準との整合性は十分である。しかし、「いつ」「なにを」「だれと」「どうやって」が不明確であり、具体的な内容ならびに計画全体に蓋然性を検討できない。	プロジェクトの目的ならびに成果の検証方法・「成功」の基準との整合性が不十分である。	3					
年間スケジュール	「いつ何をする」「そのために、いつまでに何をする」が明確であり、それぞれのスケジュールの「重みづけ」も明確である。年間を通じた活動の流れが鮮明に把握できる。	「いつ何をする」「そのために、いつまでに何をする」は明確である。しかし、それぞれのスケジュールの「重みづけ」が不明確であり、年間を通じた活動の流れが鮮明に把握できない。	「いつ何をする」「そのために、いつまでに何をする」の一部が不明確であり、年間を通じた活動の流れが鮮明に把握できない。	「いつ何をする」「そのために、いつまでに何をする」がいずれも不明確であり、年間を通じた活動の流れが把握できない。	2					
成果の検証方法・「成功」の基準	成果の検証方法・「成功」の基準共に明確であり、プロジェクトの目的・概要・年間スケジュールとの整合性も申し分ない。「プロジェクト」「プロジェクトを通じた学び」共に、十分な成果を上げられるものと予想される。	成果の検証方法・「成功」の基準共に明確である。しかし、プロジェクトの目的・概要・年間スケジュールとの整合性に疑問が残り、このままでは「プロジェクト」「プロジェクトを通じた学び」共に、十分な成果を上げられるか疑問が残る。	成果の検証方法は明確であるが「成功」の基準が不明確であり、このまま活動に入ったのでは、「プロジェクト」としては成功に見えるが、「プロジェクトを通じた学び」が不明確になってしまうと予想される。	成果の検証方法・「成功」の基準共に不明確であり、このまま活動に入ったのでは、活動の目的・目標を見失うと予想される。	2					
				計	7	0	0	0	0	0

＊ A～ E欄に評価対象のチーム名を記入。必要に応じて欄を追加して下さい
＊チーム名の下の空欄に、それぞれの評価を4～1で記入。合計点は自動的に算出されます

②「チーム活動記録簿」フォーム

プロジェクト実習は学生の自主性を重んずる PBL 授業であるため、教員が同席しない場での活動が頻発する。一方で、単位を付与するためには然るべきエビデンスが求められる。とはいえ、エビデンス作りに多大なエネルギーを取られるようでは本末転倒である。そこで入力・計算の手間を極力省くために「チーム活動記録簿」フォームを作成し、配布した（図 4）。

図 4:チーム活動記録簿



③「活動報告会プレゼン評価ルーブリック」フォーム

後述する「総合プレゼン講座」の開講、並びに年度末活動報告会における投票の実施を踏まえ、評価基準統一の必要性から作成した（図 5）。中間報告等での活用も視野に、今後改善を重ねて行きたい。

図 5:活動報告会プレゼン評価ルーブリック

活動報告会プレゼン評価ルーブリック

評価対象チーム：　　評価者学籍番号：　　氏名：

評価項目＼評点	4 言うなれば（◎）	3 言うなれば（○）	2 言うなれば（△）	1 言うなれば（×）	評価
プロジェクトの設定	□現実的かつ魅力的 課題提案と具体的なプロジェクトの設定内容を比較すると、課題提案の趣旨に沿って、実現可能でかつ内容的にも魅力的なプロジェクト設定になっている	□現実的だが物足りない 課題提案と具体的なプロジェクトの設定内容を比較すると、課題提案の趣旨に沿って、実現可能なプロジェクト設定になっているが、内容的には物足りなさがある	□絞り込み不足で無理がある 課題提案と具体的なプロジェクトの設定内容を比較すると、課題提案の趣旨に沿ったプロジェクト設定である。しかし、絞り込みが足りず無理のあるプロジェクト設定になってしまっている	□提案趣旨を逸脱 課題提案と具体的なプロジェクトの設定内容を比較すると、課題提案の趣旨を逸脱したプロジェクト設定になってしまっている	
取り組み	□十分かつﾌﾚｷｼﾌﾞﾙに活動した プロジェクトで設定した内容に対して、質的・量的に十分見合った活動ができている。加えてプロジェクト開始後に発生した様々な課題に対しても、臨機応変かつ積極的に対応している	□十分な活動をした プロジェクトで設定した内容に対して、質的・量的に十分見合った活動ができている	□やや物足りない プロジェクトで設定した内容に対して、最低限必要な活動はできている。しかし、質的にあるいは量的に物足りなさが残る	□活動が不十分 プロジェクトで設定した内容に対して、質的にあるいは量的に見合った活動ができていない	
対外的成果	□高く評価できる プロジェクト自体は、十全に実施できた。適切なプロジェクト内容としっかりした取り組みに加えて、学生ならではの視点や取り組み方法が活きており、対外的に高く評価できる成果を上げることができた	□十分に評価できる プロジェクト自体は、十分に実施できた。適切なプロジェクト内容としっかりした取り組みの結果、対外的に相応の成果を上げることができた	□やや物足りない プロジェクト自体は、基本的に実施できた。しかし、プロジェクト内容の乏しさあるいは取り組みの不足により、対外的成果については物足りなさが残る	□成果が不十分 プロジェクト内容に無理がある、あるいは取り組みが不十分であったため、プロジェクト自体を貫徹できていない	
プロジェクトを通じての学び	□出色の学びを得た プロジェクト全体ならびに個々の活動に「プロジェクトを通じた学び」への意識が認められる。同時に、一年間の活動としては出色の学びが得られたと判断できる	□十分な学びを得た プロジェクト全体ならびに個々の活動に「プロジェクトを通じた学び」への意識が認められる。同時に、一年を通じた活動にふさわしいだけの学びが得られたと判断できる	□やや物足りない 「プロジェクトを通じた学び」自体への意識は感じられる。しかし一年を通じた活動にふさわしいだけの学びが得られたとは感じられない	□学びへの意識が感じられない 活動内容の報告だけに留まり、「プロジェクトを通じた学び」自体への意識が感じられない	
スライドならびに配付資料の出来	□高い訴求力を持つ 左記1～3の問題はない。スライドと配付資料がそれぞれの特性を活かすと共に両者が密接に連携する作りになっている。その結果、高い訴求力を持っている	□十分な訴求力を持つ スライドにアニメーションや色使い等で課題を残すものの、左記1・2の問題はない。スライドと配付資料がそれぞれに特性を活かした作りになっている。その結果、十分な訴求力を持っている	□訴求力が足りない 左記1の問題はないが、スライドに図解やデータの提示が少ない。あるいはスライドと配付資料は別立てであるものの、それぞれの特性を活かせていない。その結果、意図は伝わらが訴求力という点では物足りなさが残る	□意図が伝わらない 文字が多過ぎる、あるいは図表や画像が少な過ぎるスライドで、分かりにくい。またはスライドと配付資料がほぼ同一内容で、工夫が見られない。その結果、訴求力以前に意図そのものが伝わりにくい	
プレゼンの出来	□内容を理解し共感を抱ける 左記1～3の問題はない。明確なテーマに基づき、スライドや配付資料を活用しつつ論理的な説明が展開されており、質疑への応答も的確である。その結果、内容を十分理解できるだけでなく、共感を抱くことができる	□内容を十分理解出来る テーマに基づく説明の流れに不明瞭な部分を残すものの、左記1・2の問題はない。質疑への応答も的確で内容を十分理解出来る	□内容を理解しにくい 左記1の問題はないが、原稿の棒読みやアイコンタクトの不足、スライドならびに配付資料と口頭での説明内容との連携が不十分等の理由により、内容を理解しにくい。あるいは、質疑への応答が不的確で、疑問が解消されない	□聞きたくならない 身だしなみ・動作・言葉遣い・言語の明瞭さ等、プレゼンの大前提となる部分に難があり、聞きたいという意欲を持ちにくい	
				計	0

④報告書等フォーム

プロジェクト実習では、例年報告書原稿や個人レポート等、比較的多くの文書の作製が求められる。その多くは当該年度の活動報告書の原稿として活用されるため、作業効率向上のために書式の統一を徹底する必要がある。

従来は、指示書によって諸条件を指定していたが往々にして読み違い等に起因する不統一が生じていた。そこで今年度から、従来の指示書に加えて予めフォントや文字ポイントといった細かな部分まで定めたフォームを作製、配布することとした。履修生がこれに上書きする形で原稿を作成することで、自ずと所定の書式で原稿が作成される仕組みである。想定通り、今年度の編集作業の効率化に大いに貢献してくれた。

点数が多いため、ここでは「個人レポート」フォームのみ提示する（図 6）。1 ページ目（右）が従来の「指示書」相当部分であり、2～3 ページ（下）が上書き用フォームである。

個人レポートフォーム

1：このファイルの使い方

(1)このファイルをダウンロードしたら、まずコピーを作成して「保存用」と「作業用」の 2 つのファイルを作って下さい。

(2)原稿作成作業は、専ら「作業用」ファイルで行って下さい。「保存用」は手を付けずに保存しておき、もし作業用ファイルで体裁を狂わせてしまった際のバックアップにして下さい。

(3)作業用ファイルの 1 ページ目を削除し、

(4)2 ページ目以降の該当する項目に、皆さんの原稿を上書きする形で（＝フォントや文字のポイントを変えずに）作成して下さい。

(5)2 ページ目以降の「赤字」や「黄色塗りつぶし」、「ダミーの図表」等は、適宜削除して下さい。

2：フォームの仕様

上下左右余白：23－21－20－20
布字：45 字×50 行
文字の大きさ：基本＝10 ポイント、表題 12 ポイント、図表のキャプション＝9 ポイント
本文全角ベタ打ちで 1 ページ当たり 2,000 字程度になります
フォント：全角＝MS 明朝　半角＝センチュリー
　　表題＆図表キャプション＝全角半角を問わず MS ゴシック
本文見出番号の階層使い分けは「1：　2：　3：・・・」→「(1)(2)(3)・・・」→「①②③・・・」
箇条書きで列記する場合の番号は(ⅰ)(ⅱ)(ⅲ)・・・とする
＊次ページ以降は、この仕様でセッティングされていますので、上記(4)に記すように「上書き」していけば自ずと指定の仕様になります。

3：執筆作業の前に・・・単語登録をしましょう

(1)間違えてはいけない単語

人名・地名・組織名等、「間違ってはいけない単語」は、しっかり確認した上で単語登録しましょう。こうしておけば「よほど変なこと」をしない限り、入力ミスで問題を起こすことはありません。

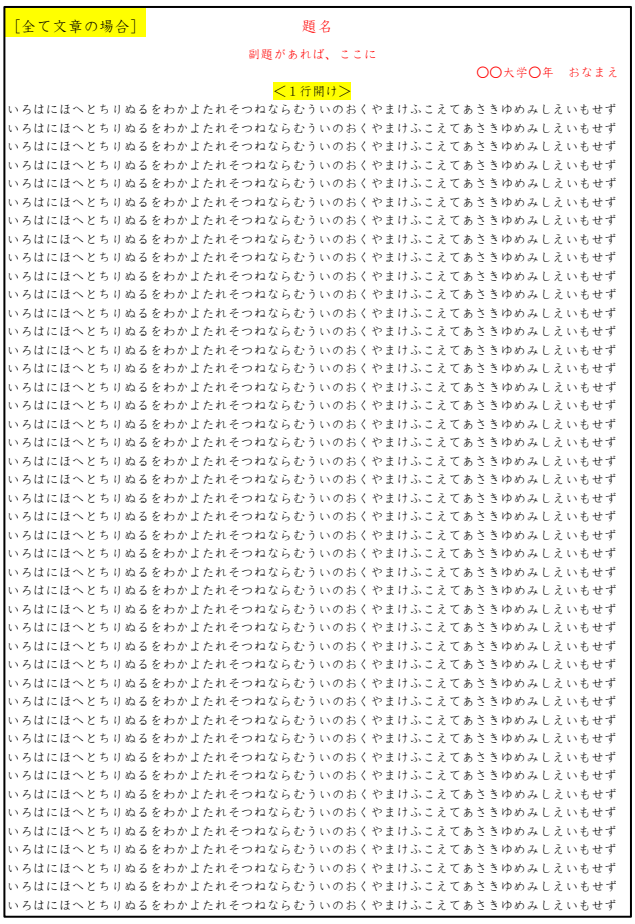
(2)多用するが、単純な変換では出てこない記号等

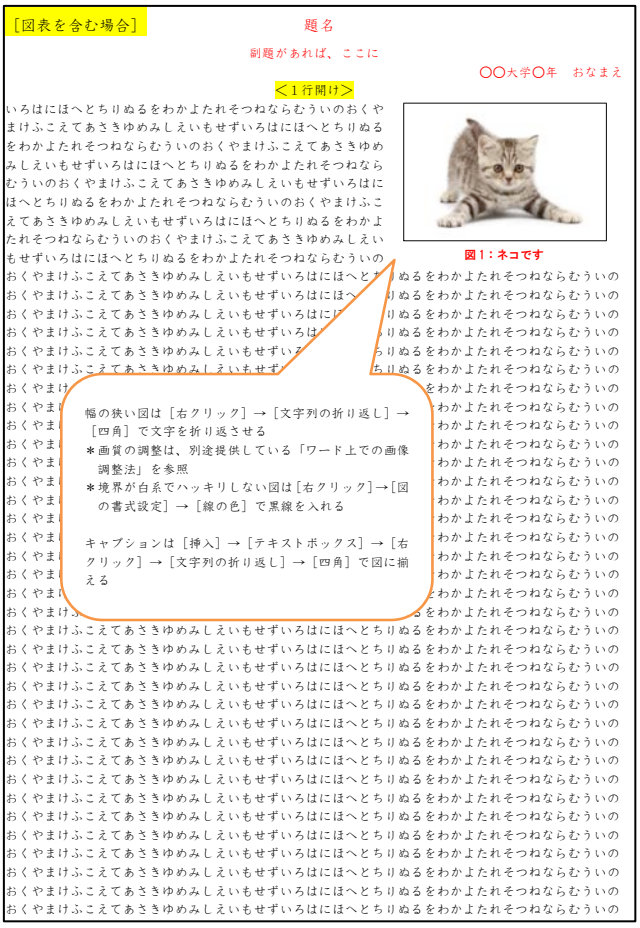
例えば、「１２３・・・」「①②③・・・」は「数字を打って変換キー」で単純に変換できますが、以下の二種についてはそうはいきません。毎回(　)と数字を入力していると時間の無駄です。予め単語登録してから作業を始めて下さい。

(1)　(2)　(3)　(4)　(5)　(6)　(7)　(8)　(9)　(10)
(11)　(12)　(13)　(14)　(15)　(16)　(17)　(18)　(19)　(20)
(ⅰ)　(ⅱ)　(ⅲ)　(ⅳ)　(ⅴ)　(ⅵ)　(ⅶ)　(ⅷ)　(ⅸ)　(ⅹ)

例えば「水戸☆Miryoku 発見❤」のように＜異なる字種が入り混じるもの＞や、「茨城大学人文社会科学部プロジェクト演習」のように、＜字種としては単純だが入力に手間がかかるもの＞なども単語登録しておくと、入力効率がアップし且つ入力ミスも減ります。

図 6：個人レポートフォーム





(2)スキル補強講座の拡充

①読解力・時事知識養成講座

人文学部根力育成プログラムでは、特定のスキルを養成することを目的に 15 コマ 2 単位で「ステップアップ系科目」（2 年生以上対象）、ならびに「実践連携科目」（3 年生以上対象）を設定している。従来は主として「ネットのルールとマナー」に関する内容であったが、これに加えて 2017 年度は「実践連携科目」の一つとして「読解力・時事知識養成講座」を開講することができた。同講座のシラバスを、図 7 に示す。

図 7:読解力・時事知識養成講座　シラバス

授業科目 英訳名	担当教員	開講時期	曜日 講時	備考
実践連携科目B Literacy and applications for Current Topics	井上俊也	前期	火 2	**授業題目** 読解力・時事知識養成講座

概要（行 50 字で 4 行以内）	本講義は、時事問題について自らの意見を表現できる人材になるために、時事用語全般（政治、社会、文化、経済、国際、科学技術、環境、医療、生活）に対して学ぶとともに、その基礎となる一般語彙の習得を前半に学習し、後半部では実際の時事問題について複数のメディアを比較するグループワークを行い、メディアリテラシーを高めることを狙いとする。
キーワード（行 50 字で 2 行以内）	時事問題、メディアリテラシー、一般語彙、時事用語
到達目標（行 50 字で 4 行以内）	メディアリテラシーを備えた学生としてメディアから伝わる情報を正しく理解するとともに、時事問題に対して自らの意見を論じ、自己の意見を主張するだけではなく、他者の主張も受容することのできるコミュニケーション能力の高い人材となることを目的とする。
授業計画（行 50 字で 15 行以内）	第 1 回　イントロダクション 第 2 回　時事用語I「政治」 第 3 回　時事用語 II「社会・文化」 第 4 回　時事用語 III「経済・国際」 第 5 回　時事用語 IV「科学技術・環境」 第 6 回　時事用語 V「医療」 第 7 回　時事用語 VI「生活」 第 8 回　時事用語総合演習I「理解度確認試験I」 第 9 回　時事用語総合演習 II「理解度確認試験 II」 第 10 回　メディアリテラシーI「プレゼンテーションのイントロダクション」 第 11 回　時事用語総合演習 III「試験の解説」 第 12 回　メディアリテラシーII「プレゼンテーション I」 第 13 回　メディアリテラシーIII「プレゼンテーション II」 第 14 回　メディアリテラシーIV「プレゼンテーション III」 第 15 回　クロージング
履修上の注意（行 50 字で 4 行以内）	講義はテキストを使用して解説と演習を反復して行う。理解度を高めるためにテキストだけではなく、小テストも授業中に行う。
予習・復習のポイント（行 50 字で 3 行以内）	今講義においては、復習を重視する。講義中に実施した問題演習により知識を定着化する。教科書だけではなく小テストについても復習を行い、知識を確実なものにすること。
成績の評価方法（行 50 字で 4 行以内）	理解度確認試験（2 回、50%）並びにプレゼンテーション（50%）で評価する。
教科書・参考書（行 50 字で 4 行以内）	以下のテキストを使用して授業を進める。 「語彙・読解力検定　公式テキスト 合格力養成 BOOK 改訂 2 版　2 級」 朝日新聞出版　ISBN978-4-02-110124-3　（1,200 円＋税）

②総合プレゼン講座

独立の科目である「ステップアップ系科目」「実践連携科目」とは別に、プロジェクト実習の内部講座として都合 15 コマの「総合プレゼン講座」を新設した。

プロジェクト実習では、年度初頭の構想報告会から年度末の活動報告会まで、様々な局面で何度もプレゼンテーション（以下「プレゼン」）を行うことになる。言うまでもなく、プレゼンは「ロジカルシンキング」「PPT 操作法」「ビジネスマナー」「プレゼンの技法」等、様々な能力が求められる場である。社会に出てから後も求められることが多い重要なスキルであり、プロジェクト実習担当教員としてもかねてよりトレーニングの場の提供に腐心してきた。

最初に目指したのは、「他大学の学生たちによるプレゼンを参観し、評価することを通じて得た知見を、自らのプレゼンにフィードバックする」機会の提供である。これは「先進地実地研修（近郊）」として 2013 年度に初めて実現し、以後 2016 年度まで継続してきた。詳細は、神田大吾他編『2015 年度根力育成プログラム　プロジェクト実習活動報告書』根力育成プログラム小委員会　2016 年 3 月刊第Ⅲ章、ならびに神田大吾他編『2016 年度根力育成プログラム　プロジェクト実習活動報告書』根力育成プログラム小委員会 2017 年 3 月刊第Ⅳ章を参照されたい。

地方の大学に進学した学生にとって、東京（ないしその近郊）に足を延ばし他大学の学生のプレゼンを参観することは刺激的であり、大いに学ぶ所があったことは間違いない。しかし

（ⅰ）先進地実地研修（近郊）は第三者が開催する催事を参観する形であるため、日時、場所、内容、会場のキャパ等は全て「他人任せ」とならざるを得ず、安定的な実施が担保できない。

加えて

（ⅱ）プロジェクト実習履修生の主力である 2 年生には、プレゼンスキルを体系的に学んだ経験がある者は殆どいない。このような条件下では、実際のプレゼンから帰納する以前にまずは最低限のスキルを体系的に注入する方が効率的に学ぶことができる。

という判断から、先進地実地研修（近郊）の趣旨はそのままに、2017 年度はより体系的な内容を安定的に学べる「総合プレゼン講座」の開講を目指すこととした。これまで継続的に実施してきた先進地実地研修を中断することについては種々思う所があるが、「対象学生の実態と授業内容の整合性」と「授業運営の安定性」を優先することとした。

単なる PPT の操作法にとどまらず、プレゼンに必要な各種スキルを総合的に学べる講座をご担当戴ける講師を見つけ出すことは困難を極めたが、幸いにしてプロジェクト実習開講の初期段階から授業運営にご協力を戴いて来た方のご尽力により、ラシャンス代表　渡辺しのぶ先生（https://www.lachance-sem.com/）をご紹介戴くことが出来た。

2017 年度総合プレゼン講座のシラバスを図 8 に示す。

図 8：総合プレゼン講座シラバス

授業科目 英訳名	担当教員	開講時期	曜日 講時	備考
人を動かす感動のプレゼンテーション技法	渡辺しのぶ	集中		

概要 （行 50 字で 4 行以内）	本講座は聞き手を感動させて動かすためのプレゼンテーションスキル・すなわち①聞き手の分析　②納得感を与えるロジカルなストーリー展開　③話し手の人間的魅力　以上３点を学び、12/9（予定）のプロジェクト実習活動報告会で発表ができるようにする。と共に今後人前で発表する際に役立つプレゼンマナーのスキルを身に付ける。
キーワード （行 50 字で 2 行以内）	聞き手を動かすプレゼンテーション、聞き手の分析、ロジカルなストーリー展開、人間的魅力、プロジェクト実習活動報告会
到達目標 （行 50 字で 4 行以内）	話し手の主張ばかりではなく、聞き手の欲する情報を提供できる分析力を身に着けると共に、それをいかにわかりやすく伝えるか、視覚情報であるスライド作成技術と話法（デリバリー技術）を習得し納得感のある感動のプレゼンテーションができる人材育成を目的とする。
授業計画 （行 50 字で 15 行以内）	第 1 回　イントロダクション（プレゼンテーションの定義と目的）　(9/21) 第 2 回　プレゼンテーションの企画から本番までのプロセス　(9/21) 第 3 回　PREP 話法とホールパート法の実践　(9/21) 第 4 回　伝わる文書構成はツリー構造　(9/22) 第 5 回　Power point 操作編①：基本操作の習得　(9/22) 第 6 回　Power point 操作編②：スライドを「一目でわかる化」する・デザインマスタの作成　(9/22) 第 7 回　Power point 操作編③：図解とカラーリング　(9/22) 第 8 回　Power point 課題作成①：第 11 回の課題発表に向けて実習　(9/25) 第 9 回　Power point 課題作成②：第 11 回の課題発表に向けて実習　(9/25) 第 10 回　魅せるプレゼンターのスキル（立ち居振る舞い・発声方法・質問発問（9/25) 第 11 回　課題発表　(9/25) 第 12・13 回　プロジェクト実習活動報告会リハーサル　(12/2 を予定) 第 14・15 回　プロジェクト実習活動報告会　(12/9 を予定)
履修上の注意 （行 50 字で 4 行以内）	「Power point の基本操作ができること」が履修の前提条件である。講義はテキストを使用して解説と演習を反復して行う。第 11 回では第 1 回～10 回までで習得したスキルを使い 5 分間のプレゼンテーションを実施し講師からフィードバックを受ける（受講生の人数により代表者のみになる可能性あり）。
予習・復習のポイント （行 50 字で 3 行以内）	第 7 回までが終了した時点で、第 11 回に発表する内容を自己学習で作成しておくことを推奨する。第 8・9 回は最終チェックの時間とする（※第 8 回で最終チェックを終わらせることができれば第 9 回で魅せるプレゼンターのスキルを実施し第 10・11回で課題発表とする）
成績の評価方法 （行 50 字で 4 行以内）	プロジェクト発表会時の発表を評価する。評価基準は①デリバリースキル（アイコンタクト・ボディランゲージ・発声・姿勢・発問と質問のスキルなど）②プレゼン内容（基本的構成・聞き手を意識した内容など）③Power point 作成スキル（色彩・図解・キーワードの使い方など）
教科書・参考書 （行 50 字で 4 行以内）	教科書：なし。講師作成のプリントとデータファイルを使用し授業を進める。

＊本講座は、プロジェクト実習の一環としてプロジェクト実習履修生に向けて限定開講されるものであり、本講座単独での単位付与、成績評価はありません。シラバスにグレーの塗りつぶしで記されている「成績の評価方法」は、講師が重視する点を履修生への参考情報として示したものです。

渡辺先生には、まず夏休み最終盤の 9 月 21、22、25 日に第 1 講～第 11 講として集中講義を戴いた（図 9・10）。

図 9:総合プレゼン講座　オリジナルテキスト(抄)

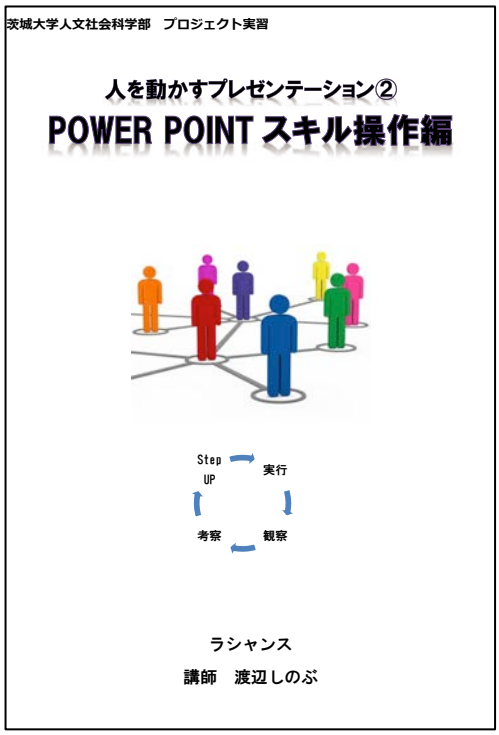


図 10:総合プレゼン講座　集中講義(9 月 21･22･25 日)

(ⅰ)ご講義

(ⅱ)ロジカル･シンキングの実習

(ⅲ)ビジネスマナーの実習(立ち居振る舞い)

(ⅳ)プレゼンの実習(実際にやってみよう！)

次いで年度末活動報告会の一週間前となる 12 月 2 日に、第 12 講～第 13 講として報告会リハーサルでのご指導を戴いた（図 11）。

図 11：総合プレゼン講座　年度末活動報告会リハーサル（12 月 2 日）

（ⅰ）ご講義（夏季集中講義の復習）

（ⅱ）立ち居振る舞いの復習

（ⅲ）学生のリハーサルをチェック！

（ⅳ）プレゼンに対するご指導

さらに 12 月 9 日の報告会本番で、第 14 講～第 15 講として実際のプレゼンに基づいて最終のご指導を戴いた。この際戴いたご指導については、録音から文字化した全文をⅢ－5－(6)に収載している。

上記の通り、2017 年度はスキル養成を目的に独立授業 2 件、授業内講座 1 件の計 3 件を開講することができた。いずれもその道の専門家を非常勤講師としてお招きしての、本格的な講座である。非常勤講師枠の確保が厳しい中、3 講座計 45 コマ分を配分して下さった人文学部執行部に篤く御礼申し上げます。

③社会人特別講義

2017 年度の授業改善の柱は、従来の「取り組む」「学ぶ」に加えて「伝える」にも注力する所にあった。このため、今年度の社会人特別講義は株式会社パソナの佐野創太先生をお迎えし、「プロジェクト実習の経験を PR 材料に深化させる方法」と題してご講義を戴いた（図 12）。

学生にとっては「先生」というよりは「先輩」「兄貴分」といった年齢の方から、作業課題を出されたりしながら双方向的なご講義を戴いたことは、大変刺激的であったと思う。また活動内容と学びを「地域の方々に」伝えるというのが思考の最大レンジであった教員にとっても、今後の授業改善のためのチャンスがふんだんに盛り込まれたご講義内容であった。ご提示戴いた PPT やご講義の際の資料類には会社の著作権に絡むものもあり、この場に転載できないのが残念である。

授業後に学生たちに戴いたメールメッセージを以下にコピーする（図 13）。

佐野先生、ありがとうございました。先生にとっての「新たなステージ」でのご活躍をお祈り申し上げます。

図 12:授業風景

図 13:授業後の、佐野先生よりのメール(一部、レイアウトを調整)

皆様
こんにちは。パソナキャリア佐野です。
本日は授業をご一緒させていただき誠にありがとうございました。熱心に耳を傾けてくださったり、メモを取ってくださったりと話しているこちらもついつい熱がこもりました。

本日お話したように、採用企業は大学での活動を高く評価する傾向になっています。
他の大学の取り組みも拝見することがありますが、その中でもプロジェクト実習は、就職活動はもちろんのこと、入社後にも活かせる体験がつまっている宝箱のようなものと思いました。
一方で真剣に取り組んだ経験ほどあとで振り返ろうとすると覚えていないことが多々あります。
そうならないために、本日の需要と供給の考え方とシートをもとに振り返る時間をお取りください。
プロジェクト実習で身についているものを知ることができ、自信につなげることが可能です。

また、アンケートやサイト登録は引き続き受け付けております。
本日お時間のなかった方もいらっしゃると思いますので、お時間のあるときにぜひみなさんの声をお聞かせください。みなさんの声が私の励みであり、今後の授業を質の高いものにすることができます。

■アンケート
https://XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
■サイト登録
http://XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

またお会いできることを楽しみにしております。ぜひプロジェクト実習を楽しんでください。厳しい体験ほど、すべてネタになります。
私も新しいステージに入ります。これからも一緒にがんばっていきましょう。

佐野　創太（さの　そうた）
Mail　　：XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
Facebook　：https://XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
LINE　　：http://XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
---

(3)公式ホームページの開設

①公式ホームページ開設の経緯

プロジェクト実習としての公式ホームページ（以下、「HP」）の立ち上げは、初開講時以来の懸案であったが、果たせぬままに 6 年が経過していた。HP 開設には「立ち上げ予算の確保」「立ち上げ作業に要するマンパワーの確保」「立ち上げ後の運営体制の構築」等、様々なハードルをクリヤする必要があったが、担当教員が授業そのものの運営と改善に追われて果たせずにいたのである。

人文学部は 2017 年 4 月に人文社会科学部へと改組され、同時に新しいカリキュラムがスタートした。新カリキュラムは「メジャー・サブメジャー制」を大きな特色とする。サブメジャーのカリキュラムとしては、「メジャーカリキュラムの簡略版」として設定されている 7 つのプログラムに加え、サブメジャー専用のプログラムも設定されている。具体的には

(ⅰ)人文社会科学部地域志向教育プログラム

(ⅱ)行政マネジメント研究プログラム

(ⅲ)グローバル英語プログラム

(ⅳ)日本語教育プログラム

の 4 種である。（ http://www.hum.ibaraki.ac.jp/faculty/submajor-program.html ）

新カリキュラムの設定に伴い、プロジェクト実習は上記(ⅰ)の「人文社会科学部地域志向教育プログラム」を構成する一科目として位置付けられることとなった。同プログラムは全学教育機構が開講している「COC 地域志向教育プログラム」に、人文社会科学部の科目を追加することで、学部独自の地域志向教育を行うものである。

具体的には、従来の「プロジェクト実習（スタッフ編）」が「プロジェクト演習Ⅰ」「同Ⅱ」に、「プロジェクト実習（リーダー編）」が「地域 PBL 演習Ⅰ」「同Ⅱ」の一部に位置付けられることとなった。プロジェクト演習は 2 年生以上向け、地域 PBL 演習は 3 年生以上向けの科目であるため、実際に新カリキュラムでの受講生が登場するのは 2018 年度からであるが、これを機会に人文社会科学部地域志向教育プログラムとしての HP を立ち上げることとなった。

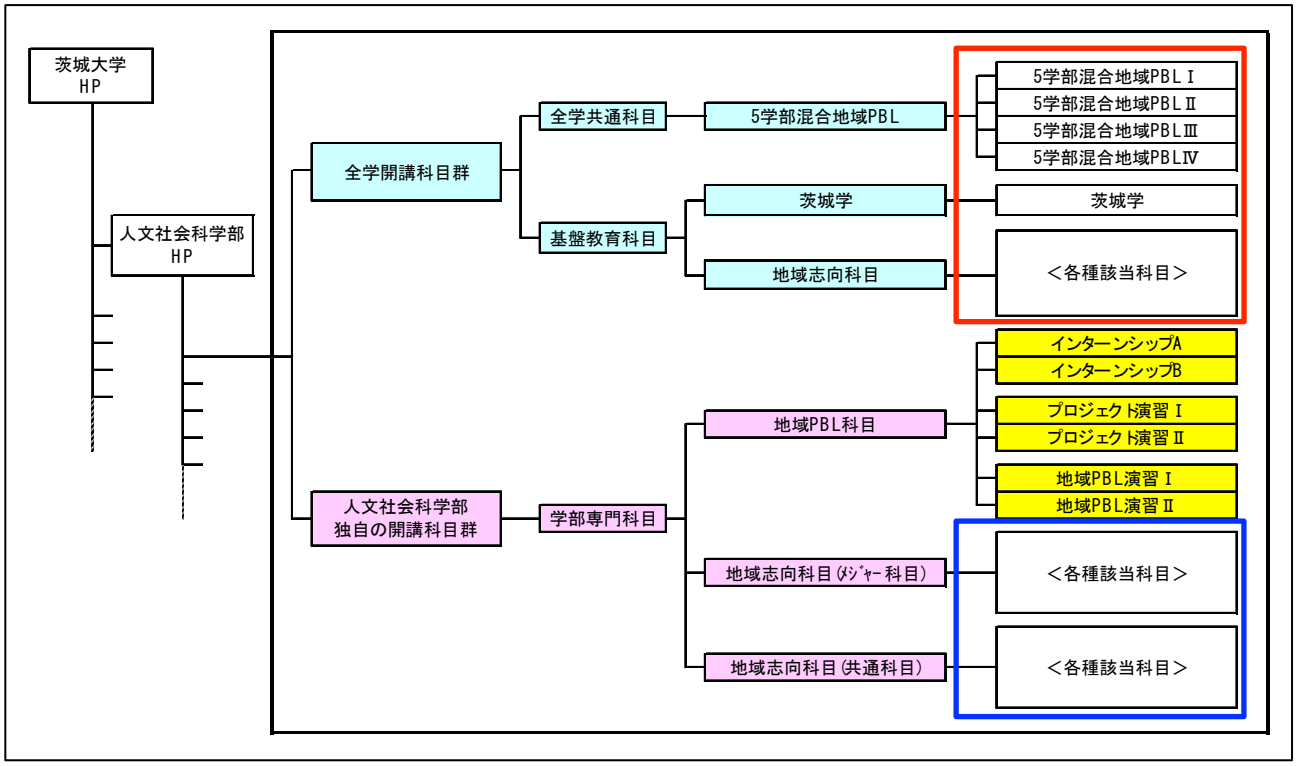
②人文社会科学部地域志向教育プログラムならびに同 HP の構造

人文社会科学部地域志向教育プログラムのカリキュラムマップを図 14 に、同 HP の構造図を図 15 に示す。

図 14：人文社会科学部地域志向教育プログラム　カリキュラムマップ

<table>
<tr><th colspan="3" rowspan="3"></th><th colspan="4">1年</th><th colspan="4">2年</th><th colspan="4">3年</th><th colspan="4">4年</th></tr>
<tr><th colspan="2">前学期</th><th colspan="2">後学期</th><th colspan="2">前学期</th><th colspan="2">後学期</th><th colspan="2">前学期</th><th colspan="2">後学期</th><th colspan="2">前学期</th><th colspan="2">後学期</th></tr>
<tr><th>1Q</th><th>2Q</th><th>3Q</th><th>4Q</th><th>1Q</th><th>2Q</th><th>3Q</th><th>4Q</th><th>1Q</th><th>2Q</th><th>3Q</th><th>4Q</th><th>1Q</th><th>2Q</th><th>3Q</th><th>4Q</th></tr>
<tr><td rowspan="3"></td><td rowspan="2">基礎教育科目</td><td>茨城学</td><td></td><td colspan="2">「茨城学」</td><td colspan="12">＊特殊な事情のない限り、所定のQで履修</td></tr>
<tr><td>地域志向科目</td><td colspan="2"></td><td>地域志向科目</td><td colspan="12">→ 次Q 以降で履修も可</td></tr>
<tr><td>全学共通科目</td><td>5学部混合地域PBL科目</td><td></td><td>5学部混合地域PBL科目</td><td colspan="13">→ 次Q 以降で履修も可</td></tr>
<tr><td rowspan="6"></td><td rowspan="6">専門科目</td><td rowspan="4">地域PBL科目</td><td colspan="4" rowspan="6"></td><td colspan="4">「インターンシップA」共通科目）</td><td colspan="9">→ 次Q 以降で履修も可</td></tr>
<tr><td colspan="4">「インターンシップB」共通科目）</td><td colspan="9">→ 次Q 以降で履修も可</td></tr>
<tr><td colspan="2">「プロジェクト演習Ⅰ」共通科目）</td><td colspan="2">「プロジェクト演習Ⅱ」共通科目）</td><td rowspan="2">「地域PBL演習Ⅰ」共通科目）</td><td colspan="2" rowspan="2">「地域PBL演習Ⅱ」共通科目）</td><td colspan="5">→ 次Q 以降で履修も可能</td></tr>
<tr><td colspan="5">→ 次Q 以降で履修も可能</td></tr>
<tr><td rowspan="2">地域志向科目</td><td colspan="2">地域志向科目（メジャー科目）</td><td colspan="2">地域志向科目（メジャー科目）</td><td colspan="9">→ 次Q 以降で履修も可</td></tr>
<tr><td colspan="2">地域志向科目共通科目）</td><td colspan="2">地域志向科目共通科目）</td><td colspan="9">→ 次Q 以降で履修も可</td></tr>
</table>

図 15：人文社会科学部地域志向教育プログラム HP の構造



同 HP は、茨城大学 HP 内の人文社会科学部 HP 内のページとして設定される（図 15・黒太枠）。

人文社会科学部地域志向教育プログラムを構成する授業群は、全学開講科目（図 15・水色塗りつぶし）と人文社会科学部開講科目（図 15・桃色塗りつぶし）に大別される。

人文社会科学部開講科目は、さらに同プログラムのオリジナル科目である「地域 PBL 科目」と、学部の既存科目を利用する「地域志向科目（メジャー科目）」「地域志向科目（共通科目）」よりなる。

全学開講科目の開講主体は全学教育機構であるので、該当科目（赤枠内）の具体的な内容については、当初は同機構の HP の該当箇所にリンクさせることを構想した。同様に人文社会科学部の「地域志向科目」についても、「メジャー科目」は各メジャーが、「共通科目」は学部が開講主体であるので、該当科目（青枠内）の具体的な内容については、人文社会科学部の HP の該当箇所にリンクさせることを構想した。

しかし、いずれの HP においても当該科目群のための特別なページは立てられていないことが分かり、やむを得ず本学教務情報ポータルシステムの「シラバス検索」のページに、一律にリンクさせざるを得なかった（ https://idc.ibaraki.ac.jp/portal/Public/Syllabus/SearchMain.aspx ）。閲覧者から見れば、プログラムの具体的内容を見ようとするといきなり本学の開講授業一般の検索ページに飛ばされてしまう形であり、肩透かしを食ったような印象になるであろうことは想像に難くない。管轄部署の今後の対応に期待したい。

「地域 PBL 科目」を構成する「インターンシップ」「プロジェクト演習」「地域 PBL 演習」については、それぞれの担当者の責任においてコンテンツを整備することとなった（図 15・黄色塗りつぶし）。

③HP の現状と責任分担

以上を踏まえて、人文社会科学部地域志向教育プログラム HP は、現在仮公開中である。（ http://pbl.hum.ibaraki.ac.jp/ ）各科目のページ及びそれぞれの「資料庫」ページの原稿作成、並びに公開後の更新の責任者は、以下の通りである。（敬称略）。

(ⅰ)トップページ

下記の 5 名全員

(ⅱ)インターンシップ A・B

井澤耕一（人文社会科学部インターンシップ委員会委員長、「インターンシップ」担当教員）
(ⅲ)プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ
神田大吾（人文社会科学部根力育成プログラム小委員会委員長、「プロジェクト実習」担当教員）
鈴木敦　（「プロジェクト実習」担当教員）
(ⅳ)地域 PBL 演習Ⅰ・Ⅱ
井上拓也　（「地域課題研究」担当教員）
西野由紀子（「地域課題研究」担当教員）

④報告書原稿と HP 記述について
本報告書の原稿作成と HP の立ち上げ作業は、特に 2017 年度末期に同時並行で進められた。このため、それぞれの文言や参照指示等に、作業のタイミングに起因する混乱が見られるものと危惧される。2017 年度の特殊事情としてご諒恕戴ければ幸である。

Ⅱ：チーム別活動報告

１：プロジェクト実習　2017年度の運用

２：KITAIBA Art Projectチーム　活動報告

３：さとみ・あいチーム　活動報告

４：D-CEPチーム　活動報告

５：いばっピ団チーム　活動報告

６：Domaine MITOチーム　活動報告

７：チームみなと☆ミライ　活動報告

Ⅱ:チーム別活動報告

神田　大吾

１：プロジェクト実習　2017 年度の運用

(1)履修状況

2017 年度のプロジェクト実習は、茨城キリスト教大学から 9 名の参加を得て、総勢 56 名が 9 チームに分かれての運用となった。内訳は以下のとおり。

プロジェクト実習 A（総合）は、北茨城市で活動する大チーム「KITAIBA Art Project」、その下に小チーム「ゴールデン・アート」5 名と「オルタナティブ・アート」6 名。

プロジェクト実習 B（地域連携・地域貢献）は、常陸太田市里美地区で活動する大チーム「さとみ・あい」、その下に小チーム「カボチャで里美を盛り上げ隊」9 名と「Comer」8 名。

プロジェクト実習 C（国際交流・異文化理解）は、高校生や小学生に国際交流の場を提供する活動を主に行う「D-CEP」チーム 6 名。

プロジェクト実習 D（PBL 型インターンシップ）は、まちなかワイナリーの可能性を模索する「Domaine MITO」チーム 7 名。

同じく D に那珂湊商店街活性化を目指して活動する「チームみなと☆ミライ」チーム 5 名。

同じく D に課題提案「水戸の公共交通の未来を一緒に創ろう」に応えて活動する大チーム「いばっピ団」、その下に小チーム「AB 革命起こし隊」5 名と「カフェめぐり宣伝部」5 名。

大チーム	(小)チーム	役割分担	氏名
KITAIBA Art Project	ゴールデン・アート	長長	長永　勇太
		副	大貫　史織
		書記	米川　緩
		会計	新井　ひな乃
			鎌田　純平
	オルタナティブ・アート	長副	神田　紗帆
		副	丹治　彩弥乃
		書記	木村　愛実
		会計	小松崎　流緋
			猿田　百佳
			森谷　柚月
さとみ・あい	カボチャで里美を盛り上げ隊	長長	田島　彩花
		副	鬼澤　麻美
		書記	飯塚　子都香
		書記	大村　みるほ
		会計	羽田野　里菜
			江口　紗姫
			塩畑　見咲
			永田　典子
			大枝　俊貴
	Comer	長副	野村　明里
		副	鈴木　真由
		書記	石橋　佳奈
		書記	塩手　菜々美
		会計	北野　友香
			後藤　睦貴
			高田　美菜
			助川　実咲

大チーム	(小)チーム	役割分担	氏名
	D-CEP	長	山本　麻由
			助川　里奈
			細川　茜
			小野　千秋
			川本　李音
			大津　里奈
	Domaine MITO	長	鶴町　直輝
		副	三枝　奈央
		副	水戸部　麻実
		書記	今川　菜津美
		書記	中野　拓哉
		会計	大徳　ちはる
		渉外	吉川　奈緒子
	チームみなと☆ミライ	長	秋葉　翔太
		副	清水　悠花
		書記	川田　綾香
		書記	斉藤　祐羽
		会計	庄司　彩乃
いばっピ団	AB革命起こし隊	長副	五位渕　梓
		書記	池田　真梨果
		書記	堀　奈津美
		会計	井上　晴香
		渉外	大場　貴史
	カフェめぐり宣伝部	長長	小宮山　弥来
		書記	大山　愛莉
		書記	鹿野　はるか
		会計	川瀬　葉月
		渉外	片見　恵都

図：2017 年度プロジェクト実習履修者名簿

尚、プロジェクト実習の背景となる、茨城大学の就業力育成支援事業と根力育成プログラムについては、神田大吾他編『2015 年度根力育成プログラム　プロジェクト実習活動報告書』（根力育成プログラム小委員会　2016 年 3 月刊）第 I 章を参照されたい。

(2)授業の構造

プロジェクト実習は PBL 授業であり、学生が能動的に学習することを前提としている。このため、①教員の主導で履修者が一堂に会して行う、通常の「一斉授業」と、②学生がチームごとに任意の時間と場所で行う「チーム別活動」とを適宜組み合わせながら運用することとなる。②は、基本的に教員が同席しない場で行われるため、教員が活動状況を直接把握することはできない。そこで、「活動日」「場所」「参加者氏名」「開始時間と終了時間」「具体的な活動内容」等を定められた書式に従って記入する「議事録・活動記録」を作成し、レナンディ（本学の e ラーニングシステム）にアップさせ、これをエビデンスとして教員が点検し、授業時間としてカウントしている。紙幅の制約から全文を掲載することが不可能なため、本報告書では最低限の情報を一覧表にして収載している。授業計画では、第 9、10、14、15、21、22 講を「チーム活動」としているが、実際の活動時期はチームによって前後する。具体的な活動状況は、次節以降の各チーム報告を参照されたい。

(3)授業各回の内容

2017 年度のプロジェクト実習は、シラバスに沿って以下のように運営された。なお、チーム横断的に行われた活動については「活動」として追記している。

今年度の主な授業改善としては、「プロジェクト構想」フォームにより、プロジェクトの目的や概要から、活動成果の検証方法や、成功の基準とは何かに至るまで、それぞれ年度の初めに考えさせ、それを文字にして可視化（＝フォームに記入）することで、チームメンバー内での情報共有を徹底させたこと。また、議事録・活動記録について、従来のフォームを改良し、授業時間外での活動時間を個人別に容易に算出できる新しいフォームにしたこと等である。

また、授業運営に関して特筆すべきは、外部講師によるプレゼンテーション特別講座を導入したことである。長年に亘って企業の研修講師として活躍されている渡辺しのぶ先生を招聘し、聞き手の欲する情報を提供できる分析力や、聞き手の理性と感性の両方を刺激する方策、また視覚情報であるスライド作成技術やデリバリー技術（話法）等、発表内容を聴衆にわかりやすく効果的に伝えるべく、プレゼン能力を総合的に高めるための講義と課題演習を 3 日間の夏季集中形式で行った。加えて、活動報告会（12 月 9 日）の一週間前にリハーサルを行って渡辺先生から講評を戴き、活動報告会当日もプレゼン報告後に改めて講評を頂戴した。詳しくは第 I 章を参照されたい。「発表 PPT とハンドアウトは別々に作る」等、きめ細かなご指導のお陰で、7 月の前期末中間報告会に比べ、12 月 9 日の活動報告会での発表プレゼンはどのチームも見違えるほどの素晴らしい出来栄えとなった。このプレゼンテーション特別講座は 2018 年度にも実施する予定である。

授業各回の内容は以下のとおり。

第 1 講:ガイダンス、履修目的の明確化（4 月 7 日、14 日）

学年暦の関係で、同一内容のガイダンスを二回行った。

①PPT により授業の位置付けや特徴を説明した後、ポンチ絵形式で 9 件のプロジェクト課題を紹介。

②保険加入の確認等、留意事項。

③マインドマップの説明。

④ルーブリックを紙媒体で配布（後日、ファイルを学生各自に送信）して説明し、次回 4 月 21 日の授業までに「根力の構成要素ルーブリック」（全 21 項目）を基に自己分析し、この授業を通じて特に自分が伸ばしたいと思う 3 項目を選んで「個人の達成目標ルーブリック」に記入し、各自で目標設定しておくよう指示。

第 2、3 講：企画プレゼンと質問会（4 月 21 日、28 日）

今年度のプロジェクト課題のプレゼン。第 1 講で紹介した 9 件に学生有志 2 件を合わせた 11 件を二週に分けて提示。発表後は各ブースに分かれる形で、提案者と学生との間で質疑応答。

この二回で提示されたプロジェクト課題の中から 2 件を選び、第一希望は 400 字程度、第二希望は 100 字程度で「自分がなぜこのプロジェクトに取り組みたいのか」を書いた Word 文書を作成し、5 月 8 日までに担当教員にファイル送信するよう指示。

第 4 講：チーム結成と基本的な役割分担（5 月 12 日）

①チーム分け発表～調整：8 日までに提出された文書を基に、第一希望者が

a ：5 名以上 9 名以下なら即 OK。

b ：10 名を超えるプロジェクトは「大チーム－小チーム体制」を指示してひとまず容認。

c ：5 名に満たないプロジェクトについては、新たなメンバーを勧誘するか、他チームに参加するよう指示。

②役割分担：チームが成立した所から速やかに

a ：役割分担作業開始。「最低限、リーダーを確定せよ」と指示。必ず置くのが「リーダー」「副リーダー」「書記」「会計」。他は任意。「渉外」等はチームごとに適宜検討。

b ：「事例シナリオ」の説明。

③チームごとに「事例シナリオ」による実習を行い、人間の個性がどのようにチーム活動に影響するかを考えさせた。

④ブレインストーミングと KJ 法を講義した後、時間外に行うチーム・ミーティングでこの方法を用いて基本構想を整理するよう指示。「プロジェクト構想書」も配布。

第 5 講：プロジェクトの基本構想策定（5 月 19 日）

チームごとに、プロジェクト課題提案者の助言を受けながら、プロジェクトの目的・概要・年間スケジュール・成果の検証方法・「成功」の基準・主な支出項目と予算の調達方法を「プロジェクト構想書」に記入して活動の構想をまとめた。

第 6 講：社会人特別講義（5 月 26 日）

佐野創太先生の講義「プロジェクト実習の経験を PR 材料に進化させる方法～大学生活の経験は、そのまま就活ネタにすることが可能です～」とワークショップ。

第 7、8 講：構想報告会（6 月 2 日、9 日）

二回に分けて、チーム活動の構想を報告し、質疑応答が行われた。その後、チームごとにミーティングを行った。

第 9、10 講：チーム活動

第 11、12 講：前期末中間報告会とチーム・ミーティング（7 月 7 日、21 日）

二回に分けて、チームのこれまでの活動内容と今後の活動予定を報告し、質疑応答が行われた。その後、チームごとにミーティングを行った。

第 13 講：前期末リフレクション

チームごとに前期末中間報告会での発表を振り返って課題を整理し、今後の活動内容について議論するミーティングを 7 月 23 日から 29 日の期間内に行った。

第 14、15 講：チーム活動

第 16～18 講：プレゼン講座（9 月 21 日、22 日、25 日）

渡辺しのぶ先生のプレゼンテーション特別講座（講義と演習）を集中開講した。21 日と 22 日は各 90 分の 4 コマ、25 日は同 3 コマの授業であった。

第 19、20 講：後期キックオフ報告会とチーム・ミーティング（10 月 6 日、13 日）

二回に分けて、第 15 講以降に行われたチーム活動の内容と今後の予定を報告し、質疑応答が行われた。その後、チームごとにミーティングを行った。

第 21、22 講：チーム活動（企画準備）

活動：茨城大学学園祭（茨苑祭）（11 月 11 日、12 日）

屋内での展示、屋外ブースでの企画商品販売、マップ試作版の配布等を行った。

第 23 講：企画リフレクション（11 月 17 日）

一斉授業形式で、実施した企画のリフレクションを行った。また、年度末活動報告会のリハーサルならびに本番について最終確認を行った後、チームごとにミーティングを行った。

第 24、25 講：年度末活動報告リハーサル（12 月 2 日）

これまでの活動をまとめた報告プレゼンを行い、講師から講評を受け、プレゼン内容を再検討した。

第 26、27 講：年度末活動報告会（12 月 9 日）

人文学部 10 番教室で活動報告会を実施した。

第 28 講：年間リフレクション第一回（12 月 22 日）

一斉授業形式で、活動報告会のリフレクションを行った。その後、チームごとに分かれ、上記活動報告会を踏まえて年間の活動を振り返り、成果や反省点を討議した。

第 29 講：年間リフレクション第二回（2018 年 1 月 19 日）

一斉授業形式で、授業のリフレクションを行った。併せて、個人レポートや報告書原稿の執筆についての必須事項等を指示した。その後、チームごとに分かれ、報告書のチーム別活動報告の分担を決め、各自で執筆した後、リーダーが原稿を集約して 2 月 19 日までに提出することになった。

第 30 講：年間リフレクション第三回（1 月 26 日）

一斉授業形式で、授業のリフレクションを再度行った。併せて、個人レポートや報告書原稿の執筆についての必須事項等を最終的に確認した。

(4)各チームの活動報告の掲載方針

次節からプロジェクト実習 A～D の順で、チーム別の活動報告を「1：はじめに」、「2：活動概要」、「3：議事録・活動記録」、「4：会計報告」、「5：活動トピック」、「6：年度末活動報告会のポスターパネルと発表風景」、「7：最終レポート」、「8：おわりに」の順に掲載する。なお、PBL 型インターンシップを特徴とする D については、「5：活動トピック」の次に「6：インターンシップレポート」を設けてまとめて載せる。

２:KITAIBA Art Project チーム

プロジェクト実習Ａ

大チーム「KITAIBA Art Project」

小チーム「ゴールデン・アート」

リーダー	：長永　勇太	人文社会科学部社会科学科	２年
副リーダー	：大貫　史織	人文社会科学部人文コミュニケーション学科	２年
書記	：米川　　緩	人文社会科学部社会科学科	２年
会計	：新井ひな乃	人文社会科学部人文コミュニケーション学科	２年
メンバー	：鎌田　純平	理学部理学科	２年

小チーム「オルタナティブ・アート」

リーダー	：神田　紗帆	人文社会科学部社会科学科	２年
副リーダー	：丹治彩弥乃	人文社会科学部人文コミュニケーション学科	２年
書記	：木村　愛実	人文社会科学部社会科学科	２年
会計	：小松崎流緋	同　　上	２年
メンバー	：猿田　百佳	同　　上	２年
メンバー	：森谷　柚月	同　　上	２年

主担当教員：神田　大吾　茨城大学人文社会科学部准教授
副担当教員：鈴木　　敦　茨城大学人文社会科学部　教授

2017 年度
茨城大学人文社会科学部　プロジェクト実習Ａ
「KITAIBA Art Project チーム」活動報告

１：はじめに

大貫　史織

私たち「KITAIBA Art Project」チームは、北茨城市を活動の拠点としている学生提案のプロジェクトチームである。今年度新しく結成したチームで、人文学部 10 人と理学部 1 人の計 11 人の 2 年生で構成されている。

では、なぜ北茨城市なのか。北茨城市は茨城県の最北に位置する市である。同市には茨城大学五浦美術文化研究所があり、大学と密接なつながりがあると言ってよい。しかし同市と茨城大学学生との間にはあまり接点がないのが現状である。また同市には大学がなく、水戸などに比べ「学生の力」が比較的弱く、市民による自発的な地域活動なども多くはないのが現状である。

北茨城市の現状を踏まえ、私たちは市内の「既存のものを活用した企画」と「新規のものの開発」によって市の魅力を発信することにした。北茨城市は岡倉天心や野口雨情ゆかりの地であり、同市には六角堂などの観光名所が数多くある。また、あんこうや天心焼といった名産品もある。そこで、既存のもの、特に観光名所を活用することと、名産品を使って新しいものを開発することの二つに絞り、プロジェクトを進めていくことにした。

プロジェクトとしての目的は以下の通りである。北茨城市を拠点とし、「アート×ヨソモノ×ワカモノ」をテーマに同市のまちおこし/まちづくり活動に参画する。 ヨソモノ、ワカモノとしての力を活かしながら、地域の課題を発見、その課題に対しての提案を行う。 その活動を通して、地域社会について知り、人々と交流し、まちが好きになる。 そして、自分の好きなものを周りの人々にも知ってもらおうと活動を広げる……。 こういったサイクルを生み出していく。また地域（ここでは北茨城市）は、「大学生」という新しい力を得て、長く地域で活動を続けてきた方々に加え、今までまちづくりに対してあまり積極的でなかった人々まで巻き込んだ新しいまちづくりへの転換ができると考える。

チームとしての目的は以下の通りである。地域活動の第一歩を踏み出すきっかけを得る。具体的には、地域への帰属意識（この町が好きだ！など）を養い、この意識を広げることの重要性を学び、地域で活動するためのノウハウや人脈を形成する。そして地域に出て活動できるような行動力を身につけ、自らの関心のある課題を見つけたときに行動できるようにする。

まちおこしやまちづくりといった活動にはゴールはないと考えるが、今回は「成果の基準」を設定し、上記の二つの目的を達成できたかどうかを検証する。まず、メンバーの意識調査である。プロジェクト開始後（6 月）とプロジェクト終了後（2 月）に意識調査を行い、各々の考え方（地域への帰属意識）や行動（活動の継続について）に成果を求める。「地域（ここでは北茨城市）を誇りに思うかどうか」「今後も活動を続けたいと思うか」という 2 項目を 5 段階（非常にそう思う/そう思う/どちらともいえない/そう思わない/全く思わない）で評価し、全員が「そう思う/非常にそう思う」と回答できることを目指す。また、プロジェクトが企画するイベントの参加者にも同様の意識調査を行い、北茨城を誇りに思うかという項目で、「そう思う/非常にそう思う」の回答率 80%以上を目指す。

当初はそのように設定していたが、変更したことがある。まず、メンバーの意識調査を 2 月ではなく 11 月に行ったことである。12 月に行われた活動報告会で結果を示すためにそのように変更した。また、参加者への意識調査を行わなかったことである。その代わり、イベントの参加者数と売り上げ個数で目的を達成できたかどうかを判断することにした。

これより先には、私たちが一年間活動してきた記録が載っている。どのような活動をし、どのような学びを得たのか、最後まで目を通していただけると幸いである。

２：活動概要

大貫　史織

KITAIBA Art Project チームは、北茨城市を拠点として活動しているチームでプロジェクト実習 A(総合)に属している。このチームのメンバーは人文学部 10 人と理学部 1 人の計 11 人の 2 年生で構成されている。当初、北茨城市内の既存のコンテンツを組み合わせて発信する「ゴールデンアート」チームと新規コンテンツを生み出す「オルタナティブアート」チームという二つの小チームに分け、活動を行っていた。しかし、活動をしていく中で二つのチームの活動を明確に区別することが困難であると感じられたため、小チームという括りをやめて、「KITAIBA Art Project」という大チームで活動をしていくことにした。

まず主な活動と概要を述べていく。次に、外部予算に関する活動と概要を述べる。

(1) 主な活動と概要

①第 1 回現地ミーティング

日にち：2017 年 6 月 23 日

場所：北茨城市旧富士ケ丘小学校

北茨城市役所環境産業部商工観光課の駒木根良徳様、株式会社魚の宿まるみつ代表取締役社長の武子能久様、北茨城市地域おこし協力隊の都築響子様と初めて顔を合わせて、ミーティングを行った。お三方から北茨城市の現状やイベントを伺った。また、チームのメンバーからは「五浦そば」の商品開発という提案があった。今後の活動の方向性について話をまとめることができた。

②第 2 回現地ミーティング

日にち：2017 年 7 月 25 日

場所：北茨城市旧富士ケ丘小学校

先月に引き続き、駒木根良徳様と武子能久様、都築響子様と共に話し合いをした。北茨城市民夏まつりと五浦そばの二つが話し合いの主なテーマであった。北茨城市民夏まつりについて、メンバーが考えた企画を提案してワークショップの内容を絞っていった。五浦そばについては、試食会を実施することに決めた。また、文化祭出店の準備に関してアドバイスをいただいた。

③北茨城市民夏まつりワークショップ準備

日にち：2017 年 8 月 17 日、18 日

場所：北茨城市旧富士ケ丘小学校

北茨城市民夏まつりで都築響子様が行うワークショップをチームのメンバーが手伝うことになり、祭りの前の二日間を利用して準備を行った。六角堂を作るワークショップであるため、画用紙を切ったり、窓や屋根といったパーツを貼ったりする作業がメインであった。

④北茨城市民夏まつり

日にち：2017 年 8 月 20 日

場所：常磐線磯原駅周辺

祭り当日、チームのメンバーは祭りの参加者にワークショップの内容を説明したり、六角堂を作る手伝いをしたりした。ワークショップの参加者は六角堂を組み立て、それに飾り付けをしていただいた。70 個以上の作品が完成するという大盛況だった。祭りの最後には、メンバーが自分で作った作品を頭に乗せ、祭りの参加者とともに市民音頭を踊った。

⑤第3回現地ミーティング

日にち：2017年9月23日

場所：株式会社魚の宿まるみつ　あんこう研究所

6、7月同様、駒木根良徳様と武子能久様、都築響子様と共に話し合いを行った。主に五浦そばについて話し合い、試食会の日程やそばの種類、具材などをある程度決めていった。文化祭で出店するため、調理方法や価格、目標とする売上個数などのアドバイスをいただいた。また、今後の予定についても話し合った。

⑥五浦そば試食会

日にち：2017年10月21日

場所：株式会社魚の宿まるみつ

株式会社魚の宿まるみつ様にご協力いただき、五浦そばの試食会を実施した。メンバーでいくつかの五浦そばを食べ比べた結果、ペースト状のあんこうの肝をのせた温かいそばを文化祭で提供することに決めた。この試食会で五浦そばを形にすることができた。

⑦茨苑祭での五浦そばプレリリース

日にち：2017年11月11日、12日

場所：茨城大学

茨城大学の文化祭である茨苑祭で、試食会で形になった五浦そばを一杯500円で提供した。茨苑祭では、学生地域参画プロジェクトの「岡倉天心・五浦発信プロジェクト」チームと合同で出店した。お客様に五浦そばを提供しながら、北茨城市のPRを行った。茨苑祭の二日間で約300杯の五浦そばを売り上げた。

⑵外部予算に関する活動と概要

KIRAIBA Art Projectチームでは外部予算である「女性・若者企画提案チャレンジ支援事業」から助成金をいただき、それを利用しながら活動してきた。以下に、外部予算に関する活動と概要を述べる。

①プレゼン

日にち：2017年7月1日

場所：茨城県立青少年会館

1次審査の書類選考に合格し、2次審査のプレゼンによる審査が行われた。KITAIBA Art Project の企画をプレゼンで伝えた。

②説明会

日にち：2017年7月8日

場所：茨城県立青少年会館

プレゼンによる2次審査も合格し、女性・若者企画提案チャレンジ支援事業として採択されたため、説明会に参加した。当事業の説明を受けたり、他のさまざまな団体と交流したりした。

③ブラッシュアップミーテイング

日にち：2017年7月23日

場所：茨城県立青少年会館

当事業のサポーターの方々から、チームの方向性や運営について様々なアドバイスをいただいた。

④女性・若者フォーラム

日にち：2018年2月24日

場所：M-SPO(まちなか・スポーツ・にぎわい広場)

ゲストスピーカーによる講演と当事業に選定された団体によるポスターセッションが行われた。その後、隣にあるOPEN TERRACE ME-EATで交流会も開かれた。

３：議事録・活動記録

神田　紗帆

No.	日時（10分単位）	場所	活動内容	参加者	実働時間
1	2017年　5月19日 13:00　－　14:30	グループ学習室S4	自己紹介、ブレインストーミング、チーム分け、チームごとの役職決定	長永、木村、大貫、神田、米川	1:30
2	2017年　5月24日 13:00　－　13:30	共同学習エリア	顔合わせ	神田、新井	0:30
3	2017年　5月26日 13:00　－　14:00	グループ学習室L3	役職の確認、事例シナリオの演習	長永、大貫、神田	1:00
4	2017年　6月2日 8:50　－　9:50	人文学部C棟406	意見出し、仕事内容の確認、諸連絡	長永、小松崎、米川、新井、森谷、大貫、丹治、木村	1:00
5	2017年　6月9日 8:50　－　9:50	人文学部C棟406	ルーブリック集計、日程調整、諸連絡	長永、大貫、木村、丹治、新井	1:00
6	2017年　6月12日 9:00　10:00	グループ学習室L1	ブレインストーミング、各チームごとの基本方針の検討、諸連絡	長永、大貫、新井、米川	1:00
7	2017年　6月23日 19:00　－　21:00	北茨城市立富士ヶ丘小学校	ご協力者様と顔合わせ、北茨城市の現状報告、企画提案について打ち合わせ	長永、神田、大貫、丹治	2:00
8	2017年　7月7日 9:00　－　10:00	人文学部C棟406	現地ミーティングに関する報告、アンケート実施の打ち合わせ、スケジュール調整	長永、丹治、新井、米川、大貫、森谷、猿田	1:00
9	2017年　7月7日 13:00　－　14:00	グループ学習室S2	前回ミーティングの情報共有、茨苑祭出店に関する打合せ等	神田、長永、丹治、木村、小松崎、猿田	1:00
10	2017年　7月10日 9:00　－　10:00	グループ学習室L3	市民夏まつりに関する打合せ、スケジュール調整、買い出し日程調整	長永、大貫、新井、米川	1:00
11	2017年　7月14日 12:40　－　13:40	グループ学習室S2	市民夏まつり企画案出し、スケジュール調整、諸連絡	長永、新井、丹治、米川	1:00
12	2017年　7月23日 13:00　－　14:00	茨城県立青少年館	ブラッシュアップミーティング、サポーターの方との打ち合わせ	長永、米川、大貫	1:00
13	2017年　7月25日 19:00　－　21:00	冨士ヶ丘小学校	市民夏まつりの打ち合わせ、五浦そばの試作の日程調整、茨苑祭出店の準備	長永、大貫	2:00
14	2017年　7月28日 13:00　－　14:00	グループ学習室S3	市民夏まつりに関する詳細な打ち合わせ（服装や段取り等）、五浦そば開発について	長永、大貫、小松崎、木村、神田	1:00
15	2017年　8月17日 9:30　－　17:30	冨士ヶ丘小学校	市民夏まつりのワークショップの準備	長永、大貫	8:00
16	2017年　8月18日 10:00　－　15:00	冨士ヶ丘小学校	市民夏まつりのワークショップの準備	長永、大貫	5:00
17	2017年　8月20日 9:00　－　20:00	常磐線磯原駅周辺	市民夏まつり当日。ワークショップの案内、六角堂模型の作成、市民音頭への参加	長永、大貫、丹治、米川、神田、	11:00
18	2017年　9月23日 16:00　－　20:00	株式会社魚の宿まるみつ　あんこう研究所	五浦そばについての話し合い、試食会の日程調整、文化祭出店における打ち合わせ	長永、丹治、大貫	4:00
19	2017年　10月21日 10:00　－　13:00	株式会社魚の宿まるみつ　あんこう研究所	五浦そばの作成に関する最終打ち合わせ、及び五浦そばの試食会	長永、小松崎、新井、米川、大貫、神田	3:00
20	2017年　10月26日 12:00　－　12:40	グループ学習室S3	茨苑祭の役割分担	長永、大貫、新井、　米川、鎌田	0:40
21	2017年　11月10日 13:00　－　16:00	グループ学習室L3	看板つくり	長永、大貫、丹治、新井、小松崎	3:00
22	2017年　11月11日 10:00　－　16:00	茨苑祭	茨苑祭における五浦そばの販売	長永、小松崎、神田、丹治、大貫	6:00

23	2017年　11月12日 10:00　－　16:00	茨苑祭	茨苑祭における五浦そばの販売	長永、小松崎、神田、丹治、大貫	6:00
24	2017年　11月17日 8:40　－　10:10	人文学部C棟406	茨苑祭の成果と反省	長永、大貫、丹治、米川	1:30
25	2017年　11月30日 16:00　－　17:00	ラーニングコモンズ	活動報告会に関する打合せ	長永、小松崎、丹治、神田、大貫	1:00
26	2017年　12月6日 13:00　－　15:00	人文A201	パネル作成	長永、大貫	2:00
27	2017年　12月8日 16:00　－　17:30	ラーニングコモンズ	ポスター作製、発表会事前打ち合わせ	長永、小松崎、新井、米川、大貫、神田、木村	1:30
28	2017年　12月22日 8:40　－　10:00	人文学部C棟406	活動報告会の反省、予算執行の報告、桃源郷芸術祭について打ち合わせ	大貫、小松崎、米川	1:20
29	2017年　2月24日 13:30　－　17:10	M-SPO（まちなか・スポーツ・にぎわい広場）	ゲストスピーカーによる講演とワークショップ、口頭での活動紹介、ポスターセッション	長永、小松崎、大貫	3:40
				合計	73:40

４：会計報告

新井　ひな乃

(1)大学予算

品　　名	単価	数量	合計
インクカートリッジ4色パック	3,553	2	7,106
インクカートリッジ黒	1,566	2	3,132
無地模造紙　白20枚	627	1	627
ポスト･イット50x50mm 5色 450枚	348	1	348
		総計	11,213

(2)外部予算

上記のチーム予算に加え、公益社団法人茨城県青少年育成協会の「女性・若者企画提案チャレンジ支援事業」（ https://www.pref.ibaraki.jp/bugai/josei/seishonen/h29kikakuteian-bosyuu.html ）に申請を行い、合計 10 万円の助成を戴くことができました（図 1)。活動にとって最大のネックとなる、現地への足の確保等に有効に活用させて戴きました。心より感謝申し上げます。

企画提案書

事業名	ゴールデンアート/オルタナティブアート	
区　分 該当する番号に○	① 申請者設定	（申請者が考えたテーマ）
	② 県指定	女性の活躍支援部門
	③ 県指定	青少年・若者のボランティア・体験活動実践部門

申請者と団体概要	団体名		KITABA ArtProject
	団体の区分	○	若者が中心となって活動するグループ又は団体
			茨城県で活動する女性団体・グループ
		※当てはまる方に○をつけてください。	
	団体の人数	10 代（11）名、20 代（　）名、30 代（　）名、40 代以上（　）名	
		計（11）名　※うち女性（8）名	
	〒番号 住所		
	代表者	役職	大学生
		ふりがな 氏名	
連絡先	担当者	役職名	同上
		ふりがな 氏名	同上
	通知等送付先	郵便番号	
		住所	
		電話番号	＊日中に連絡可能な番号
		FAX 番号	
		メールアドレス	

※連絡がとれる電話番号，FAX 番号，メールアドレスを記載願います。

添付書類	1　企画提案書（様式第１号） 2　計画書（様式第２号） 3　収支予算書（様式第３号） 4　誓約書（様式第４号） 5　団体の会員名簿※形式は任意 6　団体の定款・規則・会則等や団体の活動を紹介した資料等は任意で提出 ※提出の際に漏れがないか、最後にチェックしてください。

計画書

団体名ＫＩＴＡＢＡ　Ａｒｔ　Ｐｒｏｊｅｃｔ

1　事業名

ゴールデンアート/オルタナティブアート

2　事業の目的・対象

北茨城市を対象に学生が地域活性化活動を行なう。アート×ワカモノ×ヨソモノをテーマにアートを通したまちづくり、地域と学生の交流を行い、大学生による地域活動のサイクル形成を目的とする。

3　事業の内容、実施期間やスケジュール、実施する地域・場所等
（特に独自性などのアピールポイントを記載してください。また、例年実施している継続事業の場合は前年度との相違点や新たな工夫についても、記載してください）

北茨城市を拠点とし、「アート×ヨソモノ×ワカモノ」をテーマに同市のまちおこし/まちづくり活動に参画する。ヨソモノ、ワカモノとしての力を活かしながら、地域の課題を発見、その課題に対しての提案を行う。その活動を通して、地域社会について知り、人々と交流し、まちが好きになる。そして、自分の好きなものを周りの人々にも知ってもらおうとさらに活動を広げる。こういったサイクルを形成する。

また地域（ここでは北茨城市）は、「大学生」という新しい力を得て、今まで地域で活動を続けてきた方々に加え、今までまちづくりに対してあまり積極的でなかった人々まで巻き込んだ新しいまちづくりへの転換ができると考える。

北茨城市内の既存のコンテンツを組み合わせて発信するチームと、新規コンテンツを生み出すチームとに分け、活動を行う。
北茨城市役所や同市地域おこし協力隊、同市アートコーディネーター、その他作家、市内店舗の方々との連携を想定している。
既存のコンテンツを組み合わせるチームは、様々な特産品や工芸品を集めてのイベント企画や、新しい視点での同市のマップ作成、フォトロゲイニングなどからいくつか選び、年内をめどにこれらを実現させる。
新規コンテンツを生み出すチームは、新名物（食べ物、イベントなど）を生み出す。一年間で実現、もしくは着手を目指す。

実施する地域・場所（主に活動を行う市町村や施設名等を記入してください）
北茨城市、水戸市（茨城大学水戸キャンパス）

4　事業の実施により得られる成果

北茨城市を巻き込んだ新しい町づくりへの転換と、学生による地域活動サイクルの形成。茨城大学の学生を含むワカモノの北茨城市に関する関心の向上。

図１：助成金申請書（部分）

５：活動トピック

米川　緩

(1)北茨城市民夏まつり

2017 年 8 月 20 日、磯原駅周辺で北茨城市民夏まつりが開催された。わたしたちは北茨城市地域おこし協力隊である都築響子様のお手伝いとして頭上建築、「六角堂」のワークショップを行った。頭上建築とは、頭の上に建築物のミニチュア版を乗せることで都築様の活動の一つである。今回の市民夏まつりでは六角堂をお客様にデコレーションしていただき頭の上に乗せてもらった。

8 月 17 日、18 日に北茨城市民夏まつりのワークショップの準備を行った（図 2）。小さなお子様やお年寄りの方々は六角堂を一から作ることが難しいと考え前日の二日間を利用して準備を行った。六角堂をある程度作っておいたことで小さな子どもからお年寄りの方、たくさんの方に参加していただけた（図 3）。

また、六角堂にお花や貝殻、キラキラなどの好きなアレンジをしてもらうということで子どもや女性に人気があったと感じた。思い思いの六角堂を頭に乗せたたくさんの笑顔を見ることができた。さらに、アレンジをしている間たくさんの北茨城市民の方だけでなくお祭りに来た県内、県外の方とも交流することができ北茨城市、六角堂について伝えることができた。

市民夏まつりでのワークショップは 1 日で 70 個以上の大盛況だった。子どもからお年寄りの方までたくさんの方に喜んでもらえた。たくさんの方と交流することができわたしたちも楽しむことができた（図 4）。お祭りの最後にはメンバーも自分でアレンジした六角堂を頭にのせ、市民音頭に合わせて踊った。市民音頭の後にはワークショップに参加することができなかったが六角堂の頭上建築がほしいと言われることもあった。

図 2：作業風景

図 3：ワークショップで使用した六角堂の模型

図 4：祭り当日の様子

⑵五浦そば

株式会社 魚の宿まるみつの武子能久様のご協力のもと「五浦そば」の開発をおこなった。2017 年 10 月 21 日にあんこう旅館まるみつで五浦そばの試食会を行った（図 5）。そばつゆに常陸秋そば 100 パーセントの茶そばを入れ、その上にあんこうの肝をブロック状にしたもの、ペースト状にしたもの、温かいおそばにするか、冷たいものにするかを試食で決定した。茶そばにすることは岡倉天心が茶人であったことに由来している。本番では温かい、ペースト状のあんこうの肝を使うことになった。人参や大根の野菜も入れた。

五浦そばは 11 月 11 日、12 日で行われた茨苑祭に出店した。寒かったので温かいそばは人気だった。五浦そばを販売しながらたくさんの方に「なんで五浦そばっていうの？」などお声掛けしていただき、地域のことや活動についてたくさんアピールできたと感じた。二日間でたくさんの方に食べていただき大盛況となった（図 6・7）。

⑶「女性・若者企画提案チャレンジ支援事業」活動報告会

2018 年 2 月 24 日、水戸市南町の M-SPO（まちなか・スポーツ・にぎわい広場）において「女性・若者企画提案チャレンジ支援事業」活動報告会が開催され、2017 年度に選定された他の 38 団体と共に報告を行った（図 8）。

図 5：試食会

図 6：茨苑祭

図 7：茨苑祭で提供した五浦そば

図 8：活動報告会での説明

６：年度末活動報告会のポスターパネルと発表風景

図９：ポスターパネル（1/16 縮小）

図 10：活動報告会での発表風景

７：個人レポート

副リーダーという役割と他人の言葉が与える影響
プロジェクト実習で得た二つの学び

茨城大学２年　大貫史織

私はプロジェクト実習を初めて受講した。学生が主体となって地域で活動する授業であると聞き、通常の授業とは違った経験を積めるのではないかと思ったので、この授業を受講した。そして、KITAIBA Art Project チームのメンバーとして、この一年間活動してきた。北茨城市民夏まつりのワークショップの手伝いと茨苑祭での五浦そばの販売が主な活動であったが、プレゼン講座や最終報告会などもあった。これらの活動を通して、二つのことを学んだ。副リーダーという役割も重要であるということ、そして他人の言葉が大きな影響を与えることの二つである。

まず、一つ目の学びである。私は、副リーダーも重要な役割であるということを学んだ。

チーム内の役割を決める際に、私は副リーダーになった。リーダーや書記、会計と違い具体的な仕事のイメージを掴めないまま副リーダーになり、活動を始めることになった。初めは、副リーダーはリーダーの補佐だから、必要とされたときに意見を言ったり手伝ったりすればいいのではないかと思っていた。実際に、チーム内で SNS を使って連絡を取るとき、リーダーの指示を待つことが多かった。また現地に足を運んで外部の方と今後の予定について話し合うときも必要最低限しか話をしなかった。副リーダーになった私は、リーダーに頼ってしまい完全に受け身になっていた。

しかし、活動を進めていくにつれて、以前よりも主体的に行動するようになった。活動を始めて二、三カ月たった頃、副リーダーである私が行動しないとチーム内の情報共有が上手くいかないのではないかと思うことがあった。そのため、些細なことでも積極的に口に出して言うようになった。他のメンバーに疑問に思うことを聞いたり、発表の準備などの進捗状況を共有させたり、提出物の締め切りをリマインドしたりした。自分のことだけでなくチーム全体にも目を向ける必要があったので大変だった。また、チーム全体の情報共有が上手くいかず、締め切り間際になって慌てて活動することもあった。主体的に活動したがすべてが上手くいったわけではなかった。しかし、副リーダーという役割は楽ではなくむしろ大変であるということを実感した。

副リーダーはリーダーをサポートすることだけが役目ではない。チーム全体に目を行き届かせ、意見を言ったり情報共有を促したりすることも副リーダーの仕事であると知った。楽な役割だと思われがちな副リーダーも重要であるということを学んだ。

次に、二つ目の学びである。活動を通して、他人の言葉が大きな影響を与えることがあるということを学んだ。

プロジェクト実習開始時に個人の目標を設定し、「自分の意見をわかりやすく伝える力」を最も身につけたい力にした。ここでのわかりやすさには、自分の意見を簡潔に伝えることだけでなく、はきはきと話すことも含まれている。以前から口を大きく開けずに話してしまうという自分の欠点を自覚していたので、プロジェクト実習を通して少しでも直したいと思い、そのような目標を設定した。

夏休み期間中のプレゼン講座で、自分の欠点について講師の渡辺しのぶ先生から指摘を受けた。「口が横に開いているので、もう少し縦に開いた方がいいです」といった指摘だった。口の開きが横だと初めて言われたので、この言葉が非常に印象に残っている。自分の欠点を自覚していたつもりだったが、私は正しく自覚していなかったのだ。

プレゼン講座で指摘をいただいてから、今まで以上に声の大きさや口の開け方など話し方を意識するようになった。プレゼン講座の約二カ月半後に活動報告会があった。自分の話し方を意識して発表することはできたが、誰もが聞きやすいようにはっきり話せたとは思えない。プレゼン講座のときに指摘をもらってから、欠点を直そうと強く意識してきたが、努力が足りなかったため欠点を直すことはできなかった。結局欠点を直せなかったが、渡辺先生から指摘をいただかなかったら、欠点を直そうと今まで以上に強く意識することはなかった。活動を通じて、他人の言葉が自分に大きな影響を与えることがあるということを学んだ。

プロジェクト実習で、副リーダーという役割も重要であること、そして他人の言葉が大きな影響を与えることもあることを学んだ。これら二つの学びは、プロジェクト実習を受講したからこそ得ることができたのではないか。副リーダーも重要であるという学びは、チームを編成し学生が主体となって活動してきたからこそ得られたものである。また他人の言葉が大きな影響を与えることがあるという学びは、プレゼン講座というプレゼンを総合的に学べる機会があったから得られたものである。この一年間、決して楽ではなかった。しかし、プロジェクト実習を受講してよかったと思っている。

向き合う時間をくれた実習

茨城大学２年　丹治　彩弥乃

私がプロジェクト実習を受講する気持ちになったのは、自分の中で何かを変えたい、もしくは発見したいという想いがあったからである。しかし、普段の私は何かやってみたいという想いはあるものの、行動に移すことをあまりしてこなかった。しかし、今回はこの実習の中で自分を徐々にでも見つめていくことができればいいと思い、期待と不安でこの実習を受講することに決めたのである。

この実習を受け始めたころは自分の弱みや興味すら曖昧で、それがひたすら不安になっている状態であった。自分は何が向いているのだろうとか、何がしたいのだろうとか考えることしかしてこなかったが、この実習で実際に活動を行うことで活動することから得られる知識や経験は、ただじっとその場で黙っているよりもはるかに多いことを実感した。

活動を始める前に、私が具体的に改善したいと考えた三つの項目をまずは決めることができた。一つ目は話すこと、二つ目は実行力について、三つ目はストレスとの向き合い方についてである。私の特に弱い部分としてこれらを活動を通して改善していこうと考えた。

一つ目の話すことは、私が昔から相手にわかりやすくかつ簡単に伝えるということができないと感じていたため、プレゼンをうまくできる力を身につけたいと思ったのである。活動当初はやはり自分の意見をみんなに伝える時、どうしても情報量が多くてまとまらない、簡単にまとめて言うことができないと皆に不快にさせてしまうかもという思いが頭をよぎっていた。しかし活動の中のプレゼン講座によって、相手の聞きたいことをプレゼントするという気持ちで結果をわかりやすく伝えることを意識することを学び、相手に伝えることを重く考えていたのが軽く感じるようになった。自分の意見を伝えたいという気持ちに素直になれることは自分の中の変化であった。

二つ目の実行力は、物事を行うときの軸となる目的をよく見失うために活動にやる気がなくなってしまったり、活動の意図を見失ってしまうという問題点があった。よく、どうしてこの活動をやりたいと思ったのか、見失うことが多いのは飽きっぽい性格だからだろうとか自分に向いてないからだと考えてしまっていた。しかし、活動をするにあたって目的が軸であること、目的に弱みや欠けがないかを活動内容を決める前にその都度確認し、目的から逸れないことを徹底することで、しっかりと目的を定めることが重要だと気づかされた。そして同時に自分の欠点は目的決定の甘さにあったのだと気づくことができた。きちんと目的を定め、定期的に確認する作業の重要性をこの活動を通して学んだ。今後は自分がやりたいことを見つけたら、揺るがない目的を立てるためにはどんなことに注意して決めるかなど、目的の定め方やポイントを自分なりに発見していきたいと思う。

三つ目はストレスとの向き合い方である。これは二つ目の実行力とも関係している。目的をよく見失うために、活動自体に意味を見出せなくなり、活動自体がストレスに繋がってしまうという結果になるため、私にとってはかなり深刻な問題であった。ただ上記のように目的をきちんと定めることで改善することを知った。しかし、ストレスを生み出す原因は活動だけではなく日常にも多い。そのため自分のモチベーションを保つためにはどうしたらいいのか、どんな状況でもやる気を見つけ出し、やってみようという気持ちを生み出すものは自分の中で何なのか、逆にやる気を阻害するものは何なのか探ることを重点に置き、活動してみた。その結果、どちらにおいても自分の充実が大きく関わっていた。充実しているものはどんな状況でもストレスとは無縁であり、最終的に自分の中でいい経験だったりいい感覚だったりで、強く印象に残り続けることができていることが分かった。では、その充実を作るためにはどうすればいいのかについて考えてみたが、具体的にはっきりとこの要素が自分の充実につながっているというものは見つけられなかった。今後の課題として、自分の分析を通して充実につながる要素をもっと様々な経験を通して見つけていこうと思う。

最後に、このプロジェクト実習を通して三つの改善点という自分と向き合うこと以外に、外部の人と関わることで得られるものの大切さに気付くことができた。様々な人がそれぞれに自分と同じように向き合い、その中で日々自分が知らない努力や活動をしている人がこんなにいるのだなということを実感した。自分も将来どんな形であれ、熱意や自信をもって行動を起こせる人間になりたいと思った。プロジェクト実習という実習を通して私が学んだことを忘れずに、今後も成長していきたいと思う。

図：北茨城市市民夏祭「頭上建築」WS にて

１年間の活動を通して学んだこと
北茨城市を拠点として

茨城大学２年　米川　緩

わたしはKITAIBA Art Projectのメンバーの一人として約１年間北茨城市を拠点として活動をしてきた。アートとわたしたちのような大学生であるワカモノ、そして北茨城市以外に住んでいる全員を対象としたヨソモノを掛け合わせること。また地域社会について知り、人々と交流し、まちを好きになる、そして、好きになったものを周りの人々にも知ってもらおうとPR活動を行うというサイクルを生み出すことを目的としてまちづくり活動に参加してきた。

KITAIBA Art Projectの活動を通して、今まで地域で活動を続けてきた方々に加え、今までまちづくりに対してあまり積極的でなかった人々までを巻き込んだ新しいまちづくりへの転換ができるという考えのもと、いくつかのことを学んだ。まず、地域住民とのコミュニケーションが必須であるということである。2017年８月20日、北茨城市民祭り（図１）にて地域おこし協力隊の都築響子様のワークショップのお手伝いをさせていただいた。地域住民と関わっていく中でまちの魅力をもっと知ってもらいたい、もっと自らで伝えていってほしいと感じた。地域の方々ともっとコミュニケーションをとっていくことで地域についてさらに知ることができ、活動を続ける上で必要となっていくということを学んだ。また、茨苑祭で販売する五浦そばを、魚の宿まるみつ様に試作していただいた（図２）。一つの商品が出来上がるまでには、多くの方々のご努力とご協力に支えられているのだ、と学んだ。

図１：北茨城市民夏まつりにて

図２：五浦ば２種類を試食

また、プロジェクトで活動していくには、やはりある程度の人数が必要であるということも学んだ。わたしたちのチームは人数が多い。しかし、活動に参加するメンバーは最高で６人とチーム全体の人数と比較すると少なかった。たくさんの人数で活動できたらもっとたくさんのことができたのではないかと反省点にも感じた。さらにたくさんの連携先の方々と関わっていく中で、社会人としての基本的なマナーやメールでの連絡の取り方、情報共有の重要性などこれから生きていく上で必要となるものをしっかりと身につけることができた。このプロジェクト実習の授業ではプレゼン講座が組み込まれているためプレゼン能力やパワーポイントの作り方も学ぶことができ本当にたくさんの経験をすることができた。

わたしは初めて五浦に行った時の感動を忘れられない。一目惚れをしたと言ってもいいだろう。この感動をたくさんの方に味わっていただきたい。まず、まちについて知り、まちを好きになる、そして活動していく。わたしがこのサイクルの一員になったことから活動が始まっていると感じた。これからも茨城大学五浦美術文化研究所など、茨城大学と深い関わりを持つ北茨城市の素敵さ、魅力をたくさんの方々に伝えたい。そのためにも大学生として柔軟な発想、そしてフットワークの軽さを生かし、さらに自分も楽しみながらこれからも活動を続けていきたい。

何かを達成するということ

茨城大学２年　新井　ひな乃

KITAIBA Art Project の活動を通して自分の成長を感じることのできる点は三つある。個人の目標達成ルーブリックを記入したことにより気づきを得られた。自分と他人の意見についての考えと、最も苦手意識のあったインターネットとの関わり、そして茨城の魅力発見活動に対する考えの変化である。

一つ目は、自分の意見を持つ上にほかの人との協調性をもつことができるようになったことである。以前は自分の意見とはどのようなものなのかをよくわからず、ほかの人たちの意見に流されたり、ほかの意見を聞いたら自分がどう思っているのかわからなくなったりしていた。しかし、プロジェクト実習を受講したことで自分の意見を求められたり、ほかの人の意見を聞いたりしながら一つのことを決めなくてはいけないことが増えた。このことにより自然と自分の意見を固める、そしてほかの人の意見はほかの人の意見として聞き入れることができるようになったと感じる。またそれに加えて、ほかの人の意見と自分の意見を理解したうえで比較して、どうしていくべきか、積極的に考えることができるようになった。この“積極性”がこの授業で培われた、最も今まで自分に足りていなかった能力であると思う。

二つ目は、インターネットを利用するにあたっての情報の扱い方が約一年前に比べて格段に良くなったことである。今まではまず、エクセルやパワーポイントといったソフトを使いこなすこともままならなかった。それに加えて、とりわけ「調べもの」が苦手であった。この授業では、「実際に自分が動いて」というよりも「この授業で周りを見て学んだものをほかの機会に生かして」という視点からの学びであったのだが、自分の成長の一つ目に挙げたような自分の意見を述べる際に必要な根拠を探す・伝えるために、自分に必要な情報を集めたり、またその中でどの情報に信用性があるのかを見極めたり、パワーポイントを駆使していかに相手に伝わりやすいように構成を考えたりなど、今までは気にすることのなかった領域まで自分の視野を広げることができるようになった。また、パワーポイントなどのソフトの技術アップについては、パワーポイント講座をこの授業の一環で受講したり、ほかの授業でパソコン機能の仕組みを学んだり、実際に様々な課題に取り組んで来たりしたことで、克服できた。またメディアリテラシーを身に着けるために、情報伝達の仕組みやその際に生じる数々の問題について学び、その問題についていろいろな視点から考察してきた。この面からプロジェクト実習という授業を見ると、この授業を通して様々な技能を身に着けたというよりは、自分が様々な場面で身に着けてきた技能を生かし発達させる場として活きていたと考える。

三つ目は、今までそこまで深く考えておらず、漠然とした印象でしか持っていなかった「茨城の魅力発見」という言葉に対して、自分なりの考えを持つことができるようになったということである。今までも茨城の魅力を発見しそれを発信していく、という活動には参加してきたのだが、はっきりとしたビジョンはなく「茨城県の魅力発見・発信」というワードに惹かれて取り組んできただけといわれても過言ではないような取り組みをしてきた。しかし、リーダーの長永がグループ結成当初から明確なビジョンを持っていたことから、すんなりとその世界を理解し、自分なりに入り込むことができた。そのおかげで自分なりに茨城の魅力発見・発信活動についての考えを固めることもできた。今まではただ「茨城といえば何なのか」、「他県に劣らない、または意外と知られていない茨城の魅力とは何なのか」を考え、KITAIBA Art Project のメンバーのみんなとそれを「食」を通じて伝えてきた。しかしこの授業では実際に足を運んだり現地の人と交流を図ったりすることで「食」以外の視点からも考え、伝えることができたと思う。想像上だけでは広がらなかったものが広がっていく感覚が楽しかった。実際に自分がその魅力に気づき、それが消費者の需要と合致しているのか、が今までの自分の活動に不足していた部分であるのかなと感じた。

最後に、上に挙げた三つのことを学べたが、それ以上に反省点が多かった。リーダーをはじめとする数人に頼り切ってしまっていた部分があるのでそこは今後の活動の中で修正していきたい。

図：あん肝ペーストの試作品

言うは易く行うは難し

茨城大学２年　鎌田　純平

2017 年の１月１日、友人と初詣に行った際に今年の抱負を決めた。“挑戦”である。まだ１年生の段階だったが理学部として理学部の講義を受けることは一般的に言えば常識的ではあるが、私は少しの疑問を抱いていた。理学部は理系として位置しており、文系とは相反する存在として認知されている。また文系の講義に理系が参加すること、またその逆も異端として見られてしまう。そんな中、私は理学部の理系の学生として文系の講義に参加することで何か“新しい発見”があるのではないだろうかと考えるようになっていた。

そんな中、友人の長永君の紹介によってこのプロジェクト実習を受講したわけだが、端的に結論を述べると実にダメダメだった。なにがどのようにダメだったのかはこれから具体的に述べていくのだが、実に情けなさを感じる日々であった。長永君から紹介されたタイミングが一般の学生よりも遅かったため、選択肢はプロジェクト実習 A の一つのみであり迷うことは一切なかった。というより迷うための選択肢がない。動機も曖昧で単に“楽しそう”や“アクティブに活動したい”という想いからであった。当初、私が立てた個人達成目標は「説明能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力」、「目的を設定し確実に達成する力」、「生活を送るうえで必要な情報のありかや、入手方法を把握する力」の 3 つである。それぞれの比率は 1:5:4 で、目的設定とその達成能力に 1 番の比重を置いた。前期終了時点での自己評価としては、若干達成できたのは情報収集能力のみで、他の 2 つに関しては 4 月時点と“まるで変わらない”という評価である。情報収集能力も向上したとはいえ、その内容を見てみると能動的に情報を集めたかと言えばそうではなく、チームメンバーに迷惑をかけないように、そして追いつくための情報収集である。4 月から前期終了まではこの講義を通してはまるで成長していないのである。

後期に関しては前期の反省を生かして少し前進できた。その 1 つの形として活動報告会に出席したことだ。他のチームの人達は私のことを初めて見た人もいたのではないだろうか。私自身も他のチームメンバーや彼らの活動内容を実際に見聞きするのは初めてであった。補講として DVD や音源を見るのとは全く違ったものであると感じた。話は逸脱するが私は生協学生委員会という団体に所属しており、前に立って話したりプレゼンする機会が、この後期の期間は多数あった。プレゼン能力に関しては他のメンバーには負けない自信があった。しかし、現実は全く異なったものであった。情に訴えるようなプレゼンではなく、経験や実績を積み重ねた上に凛として聳え立つ他チームのプレゼンにはまるで歯が立たない。それも当然のことである。いくらプレゼンに自信があるとはいえ、周到に準備したプレゼンに対して私が行ったものは、当日の朝に原稿を考え添削し、実績が伴っていないプレゼンだったからだ。プレゼンにはある程度プライドを持って取り組んできたが、ここまでおざなりに行ってしまったのは生まれて初めてである。チームメンバーにも、他チームメンバーにも、そして来場された方々にも申し訳ないことをしたと深く反省している。

やはりこのレポートの題でも取り上げた通り「言うは易く行うは難し」であると何度も実感した。単なる興味関心だけで物事を実行することは非常に危険だし、非常に無責任であると実感した。しかし悪いことばかりではない。やはり不純な動機だろうと動機は動機である。私の場合は楽しそう、活動がしたいであった。動機が不純かどうかは他人から見てしまえば動機の種類や有無は関係なく、理学部の一人の人間として接してくれ暖かく迎え入れてくれるのである。これは人と人との繋がりを再確認することが出来る数少ない機会になった。

理学部の学生は往々にしてコミュニケーション能力が低いと言われている。一概にそうとも言い切れないが、私が理学部生として生活している中では、確かにコミュニケーション能力が低いという感じがしないでもない。このコミュニケーション能力というのは初対面相手によるもので、仲の良い友達に対しては、これは起こらないのである。実際にこの講義を通して接した文系の人たちはコミュニケーション能力が高く、例えば面接官からも印象はいいのだろうと感じた。そういった人たちとの出会いこそがこの講義での一番の収穫であったと私は確信している。何か現状を打破したい、変えてみたいと今の生活に満足することなく、地道な努力を重ねている人間たちに直面して、私の意識を改革することが出来た。ただ、当初講義を受講するにあたっての理由として私が提示したことは、「理学部生として他学部の学生に何か刺激を与える」であったことを考えると、非常に惜しいというか力不足であったと感じていることが残念でならない。

主体性と責任感の重要性について

茨城大学２年　木村　愛実

私は今年度の活動を通して身につけたい力として、物事に進んで取り組む「主体性」、人を巻き込む「働きかけ力」、行動の影響等を予測する「想像力」の３点を挙げた。これまでこの実習以外に行ってきた様々な活動の中で、自身の動き出しの遅さと、他人に対し必要なことを言えない働きかけ力・コミュニケーション力の乏しさ、動き出しが遅いにもかかわらず十分な準備もなく唐突に動き出してしまう慎重性の乏しさは大きな欠点となることを痛感した。そこで１年間をかけて学生同士のチームで活動を行いながら外部の方々とかかわるこの授業において、これらの欠点を改善しようと考えた。身につけたい力３点について、年間の活動を通して学んだことを以下に挙げる。

まず１つ目は「主体性」についてである。私は他の活動などが重なり、チームとしての大きなイベントにはほとんど参加することができなかった。しかし、大きな活動に参加できない分、どうチームに関わっていくか、活動に参加していくかを考えることができた。例えば現地のことを調べてみたり、他の地域で自分たちが考えているものと似たようなイベントが行われていないか探してみたりと、自分なりに北茨城市やチームの活動について知識を増やしたり考えを深めたりすることができた。ただし、これについてはもっと工夫ができたはずだと考えている。今回は自分で調べただけで満足してしまい、チームに知識や情報を共有することができなかった。また、チームとして活動する時間に参加できないのであれば、自分の空いた時間にチームに呼びかけて勉強会を行うなど、積極的に企画をすることもできたはずである。しっかりと活動について考えている姿勢、活動を他人事ではなく「自分事」として考えている姿勢を見せるというのも、チームで活動を行う上では信頼を築くことにつながるということを学んだ。

次に２つ目の「働きかけ力」についてである。様々な人との関わりの中で、地域活動をする上での「巻き込み」の重要性と、巻き込んだ側の責任について考えさせられた。他人に働きかけ、巻き込むことによって自分のやりたいことを実現させる力は重要である。しかし、その後、巻き込んだ人々をどう巻き込み続けるかという点が非常に難しい。情報共有が無い、もしくは著しく遅いという中では人は動けない。会議やイベントの当日になって、来るはずだった代表者が来ない、情報も与えないままにとりあえず現地に向かわせる、ということを行えばチーム員や関係者からの信頼を失う。情報共有が遅かったにもかかわらず参加を強く求めるなどの強引な運営も、「ついていこう」「一緒に頑張ろう」という気を失くし、モチベーションを下げる。これまで私は自分がリーダーとして人を巻き込み、情報共有や指示を行う側に立つことが多かったため、この実習を通して巻き込まれる側としてそれを体験し、巻き込まれた側のモチベーションを維持させるのは難しいということ、巻き込む側は他人を巻き込んだ以上、責任をもって行動しなければならないということを、身をもって学ぶことができた。

最後に３つ目の「想像力」についてである。今までのように衝動的に動いたり、惰性で動いたり、無計画に動いたりということは少なくなった。先を考えて問題点を洗い出し、それを見過ごすことなくきちんと対策をすることができるようになり、他の人に確認をとって抜けがないか確認することもできるようになった。しかし、個人単位では先を考えることができても、周りを巻き込んで考えることができなかった。自分で問題点の洗い出しと対策をある程度固めてチームに確認を取るということはできたが、チームの皆で洗い出しを行ったり対策を考えたりということができなかった。チームを引っ張る人だけでなくチームの皆が「皆で意見を出し合う」という考え方を持ち、且つ、その考えを個人単位で消化せず、皆で対策を考えられたらより活発に話し合いができたはずである。自分の起こす行動の影響を先読みする想像力を養うにも、グループとして活動するのであればやはりコミュニケーションは欠かせない。意見を出し、それに対する他のチーム員の意見を求め、皆でその意見の抜け穴をつぶしたり補強したりと精査していくことも「自分の起こす行動の影響を先読みする想像力を養う」ことにつながるのではないだろうか。

以上３点が今年度の活動の中で学んだことである。物事に進んで取り組む主体性、他人を巻き込む「働きかけ力」は確かに活動を行う上で重要な要素であり、地域活動だけでなく社会に出た後も求められる力である。自分から動くことができない人はもちろん、自分だけは主体的に動くことができても他人を動かせない人は必要とされない。しかし、その主体性や働きかけ力の裏に責任が伴うことを忘れてはならない。主体的に動き出し、他人を巻き込むことができたとしても、巻き込んだ人をおいていってしまっては元も子もない。自分の考えに賛同してくれた人に対しても失礼であるし、そのような行動をする人が信頼を得られるはずがない。主体的に動き、他人に働きかけると同時に、きちんと責任ある行動をすることの重要性を学ぶことができた。

KITAIBA Art Project を終えて
得られた貴重な経験

茨城大学２年　小松崎　流緋

私は長永勇太とともに昨年度から五浦・岡倉天心発信プロジェクトに参加しており、北茨城にはもとより関心が高まっていました。そのタイミングで今回、長永の方から声がかかりこの KITAIBA Art Project に参加しました。

KITAIBA Art Project では北茨城の市民祭りに参加して六角堂の頭上建築作成ワークショップを行ったり、北茨城産のあん肝や茶そばを使った「五浦そば」をあんこう旅館まるみつ様と共同で開発させていただき、文化祭で売るなどしました。市民祭りの方には私は参加できなかったのですが、五浦そばの方には試食会の段階から深くかかわることが出来ました。あん肝の形状一つとってもサイコロ状にするのかペースト状にするのか、また口に運んだ時の風味など、様々な観点から話し合い、改良を重ねました。ここでとりあえずあん肝を使えばいいわけではないプロの仕事をみて、仕事というものについて改めて触れる、そして考えるきっかけになりました。

このプロジェクト自体に北茨城市内外の人に「北茨城」についてもっと知ってもらい、内部の人にはシビックプライドを、外部の方には興味を持ってもらうという意図もありました。今回のプロジェクトの反省点の一つとして自分の潜在的な甘えなどの意識の問題が挙げられます。今回 KITAIBA Art Project に入って初めて五浦について知るメンバーが数名いる中で、自分は昨年度から五浦をフィールドに活動していたこともあって「まあ知ってるし」という気持ちが少し出てしまい、あまりフルコミットが出来ていなかったのではないかなと思いました。これでは本来得られるはずであるものも得ることが出来ず、プロジェクトが終了したときにも達成感があまりないのも当然だと反省しています。このことから初心を忘れない大切さを学びました。これからの人生ではしっかりと活かしていきたいです。

逆にもちろん得られたものもありました。五浦そばの開発から販売までの過程で多くのことを学びました。開発では仲間たちとともに何か一つのものを作り上げる、そこに一丸となり向かう姿勢を体験することが出来ました。また、茨苑祭での五浦そばの販売はとても過酷なものでした。圧倒的人手不足の中で行われた二日間に及ぶ文化祭での販売。予想以上に人気が出て当初の予定の 2 倍近く売上げたこともあり、一日中そばを茹でたりしていて、初日は一切ほかのブースを見ることなく終わりました。ただ、それだけ一つのことに、お客様の笑顔を見るために無我夢中になれる体験は普段の生活では出来ないため、非常に良い経験になりました。

今回のプロジェクト実習を通して、「プロとしての仕事に対する意識」「初心を忘れないこと」「みんなで一つのものを作る姿勢」「人のために無我夢中で頑張ること」の 4 つを学ぶことが出来、個人達成目標ルーブリックにあげた目標すべてが達成できたわけではありませんが、人間として一つ大きく成長することが出来たと思います。

また、私は個人達成ルーブリックで、今プロジェクトを通して最も身に着けたい力としてチームワーキング力の「意見の違いや立場の違いを理解する力」を掲げていました。一年次の時から様々なプロジェクトを回していたということもあり、二年次になるころには行動が少し自分本位になってしまっていた気がしたからです。改めて目標として「みんな『違う』ということ理解する」を掲げたことでプロジェクト中、常に意識するようになり、今では会議でとりあえず「No」とは言わずにみんなの意見を受け入れられるようになり、プロジェクトとしてのアイデアの幅が広がったように思えます。また相手の立場に立つことができるようになったことで、相手からのアドバイスも素直に受け取ることが出来るようになり更なる自己成長にも繋がりました。もうひとつチームワーキング力と同等の比重で掲げた目標として社会生活力の「自立した生活を実践できる力」がありました。当初の現状として「起床・食事・登校・各種活動から就寝までのペースがかなり乱れる。健康的ではない。社会生活に必要な諸手続を、確実にこなせないことが稀にある」という状況であったため、これを機にしっかりとした生活リズムにして仕事にも学業にも支障をきたさないようにしようと思いました。しかし、現実としてすぐに直すということは難しく、未だに早寝早起きなどの習慣は徹底は出きてはいないが少なくとも大事なイベントがあったり仕事があるときは起きれるようになったり、以前よりも食生活も改善され身体の調子は自分で良くなったと感じる。今回ルーブリックで掲げた目標に関してはある程度達成できたとはいえ、まだまだ自分の中で改善の余地はあるのでこれからの生活でもしっかりと忘れずに意識して生活したい。社会に出る上で確実に必要な能力になると思うので少なくとも来年度までには今回掲げた目標は完璧に達成しようと思います。

「意識高い系」とは

茨城大学２年　猿田　百佳

今回プロジェクト実習を受講するきっかけとなったのは、高校から一緒の友達が大学に入ってからいろいろな学校外の行事に携わって充実していることだった。彼はいわゆる「意識高い系」だと思うのだが、何が充実しているか、何に関して意識が高いのか、具体的なことはよく分からなかった。将来に対する明確な目標、野心を秘めていることは伝わってきて、なぜか憧れのようなものを感じていた。では、彼との差異はどこにあって、意識高い系の定義とは何なのか。

プロジェクト実習が始まった当初は１限にできるだけ出席して、会議にもお昼の時間など参加した。プロジェクトのミーティングというものに初めて参加して、あの空間に最初は少し緊張してしまった。しかし、集まってきたのは顔見知りの同じ２年生。友達の友達などが集まったが、みんな仕事をしているような真剣さだった。その場の雰囲気やトークこそなごやかだったが、とてもクリエイティブな空間になっていたと感じた。特に記憶にあるのが、北茨城をどうアピールしていくかという手段について話していた会議だ。茨城大学の文化祭であんこう鍋・五浦そばを売ろうという話になったとき、PR のために頭上建築をかぶるというアイディアが提案された。既存のものとのコラボレーションによって、新規のものを光らせていた。

それと同時に、わたしは経験不足を痛感した。数人のミーティングをしているメンバーの中にはもうすでにいくつかのプロジェクトをすでに成功させていたり、継続していたりする仲間もいた。そのような人たちの中に自分が居ることによって、社会的スキルの差が可視化できた。例えば、先述した通り、現実的に私たちの力ではそれは無理だろうと心の中で思ってしまうような提案も、他のプロジェクトを有意義にいい意味で利用して、「自分が以前仕事を一緒にさせていただいた〇〇さんに頼んでみるよ」と、他の人がサポートして、どんどんアイディアが繋がっていった。まさに個別のプロジェクトという点が、多様な視点からとらえることによって、たくさんのカラーを持ち、それぞれ線でつながり、混ざり合っていた。その場で少し取り残されているような自分がいた。しかしながら、それは自身で足かせをはめていたから招いた結果だということに気づいた。まだ大学生だから・・・という固定概念、バリアを自分で作って、行動に制限を設けていた。自分の殻に閉じこもっていた。彼との差異をここで認識した気がした。

プロジェクト実習が始まって、中頃実際に文化祭であんこう鍋・五浦そばを販売した。当日はバンドサークルの方が忙しく、当日は全く手伝えなかった。自分のバンドメンバーがあんこう鍋を演奏の合間に食べているのを見て、うれしかったが、自分もそれにかかわっているのだと胸を張って言えなかったのを今とても後悔して、重ねて反省している。それは自分の中で活動に積極的に参加できていないという現実感によって、悔しさや申し訳なさをどうしても無視できなかった結果だろう。後期から金曜１限のプロジェクト実習の時間にもほかの講義が入り、授業内でのミーティングには参加できなくなってしまった影響が大きいと感じた。

反省のようになってしまったが、あくまでもここ、プロジェクト実習で収穫できたものは大きいと感じる。最低限の単位をとって、そつなく大学を「こなして」いた私にとって、彼らの行動は刺激的でならなかった。意識高い系とは自分の設定したゴールに向かって貪欲に走る人のことを言うのではなかろうか。意識が高い人は行動力があって、人生のルートをきっちりと計画している人が多いと感じる。ゴールが設定されていることによって、逆算が可能になり、「自分が今何をするべきで、次のイベントの足掛かりになるだろう」といったようにルートを作ることができる。行き当たりばったりの人生より有意義な時間の使い方ができるのではないかと評価できる。また、意識高い系に共通することは、メールの返信が早いということだと気づいた。これはわたしもすぐに見習い、心がけている。就職活動が始まり、社会人との狭間を行き来するようになっても意識を高く保つことによって、より高い場所を目指せると思える。

図：茨苑祭で使用した看板

８：おわりに

木村　愛実

最後に、我々「KITAIBA Art Project」チームの今年度の活動を振り返り、成果の検証と今後の課題発見を行う。

プロジェクトとしての目的は2点あった。1点目は、地域課題の発見と提案を行い、地域社会について知り、人々と交流し、まちを好きになる、そして活動を広げる、というサイクルを生み出していくことである。2点目は、北茨城市が「大学生」という新しい力を得て、長く地域で活動を続けてきた方々に加え、今までまちづくりに対してあまり積極的でなかった人々まで巻き込んだ新しいまちづくりへの転換をすることである。チームとしての目的は、地域への帰属意識を養い、この意識を広げることの重要性を学び、地域で活動するためのノウハウや人脈を形成すること、そして地域に出て活動できるような行動力を身につけ、自らの関心のある課題を見つけたときに行動できるようにすることであった。

上記について、メンバーの意識調査と、イベントの参加人数・売り上げ個数をもって成果検証を行った。まず、メンバーの意識調査である。プロジェクト開始後（6月）と活動報告会前（11月）にアンケートを行い、各々の考え方（地域への帰属意識）や行動（活動の継続について）について調査した。「地域（ここでは北茨城市）を誇りに思うかどうか」「今後も活動を続けたいと思うか」という2項目を5段階（非常にそう思う/そう思う/どちらともいえない/そう思わない/全く思わない）で評価し、全員が「そう思う/非常にそう思う」と回答できることを目指した。アンケートの結果、「地域を誇りに思うかどうか」、「今後も活動を続けたいと思うか」のどちらの問いにも、全員が「非常にそう思う/そう思う」と回答した。活動を通して、メンバーが北茨城市の魅力を感じ、地域への愛着や帰属意識をもって活動を継続したいと考えていることがわかった。プロジェクトとしての目的の1点目と、チームとしての目的は達成されたと言えるだろう。次に、イベントの参加人数・売り上げ個数についてである。2017年8月20日、磯原駅周辺で行われた北茨城市民夏祭りでは頭上建築ワークショップを行い、70人以上の来場者に参加していただいた。2017年11月11日、12日に行われた茨苑祭では五浦そばを販売し、2日間で300食を販売した。どちらも販売時に様々な会話をすることができ、北茨城市や五浦の魅力発信に繋がったのではないかと思われる。

成果検証を踏まえて、残された課題は2点ある。1点目は企画に主体性がなかった点、2点目はチームの運営が滞り、タスクに偏りがあった点である。1点目について、今年度は様々な方のご提案のもと我々が意見を広げたり、お手伝いをさせていただいたりするような形の活動が多かった。「ワカモノ」「ヨソモノ」視点を活かした意見は出せたと思うが、主体的に企画を行っていたらそれ以上に新たな色が出せたのではないかと考える。しかし、我々の考えるサイクルではまず活動に参加することで知識や帰属意識を育むことが第一段階であるため、今年度の活動としては十分目的を達成していると言える。2点目について、チームを運営する中で今後社会に出てからも重要になる基礎的な事項を学ぶことができた。地域活動を行う上で他との連携は非常に重要なものである。チームへの帰属意識の育成や細やかな連携の難しさを学ぶことができた。チームとして、自らの関心のある課題を見つけたときに行動できるようにする力を身に付けることを目的としていたため、この課題は今後改善していくべきものである。

以上を踏まえて、今年度活動の目的として掲げた点については概ね達成したものと思われる。しかし、行動力不足などの課題が残っており、今後さらに活動を発展させることのできる余地があると考えられる。茨苑祭にてプレリリースを行った五浦そばについても、今後の商品開発や販売促進などで関われる部分は大きいのではないだろうか。また、北茨城市と茨城大学の繋がりについて、茨大生が知らないという現状も、未だ改善されたとは言えない状況である。今年度はプロジェクトチームのメンバーが発信者となることに重きを置いたが、今後は発信者となった我々がいかに北茨城市の魅力や茨城大学とのつながりなどを発信できるかが課題となってくる。「ワカモノ」であり「ヨソモノ」である我々だからこその視点を地域に還元していくことに注力する必要性を感じた。

末筆ながら、今年度の「KITAIBA Art Project」の活動を支えてくださった、北茨城市役所環境産業部商工観光課 駒木根良徳様はじめ北茨城市役所の皆様、代表取締役社長 武子能久様はじめ株式会社魚の宿まるみつの皆様、地域おこし協力隊の都築響子様、石渡のりお様・ちふみ様ご夫妻、女性・若者企画提案チャレンジ支援事業のサポーターの皆様、プロジェクト運営にかかわってくださった皆様に厚く御礼申し上げます。

３：さとみ・あいチーム

プロジェクト実習Ｂ

大チーム「さとみ・あい」

小チーム「カボチャで里美を盛り上げ隊」

リーダー	：田島　彩花	茨城大学人文社会科学部人文コミュニケーション学科	３年
副リーダー	：鬼澤　麻美	茨城大学人文社会科学部社会科学科	２年
書記	：飯塚子都香	茨城大学人文社会科学部人文コミュニケーション学科	３年
書記	：大村みるほ	茨城大学教育学部情報文化課程	２年
会計	：羽田野里菜	茨城大学人文社会科学部人文コミュニケーション学科	２年
メンバー	：江口　紗姫	同　　上	２年
メンバー	：塩畑　見咲	茨城大学人文社会科学部社会科学科	２年
メンバー	：永田　典子	茨城大学人文社会科学部人文コミュニケーション学科	２年
メンバー	：大枝　俊貴	同　　上	４年

小チーム「Comer」

リーダー	：野村　明里	茨城大学人文社会科学部人文コミュニケーション学科	３年
副リーダー	：鈴木　真由	茨城大学人文社会科学部社会科学科	２年
書記	：石橋　佳奈	茨城大学人文社会科学部人文コミュニケーション学科	２年
書記	：塩手菜々美	同　　上	２年
会計	：北野　友香	同　　上	２年
メンバー	：後藤　睦貴	同　　上	２年
メンバー	：高田　美奈	同　　上	２年
メンバー	：助川　実咲	茨城大学人文社会科学部社会科学科	４年

主担当教員：鈴木　　敦　茨城大学人文社会科学部　教授
副担当教員：岩佐　淳一　茨城大学教育学部　　教授
副担当教員：杉本　妙子　茨城大学人文社会科学部　教授

2017年度
茨城大学人文社会科学部　プロジェクト実習B
「さとみ・あい」チーム活動報告

１：はじめに

野村　明里

茨城大学人文社会科学部プロジェクト実習Bは、地域連携・地域貢献をテーマに活動している。この枠組みの中、「さとみ・あい」は初年度より、茨城県常陸太田市里美地区を主なフィールドとして活動をしている。

茨城県最北端に位置する常陸太田市里美地区は、中山間地域であり、少子高齢化・過疎化が進む地域である。私達は、地域の問題や課題を知り、学生という立場から6年間活動を行ってきた。継続しているプロジェクトとはいえ、メンバーは入れ替わり、それぞれの年によりアプローチの仕方も様々だった。昨年度までの活動は、里美地区を訪れること、イベントで里美の魅力を発信し、知名度を高めること等であり、その活動の支えは、里美の在来作物「里川カボチャ」と里美の豊かな自然を利用したものだった。

今年度は大チーム「さとみ・あい」をさらに小チーム「カボチャで里美を盛り上げ隊」と「Comer」に分け、活動を行った。小チーム結成により、活動内容も新たな展開を迎えた。従来の里川カボチャに関する活動だけでなく、里美地区で最も作られている農作物「米」に焦点を当てた活動が本格始動したのだ。昨年、試験的に活動を行った、水田での活動だ。

プロジェクトの目的として、一つ目に「若者・よそ者で里美の地域おこし活動を行うこと」を掲げ、カボチャで里美を盛り上げ隊がバスツアーを企画し、里美を知ってもらうことを目指した。二つ目に「農業を通して地域の方との交流をすること」を掲げ、Comer が中心となり、現地の方々と稲作を行うこと、そしてそのお米を利用して現地の方々と触れあうことを目指した。

またチームとしては、三つの目的を掲げた。「里美の魅力を若者・よそ者に伝えること」で発信力・働きかけ力、「自らが里美に赴き、交流をすることによって里美を元気にすること」で人間関係構築力・主体性・実行力、「里美・茨城大学の両方においてさとみ・あいの知名度を上げること」で課題発見能力・課題解決能力を学ぶことだ。

イベントへの集客を図るためにポスター掲示やビラの配布、茨城学での授業前宣伝などを利用した。イベントでは参加者にアンケートを設け、「満足度」や自由記述での感想の提出を求め、集計し、満足度80%以上を目指した。販売では「完売」を目指し、完売により成功とみなすことにした。

上記で述べたように今年度は、従来の里川カボチャの活動だけでなく、低地にある広大な水田で生産される、里美の水と土地で出来た藁と米の生産、収穫、販売の企画をした。「新たな企画」と「企画の継続」の二つの課題を背負いながら、豊かな緑に触れ、地域の人々と学生はどのように交流し、活動したか。これらの活動内容を次頁から具体的に記録する。

⑴里美 魅力発見バスツアー
⑵茨苑祭
⑶稲刈り・おだかけ体験
⑷さとみ 秋の味覚祭

２：活動概要

北野　友香・塩畑　見咲

⑴活動目標

「里美の魅力の伝達」

若者や里美地区外の人々に魅力をしっかり伝える。

「里美地区の活性化」

自らが里美に赴き、交流をすることによって里美を元気にする。

「活動の周知」

里美・茨城大学の両方においてさとみ・あいの活動の知名度を上げ、活動を確かなものとする。

⑵活動の概要

チームはプロジェクト実習 B(地域連携・地域貢献)のカテゴリーに属する。スタッフ編 13 名、リーダー編 2 名、メンター編 2 名の計 17 名で大チームを編成する。本年度で、継続して 6 年目の活動となる。「さとみ・あい」を大チームとして置き、それを構成する小チームとして、在来作物「里川カボチャ」をベースとした「カボチャで里美を盛り上げ隊」、里美地区の水田をベースとした「Comer」の 2 つのチームをそれぞれ置いた。これらの小チームは、それぞれにプロジェクトを設定し、相互にフォローしつつ推し進めた。

以下、主な活動とその概要について述べていく。

※全体での活動

①第 1 回里美訪問

2017 年 6 月 10 日、里川町にて実施。

里美地区でお世話になる方へのご挨拶に伺った。また、カボチャの種まき、植え付けのお手伝い、水田の参観を行った。お昼は荷見カツ子様お手製の里美の野菜を使った料理をご馳走になった。昼食後は荷見様から里美地区の歴史や里川カボチャについての解説をしていただいた。今年度初めての里美での活動で、里美地区の理解、地域の方々との交流を深めた。

②第 2 回里美訪問

2017 年 7 月 29 日、里美倶楽部様の水田／荷見様宅にて実施。

水田の除草作業とカボチャ畑の敷き藁作業を行った。里美の水田に初めて直に触れたことにより、自分たちの活動の実感が出てきた。また里川や里美の大自然に触れる機会もあり、より理解を深めた。

③合宿

2017 年 9 月 9 日／10 日、里川町／大中町にて実施。

バスツアーの下見を目的として、里美地区の観光スポットの視察を行った。外部の人たちにも里美の魅力を知ってもらうために自らが観光スポットの魅力を知ることができるよう努めた。夜は古民家荒蒔邸、沼田邸に宿泊した。食事を自分たちで作って食べたり、レクリエーションを行ったりしたことにより、メンバー同士の仲がより深まった。

※里美の在来作物である“里川カボチャ”を軸とした活動

④里美 魅力発見バスツアー

2017 年 10 月 15 日、里川町／大中町にて実施。

さとみ・あいのメンバーでバスツアーを企画。里美で活動する学生の立場から、普段、里美に馴染みがない方々

へ里美の魅力を伝えること、地域の人々との交流や中山間地域での暮らしの豊かさを参加者に実感してもらうことを目的とし、合宿をもとに里美地区の観光スポットを巡った。

⑤茨苑祭での出店および展示

2017 年 11 月 11 日／12 日、茨城大学にて実施。

里川カボチャを使用したカボチャパイの販売及び、さとみ・あいの活動紹介を行った。カボチャパイは水戸農業高等学校様のご協力のもと製造し、一部さとみ・あいメンバーも製造のお手伝いをさせていただいた。活動紹介は活動内容の展示とともに行い、多くの方々に里美地区の魅力、さとみ・あいの存在を知ってもらう良い機会となった。

※里美の水田を軸とした活動

⑥稲刈り・おだかけ体験

2017 年 9 月 16 日、里美倶楽部様の水田にて実施。

おだ掛けの認知度をより多くの若者、よそ者に発信するため、さとみ・あいのメンバーだけでなく、チラシを作成して募集をかけた。一般学生や茨城キリスト教大学の先生にも参加していただき、外部への里美の魅力発信にもつながった。

⑦さとみ 秋の味覚祭

2017 年 11 月 3 日／4 日／5 日、里美ふれあい館イベント会場にて実施。

里美地区で開催された「味覚祭」に参加した。「味覚祭」は毎年 11 月上旬に里美地区にて「かかし祭」と同時開催されているイベントである。里美地区の特産物の即売会や芸能発表などが数日間に亘って行われる。今年度は、地域の方々のお手伝いに加えて、自らが里美地区で生産に携わったお米を販売するという形でも参加し、若者が里美地区の活性化に携わるという目的のため、「学生が作った」ことをモチーフとして販売を行った。

３：議事録・活動記録

飯塚　子都香・石橋　佳奈・大村　みるほ・塩手　菜々美

No.	日時（10分単位）	場所	活動内容	参加者	実働時間
1	2017年　5月16日 9:00　－　10:10	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	自己紹介、プロジェクト構想立案、 チーム決め、役割決め	田島、野村、飯塚、江口、鬼澤、北野、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野	1:10
2	2017年　5月19日 8:40　－　10:10	茨城大学人文社会科学部C棟406	ピーク行事の決定、第一回里美訪問について、今後の日程の確認	田島、飯塚、鬼澤、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野、大村、後藤	1:30
3	2017年　5月23日 9:00　－　10:10	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	プロジェクト名の決定、目的・概要・予算について、年間スケジュールの決定	田島、野村、飯塚、江口、鬼澤、北野、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野	1:10
4	2017年　5月30日 9:00　－　10:10	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	Comerのイベントについて、水戸農業高校の訪問について、プロジェクト構想の変更	田島、野村、江口、鬼澤、北野、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野	1:10
5	2017年　6月2日 9:00　－　10:10	茨城大学人文社会科学部C棟406	構想発表について、第一回里美訪問について	田島、飯塚、江口、鬼澤、北野、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野、大村、後藤、石橋	1:10
6	2017年　6月9日 9:40　－　10:10	茨城大学人文社会科学部C棟406	茨苑祭について、茨城学における宣伝について、助成金について	飯塚、野村、江口、鬼澤、北野、鈴木、羽田野、大村、後藤、石橋	0:30

7	2017年　6月10日 10:15　－　16:00	茨城県常陸太田市 里美地区	里美訪問:(1)荷見様宅にてカボチャの種まき　(2) 里美倶楽部様へのご挨拶	田島、野村、飯塚、江口、鬼澤、北野、塩手、塩畑、鈴木、羽田野	5:45
8	2017年　6月16日 9:00　－　10:00	茨城大学人文社会科学部C棟406	岩佐先生からのお話、物品申請について、7月の活動について、Comerの宣伝について	田島、野村、飯塚、江口、鬼澤、北野、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野、大村、後藤、石橋	1:00
9	2017年　6月19日 9:00　－　12:00	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	「平成29年度大好きいばらき地方創生応援事業」申請のための書類作成	田島、野村、飯塚、江口、塩畑、永田、大村、高田	3:00
10	2017年　6月21日 16:30　－　18:00	茨城県立 水戸農業高等学校	水戸農業高校様にご挨拶、今後についての話し合い	田島、江口、鬼澤	1:30
11	2017年　6月23日 9:00　－　10:10	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	茨苑祭について、第2回里美訪問について、さとみ・あいの判子完成の報告	田島、野村、飯塚、鬼澤、北野、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野、大村、後藤	1:10
12	2017年　7月7日 9:30　－　10:10	茨城大学人文社会科学部C棟406	Comerの宣伝について、茨苑祭の販売物について、第2回里美訪問について	田島、野村、飯塚、江口、鬼澤、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野、大村、後藤、石橋、大枝	0:40
13	2017年　7月21日 9:40　－　10:10	茨城大学人文社会科学部C棟406	茨苑祭について、茨城学における宣伝について、第2回里美訪問について	田島、野村、飯塚、江口、鬼澤、北野、塩手、鈴木、永田、羽田野、大村、石橋	0:30
14	2017年　7月28日 9:00　－　10:10	茨城大学人文社会科学部C棟406	Comerのイベントに関して、第2回里美訪問・里美合宿について、味覚祭について	田島、野村、飯塚、江口、北野、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野、大村、後藤、大枝、助川	1:10
15	2017年　7月29日 10:20　－　16:50	茨城県常陸太田市 里美地区	第2回里美訪問:(1)水田での稲刈り　(2)荷見様宅での魚釣り体験とカボチャ畑の藁敷き	田島、江口、鬼澤、塩手、永田、羽田野、大村、石橋、高田、大枝、助川	6:30
16	2017年　9月9日 10:10　－　19:30	茨城県常陸太田市 里美地区	合宿にてバスツアーの下見:大中神社、プラトー里美、荷見様宅、圃場見学、生田の滝、ぬくもりの湯、荒蒔亭	田島、野村、飯塚、鬼澤、北野、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野、大村、石橋、大枝、助川	9:20
17	2017年　9月10日 6:30　－　16:10	茨城県常陸太田市 里美地区	合宿にてバスツアーの下見:薄葉沢の滝、うぐいすの里、横井の滝、里美ふれああい館、里美生産物直売所	田島、野村、飯塚、鬼澤、北野、塩手、塩畑、鈴木、羽田野、大村、石橋、大枝、助川	9:40
18	2017年　9月16日 10:30　－　15:00	茨城県常陸太田市 里美地区	おだかけ体験ツアー:稲刈りとおだかけ	田島、野村、江口、北野、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野、石橋	4:30
19	2017年　9月29日 10:20　－　11:50	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	後期報告会の準備、バスツアーの宣伝について、脱穀体験について、茨苑祭について	田島、野村、飯塚、大村	1:30
20	2017年　9月30日 10:20　－　15:00	茨城県常陸太田市 里美地区	脱穀作業・おだを外す作業	野村、永田、羽田野	4:40
21	2017年　10月5日 16:10　－　18:00	茨城県常陸太田市 里美地区	NHKの夕方放送番組の収録へ参加	田島、飯塚	1:50
22	2017年　10月6日 6:00　－　8:30	茨城県常陸太田市 里美地区	NHKの朝方放送番組の収録へ参加	田島、飯塚	2:30
23	2017年　10月15日 9:40　－　15:30	茨城県常陸太田市 里美地区	里美魅力発見バスツアー・カボチャの収穫体験	田島、野村、江口、塩手、鈴木、大村、石橋、大枝	5:50
24	2017年　10月20日 9:00　－　10:10	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	味覚祭ならびに試食会についての話し合い、茨苑祭・活動報告会について	田島、江口、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野	1:10
25	2017年　10月21日 11:00　－　14:30	茨城県水戸市五軒町 市民センター	味覚祭に向けての試食会	田島、野村、北野、塩手、鈴木、永田、羽田野、石橋、高田	3:30
26	2017年　10月31日 16:30　－　19:00	茨城県立 水戸農業高等学校	茨苑祭で販売するお菓子の相談、試食	田島、江口、北野、塩手	2:30
27	2017年　11月2日 16:00　－　20:00	茨城県常陸太田市 里美地区　荷見様宅	味覚祭の前準備	田島、野村、飯塚、北野、塩手、石橋、高田	4:00
28	2017年　11月3日 7:30　－　20:00	常陸太田市里美地区 大中町里美ふれあい館	味覚祭1日目:Comerによるお米の販売・カボチャコロッケ販売の手伝い、翌日の前準備	田島、野村、飯塚、江口、北野、塩手、永田、大村、後藤、石橋、高田、助川	12:30

29	2017年　11月4日 8:00　－　17:00	常陸太田市里美地区 大中町里美ふれあい館	味覚祭2日目：Comerによるお米の販売・カボチャコロッケ販売の手伝い、翌日の前準備	田島、鬼澤、塩畑、鈴木、永田、羽田野、大村、後藤	9:00
30	2017年　11月5日 9:00　－　15:30	常陸太田市里美地区 大中町里美ふれあい館	味覚祭3日目：Comerによるお米の販売・カボチャコロッケ販売の手伝い	野村、江口、鬼澤、塩手、鈴木、羽田野、石橋、高田	6:30
31	2017年　11月10日 8:50　－　22:20	茨城大学水戸キャンパス／水戸農業高等学校	茨苑祭のブース準備、展示物・看板の作成カボチャパイの作成	田島、野村、鬼澤、北野、塩手、鈴木、永田、羽田野、大村、石橋、高田	13:30
32	2017年　11月11日 9:00　－　18:00	茨城大学 水戸キャンパス	茨苑祭にてカボチャパイの販売、活動紹介	田島、野村、飯塚、江口、鬼澤、北野、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野、大村、後藤、石橋、高田	9:00
33	2017年　11月12日 9:00　－　18:00	茨城大学 水戸キャンパス	茨苑祭にてカボチャパイの販売、活動紹介	田島、野村、飯塚、江口、鬼澤、北野、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野、大村、後藤、石橋、高田	9:00
34	2017年　11月17日 8:40　－　10:10	茨城大学人文社会科学部C棟406	活動報告会およびポスターの作成について、水農祭について	田島、野村、飯塚、江口、北野、塩手、鈴木、永田、羽田野、後藤、石橋	1:30
35	2017年　12月1日 8:40　－　10:10	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	今後の日程ならびに出席者の確認、パネルセッションについて	飯塚、江口、鬼澤、塩畑、鈴木、永田、羽田野	1:30
36	2017年　12月10日 9:00　－　17:20	茨城大学人文社会科学部 講義棟	プロジェクト実習 最終報告会	田島、野村、飯塚、江口、北野、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野、大村、後藤、高田、大枝、助川	8:20
37	2017年　12月22日 9:10　－　10:10	茨城大学人文社会科学部C棟406	活動報告会の振り返り、報告書作成の割り振り、B502の片づけについて、常陸太田市の冬まつりについて	野村、飯塚、江口、鬼澤、北野、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野、大村、後藤、石橋	1:00
38	2018年　1月19日 9:20　－　10:10	茨城大学人文社会科学部C棟406	残された課題と今後の展望について、最終報告書について	田島、野村、飯塚、江口、北野、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野、大村、後藤、石橋、大枝	0:50
39	2018年　1月26日 8:45　－　10:10	茨城大学人文社会科学部C棟406	最終報告書について、今後のイベントについて	田島、飯塚、鬼澤、北野、塩手、塩畑、鈴木、永田、羽田野、大村、石橋	1:25
40	2018年　2月2日 10:20　－　11:50	茨城大学人文社会科学部C棟406	域学連携合同報告会について	田島、江口、永田、羽田野、大枝	1:30
41	2018年　2月9日 9:00　－　17:30	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	最終報告書作成に関する話し合い	野村、飯塚、江口、塩手、鈴木、永田、羽田野、大村、後藤、高田、大枝	8:30
42	2018年　2月15日 9:00　－　17:30	茨城大学図書館1階 共同学習エリア	最終報告書作成に関する話し合い	田島、飯塚、江口、後藤、大枝	8:30
43	2018年　2月23日 13:30　－　19:00	3331 Arts Chiyoda B105	域学連携合同報告会リハーサル並びに登壇	田島、江口、永田、羽田野、大村、大枝	5:30
				合計	177:00

４：会計報告

北野　友香・羽田野　里菜

(1)大学予算

予算運用の自由度を高めるため、小チームごとの個別運用ではなく合算して使用した。このため、本報告も大チームさとみ・あいとして行う。

品　　名	単　価	数　量	合　計
軍手	1,138	2	2,276
プリンタインク	4,626	1	4,626
農作業用長靴サイズ SS　（あじさい柄）	5,346	2	10,692
農作業用長靴サイズ S　（あじさい柄）	5,346	4	21,384
農作業用長靴サイズ L　（オリーブ）	4,752	1	4,752
成分表用シール	756	4	3,024
ビニール袋	648	7	4,536
		総　計	51,290

(2)外部予算

上記のチーム予算に加え、小チーム「カボチャで里美を盛り上げ隊」・「Comer」それぞれが大好きいばらき県民会議の「大好きいばらき地方創生応援事業助成金（ http://www.daisuki-ibaraki.jp/h29chihousousei-ouen.html ）」に申請（図 1）を行い、合計 24 万円の助成を戴くことができました。活動にとって最大のネックとなる、現地への足の確保を中心に有効に活用させて戴きました。心より感謝申し上げます。

（様式第 1 号）

大好きいばらき地方創生応援事業応募申請書兼実施計画書

団体等名称	カボチャで地域を盛り上げ隊	28 年度に当事業の助成金を受けた団体	はい いいえ
代表者氏名		会員等数　9 人	
団体等所在地	〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1 茨城大学人文社会科学部 鈴木教研究室気付	TEL 029-228-8115 FAX 029-228-8199	
担当者氏名	田島 彩花	TEL 080-3981-0926 FAX	
事業名	若者・よそ者へ里美の魅力発信プロジェクト―在来作物 里川カボチャを通して―		
事業のねらい	1. 少子高齢化の進む常陸太田市里美地区で、地域の在来作物である里川カボチャに関わる活動を学生である私達が現地で行うことなどを通して地域を活性化させる。 2. 申請団体は、メンバーが入れ替わりつつも、2012 年から継続的に里美地区及びその在来作物である里川カボチャの周知活動を行っており、地域からも評価されている。近年、里川カボチャはマスコミに何度も取り上げられるようになり、今後は北関東イオンからの引き合い、大規模圃場の新設も視野に入れて「メンバー以外の若者への周知」をテーマに掲げて活動を行うことで、活動の拡大、即ちより充実した地域活性化を目指す。茨城大学の文化祭（茨苑祭）での里川カボチャを使用した食品の販売を予定している。 3. 農業に携わる機会が少ない学生が、地域の方々と関わりながら農業活動を体験することによって、普段は気づくことが出来ない、自然の営みや食事が出来ることのありがたみや地域の課題に気づく機会を作る。		
対象地域 対象者 参加予定者数	対象地域 常陸太田市里美地区	対象者 地域の住民の方々 茨城県内の学生	参加予定者数 （事業内容のとおり）
連携・協働の相手方	里川カボチャ研究会		
事業内容	〔定期現地活動〕 日　時：7 月 29 日・9 月 9 日-10 日 場　所：常陸太田市里美地区内 参加者：メンバー・教員 約 8 名＋メンバー外の若者約 7 名＝約 15 名 内　容：カボチャ畑での農作業・バスツアーで巡る場所の視察　等 〔里美探検バスツアー〕 日　時：10 月中旬 場　所：常陸太田市里美地区内 参加者：茨城県内の学生・教員 約 40 名 内　容：里美地区をバスで巡る。 ツアー内に里川カボチャについての学習と収穫体験を予定。		

（様式第 1 号）

大好きいばらき地方創生応援事業応募申請書兼実施計画書

団体等名称	Comer	28 年度に当事業の助成金を受けた団体	はい いいえ
代表者氏名	野村 朋里	会員等数　8 人	
団体等所在地	〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1 茨城大学人文社会科学部 鈴木教研究室気付	TEL 029-228-8115 FAX 029-228-8199	
担当者氏名		TEL 070-6451-1082 FAX	
事業名	若者・よそ者による地域交流促進プロジェクト―稲作を通して―		
事業のねらい	1. 少子高齢化の進む常陸太田市里美地区で、水田を軸とした活動を行う。学生である私達が里美地区で活動し、またメンバー以外の若者を里美地区に呼び込む活動を行うことによって、地域を活性化させる。 2. 2016 年度に試行し、今年度本格始動した事業である。農業のすばらしさ、農業は「ダサい」ものではなく「イケてる」ものであることをメンバー以外の若者に広く周知させる方法を考え・企画し・実施する。 3. 高齢化と機械化によって茨城の名産品・わら納豆用のわらが不足している。納豆用わらの生産には手作業による天日干しが不可欠だが、高齢者には負担が大きい。私達若者が、メンバー以外の若者も巻き込んでこの作業を請け負うことにより、地域活性化と名産品保護を同時に進める。 4. 農業に携わる機会が少ない学生が、地域の方々と関わりながら農業活動を体験することによって、普段は気づくことが出来ない、自然の営みや食事が出来ることのありがたみや地域の課題に気づく機会を作る。		
対象地域 対象者 参加予定者数	対象地域 常陸太田市里美地区	対象者 地域の住民の方々 茨城県内の学生	参加予定者数 （事業内容のとおり）
連携・協働の相手方	里美山村交流会・里美倶楽部・茨城県納豆商工業協同組合		
事業内容	〔定期現地活動〕 日　時：8 月下旬・11 月上旬 場　所：常陸太田市里美地区内 参加者：メンバー・教員 約 8 名＋メンバー外の若者約 7 名＝約 15 名 内　容：水田の管理・常陸太田市里美地区 秋の味覚祭への出店 等 〔稲刈体験－わら納豆を救え－〕 日　時：9 月中旬 場　所：里美倶楽部様借り受けの水田 等 参加者：茨城県内の学生・教員 約 40 名 内　容：メンバー以外の若者も巻き込み、稲刈・天日干しを行う。		

図 1：助成金申請書（部分）

５：活動トピック

⑴里美 魅力発見バスツアー

江口　紗姫

＜日時＞2017 年 10 月 15 日(日)　9:00～18:00
＜場所＞常陸太田市里美地区
＜活動内容＞

里美の魅力を「よそ者」(=里美に居住していない)の方たちに知ってもらうために、今回は大学生をターゲットに「里美魅力発見バスツアー」を企画した。バスツアーの流れは、大中神社→プラトーさとみ→荷見誠様・カツ子様宅の圃場→横川の大滝→里美生産物直売所 である。

大中神社では、見どころの一つである大きな杉の木と写真を撮ったり、たくさんのお社の中から自分の願いを叶えてくれるものを探し、お参りをしたりした。プラトーさとみでは、昼食をいただいた。また、昼食中にさとみ・あいメンバーも出演した里川カボチャ特集のテレビ番組を見ていただき、この後向かう荷見様宅での里川カボチャ収穫への理解を深めていただいた。荷見様宅の圃場では、参加者の方々に里川カボチャの収穫体験をしていただいた（図 2)。当日は悪天候で足元の状態は悪かったが、どの参加者の方も楽しそうに収穫をされていた。収穫した里川カボチャはレシピと一緒に持ち帰っていただき、各ご家庭で調理していただく形となった。横川の大滝では、足元が悪かったため、滝壺まで降りることができなかった。しかし、途中の場所からでも滝の迫力が感じられた。滝をバックに記念撮影をしていた参加者もいた。里美生産物直売所では、里美にやってきた記念としてお土産を買っていく方が多かった。また、里美ジェラートを堪能し、五感で里美の魅力を体感できた。

道中、バスの中では、さとみ・あいメンバー自身がバスガイドとして行き先について説明をした。見どころを一枚のマップにまとめたり、里美にまつわるクイズを出題したりなど、それぞれ工夫が見られるバスガイドであった（図 3)。

図 2：里川カボチャ収穫体験の様子

図 3：さとみ・あいメンバーによるバスガイド

⑵茨苑祭

大村　みるほ

＜日時＞　2017 年 11 月 11 日(土)　9：30～17：30、12 日(日)　9：30～17：00
＜場所＞　茨城大学水戸キャンパス
＜活動内容＞

今年の茨苑祭では、出店と室内展示を行った。

出店では、理学部 D 棟付近で里川カボチャを使用したパイの販売を行った。この里川カボチャパイの作成には、連携 4 年目となる水戸農業高等学校食品化学科の方々にご協力いただいた。11 月 10 日に水戸農業高等学校にてパイ作りが行われた際には、さとみ・あいメンバーも参加した（図 4)。1 個 300 円で販売した里川カボチャパイを、2 日間で計 310 個完売することができた（図 5)。出店ブースには、里美地区や里川カボチャ、さとみ・あいに関するパネルを掲示し、販売しながら口頭で紹介をしていた（図 6)。

室内展示は、プロジェクト実習を受講する「Domaine MITO チーム」、「チームみなと⍰みらい」と共に合同で、人文講義棟 23 番教室にて行った。昨年度までに制作した展示物とともに、今年度の活動内容をまとめ制作した展示物を使用した。来てくれた方に、実物の里川カボチャを見せながら、自分たちの活動や里川カボチャについて説明をした（図 7)。

図 4：パイ作成の様子

図 5：里川カボチャパイ

図 6：集合写真

図 7：展示の様子

⑶稲刈り・おだかけ体験

石橋　佳奈

＜日時＞ 2017 年 9 月 16 日(土)　9：00～16：35
＜場所＞ 常陸太田市里見地区　里美倶楽部様水田
＜活動内容＞

さとみ・あいでは、2016 年度から里美倶楽部の皆様の稲作に加わらせて戴いて来た。里美倶楽部は、稲作を中心に十数年前から里美地区で活動してこられた域外の方々のグループであり、さとみ・あいにとっては大先輩に当たる方々である。今年度は、米の生産から一歩進めて稲わらの生産にも挑戦した。

稲作農家の高齢化と農作業の機械化により、かつては様々な用途に活用された稲わらは稲刈りと同時に粉砕されて田にすき込まれてしまうのが一般的となった。質の高いわらを安定的に確保することが困難になり、茨城名産のわらづと納豆がピンチに陥っているという報道に接し、わら確保に当たってネックとなるおだかけ作業を自分たちで行うことで、①少量なりとも良質のわらを生産する、②生産したわらを加工業者さんに販売するルートを作ることを目指した。将来的に③里美地区でわらづと納豆用のわら生産が広まることも期待しての活動である。

この活動では、「広がり」を重視してチーム以外の茨城大学生にも参加を呼びかけ、大好きいばらき地方創生応援事業助成金を使ってバスをチャーターし、「稲刈り・おだかけ体験ツアー」という形をとった（図 8）。

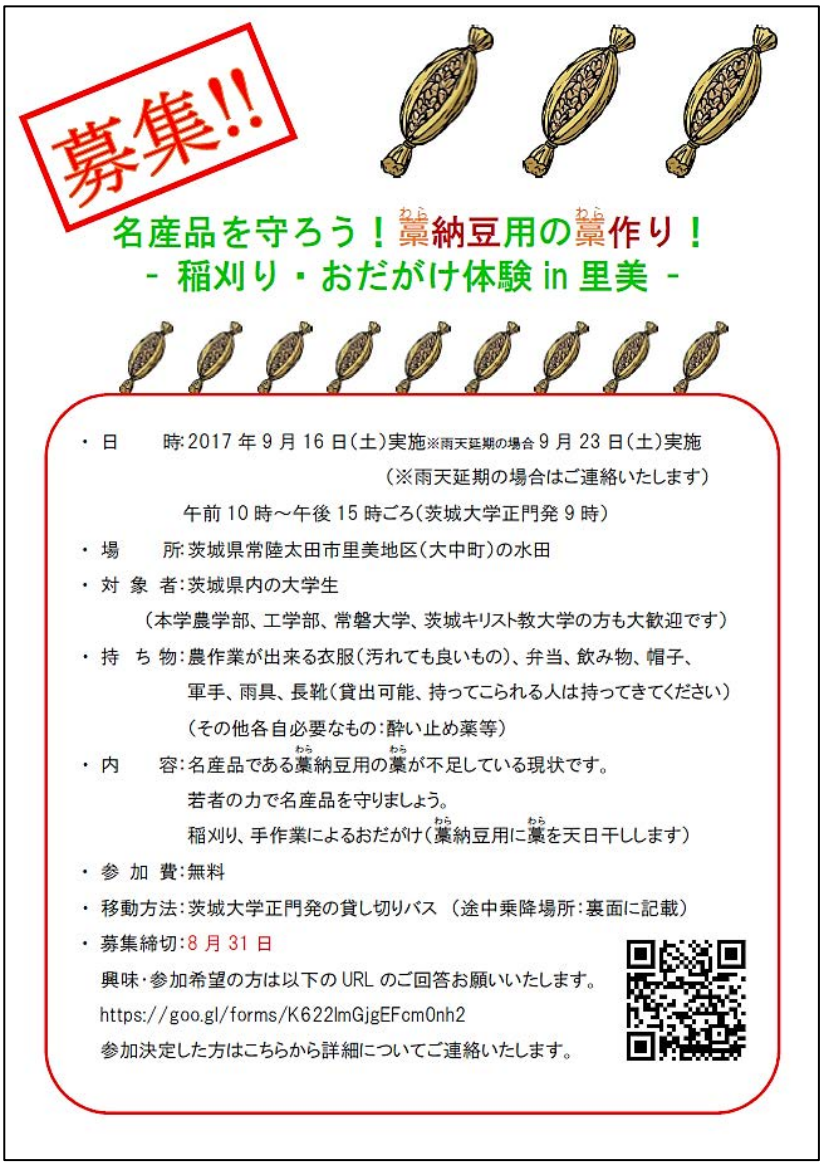


図 8：ツアーチラシ

作業手順は、①まず、日ごろから里美倶楽部の水田をお世話下さっている里美地区在住者の小林信房様・豊田紀雄様に「バインダー」という小型機械を使って、稲の刈り取りとおだかけに適したサイズの束にまとめる作業をして戴く（図 9）、②バインダーで刈り残した稲や束からこぼれた落穂は、自分たちが手作業で刈り取り、拾い集めて束にまとめる（図 10）、③稲の束を竿に干す（おだかけ）（図 11）、④雨からわらを守るために、束の根元にビニールをかける（図 12）というものである。

里美倶楽部の方々とはほとんどのメンバーが初対面であり、加えてさとみ・あい以外の学生にも参加してもらうという初の試みであったため、もたついたところもあったが、様々な方々と交流を深めながら、楽しく作業することが出来た（図 13）。

生産したわらは、茨城県納豆商工業協同組合理事長・高野正巳様のご紹介で加工業者に買い取って戴くことができた。皆様のご支援に感謝申し上げます。

図 9：豊田様とバインダー

図 10：刈り残しを鎌で刈る作業

図 11：おだかけ作業

図 12：ビニールかけ作業

図 13：作業後の記念撮影

(4)さとみ 秋の味覚祭

塩手　菜々美

＜日時＞　2017 年 11 月 3 日(金)・4 日(土)・5 日(日)　9:00～15:00
＜場所＞　常陸太田市里美ふれあい館イベント広場
＜活動内容＞

さとみ・あいの知名度を上げること、地域の人との交流を深めることを目的とし、さとみ秋の味覚祭にて自分たちで作ったお米「さとみまい」の販売を行った（図 14・15）。

荷見様の出店ブースの一部をお借りして出店した。販売の際には、テントの中で米の包装を担当する人、会計でお金を管理する人、テントの外で呼び込みをしつつ宣伝をする人に適宜分かれて活動した。お米の販売をしながら、お客様にお米についての説明とさとみ・あいの活動についての説明も行い、交流を深めることができた。

また、同時に開催されていた「かかし祭り」にもさとみ・あいメンバーが作成したかかしを出品しており、努力賞を獲得した（図 16）。

図 14・図 15：さとみまいの販売

図 16：さとみ・あい公式キャラクター
おさとちゃんのかかし

６：年度末活動報告会のポスターパネルと発表風景

図 17：ポスターパネル（1/16 縮小）

図 18：活動報告会での発表風景

７：個人レポート

リーダーとしての成長
さとみ・あいでの「楽しみ」を通して

茨城大学３年　田島　彩花

図：活動の中で釣りを
「楽しむ」私達

私は昨年、初めてプロジェクト実習を履修した。昨年の報告書の個人レポートにも記載したように、他のチームは２年生だけで活動を行っていたというのに、私は２名の３年生と４名の４年生に頼りっぱなしだった。

今年度、私はさとみ・あいのリーダーとして２年目の活動に取り組むこととなった。「今年も里美の方々に会える、おいしいものが食べられる」という期待より「私にリーダーが務まるのか」という不安の方が大きかった。今年度の活動を開始することに伴い、私は二つの目標を立てた。一つ目は「役割をできるだけ分担し、自身はリーダーとして全体統括に徹すること」、二つ目は「自身の伝えたいことを簡潔に述べられるようにすること」だ。以上の二つの目標について以下で詳しく説明したい。

一つ目の「役割をできるだけ分担し、自身はリーダーとして全体統括に徹すること」という目標は、大学卒業後の自分、そして来年度さとみ・あいを引っ張っていくであろう後輩の為に立てた目標だ。まず、自身が就職をした際に、自分一人で仕事をするのではなく、同僚と協力しながら仕事を進めることがあると考えた。また、自分が指示を出し、仕事を円滑に進める役割(さとみ・あいにとってのリーダー)につくことがあるかもしれないため、学生のうちからスキルを磨こうと考えた。そして、昨年度、自身が先輩に頼りっぱなしになってしまったことにより、今年度の活動に対して不安が大きかったことを反省とし、２年生に対しても仕事をきちんと振り分けることにより、来年度のさとみ・あいの安定を目指した。

この目標が結果的に達成できたかと問われれば、実際には、できなかった場面の方が多くあっただろう。役割を振り分けることは容易にできた。しかし、役割分担を終え、その後の活動が私にとっては難しかった。後輩に任せた仕事であっても、自分のやり方を強要したり、提出してもらった成果物が自分の基準より低い完成度だと、結果的に手出しをしてしまったからだ。より良いものを作り上げたいという気持ちと後輩に任せたいという気持ちが葛藤を繰り返した１年であったと思う。私が訂正するのではなく、自身の持っている知識を後輩に伝授し、後輩自身に訂正をさせるべきだった。

二つ目の「自身の伝えたいことを簡潔に述べられるようにすること」は、自分の話し方・展開の仕方に欠点があると感じ、立てた目標だ。話が長くなってしまい、本当に伝えたいことが何なのか、相手に伝わらないことが、頻繁にあった。話をする際に事柄や順序を、整理せずに意見を述べていたことが原因だと考え、今年度は、意見を述べる前に自分の中で整理してから述べるように意識した。その結果、年度の初めよりわかりやすく述べることが出来るようになったと感じている。しかし、まだまだ改善すべき点があるため、今後も邁進していきたい。

今年度、さとみ・あいとして再履修をした者が自分だけということもあり、初めにも述べたように大きな責任と不安を感じていた。元々、自身がリーダーに向いているとは考えていなかったため、先に待ち受けている困難が怖かった。しかし、実際に活動を始めてみると、楽しいことの方が多かった。プロジェクト実習という授業の中で楽しみながら活動を行えることは、私達さとみ・あいの誇る部分であり、楽しさや活発さは、他のチームと比較しても負けない自信がある。それは、私を支えてくれたメンバーがいたからこその楽しさであった。個性豊かなメンバーがそれぞれの良さを生かしながら、笑顔を絶やすことなく活動を行った。もちろん、困難なこともたくさんあり、焦りや苛立ちを感じることも多くあった。それらを共に乗り越えた私達だからこそ、成功には心の底から共に喜ぶことができ、失敗には共に反省をし、悔やむことができた。様々な学年・学部・学科が所属するさとみ・あいの活動は、私生活においても大きな支えとなっていた。

今年度も私はメンバーに頼ってしまった。しかし、今年度は「共に」活動を行うことができたと感じている。支えてくださり、「共に」活動を行ってくださった外部の皆様、そして先生、メンバー、ありがとうございました。

活動を通して学べた協力することの大切さ

茨城大学２年　鬼澤　麻美

私は、プロジェクト実習という授業があるということを大学の先輩に教えていただき、興味を持ち始めた。普段の授業とは違って通年の授業であり、地域と地域の方々とより深くかかわることができる良い機会だと思った。また、学生が主体の授業であるため学生同士で協力して活動することで、お互いに多くの刺激を受け、普段では学べないことも学ぶことができると思い履修を決めた。

私が所属しているさとみ・あいとしての活動は、チームとしての目的や活動の方向性、活動内容をメンバーで話し合うことから始まった。過去の活動記録はあるものの、集まったメンバーで一から何かを作り上げていくという経験はこれまでにほとんどなかったため、新鮮で楽しみという思いもあったが、しっかりついていけるのかという不安もあった。また、個人としての目標も設定した。さとみ・あいの活動で多くの人と話す機会があるため、説明する能力やコミュニケーション能力など話すことに対すること、物事に積極的に取り組む主体性、自分の意見を分かりやすく伝えること、この３つをどのように達成したいかを具体化させ活動に取り組んだ。実際に活動をする前の段階で、このようにしっかりと目的、目標を設定したことにより、それぞれの活動に明確な目的を持って活動することができた。

さとみ・あいのフィールドである里美地区に何度も足を運び、協力してくださる農家さんのお手伝いをしたり、バスツアーを企画するにあたって、まずはメンバー自身が地域の魅力をしっかりと知るために現地での合宿を行ったり、地域のイベントに参加したりなどして、地域の方々との交流を深めることができたとともに、一回一回の活動でもっとこうすればよかったなど反省する機会も多々あったので学びの場として有意義な時間を過ごすことができた。

図：茨苑祭で販売した里川カボチャのパイ

メンバー内で役割分担をして活動していたが、どうしてもリーダーに頼りすぎてしまうことが多かったことが課題だと感じた。活動の実行の部分だけでなく、構想の段階から積極的に関わって、自分にできることは率先して行わなくてはならないと思った。そのような思いの中で、自ら役割を担ったことがきっかけとなり、責任感を持って最後まで積極的に取り組めたと感じたのは茨苑祭である。私は茨苑祭のまとめ役となり準備の段階から本番までメンバーと協力して活動した。さとみ・あいは茨苑祭で水戸農業高校の生徒さんとコラボして、里川カボチャを使用したスイーツの販売を行った。そのため、まずは高校に訪問し、自分たちの活動紹介をして相手方の協力を得て、実際にどのようなスイーツを製作するのかについての話し合いを行った。大学生になってから高校生と関わる機会はなかったため、貴重な機会だった。その後は会議に参加して得た情報をメンバーに共有したり、当日までに行うことをまとめたりして着実に準備を進めた。メンバーの積極的な協力もあったおかげで無事に本番を迎えることができた。当日は、製作したカボチャパイは大盛況で、「製品の完売」という目標を達成することができて、とても嬉しかった。また、展示ブースでも見に来てくださった方々がさとみ・あいに興味を持ってくださり、自分たちの活動が注目されることはやりがいにもなると感じた。茨苑祭の２日間で反省することもあったが全体的に成功させることができてとても達成感があった。今やらなくてはいけない活動だけでなく、先のことも考えて計画的に行動することができたと感じた。

１年間の活動を通して、自分が抱えている課題を見つめなおすことができた。活動の初めに設定した自分の目標を少しずつ達成できている気がする。自分が伝えたいことをその場でうまく整理できずに、分かりやすく伝えられないことが課題であったが、自分たちの活動紹介をするときなどには順序立てることを意識したので以前よりはまとまりのある内容で話をすることができるようになった。さとみ・あいとしての活動は、忙しくて大変なことも多かったが、その分一つ一つの達成感を感じることができたし、メンバー同士で話し合いを行ったり協力し合ったりすることでチームの絆も深めることができたと思う。協力し合うことの大切さも学んだ。自分の周りには自分以上に積極的に活動しているメンバーもいて、「自分も頑張らなくては」と良い刺激を受けることができた。授業の一つとしてこのような貴重な活動ができ、履修して本当によかったと感じた。

プロジェクト実習は終わったが、自分への課題は多く残っているので、それをそのままにせずしっかり改善していき、今後のあらゆる場面で役立てていきたい。また、さとみ・あいの活動で学んだ多くのことも将来に活かしていきたいと思う。

2年目のプロジェクト実習
再挑戦による新たな気づき

茨城大学3年　飯塚　子都香

2年目のプロジェクト実習であるが、昨年度は異なるチームにいた。昨年1年間の活動の中で、葛藤することも多く、今年度履修する事自体も始めは迷っていた。しかし、今しかできないことを今はやりたい、と考え、もう一度履修することを決めた。更にその中でも、さとみ・あいを選んだのは、昨年度の活動の様子を見て、里美の魅力を知り、自分もその魅力を伝える一員になりたい、と考えたこと、また、継続して活動するとはどのようなことなのかを学びたいと考えたからである。

昨年度は、スケジュール管理ができず、プロジェクトに参加できないことが多く、それにより他のメンバーとの認識の差などができてしまった。今年度、履修を決めた際、私は、「逃げずに向き合う」という目標を立てた。

他のメンバーと比べ、まだまだ活動の量は多くはないが、普段の活動に参加できない分、書記として家でできることを進めるなど、自分の中でできる限り活動することができた。そしてそれは一緒に活動していたリーダーやメンバーの支えと気遣いがあったからこそだと思う。一緒に活動してきたメンバーに感謝と尊敬の気持ちを伝えたい。できる限りではあるが、活動に多く関わることで昨年度の活動では見えてこなかった部分にも気付くことができた。自分が活動しているチームについてまずはよく知ること、それがプロジェクトを進める第一歩になる。活動をしていく中で、もっと知りたい、関わりたい、という気持ちが生まれ、見えてくるものがあるということに改めて気が付いた。

昨年度の活動において私は書記を担当していたが、反省点が多く自分の活動に納得がいっていなかった。その点においてリベンジするぞ、という思いで今年度も書記を担当した。結果、昨年度のようにうまくいかないことをそのままにせず、活動を実施することができたので、無事にリベンジを果たすことができたと感じている。またチーム全体では、自分の立ち位置に葛藤することもあったが、書記チームをまとめることを通して自分の立場を明確にできたこともひとつ成長につながった。

また、プロジェクトを進めるにあたって、課題発見から計画・実行までのプロセスの重要さを学ぶことができた。課題を解決するために必要なことは何かを考え、計画を立てることの難しさ、また、計画を実行しようとした際に出てくる課題の解決など、様々な壁にぶつかることができた。

しかし一方で、イベントが立て続けにあったことも重なり、チーム全体としても個人としても、立てた計画を実行してから、振り返りの時間を持つことができなかったことが反省点の一つだ。PDCAサイクルを回して次の活動に活かしていくことができていたら、4つの大イベントはより良いものにできたのではないだろうか。

また、チーム全体の今後の課題として、里美地区における住民との関わりが重要になってくるだろう。さとみ・あいチームの目的は、里川カボチャを通じて、里美地区を活性化することである。しかし、1年間活動してきた中で、多く関わることができたのは、里美地区の一部の方であり、地域住民の方と関わる機会は少ないように感じた。味覚祭では、お米の販売を通じて、初めて住民の方に私たちの活動を知ってもらう機会が得られたことはその一歩になっただろう。しかし、実際に里美地区における知名度はどれほどのものなのか、住民の方々にわたしたちの目的を認識してもらっているのかどうか、実際のところはわからない。まず里美地区における立場の現状を明確にし、今後どのように活動していくかを考える必要があるのではないだろうか。

カボチャを通じた地域おこしがテーマであるが、それ以外にも多くの方の協力のおかげで、様々な自然に触れ、たくさんのことを感じることができた。

プロジェクト進行における反省点を感じることができたことも含め、活動を通して非常に多くの学びがあり、諦めずにプロジェクト実習に参加してよかったと心から思っている。

図：里川カボチャ

さとみをあいする
1年間の活動を通して

茨城大学2年　大村　みるほ

1年間のさとみ・あいの活動を振り返ると、プロジェクト実習を「教育学部だから」、「活動が大変そうだから」という理由で履修しない、という選択をしなくてよかったなと思う。ガイダンスに行った時は、授業内容への期待を感じつつも、他学部の授業、1年間を通しての活動ということで負担が大きいのではないかと不安を感じていた。実際、負担はあったし大変だった。それでもなお、思い返してみると楽しいという感情の方が上回った。それは、活動を通して「さとみをあい」することができたからだと思う。以下、「授業」と「地域活動」という2つの側面からさとみ・あいでの活動を振りかえっていきたい。

まず、授業という側面からである。年度初めの授業から使用していた「個人の達成目標ルーブリック」を参考とする。私はプロジェクト実習を通して、プレゼンテーション能力・課題発見能力・発信力を特に身につけたいと感じていた。プレゼンテーション能力に関して、大学に入学し、授業等で発表をする機会は増えたが、正直「プレゼンって何？」というもやもやとした思いと苦手意識を抱いていた。しかし、プレゼン講座や実際にプレゼンすることを通して、プレゼンとは「聞き手へのプレゼント」なのだと学んだ。技術の点ではまだまだ未熟だが、プレゼントだという意識は忘れないようにしたい。また、プレゼン講座では、プレゼン内容の構成の立て方や情報を分かりやすく伝えるための設計図を作るコツ、今まで知らなかったパワーポイントの使い方など、学びが多くあった。とても有意義な機会であったと感じている。課題発見能力に関しては、受講前と比較すると、力を伸ばすことができたように思う。企画を行うにしても「なぜ行うのか」、「どんな効果をもたらすのか」を明確にしないと内容がぼんやりとしてしまったり、行うだけで満足してしまったりする。今年度のさとみ・あいの活動では、次の3つをチームの目的として掲げていた。「里美の魅力を若者・よそ者にしっかり伝える」、「自らが里美に赴き、交流をすることによって里美を元気にする」、「里美・茨城大学の両方においてさとみ・あいの認知度を上げる」ということである。この目的があったからこそ、意義のある活動が行えたのだと思う。しかし、自分は現状を分析するという点が不十分であったように思う。前年度からの先輩がチーム内にいた、聞き得た情報があった、ということで甘えていたのかもしれないが、自分から積極的に里美地区（以下、里美）のことを調べることがあまりできていなかった。今後は現状分析をおろそかにしないようにしたい。発信力に関しても、受講前と比較すると、力を伸ばすことができたように思う。以前は、伝えたいことがある時に、頭の中で整理しきれていないことから、相手にうまく伝えることができずもどかしい思いをすることが度々あった。さとみ・あいの活動では、企画を進めていく中で自分の意見を伝える機会が多かった。そのように経験を積んでいったことで、徐々に自分の意見を分かりやすく伝えることができるようになっていったのだと思う。プレゼンテーション能力・課題発見能力・発信力の3つは、社会に出てからも大切なことだと思うので、今後も力を伸ばしていきたい。

次に、地域活動という側面からである。私はこれまでの大学生活の中で、授業やボランティア、その他の取り組みにおいてひたちなか市や水戸市で地域活動を行ってきた。ひたちなか市は地元であるし、水戸市は高校生の頃から通っているので、どちらも馴染みのある土地である。さとみ・あいがフィールドとする常陸太田市や里美はほとんど知らない土地であり、私は「よそ者」であった。しかし、訪問を通して活動を重ねるごとに徐々に里美を知っていった。空気がおいしく豊かな自然、ピンク色の皮の里川カボチャやおいしいお米などの食、といった里美の魅力。また、里美の方々のあたたかさに何度もふれた。はじめは何だか観光気分だったが、活動が後半に差し掛かるころにはすっかり愛着がわいていた。だが、まだまだ里美に関して知らないことはたくさんある。授業以外で訪れたこともまだない。これからもっともっと「さとみをあい」し、里美のことを発信していきたいと思う。

今年度の活動では、稲刈り・おだ掛け体験やバスツアーといった参加型のイベントや味覚祭・茨苑祭での出店において、さとみ・あいを介して里美の魅力を多くの人に発信することができた。今後も自分たちの視点から、里美を盛り上げていくことができたらと思う。

最後に、さとみ・あいに関わってくださった全ての皆様、そして共に活動を行ってきたさとみ・あいの皆さん、1年間ありがとうございました。

図：茨苑祭での展示の様子

自分の力はこんなものじゃない
プロジェクト実習を通して学んだこと

茨城大学２年　羽田野　里菜

プロジェクト実習は、私にとって大きなものとなった。今の自分と一年前の自分を並べると明らかに今の自分の方が輝いているに違いない。それぐらい自分を成長させてくれたものだ。

一年前に、自分でルーブリックを埋めていった。自分が足りないと思った力を三つ選ぶ。私が選んだのは、想像力・行動力・人間関係構築力だ。どれも自分の将来につながると思い、選んだ。どんな力を身につけたいかを具体的に書き、今の自分の力も確認した。人間関係構築力は、一番成長したと思う。しかし最初は、実際のところ狭い範囲で考えていたことが今になってわかる。さとみ・あいが里美地区の人と交流し活動をすることはわかっていた。しかし、目標設定の段階では、あくまでチーム内のことしか考えていなかった。ほとんどが初めて会った人だった。私は、グループになったときに積極的に発言ができるタイプではなかった。これは変えていかなければいけないと、どこかで考えていて、その機会がいまだと思ったのだ。「積極的」ということをいつもこころがけていた。しかし、やはりチーム内でという考えが自分の中で存在していたと思う。一歩外に出ると、いつも通りの自分。まったくプロジェクト実習の経験を他でいかせていなかった。成長の実感がないまま、9 月の合宿まで参加していた。自分が壁を乗り越えられたのは、「稲刈り・おだかけ体験」からだ。私は、チーム内で会計という役割がある。しかし、イベント全体のしきりという役割が決まったのは初めてだった。さらに、外部の方を招いたイベントというのも初めてで、今までと少し違っていた。このイベントでは失敗ばかりしていた。まず、しおり作成だ。最初は、今までのしおりと同じようにやっていた。しかし、メンバーだけが見るしおりではないため、外部用のしおりも作成した。これについて、かなり苦労した。確認をしてもらうため、二週間前には完成をさせなければならなかった。それをめどに最初は順調に作成していた。しかし、その後の、バス会社との関係や参加してくれる方との連携などがあり、結局一週間前になってしまった。その後も、外部の方に失礼のないよう、このイベントの内容やその他私たちの活動目的がわかってもらえるようにするしおりにしなければならない。そのため、確認後の手直し。結局、完成したのは三日前でぎりぎりになってしまった。当日もメンバー用は未完成だったため、時間のみ外部用を共有してもらうかたちになってしまい、もやもやしたまま当日を迎えてしまった。次に、当日の進行についてだ。三人で役割を分担していた。これはうまくいったが、バスの方との駐車場所や集合場所の変更であったり、時間の変更であったり、臨機応変に対応しなければならない場面がたくさんあった。ある程度は対処できていた。しかし、誰かに言われて動く場面もあったのではないかと思う。このイベントでチーム内だけで成立していたスキルが、ほかの場面でも活用できなければ意味がないと学んだ。また、どれだけそのことを意識していなかったのかということを改めて考えた。成功から学んだのではない。失敗から学んだのだ。直接の交流はあまりなかったかもしれないが、それでも学校内という身内ではなく、協力してくださっている人たちとの連携も、立派な人間関係構築力に繋がっている。ここから、少しずつ意識が変わった。そのため、他の二つも自然と向上していったように思う。行動力については、最初のころは自分からすぐに動くということができなかった。自分から動いても、誰もいないならというくらいだった。しかし、自分からどんどん動いていこうと心掛けた。特に、「味覚祭」である。二日間の参加だった。私は主に売り子として働いた。前の自分であれば、大きな声を出して知らない人の注目をあびるのが嫌だった。しかし、一人ではなかったが友達とがんばって大きな声を出して売り子をした。いろんな人が興味を持ってくれたがそれだけではない。声をかけてくださった人とたくさん話ができたことも楽しかったし、こんな自分がいると気づけたことがうれしかった。また、思考力については、「中間発表」や「茨苑祭」だ。中間発表は、何回か担当した。そのなかで、一人急に来られなくなった時があった。私は、本当に少しの部分の担当だったが、もう一人の担当者と話し合い、なんとかその日を乗り切れた。茨苑祭も、準備の時に何が必要か先輩に頼らず、自分で考えて動く。前の自分なら失敗を恐れてまずは頼って言われたことをすることを優先した。しかし、そうではなく、率先して動く、そのために考える。そういった力が確実に発揮された。

前の自分と今の自分は明らかに違うと述べた。チーム内だけ、この授業だけで学んだことを発揮するのではなく一歩踏み出した外でこの力を活用しよう、そう考えた結果だと思う。他の授業のグループワークで、学校外で、プロジェクト実習で成長した自分をさらに磨くために存分に力を活用する。まだこれから、まだこんなものじゃない。成長したから自分に欲張りになれる。今後もずっとそうやって成長する。自分の力はこんなものじゃない。どんなにかっこ悪くても、がむしゃらになることを選んで、新しい自分とこれからも出会う。

図：里川を眺めるさとみ・あい

地域で学ぶ

茨城大学２年　江口　紗姫

プロジェクト実習を履修するにあたり、この授業を通して身に着けたいことを「個人の達成目標ルーブリック」という形で記入した。私が身に着けたい力は、①自立した生活を実践できる力　②他人に働きかけ巻き込む力　③課題が抱える影響、課題解決方法の影響等、ものごとをイメージする力　の３つである。

はじめに、①自立した生活を実践できる力について、この力を身に着けたいと思った理由は、普段の生活の中にムダな時間が多いと考えたからである。一日を振り返ると、「あの時間は何だったのか」という風に後悔することが多い。また課題なども、ギリギリまで他のことをしてしまい期限直前にならないとはじめることができない。そのため、深夜遅くまで課題をやらなければならず、規則正しい生活を送ることができなくなってしまう。プロジェクト実習でイベントのしきりや準備など、チーム内での自分の役割を果たさなければならないという責任感から早めに課題をはじめようとする。そしてムダな時間が減り、時間に余裕が生まれるのではないか、と考えた。

中間の振り返り時点では、時間的に余裕があるわけではないが、やることはなんとか終わらせることはできていると感じた。後学期に入って、毎日お弁当を作る余裕もできてきたが、まだまだムダをなくすことができると思った。最終の振り返り時点では、中間の振り返りと同様に、時間的に余裕があるわけではないが、やるべきことは期日までに終わらせることができていた。また、勉強やプロジェクト、バイト以外にも、自分の興味のある地域イベントに積極的に参加することができている。規則正しい生活を送れているとはまだ言えないが、ムダな時間は中間の振り返り時に比べて減ったように思う。大学卒業までに、時間に余裕を作り、空いた時間を自分磨きなどのために費やすことができるようになりたい。

次に、②の他人に働きかけ巻き込む力について、この力を身に着けたいと思った理由は、自分が行いたいと思うことに自信を持ち、どんな人にも協力を促せるようになりたいと思ったからである。プロジェクト実習で、自分たちが主体的にイベントなどを計画し、実行していく過程で、自分がやりたいことを他の人に説明して納得してもらい、協力してもらうことが必要になるし、それを実際に経験することで身に着けられるのではないか、と考えた。

中間の振り返り時点では、自分たちが企画・運営した里美魅力発見バスツアーで、初対面の人にも「このように行動してほしい」と協力を促すことができた。しかし、初対面の人といっても、学生、つまり「立場の近い人」たちであったので、「立場の違う人」、普段関わることがないような立場の人にも協力を促せるようにしたいと感じた。最終の振り返り時点で、プロジェクト実習を通した活動では、立場の近い初対面の人にも協力を促すことができたと思った。しかし、プロジェクト実習を離れ、個人的に行いたいと思うことがある時に、やはりまだ自信を持つことができない。自信を持って自分の行いたいこと、協力してほしいことを伝えることが現時点ではまだ困難であると感じている。

最後に③の課題が抱える影響、課題解決方法の影響等、ものごとをイメージする力について、この力を身に着けたいと思った理由は、これから先、社会の中で生きていくために必ずと言っていいほど必要な力だと考えているからである。当初は、課題についてはなんとなくイメージできるが、解決策など、明確なイメージを描くことができない状態だった。プロジェクト実習を通して何かしらの課題を抱えている地域と向き合うことで、課題に対する解決策を明確にイメージし、さらにその解決策を実行できるのではないか、と考えた。

中間の振り返り時点では、バスツアーのコースの計画を立て、その後鈴木先生に「雨の日だとそのコースで大丈夫なのか」というご指摘をいただいたときに、自分ではその課題をイメージすることができていなかった。解決策は思いついたが、課題を想像するということが難しく、課題を自らで見つけ、解決策を考えることはさらに難しいということに気づいた。最終の振り返り時点では、プロジェクト実習を通して、地域の課題と向き合う時間が増え、解決方法について考える時間も増えたと感じた。また、プロジェクト実習以外でも、地域の課題について考える機会をいただいている。課題について考える時間が増えたことにより、具体的に「このようなことをしたらおもしろいのではないか」という風に解決策を考えることができるようになった。

図：バスツアーでの様子

プロジェクト実習を通して、上記の３つの力以外にも多くのことを学んだ。何よりも大切にしたいと思ったことは、地域で活動すること、そこでたくさんの人にかかわることはとても楽しいということである。今後もこのような活動をして、楽しみながら多くのことを学んでいきたい。

「大切なこと」

茨城大学２年　塩畑　見咲

私はプロジェクト実習を履修するにあたって、ある大きな２つの思いがあった。それは、”自分を成長させたい”、“地域に関わりたい”といった思いである。普段の生活ではなかなか学び得ないことを、プロジェクト実習の活動を通して自らが考え、他の学生と協働することによって学び成長したいと考えたのだ。そこで私は、直接地域に赴くことにより深く地域に関わることができ、多くを学ぶことができるであろうと感じたさとみ・あいに所属することを決めた。

また、より明確な目標を設置するため以下のことがらを重点事項としておいた。”話す力“ ”実行力” ”発信力“の３点である。ここでいう話す力とは、主に説明能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を指し、実行力とは、目的を設定し確実に行動する力を指し、発信力とは、自分の意見をわかりやすく伝える力を指す。これらは私の今までの人生において苦手としていた分野である。何かの発表がある際は決められた言葉を言うことだけに精一杯。何かをしようと目標を設定しても、そこに向かって計画的に物事を実行できない。自分の思ったことを伝えようとしてもわかりやすく表現できず、また自分自身でも何が言いたいのかまとまっていない。といったように散々なものであった。これらを少しでも改善したい、成長させたいと感じ重点事項としたのである。

さとみ・あいの活動は、実際に里美地区に赴き、地域の方々に支えていただきながら直接地域と関わるということが主であった。そこでは、里美地区や里川カボチャについて、また里美地区の実情や人々の繋がりの大切さなどを学ぶことができた。また、さとみ・あいの活動の中では直接的に地域に関わること以外にも様々なことを行った。活動の準備のためには、お世話になる方々や先生方、訪れる施設とのやりとり、活動の日程や場所の作成、お金の収集などを行い、活動当日にはしきりを行ったり、全活動終了後には報告会での発表を行ったりした。このように、私はさとみ・あいの活動を通して様々なことを経験することができた。これらの経験では、人とやりとりをする際のマナー、自分の役割に責任を持つこと、自分の尺度のみで物事を考えないこと、自分のキャパシティを最初から制限しては勿体無いということなど、近い将来社会に出る人間として大切なことを多く学ぶことができた。またこれらの経験は、驚くことに自分自身が重点的に伸ばしたいと思っていたことを達成するうえですべきことと見事に合致していたように思える。うまくいかないこともあったが、さとみ・あいメンバーの支えや協働により何とかやり遂げることができた。

これらの活動を通して、自分の目標が完璧に達成されたかというとそうと言い切ることは難しいものの、プロジェクト実習履修前の自分と比べてみると確実に成長はあったと思う。また、何事も周りの人々の支えによって成り立っているということ、身近でありながらも尊敬すべき偉大な存在の再確認など、大切なことにも気づくことができた。つまり、最初に決めていた目標に限らず言えば、何より多くのことを学び気付いたことが自分にとって大きな成長であった。このプロジェクト実習の活動において学んだことを忘れず、これからより成長していくために学びを更新していきたい。

図：プロジェクト実習報告会の様子

実践的な活動を通して実感したこと

茨城大学２年　永田　典子

図：域学連携合同報告会@東京でのプレゼン

私はプロジェクト実習で「目的を設定し確実に行動できる力」を伸ばすことを大きな目標として掲げた。その中でも私が一番できたと思うことは、与えられた仕事を確実にこなすことである。特に私の印象に残ったイベントを二つ紹介する。まず、稲刈り・おだがけ体験では私もしおり作成の一員となり外部参加者との連絡を主に行った。外部参加者を募ったイベントを催すことが私にとっても今年度のさとみ・あいチームにとっても初めての試みだったため、連絡が遅くなったことや余裕をもったしおりの製作ができなかったことなど反省点が多く見つかったものの、与えられた役割をしっかりとこなすことができた。また、イベントへのアンケートをインターネット上の機能を使い作成した。これは私にとって初めての経験で、インターネット上の機能を知ることができ勉強になったのと同時に、自分がイベント企画に携わっていることを実感できる良い機会になった。次に、茨苑祭ではかぼちゃパイの販売と活動内容の展示を行った。多くの人にさとみ・あいチームや里美地区のことを知ってもらえる良い機会だった。かぼちゃパイは二日間とも完売することができ、世代を問わずにたくさんの人に食べてもらうことができた。しかし、私は販売することに意識をおくと、私たちの活動を伝えることを忘れてしまいほかの出店サークルと特に差異がなくなってしまった。その結果、展示を見に来られた方は少なく販売とPRを同時に行うことの難しさを学んだ。「現状を分析し目的や課題を明らかにする力」と「課題の本質をとらえ、適切な解決に導く力」の二つの目標は、一人で達成することが難しくほかのメンバーに意見を求めること多かった。時間に余裕がないときはひとりで考えていたが、しっかりとした答えには程遠くまだまだこの二つの力は身に着けるまで練習が必要であると感じた。まだまだ力が及ばない点が多々あるが、今回個人の目標を明確にしておいたために自分で振り返ることができたことが大きな収穫だった。計画通りに進められない私にとって、最初の明確な目標設定は非常に大切であると実感した。全体的な感想としては、活動にコンスタントに参加できたことで里美のお米とかぼちゃのどちらにも同じくらいの知識を得ることができた。そして同じ里美地区でもお米とかぼちゃをどちらの視点からも考えることで、里美地区の多様な側面を知ることができた。活動内容としては、さとみ・あいチームの一員として一つ一つの活動に自分の中で小さな目標をたて活動をすることができたことが最もよかったと思う。毎回小さな目標をたてることですべての活動を意義あるものにできた実感している。私が所属したさとみ・あいチームは、前年度もプロジェクト実習を経験している先輩方がいたため、先輩方に頼りがちになってしまい自ら進んで目的を設定できなかったことや活動において積極的な行動が足りなかったことが反省点である。その反面最もメンバーが多いチームだったこともあり、人に頼ることと意見を求めること、大人数で一つのことに取り掛かる際の連絡の重要性も身に染みて感じた。

私はプロジェクト実習を履修する前は、交友関係が狭く同じような日常を繰り返している日々だったが、プロジェクト実習を履修したことで交友関係が広くなり多くの人とかかわりを持てたため、様々な意見を聞くことができ視野を広げることができた。履修を決めたきっかけは就活に役立つという言葉に惹かれたからだったが、大学内の交友関係の拡大を含め茨城大学生以外の年齢や所属も違う多くの人とかかわれたことは私にとってとても良い経験になり、外部の方と連絡をとるときのメールの文章の作り方も勉強になった。プロジェクト実習は学生が主体となって行うもので、誰に何をどうしたいのかのように常にチームがひいては自分が何をしたいのかを考える時間だった。何をしたいのかが明確ではなかった私にとって常に答えを求められるのは大変だったが、人に流されがちな私には今まで触れないようにしてきた自分の内面を知る重要な機会になった。実践的な活動で就職活動に役立つことはもちろんであるが、地域に興味のない人でも自分たちが主催することで多くのことを学ぶ良い経験になると思う。今年度プロジェクト実習を履修して学んだことを活かして今後の学生生活や就職活動を有意義なものにしていきたい。

「さとみ・あい」3年目を終えて

茨城大学4年　大枝　俊貴

様々な方々のご協力を頂きながら、私のプロジェクト実習受講も3年目を終えるに至った。2年生時のメンバー編、3年生時のリーダー編を経て、本年度のメンター編を経験した。私は3年間、「さとみ・あい」として活動してきたということになる。こう言うと、並々ならぬ里美地区への愛を感じるかもしれない。しかし、純粋な思いでやってきたかと言われれば、必ずしもそうではない。そもそも、1年目も、はじめは「さとみ・あい」を進んで選んだわけではなかった。2年目においては、自分で立ち上げようとしたチームが不成立になり、ややあり「さとみ・あい」に入ったのであった。自分から進んで里美地区を盛り上げようとしてきたというよりかは、プロジェクトの配属先がさとみ・あいだったという感覚が正直なところである。そのような、もともと「さとみ愛」に薄い私ではあったが、この3年の間、年月を経るほどに、減っていく同期に切なさを覚えながら、ついに講義の枠目一杯までプロジェクト実習にお世話になることになった。3年間続けてきた大きな理由のひとつは、様々な出会いである。里美地区の方々やプロジェクトに関する方々との出会いを通し、ふとした時に訪れたくなるくらいには「さとみ愛」も深まったのであった。このゼロからその場所を知って、通い、惹かれていくというプロセスは、私たちさとみ・あいが、里美地区に人を呼び込む手段として、そのまま再現しようとしていたことである。こういった目線を持つことができたということは、完全なる余所者から「さとみ・あい」に入ったことにも意味があったのではないかと考える。近年、『置かれた場所で咲きなさい』という本がベストセラーとなった。住めば都という言葉もある。今思うと、職業に就いてから、配属先でより良く活動するための予行練習であったようにも感じる。もし、余所者コンプレックスで入るか否か迷っている人がいれば、ぜひ入って活動して欲しい。色々な目線があって、色々な技があってプロジェクトは構成されていくのだ。

自分のさとみ・あい生活を振り返ると、もっと工夫できた、もっと頑張れたと悔やむことばかりである。例えば、本年度においては、メンターとして、メンバーやリーダーに、もっと適切にアドバイスできたと反省することが多い。リーダーを立てながら、プロジェクトの方向性のズレを指摘したり、フィールドワーク中のアドバイスを行ったりすることは非常に難しいことであると身を持って感じた。プロジェクト実習のような、様々な関係先と協力して普段しないようなことを遂行していく過程では、その場面場面において、多種多様な問題に直面する。それらの問題に揉まれる中で、これは今後においても必要になると感じたことがある。「余裕を持つこと」だ。余裕を持てず、様々な場面で失敗してきた。余裕を持って対応することは、プロジェクトを立ち上げ行っていく中で効果的だ。余裕を持った態度は、関係先・連携先の方々に安心感を持ってもらうことにつながる。余裕を持つには、前もって下準備が必須だ。シミュレーションを密にしておかなければならない。これも、プロジェクト実習を履修する中で、実感したことだ。

最後に、これからプロジェクトを組み立てる後輩たちにぜひ反面教師にして欲しいことがある。それは、現在、里美地区が置かれている状況をキチンと分析してほしいということだ。私がプロジェクト実習を受講し、里美地区に触れてきたこの3年間でも、常陸太田市や里川カボチャの立ち位置は大きく変化した。例えば、昨年度はNHKで放送された連続テレビドラマの主要な舞台に常陸太田市が選ばれ、観光客の増加にも一役を買った。ロケーションジャパン大賞の特別賞も受賞している。里美地区の在来作物である里川カボチャは、数々の番組内でも取り上げられ、知名度は全国規模になっている。常陸太田市を含む県北地域の知名度が飛躍的に上がっている。常陸太田市および里川カボチャの知名度が変化していくに伴って、学生団体「さとみ・あい」が為すべき役割も変化してきている。2012年から絶えることなく続いている「さとみ・あい」は、活動に安定性がある一方で、活動の目的や目標が曖昧になりがちということが課題である。今年度は、様々な地域活動を行う団体の活動内容を聞く機会に恵まれたが、「さとみ・あい」含め、やはり地域の一側面しか見ることができていないように感じた。学生団体に限界があるということは重々承知である。しかし、自分たちが一側面を見ているに過ぎないということは理解した上で活動する必要があるだろう。昨年度からはじまった田んぼの活動は、地域をより広い視点で捉えるための兆しと活動であろう。ぜひ、里美地区やその周辺の現状分析からはじめてほしい。現状分析から何をすべきかを抽出し、プロジェクトの立ち上げ方をしてくれたらと思う。以上が、去りゆくものとして、これから活動していく後輩たちに伝えたいことだ。

末尾になるが、プロジェクト実習を通して出会ったすべての皆様に感謝を伝えたい。来年度も里美好きな茨大生が増えることを切に願う。

さとみ・あいチームにおける里美地区での活動経験からの学び

茨城大学３年　野村 明里

私はプロジェクト実習、さとみ・あいチームの活動において、「話す」ことを 50 の比重で「実行力」を 30 の比重で「課題解決能力」を 20 の比重で、三つの根力構成要素を目標にして活動を行った。

今年度（2017 年度）5 月ごろから企画を立て、補助金を受け、活動を開始した。小チーム二つに分かれ、名産品の藁納豆用の藁を収穫することに重点を置いたチーム「Comer」の副リーダーとして所属。チームメンバー集会と企画遂行における話し合いを定期的に行う。それ以外のチーム全体の大きな活動の中で自分が活動したものは以下に記載する。

本プロジェクトにおいて、あらかじめたてた目標に対して、達成できた部分と中途半端になってしまった部分の要素がある。全体的に反省点の方が多いが、まず、達成できたと実感できることから挙げていく。

一つ目に一番比重を大きく定めた「話す」構成要素では、この要素の中の特に「コミュニケーション能力」については達成できたように感じる。私は、元来コミュニケーションがうまく取れる方ではない。また、このような連携・協力をしていただける方との話し合いとなると言葉遣いや話す内容などまとめて話さなければならない重圧を感じた。今回の件では、なかなか相手方と連絡が取れなかったり、急を要する予定が入ったりしたことで、臨機応変に対処する力も問われた。地域の中で地元の方と共に活動し、交流を重ねることができ、大学生という立場での活動を発信するだけではなく、一人の社会人としてどのように連携先と交渉していくかというコミュニケーション能力を学んだ。二つ目の「実行力」の構成要素では、里美地区秋の味覚祭において、収穫した米を、オリジナル性を高めた袋に詰めシールを貼り、限られた予算の中で装飾を行った。チーム内マスコットキャラクター「おさとちゃん」に加え、米のマスコットキャラクターの作成も検討するほど計画が盛り上がったと感じる。三つ目の「課題解決能力」は、9 月 30 日のようにイベントが急遽入った時に試される力だった。実際に参加者を募ったものの、緊急のイベントに対して反応はあったが、参加してくれる人は限られてしまった。また、全体的に移動手段は先生方に担っていただいたので、交通手段の確保などの課題はバスのサイズ変更連絡のみとなった。さらに、相手方の連絡や書類提出のひな型の用意などはリーダーが大半を行ってくれたため、自分自身で解決していくということが出来なかった。その点で、リーダーには大変お世話になり、自分がリーダーの補助を出来なかったことを大変申し訳なく思っている。

次に全体的な反省として、私が根力構成要素で達成できなかったと感じる部分を上げていく。まず一つ目にプレゼンテーション能力である。これは、今回のプロジェクト実習の要でもある要素だが、自分の時間が合わずプレゼンテーション講座に出られなかったため、講義を聴くことが出来なかった。そのため、プレゼンテーションの進め方や重要ポイントなどを直接聴講して体験することが出来なかったのが口惜しい。二つ目に説明能力である。これは電話などで連携先の相手と話し合うときに、自分の要点をまとめながらも、相手に伝わるように簡潔に分かりやすく説明が出来なかったと感じるからである。自分の伝えたいことに対して、相手が受け取っている情報は全く異なっていた場合がある。その時は二重に相手と連絡を取る形となり、返ってご迷惑をおかけしてしまった。

以上のことから、自分が掲げた目標のうち、一番比重を高く設定した「話す能力」では 3 つのうち 2 つが目標を達成できなかった。しかしながら、比重が低かったが、他 2 つの「実行力」と「課題解決能力」は目標に達成できたように感じる。例えば「課題解決能力」では、来年度の継続のために使用されると考えられる「栗ご飯」の「栗」の調達が課題となっていた。今回、別の活動で連携していた方に、プロジェクト実習の活動内容をお話したら、栗園の提供を検討していただいた。来年度の活動の継続へのパイプをつなげたと実感した。プロジェクト実習論で書類作成やコミュニケーションなど様々な体験をした。そのおかげで、イベントに対しても履修前よりも抵抗なく参加できるようになったと感じる。

社会人の体験を実際に体験し、学ぶことはインターンシップの活動などでないと活動しにくい。今回のプロジェクト実習の授業では、県北の過疎地域を対象に、社会人の対応能力を身に着け、交流することで、社会に出る前の大学生と地域の人々の交流の役割とは何かを考え、実感する活動となった。また、自分自身の足りないところを補うために目標を小さく分け、可視化し、計画的に遂行していくことで、自らの力を補っていることを実感していく結果となった。改めて、今回の活動での大きな学びとなったのは、様々な人と交流することで自分の力では足りないことを補う必要があり、自分ではお世話になった人に迷惑をかけないように計画を遂行していく力が必要であることを学んだ。そして、大学生という枠組みの中での活動は地域の活性化に重要であることも学んだ。

図：藁を運ぶ筆者

さとみ・あいで学んだこと

茨城大学２年　鈴木　真由

私はさとみ・あいのメンバーとして１年間活動し、その過程で説明能力と実行力を向上させた。

さとみ・あいとして活動するまで、私は里美地区を訪れたことがなかった。初めて訪れた時は、その自然の美しさと澄んだ空気、そしてさとみ・あいの活動を発足当初から支えてくださっている里美地区の方々の優しさに感激した。

今年度のさとみ・あいの活動の目的は「里美の魅力を若者・よそ者にしっかり伝えること」「自ら里美に赴き、交流することで里美を元気にすること」「茨城大学と里美地区の両方において、さとみ・あいの知名度を上げること」である。これらの目的を達成するために、まずは里美の魅力をメンバーが知ることから始まった。我々は里美地区を訪れ、里川カボチャの種まきから収穫までを学び、作業の体験もさせていただいた。また、里川カボチャや里美地区でとれたさまざまなものを使用した料理をいただいた。さらに夏の合宿では、里美地区で観光場所として案内できる場所を発見し、情報を集めた。

活動で得た知識や情報は、里美バスツアーで活用することができた。メンバーがバスガイドとなり里美地区の魅力を伝えながら案内し、参加者に観光やカボチャの収穫を体験していただいた。ガイドの経験から、初めて里美を訪れる人に伝えるべきことは何か、案内する立場として把握しておくべき情報が何かを学ぶことができ、非常に充実したツアーであった。

また、茨苑祭や里美地区で行われた味覚祭では、里川カボチャのスイーツや里美地区でできたお米を宣伝した。この活動では他校との連携や地域の方々との交流をしたため、他団体との連携時に必要な報告・連絡・相談のノウハウを学ぶことができた。

さとみ・あいでのさまざまな経験によって、私は実践的な能力を身につけることができ。例えば、コミュニケーションの取り方である。関係者や先生への挨拶や連絡、その他開催したイベントやプレゼンを通して、素早い対応力や相手に伝わりやすい話し方・メールの作り方を覚えた。また、活動開始時に課題として設定した実行力も鍛えられた。イベントやプレゼンをこなすにつれて、丁寧に仕事をこなすためには余裕を持った計画を立てることが必要だと身をもって学ぶことができた。

活動全体を振り返ると、すべての活動を楽しむことができたと感じる。さとみ・あいのメンバーは常に賑やかで、イベントを盛り上げることや積極的に行動することに長けていた。しかし、メンバーに頼ってしまう部分もたくさんあった。特に昨年度からさとみ・あいの活動を続けているリーダーや、米の班のリーダーには、関係者・先生との連絡や資料作成など、大きな負担をかけてしまった。もっと積極的に仕事を覚えて負担を減らせばよかったと後悔している。この反省も今後の人生に役立てたい。

図：茨苑祭で販売した里川カボチャのパイ

さとみ・あいが私に気づかせてくれたこと

茨城大学２年　石橋　佳奈

私の実家は兼業農家であり、幼少期から農業に携わってきた。そのため、私は、農業が高齢化により衰退してきていることを身をもって体験している。私が小さい時は、田植え、稲刈り、落花生の種まきや収穫に、親戚が集まり、皆で協力して作業を行っていた。しかし、親戚と祖父母の高齢化により集まる人数が年々減ってしまったため、数年前から落花生の生産をやめてしまった。私は、農作業はつらくて退屈だと思う反面、大人数で一緒につらい作業を乗り切る達成感や、作業の合間の休憩時間にいろんな人ととれるコミュニケーションが楽しかったと思っていた。そんな中、さとみ・あいの「イケてる農業で名産品を守る！」というキャッチコピーに興味を持った。「イケてる農業」で農業自体を楽しもうという発想に惹かれると同時に、いろんな人とコミュニケーションをとることが出来るのではないかと考え、さとみ・あいというプロジェクトに参加を決めた。

さとみ・あいでの活動は、農作業を楽しむことができた。同世代の若者たちとともにしゃべりながら行う農作業は初めてであり、それはつらくて退屈なものではなく、楽しいものであった。さとみ・あいでの活動は、私の中の農作業に対するイメージを変えてくれた。また、「イケてる農業」という名から、柄のある長靴やキャラクターが印刷された軍手を使用するなど、農業の道具におしゃれを取り入れる発想に触れて「農業＝地味」という私の概念を壊すことができた。私のように、農業に対する固定概念を覆すことが、若者に興味を持ってもらうために必要なことであると知った。

新しい人々との出会いの連続であった。さとみ・あいのメンバーもほとんどが初対面であった。里美という土地も私にとっては新天地であり、さとみ・あいの先輩方が代々お世話になってきた方々も、私は初めましてであった。この様な状況から、活動を通じて、徐々に人間関係を構築していく過程を体験することができた。大人の方々との関係の構築と同年代の人たちとの関係の構築の仕方の違いも学ぶことが出来た。また、初対面の人とのコミュニケーションの取り方を身につけることができた。相手から話しかけてもらうことを待っているのではなく、自ら進んでコミュニケーションを取りに行くことが、積極性が大切なことだと感じた。今までは、自ら進んでコミュニケーションを取ろうとはしなかったので、人との関係を築くことに時間が、他の人よりかかってしまっているように感じていた。さとみ・あいの活動を通じて身についたコミュニケーションの取り方を、これから生かしていきたい。さらに、プロジェクトでは発表の機会が多かったため、プレゼンテーションの際のマナーを実際に見聞きし学ぶことができた。説得力があり、聴衆を引き付けることのできるプレゼンの仕方を渡辺先生によるプレゼン講座から身につけることができた。

図：田んぼでの草刈り

一方で、さとみ・あいで達成できなかったこともある。それは、情報収集力を上げることである。私は、普段から自分に必要な情報を収集することが苦手でる。どこに情報があって、自分でどのようにその情報を入手すれば良いのかがわからないことが多々ある。このプロジェクトは学生が自分たちでやりたいことを決めて、実行していくものであるから、情報を集めることが大切となってくる。私は、プロジェクトを通して、情報収集力を鍛えようと考えた。しかし、一年を振り返ってみると情報収集力はそんなに身についていない。原因は、プロジェクトに能動的に参加しきれなかったことにある。活動の仕切りにならなかったため、先輩方や仕切りの二年生から与えられた情報を元に、受動的に行事に参加していたと感じる。活動に関する詳しい情報をしっかりと把握していない状態で取り組んでいた。また、私に仕事があるときも情報がどこにあるのかわからず、他のメンバーに情報を聞いてしまっていた。もっと自分から積極的に、プロジェクトに参加していれば、自ら情報を集めなければいけない環境になり、情報収集力を身につけることが出来ていたと考える。この一年間の後悔が残るところであり、今後力をつけなければいけないところである。

さとみ・あいでの一年間は、学びのあるものであった。普段の大学生活では、知り合うことはなかったであろう人々と関わることができ、充実したものであった。この一年間で築いた人との関係を大切にしていきたい。

達成できるまでがプロジェクト実習

茨城大学２年　塩手　菜々美

私はこのプロジェクト実習がはじまってから最初に個人の達成ルーブリックで設定した目標が３つある。１つめは行動力の主体性、「物事に進んで取り組む力」を身につけること。２つめは行動力の実行力、「目的を設定し確実に行動する力」を身につけること。そして３つめはチームワーキング能力の発信力、「自分の意見をわかりやすく伝える力」を身につけることであった。ここから、約１年間の活動を通して、これらの目標がどれだけ達成されたかを振り返っていこうと思う。

まず、これらの目標を設定したときの状態を振り返る。１つ目の「物事に進んで取り組む力」については、指示を待ち、できるだけ他人の後についていくことを考え、積極的に取り組むことができないといった状態であった。２つ目の「目的を設定し確実に行動する力」については、目的を設定できず、設定しても達成のための行動ができないという状態であった。３つ目の「自分の意見をわかりやすく伝える力」については、自分の意見を分かりやすく伝えることができないという状態であった。ここから中間の振り返りまでの主な活動は週１のミーティング、里美訪問、中間報告会、バスツアーに向けた里美合宿、稲刈り・おだがけ体験、里美魅力発見バスツアーなどがあった。まず週に１回あるミーティングでは、最初の頃は本当に受け身な姿勢で参加していたと反省している。他のメンバーとまだ打ち解けられていない時期は、話し合いにしっかりと参加できず黙っていることが多かった。意見を求められても自分の意見をうまく伝えることができず、指示されることがあればそれだけはこなすというようなひどいものであった。先輩を含めて周囲のメンバーがとても頼もしく、甘えてしまっていた。しかしミーティングや活動を重ねてメンバーと打ち解けていくにつれて自分の意見を伝えられるようになった。また、「これをやってくれる人いますか」や「この日空いてて仕事を引き受けてくれる人いますか」という問いかけに最初は積極的に答えることができなかったが、「やります」と言えることが増えていった。また、活動中は徐々に自分からやることを探すことができるようになっていった。これらのことから「物事に進んで取り組む力」と「自分の意見をわかりやすく伝える力」は少しずつではあるが身についていった実感があった。しかし、「目的を設定し確実に行動する力」に関することは反省点が目立つ。具体的に言うと、９月にバスツアーの下見として行われた里美での合宿で仕切り役をやらせてもらった時のことだ。合宿のしおりを作成したり、下見に行くところを決めたりと計画を詰めていく過程がとても難しかった。バスツアーで里美という地域の魅力を知ってもらうためには自分がまずは知らなければならない。目的を設定しても確実に行動するためには計画性が重要になる。仕切り役としてチームのリーダーや一緒に仕切りをやるメンバーと話し合う時も意見を出して主体的に動くことはできたと感じていたが、いまひとつ仕事のひとつひとつが迅速さにかけていたように思う。しおり作成で先生とメールのやり取りをしながら指摘された点を修正するという作業で対応が遅くなってしまうことがあった。もう少し設定した目的を確実に、かつ迅速に行動できるようにならねばならないと感じた。

中間で目標の達成度を振り返って以降の主な活動は、味覚祭や茨苑祭、報告会があった。この時期にはもう完全にチームのメンバーと打ち解けられていたため、自分の意見を言うことをためらうことはなくなっていた。中間までも味覚祭や茨苑祭に向けてのミーティングや活動がコツコツと進められていたが、実際にイベント間近になるとみんな忙しくなりそれぞれの主体的な姿勢が求められていたように感じる。私も周りのメンバーと協力しながら主体的な動きができたと感じている。また、今年度の活動が始まってすぐに設定したチームでの活動目標や計画が大きな問題もなく着々と進められていく中で、目的の設定と計画性の重要さが改めて分かった。目的を設定するだけでなくしっかりとその目的に向けてみんなで話し合い、確実に行動していくことでようやく達成できる。私はさとみ・あいというチームに入って約一年間の活動を通して目的に向けて精力的に活動することの充実感や、目的が無事に果たされた時の達成感を学んだ。これはチームのメンバーや先生方、お世話になった里美の方々などのおかげである。しかし、ここで学んだことをこれからどう生かしていくかが大事だと考える。周りのメンバーと打ち解けるまでは意見も言えず、受け身の姿勢で、目標に向けた迅速な行動もとれていなかった。個人の目標３つは正直まだ100%達成できたとは言えない。今年度の授業としてのプロジェクト実習は終わりを迎えるが、自分の中で立てた３つの目標が完全に達成されるまでがプロジェクト実習だと思ってこれからも自分を高めていこうと考えた。

図：おだがけの様子

プロジェクト実習を通して
里美地区をフィールドとして

茨城大学２年　北野　友香

まず個人の達成目標について述べる。私は最初に個人の達成目標として、主体性、課題発見能力、話すという点において「物事に進んで取り組む力」、「現状を分析し目的や課題を明らかにする力」、「説明能力・プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力」を身につけるという課題を挙げた。まずこの３点について述べていく。１つめに「物事に進んで取り組む力」について述べる。私は今回のプロジェクト実習で１番意識したのはこの点である。さとみ・あいが６年目の活動であったことや、メンバー内の上級生は去年もプロジェクト実習を行っていて、どのように動けば良いかをある程度把握していたこと、そしてメンバーが 17 人と大人数だったこともあり、何もしないメンバーがいても難なく進んでいく状況の中で、誰かがやるだろうとは考えず、常に積極的に参加することを意識した。しかし、それでもリーダーに任せっぱなしな部分があり、私自身は決まったレールに乗ってそれをこなしていくという感じだったので、何か考えて行動するということは出来なかった。２つめに「現状を分析し目的や課題を明らかにする力」について述べる。里美の現状をきちんと理解し、里美を若者の力で盛り上げる、里美の魅力を外部の人々に伝えるという明確な目標を持って活動を行うことができた。具体的な活動として、チラシ配布活動などの広報に力を入れた。そして３つめに「説明能力・プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力」について述べる。まず、メンバーや先生方とのやりとりの中で伝えたいことを伝える能力を培い、外部の方とのやりとりで実践できた。また、プレゼンテーション能力について、授業内でプレゼンテーションの講座を受け、アイコンタクトやパワーポイントの使い方、話し方などを学び、中間報告会、最終報告会で教わったことを意識してプレゼンテーションを行うことができた。今後のプレゼンテーションの場で活かしていきたい。

次に、今回のプロジェクト実習で私自身にとって良かった点を述べる。私がこのプロジェクト実習を経験して良かった点は、１つめに地域おこしに関わることができたことである。地域おこしというものに携わったのはこのさとみ・あいの活動が私にとって初めての経験だった。地域の農家のお手伝いをしてイベントで販売したり、地域の食材を使った美味しい料理を食べたり、また地域の方々との交流を通して、私たちが地域を元気にするという試みだけでなく、私たち自身も笑顔になり元気になることができ、地域の魅力をたくさん知ることができた。地域おこしはよそ者も地域の者も互いに刺激を与え、互いに元気になることができるものだということが実感できた。２つめにあまり普段は関わらないような方々と接することができたことである。農業を営み地域おこしに積極的な方々と関わることによって、刺激を受け、農業に対する考え方が変わった。もっと地域の方々と深く関わり、地域のためにできることを考えたいと深く思った。

そしてチームとして良かった点を述べる。１つめに、今だからできる若者ならではの元気さを前面に出していったことだ。お米作りは年々若者が減っていき、人口減少とともに活気も失われていく中で、私たち学生が米作りに携わり、米作りを発信していくことで、若々しい活気あるイメージを作り出し、地域の活性化に役立つことができた。おだ掛けというあまり知られていない藁作りの作業にも携わることができ、私たち自身良い経験になった。また２つめに、バスツアーを行うことで地域の魅力を外に発信することができただけでなく、私たち自身が地域の魅力についてたくさん知ることができたことだ。事前に下見を行い、それを外部の人たちにどう発信するかを考えていく中で、地域の特徴や歴史までより深く理解することができ、そのことでより地域のことを好きになることができたように感じる。

さとみ・あいの活動を行うことで地域おこしに関わるという経験ができただけでなく、地域に対しての深い理解、また地域の人々や、またさとみ・あいメンバーなどいろいろな人との繋がり、そして自分にできることは何だろうと考える機会を多く持つことができた。この活動を通していろいろな面で成長できたように感じる。お世話になった皆様に感謝申し上げたい。

図：カボチャの苗植え

プロジェクト実習を振り返って

茨城大学２年　後藤　睦貴

プロジェクト実習に参加するにあたり、私は、根力の構成要素ルーブリックから３つの達成目標を設定した。その目標とは、一つ目が話す力の向上、二つ目が主体性の向上、三つ目が傾聴力の向上である。「さとみ・あい」チームのメンバーとして活動していくなかで、私が、これらの目標をどれだけ達成することができたのか、逆に何が達成できなかったのか、その反省点や改善すべき点について振り返っていきたい。

まず、話す力の向上についてである。ここでの話す力というのは、説明能力やプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力のことである。私がこういった力の向上を目標にした理由には、自身のこれらの能力が弱いと感じていたこと、また、今後の大学生活や社会人となった際に、これらは必要不可欠な能力だと感じていたことがある。プロジェクト実習での活動を通して、私はこの目標達成に向け、大きく前進することができたように感じている。特に、夏休みに開講された総合プレゼン講座では、プレゼンテーションの流れや構造、プレゼンターの立ち振る舞いや発声法、さらには、PowerPoint でのスライド作成技法を学ぶことができた。講義のなかで実際にプレゼンテーションを行うことで、学んだことを実践し、反省点や改善点を見つけることができた。また、他の受講生の発表を聞くことは、自分のプレゼンテーションにはない新たな点を見つけることに繋がった。今後の課題としては、総合プレゼン講座などで学んだことをどのように活かしていくのか、ということが挙げられる。身につけた知識と見つけた反省点を、今後のプレゼンテーションや発表に反映しながら、自身の話す力をより向上させていくことが必要であると感じた。

次に、主体性の向上についてである。私は、自ら物事に進んで取り組む力を身につけることを目標にした。私がこの目標を設定した理由は、これまで自分自身が主体的に行動することがあまりなかった、と考えたからである。根力の構成要素ルーブリックから言葉を借りれば、自分が「指示や命令・切迫した必要があっても、できるだけ他人の後に付いていくことを考え、積極的に取り組むことができない」という項目に当てはまっていると感じた。そこで、具体的な目標としては、「自らの興味関心が強い事柄、また明確な義務を伴う事案については、自ら率先して取り組むことができるようになる」ということを設定した。しかし、プロジェクト実習での活動を終えた今、この目標を達成することができたかというと、素直に「達成できた」と答えることはできないのが現状である。プロジェクトでの活動を通して、自分の役割や与えられた仕事に関しては、積極的にこなしていくことができたと感じている。その点では、自らの主体性を向上させることができた。しかし一方で、主体的に行動できなかった点も多くある。例えば、日々の活動のなかであっても、自ら積極的に仕事をもらいにいったり、意見を述べたりすることが少なかった。そのため、ただその場にいるだけ、仕事がくるのを待つだけ、となってしまうことがあった。それでは、プロジェクトに参加している意味がない。今後の課題として、このプロジェクト実習を通して見つけた反省点を、これからの生活のなかで意識し、改善していくことで、自身の主体性を高めていきたい。

そして、傾聴力の向上についてである。私は、相手の意見を丁寧に聴く力を高めたいと考えた。私がこの目標をもった理由は、自分が得意とする部分を、より発展させていきたいと感じたからだ。前述した２つの目標は、自分の苦手とする能力の向上や改善を目的としていたが、この目標に関しては、自身の長所をのばすことを考えた。しかし、私はプロジェクト実習での活動を通して、ひとつ気がついた。それは、自身の長所であると感じていた傾聴力にも、多くの苦手な部分が存在しているということである。例えば、実際に活動が始まってから、私は、集中力を保ちながら相手の話を聞くことができず、話の内容を正確に把握できていないと感じることがあった。自身の苦手とする部分に気がついたことで、それを克服しようと活動に取り組むことができた。活動を終え、この目標に対しては、長所をのばす・苦手を克服する、という両点において目標達成に近づくことができたように感じる。

最後に、私は、このプロジェクト実習を通して、根力とは短期間で身につくものではなく、長い時間をかけ、徐々に自分自身の力となっていくものであると感じた。この活動から得た多くの学びを、今後の生活に向けて活かしていくことで、人間としてより一層成長することができるのではないだろうか。

学外に出て学ぶ・触れる・成長する

茨城大学２年　高田　美菜

私がプロジェクト実習を履修しようと思った理由は、学生が自分たちの力だけで考え、行動し、プロジェクトをつくっていくことに魅力を感じたからである。これは、普段受けている講義とは違い、教授の講義をただ受け身となって聞くのではなく、学生たちが主体となり、学外に出て学ぶことで、多くのことが得られると思ったからだ。また、「さとみ・あい」チームを選んだ理由は、私の地元の福島県では、震災以降、津波や原子力災害の影響で農業を営むことが困難、もしくは出来なくなっていた。そのため、活動を通して農業や自然に触れることや、自分がまだ行ったことのない常陸太田市に実際に訪れ、地元の人にはわからない、外からの視点で新たな発見や魅力を見出だせればと思ったからである。

プロジェクト実習の授業やミーティングは金曜１限に行われていたが、私は前・後期ともに他の授業があったため、それらに参加することはできなかった。そのため、私が参加できたのは、ほとんどが学外の活動であり、その意味ではこの授業の強みである、実際に学外に出て学んだという部分が大きかった。

この授業を履修するにあたって、授業開始当初に個人の到達目標を設定した。私は、「話す」、「働きかけ力」、「ストレスコントロール力」の３つを選択したが、特に「話す」と「働きかけ力」においてプロジェクト活動を通して成長できたのではないかと思う。

まず、「話す」能力であるが、私は親しい友人や１対１のコミュニケーションはできるが、初対面であったり、年齢や性別が異なる人との対話、大勢の前での発表が苦手であった。活動当初は、普段の授業に出ていなかったため、なかなかメンバーと直接会ってコミュニケーションを取る機会がなく、メンバーと打ち解けられるか心配だった。しかし、共に活動をしていく中で、声をかけてくれたり、自分から話しかけることで面識のなかった同級生や先輩、先生とも上手く連携しながら活動をすることができた。また、活動では、歳の近い人だけでなく、高校生であったり、年配の方であったりと普段学内で生活しているだけでは関わることのできない幅広い年代の方と話す機会を持つことができた。特に、茨苑祭や味覚祭では、接客や活動の説明をし、どのような年代の人に対しても緊張や恥ずかしがることなく話せるようになった。また、プレゼン講座では、渡辺先生にプレゼン前の挨拶やお辞儀などの基本から丁寧に教えていただいた。今までプレゼンは、自分が伝えたいことを相手に伝えることだと思っていたが、「プレゼンテーションはプレゼントであり、相手が受け取って嬉しいものをプレゼントする」ものであるとご指導いただき、プレゼンの意義を考え直し、相手にとって欲しい情報をわかりやすく伝えられるようなプレゼンの仕方を学ぶことができた。そのため、プレゼンに自信を持つことができ、大勢の前でも以前より堂々と発表をすることができた。

次に、「働きかけ力」であるが、今までは親しい友人に対しても、相手に迷惑をかけてはいけないと、協力を頼むことができないことが多かった。しかし、任された仕事を分担して相手に協力を頼むことができた。今回の活動では、あまり自分から仕事を割り振ることはなく、割り振られた仕事をこなすことが多かった。そこで学んだのは、相手が協力を頼みやすい環境をこちらから作っていくことである。連絡に対して速いレスポンスを心掛けたり、頼まれた仕事を期日までにできるか、できない場合は断る勇気を持つことが必要であるとわかった。また、ミーティングに参加できなかったこともあり、何をして良いのか分からないこともしばしばあった。仕事を与えられるのを待つだけでなく、自分から聞きに行くべきであったというのが反省点である。

１年間の活動を通して、学外に出て普段触れ合うことのできない人々とたくさん触れることができた。そこでコミュニケーションや人とのつながりの重要性や、自分１人では気づけなかったことに気づけたり、できないことも協力すれば実現可能になることを強く実感した。また、常陸太田市には自然や魅力が多く、それを私たちが媒介し、知らない人へと発信していくことができたと思う。学内にいるだけでは決して学べなかったものを、外に出て様々なものに触れ、吸収し、自分の成長に繋げることのできた講義であった。プロジェク実習での経験を活かし、これからも成長していきたい。

図：里美訪問の際の集合写真

3 年間の成長
さとみ・あいで学んだこと

茨城大学 4 年　助川　実咲

卒業を目前に控え、学生生活も残りわずかとなった。さとみ・あいとして 3 年間活動してきたわけだが、多くの学びを得たことを実感している。本レポートでは、3 年間プロジェクト実習を履修して、自分がどのように成長することができたのか、「個人の達成目標ルーブリック」をもとに、3 点に注目して考えていきたい。

まず、私が最も成長したと感じるのは「柔軟性」である。これは、意見の違いや立場の違いを理解する力である。さとみ・あいとして活動する中で、チームのメンバー以外にも、農家の方や高校生、商店街の方など、様々な立場の人と関わる機会を得た。最初の頃は自分たちの活動を円滑に進めることだけに頭がいってしまい迷惑をかけてしまったこともあったが、こうした失敗を経て、相手の立場を考えお互いに納得できる方法を模索することが「協働」するうえで大事なことだと学んだ。協働することは、時間や金銭など様々な制約が加わることもあるが、一方で連携することでスムーズに事が運んだり、新しいアイディアが生まれたりすることもある。また、異なる意見を持っていたとしても、話を進めるうちに折衷案が見いだせる場合もある。社会人になっても、この柔軟性を生かして良い人間関係・取引関係を築いていきたい。

2 つ目は「ストレスコントロール力」である。プロジェクト実習では、外部の方と一緒に活動する場面も多いが、それには当然責任も大きくなる。学生だからという甘えた考えではいけない。このようなプレッシャーに加えて、初年度は無理な計画を立ててしまったばかりに、自分も含めチーム全体の空気がピリピリしていたことがあった。これを踏まえて、2 年目以降は、余裕のある計画はもちろんのこと、自分自身がストレスを回避する必要があると考えた。私の場合、やるべきことが複数あると、他のことが気になって集中できず効率が悪くなることがある。そのため、時間や進捗状況に応じてメリハリをつけて取り組むことを心掛けた。そうすることで、スイッチの切り替えができるようになり、少しずつストレスをコントロールできるようになった。昨今、精神疾患が増加している中で、早いうちからストレスについて考えることができたのは、良い機会であったと思う。

3 つ目は、当初から最も苦手としていた「説明能力」についてである。私は、人前で話すことが不得意で、これまで積極的に前に出ようとしてこなかった。プロジェクト実習を履修したのは、発表の場が多く、場数を踏むことで苦手意識がなくなるのではないかと考えたことも理由の 1 つである。実際、何度か人前で話す機会をいただいたことで、苦手意識こそなくならなかったものの、以前よりは抵抗がなくなった。加えて、チームのメンバーの中にはプレゼン能力に長ける人も多く、とても勉強になった。先輩はもちろん、後輩でも気後れすることなく堂々とプレゼンする姿は本当に頼もしく感じていた。「説明能力」に関しては、まだまだ課題が残るものの、一歩踏み出したという点では、自分をほめてあげたいと思う。

以上のように、プロジェクト実習を通して成長できた部分と、まだまだ課題が残る部分が明らかになった。春からは社会人として働くわけだが、さとみ・あいで学んだことは存分に活かし、今後の課題についても克服できるように努力していく所存である。プロジェクト実習は、社会人になるにあたって必要なスキルを身につけるものであるが、今後は社会人になってどんなことが役に立ったのか、後輩たちに伝えられるように一層精進していきたい。また、これまでさとみ・あいの活動を通して出会った方々のように、形にとらわれず、いつまでも新しいことに挑戦し続けられる大人になりたい。

最後に、プロジェクト実習でお世話になった先生方や、活動に協力してくださった地域の方々や関係者の皆様、そしてさとみ・あいのメンバーに厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

図：味覚祭での販売の様子

８：おわりに

田島　彩花

今年度、個性豊かな17名のメンバーによって、さとみ・あいの6年目の歴史が築かれた。プロジェクト実習という授業の中で組織され、毎年メンバーが変わり続けるということは、活動の中では大きな弊害になる。しかし、さとみ・あいが「常陸太田市 里美地区を元気にする」という大きな目標に向かって、毎年、新たな個性を活かしつつ、生き生きと活動を行えていることを誇りに思いたい。

とはいえ、私はふと疑問を感じた。「今年度の活動は新しいことが行えていないのではないか」「毎年同じようなことを行う、いわゆるマンネリ化の波にのまれてしまっているのではないか」と。今年度、私たちは17名という人数を活かすため、在来作物 里川カボチャを利用したカボチャで里美を盛り上げ隊と広大な土地で作られた米を利用した2チーム編成で活動を行った。Comerは昨年度、試験的に活動を行った活動で、今年度は本格的に始動をした。

「若者・よそ者で里美の地域おこし活動を行うこと」「農業を通して地域の方との交流をすること」という二つのプロジェクトの目的は達成することができたと考える。私達は茨城大学生を中心に、さとみ・あいの活動に巻き込むことができた。しかし、おだがけ体験に際しては、思うように人数が集まらず、想定より小規模での活動になってしまった。「農業」という活動は学生にとって敷居の高い活動であり、より積極的な広報と「学生にもできる農業」という積極的なイメージ定着を進める必要があると感じている。またチームとしての三つの目的、「里美の魅力を若者・よそ者に伝えること」「自らが里美に赴き、交流をすることによって里美を元気にすること」「里美・茨城大学の両方においてさとみ・あいの知名度を上げること」は達成できたと考える。

今後の課題は、私達と里美の住民の方々の関係が限定されていることだ。私達は、常陸太田市里美地区で住民の方々と関わりをもっているとはいえ、それは住民の方のほんの一部でしかない。里美での活動をより豊かにするためには、より多くの住民の方々と接し、共に活動を行う必要があるのではないかと考える。

来年度以降は、里美の稲作活動の継続、里川カボチャのブランディング等を検討している。味覚祭で販売をした「さとみまい」についてFaceBookで「おいしかったからまた購入したい」というお問い合わせをいただいたことや、店頭で販売をしていた栗ご飯が好評だったことを踏まえ、来年度はより広い範囲での販売ができないか考えている。また、地域活動に深い関心のない方にも活動や里川カボチャ等を知っていただくためには、堅苦しくない広報が必要だと考える。ポスターセッションやパワーポイントでの発表は興味のある方にしか響かない。より多くの方に知っていただくためには、よりポップであり、簡潔にわかる広報が不可欠だ。そのための案の一つとして、私達の公式キャラクター「おさとちゃん」のラインスタンプの作成が挙がっている。

2017年度さとみ・あいの活動は、自分たちの力のみで成し遂げられたわけではない。さとみ・あいという団体を結成してくださり、継続してくださった先輩方、その活動を支えてくださった皆様はもちろんのこと、今年度の活動を支援してくださった皆様を含め、本当にたくさんの方々に支えられている。その先輩方と並び、2017年度もさとみ・あいを無事に守り抜くことができ、誇りに思う。

末尾になりましたが、今年度の活動にあたり、多大なるご支援をいただきました常陸太田市里美地区をはじめ常陸太田市の皆様、水戸農業高校の皆様、大好きいばらき事務局の皆様、また、さとみ・あいを知ってくださっているすべての方々に厚く御礼申し上げます。

［編者追記］　さとみ・あいチーム　「域学連携合同報告会@東京」に登壇

鈴木　敦

１：登壇の経緯

2017 年 12 月 28 日に、長崎県対馬市より元・常陸太田市地域おこし協力隊員（現・立教大学大学院社会学研究科博士後期課程）笹川貴吏子様を介して、同市が 2018 年 2 月 23 日に東京で開催する「域学連携合同報告会@東京」へのさとみ・あいチームの登壇のお声掛けを戴いた。

対馬市は、2012 年度に「総務省域学連携地域活力創出モデル実証事業」の採択を受け、各種活動のプラットフォームとして立ち上げた「フィールドキャンパス対馬学舎」（以下、「対馬学舎」）を基盤に、「多大学連携による離島活性化のための離島キャンパスモデル事業」として各種活動を展開してきた。補助金の交付期間が終了すると短時日の内に雲散霧消してしまう事業も多い中、市が独自に予算を確保して事業を継続発展させてきた、当該分野の「有名どころ」である。

・総務省域学連携地域活力創出モデル実証事業

http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/ikigakurenkei.html

http://www.soumu.go.jp/main_content/000218434.pdf

・対馬学舎

http://fieldcampus.city.tsushima.nagasaki.jp/field/

http://fieldcampus.city.tsushima.nagasaki.jp/ikigaku_all.pdf

本件の窓口をご担当下さったのは、対馬市の委託を受けて対馬学舎の運営に参画しておられる「一般社団法人 MIT」（ http://sustainable.mit.or.jp/ ）代表理事の吉野元様であった。吉野様から戴いた概要書によれば、登壇者は対馬学舎参加学生、さとみ・あいメンバーに加えて、長野県木島平村公認早稲田大学学生サークル「わせだいら」（ http://wasedaira.sub.jp/ ）メンバーとのことであった。木島平村もまた、当該分野では特色ある活動で知られていた自治体である。

過去、担当教員が他大学のお招きにあずかってプロジェクト実習の概要紹介を行ったことはあったが、学生チームそのものが登壇要請を受けたのは今回が初めてである。初開講以来 6 年目にして、漸くここまで辿り着いたという達成感と、有名どころと同じ壇上に立つことへの気後れとが入り混じる中、実現に向けて本格的に動き出すこととなった。

２：各種調整

ありがたいお声掛けではあったが、諾否の主体はあくまで学生である。笹川様を介してのやり取り期間を経て吉野様と直接やり取りを開始した 1 月 24 日時点では、既に授業としてのプロジェクト実習はほぼ終了しており、年度当初に確保していた予算もほぼ底をついていた。実質一か月を切ってからの、甚だ慌ただしくかつ不安なスタートとなった。

学生たちにとって 1 月下旬から催事当日の 2 月 23 日にかけては、学期末試験ならびに各種レポート作成等でとりわけ忙しい時期である。提案に対して「いい機会とは思うが時間的に無理」という反応も大いにあり得る状況であったが、幸いにしてチームを代表して、田島・大枝・大村・江口・永田・波田野の 6 名が対応してくれることとなった。

予算的には、「財源そのものに関する問題」と「学生個人宛に旅費を支給することの事務的問題」という二つのハードルがあった。しかし、人文社会科学部学部長・事務長始め関係者の全面的なご支援により、こちらも幸いにして然るべく支給して戴けることとなった。また、学部としての参画のスタンスについてもご相談させて戴き、単なる学生チームの登壇ではなく人文社会科学部が催事そのものの「共催」組織として関わって戴けることとなった。

上記内容は、共催の件を含めて主催者の対馬市様にも幸いにして歓迎を以て受け入れて戴けた。

さらに、引率教員に関してもプロジェクト演習 B の副担当教員である岩佐淳一教授ならびに杉本妙子教授のお二人が揃ってご参加下さることとなった。

かくして極めて短時日の内に諸課題がクリヤされた。関係各位のご支援に篤く御礼申し上げます。

３：チラシならびにプログラム

チラシならびにプログラムを、図１・２に示す。茨城大学の報告には 50 分が割り当てられ、冒頭の 15 分で鈴木がプロジェクト実習の概要をご説明し、続く 35 分間で学生が 2017 年度の活動を中心に直近３年間の活動を報告することとなった（ http://fieldcampus.city.tsushima.nagasaki.jp/other/cat1/post_59.html ）。

図１：「域学連携合同報告会@東京」チラシ

東京会場プログラム

日時：2 月 23 日（金） 15:30～19:00 （開場 15:00）
場所：3331ArtsChiyoda B105
15:30～15:45 挨拶・域学連携の意義
15:45～16:35 茨城大学人文社会科学部による常陸太田市での活動報告
16:35～17:15 木島平村公認サークル「わせだいら」からの活動報告
17:15～18:30 対馬市からの活動報告
18:30～18:45 対馬市における次年度の受入について
18:45～18:55 講評
18:55～19:00 挨拶
19:00～交流会及び、次年度プログラムに関する個別相談会

図２：「域学連携合同報告会@東京」プログラム

４：担当教員による概要説明

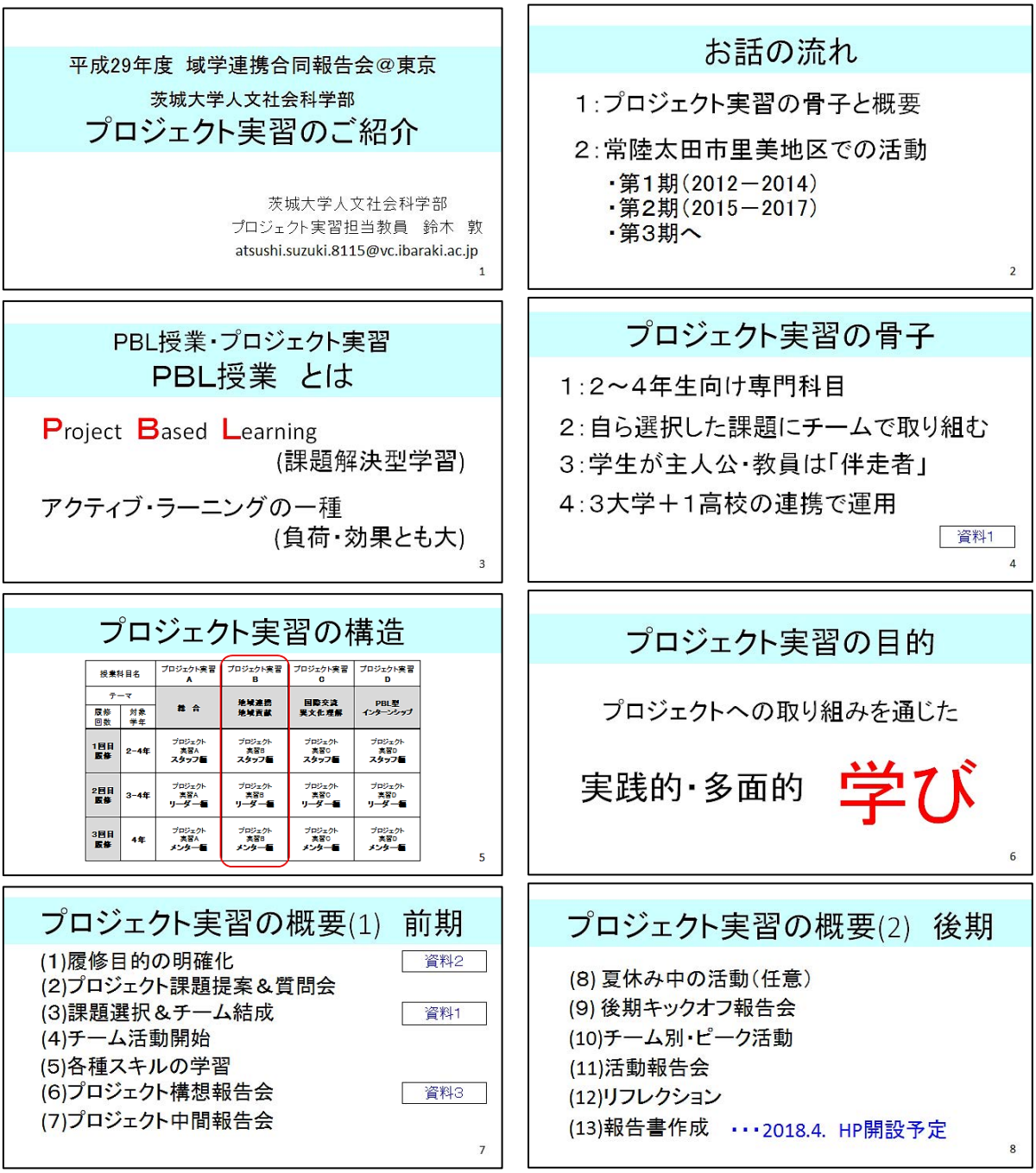
2018 年度の域学連携合同報告会@東京で報告した 3 団体の背景は、それぞれ大きく異なっていた。具体的には、「わせだいら」は早稲田大学の学生サークル、対馬市は対馬学舎が用意した枠組みに個人として参加した複数の大学の学生・院生、「さとみ・あい」は茨城大学の正課授業「プロジェクト実習」の履修生である。「さとみ・あい」の背景を明確にするために、冒頭で主担当教員の鈴木が「授業の目的と枠組み」「過去 6 年間の経緯」等について、簡単に説明を行った。

使用した PPT を図 3 に示す。なお、スライドに記した［資料 1～4］は別途紙媒体で配布して参加者に参照して戴いた。ここでは紙幅の制約から、資料名のみを列記する。

資料 1：概要説明ポスター　　資料 2：根力の構成要素ルーブリック

資料 3：個人の達成目標ルーブリック　　資料 4：プロジェクト構想書フォーム

図 3：鈴木の PPT



養成される(筈の)能力

(1)未知の世界に踏み出す　チャレンジ精神
(2)自ら考えて行動する　主体性
(3)自らの役割をきちんと果たす　誠実性
(4)チームの一員としての　協調性
(5)学内・学外の様々な立場の方々と、しっかり意思疎通できる
コミュニケーション能力

9

常陸太田市里美地区での活動(1)

背景は　：文科省就業力育成支援GP

スタートは：2012年度
プロジェクト実習（試行）

10

常陸太田市里美地区での活動(2)

設計者は：蜂屋大八先生
山形大学職員→茨城大学准教授
→現・金沢大学准教授

モデルは：山形大学
エリアキャンパスもがみ
http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/yam/

11

常陸太田市里美地区での活動(3)

第１期：2012－2014
・市役所＆地域おこし協力隊
・里川カボチャとの出会い
・蜂屋先生からの引き継ぎ（2013夏）
→鈴木は運用で精一杯

12

常陸太田市里美地区での活動(4)

鈴木の悩み　f(-_-;

間違い無く「若者の活動」ではあるが･･･

「大学生の活動」になっているか？

13

常陸太田市里美地区での活動(5)

第２期：2015－2017
・里川カボチャ研究会
・里美ふるさと振興公社
・県立水戸農業高等学校食品化学科
・「学び」の強調

14

常陸太田市里美地区での活動(6)

近年の動き：
・「継続」への意識
・「地域」への意識
・「専門」への意識

15

常陸太田市里美地区での活動(7)

第３期に向けて：
「プロジェクトは手段・目的は学び」を再考
「地域への貢献を通じた学び」へ

16

常陸太田市里美地区での活動(8)

そんなの、あたりまえです！
元々、そういう意識でやってます！

･･･失礼しました　<(_ _)>

17

では･･･

スタート！

ご清聴　感謝申し上げます

18

５：学生の報告

⑴教員からの伝達

報告準備に先立ち、教員からは以下の 4 点を伝えた。

①過去のプロジェクト実習におけるプレゼンは、最長でも 15 分未満であった。今回は 35 分という異例の長さとなる。聴衆を飽きさせない工夫が必要である。

②プロジェクト実習では、正課授業という性質上「学び」の報告に重きを置くよう指示してきた。しかし、今回は会の性格に鑑み、「活動内容」に重点を置いた報告を準備されたい。

③プロジェクト実習の概要については鈴木が報告する。学生チームは、それを念頭に原則として直近 3 年の活動に絞って報告されたい。

④2017 年度のプロジェクト実習では、「先進地実地研修（近郊）」に代えて渡辺しのぶ先生の「総合プレゼン講座」を設定した。その成果を今回の報告に盛り込んでほしい。渡辺先生には特にお願いをして、課外指導をお引き受け戴いている。PPT ができ次第お送りして、ご指導を仰ぐように。

⑵報告の基本方針

⑴を踏まえて、学生たちは以下の方針を立てた。

①過去 3 年間の活動を網羅的に紹介するのではなく、チームの特色を伝えやすい「里美茶屋」と「バスツアー」に絞り込んで報告する。

②PPT と自作動画の放映とを組み合わせて、プレゼンに変化を持たせる。

③準備期間が極めて短いことを踏まえて PPT 原案の作成を急ぎ、渡辺先生のご指導を戴いた上での修正ならびにリハーサルにできるだけ多くの時間を割り当てる。

④「シナリオメモ」を作成して、鈴木の報告との整合性を確認すると共にメンバー間での情報共有を徹底する。

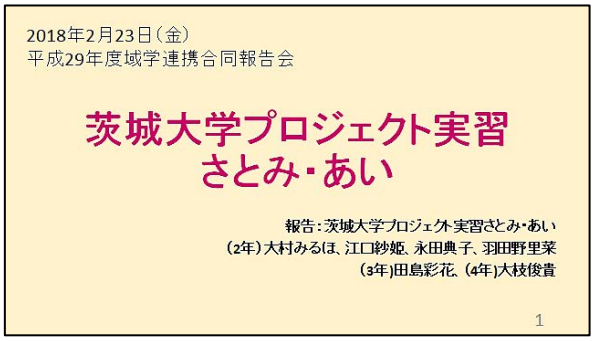
⑶渡辺先生のご指導

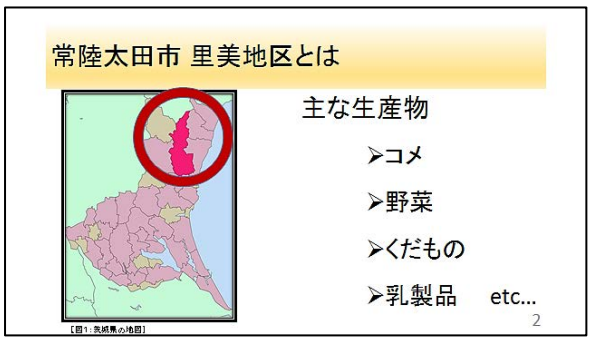
渡辺先生には、本学非常勤講師として夏季集中講義並びに 12 月 9 日の活動報告会本番、それに先立つ 12 月 2 日のリハーサルでのご指導をご担当戴いた。今回の登壇にまつわるご指導は、もとより年度当初のご出講依頼には含まれていない上、謝金もお支払できない中での全くの無償奉仕のお願いであった。甚だ勝手なお願いにもかかわらずご快諾下さり、お忙しい中懇切丁寧なご指導を賜った。篤く御礼申し上げます。

⑷ 学生の PPT

学生の PPT を以下に示す（図 4）。鈴木の PPT（図 3）と比較して戴きたい。鈴木のそれが平板な要点列記に終始しているのに対し、学生の PPT は適度なアニメーションを組み込んだスライドと独自の語りを組み合わせた構造になっている。語りとアニメーション、さらに動画については、紙媒体の報告書では伝える術がない。勢い、図 4 のみをご覧戴いても内容が伝わりにくいと思われる。これは学生のプレゼンが稚拙だったためではなく、寧ろスライドー語りー動画を組み合わせた「立体的な」プレゼンであったが故のこととご理解戴ければ幸いである。

図 4：学生の PPT





常陸太田市 里美地区とは

【図2：常陸太田市の地図】

主な生産物

- コメ
- 野菜
- くだもの
- 乳製品　etc…

3

「さとみ・あい」の目的

里美地区に活気を！
→里美の魅力を伝えたい。
　若者を呼び込みたい。
→ 里川カボチャ でブランディング

対象を水戸の市民や学生とした。

4

5

里美茶屋

ピックアップコンテンツ①

6

里美茶屋

ときわ祭内にて出店。
「里川カボチャのカステラ」
「里美地区の野菜を使用したポテトサラダ」販売。

⇒約300食を完売

7

問題①何の権威もない

8

問題①何の権威もない

里川カボチャ研究会会長
荷見誠様

9

皆さんにカボチャ作りに
参加していただいて、

10

問題②専門性がない

11

問題②専門性がない

水戸農業高校食品化学科様

12

問題③集客力が弱い

13

問題③集客力が弱い

里美ふるさと振興公社様

14

問題④伝わらない

15

16

つながりが広がる

17

バスツアー

ピックアップコンテンツ②

18

バスツアー概要

大中神社
↓
プラトーさとみ
↓
荷見様宅(カボチャ収穫)
↓
横川の下滝
↓
里美生産物直売所

19

プロセス

Ⅰ.予算

Ⅱ.バスツアーへの歩み

Ⅲ.外部との関わり

20

Ⅰ.予算

学校からの支給金→最大で6万円

バスツアー予算の目算→10万円以上

6万円では実現不可能

21

Ⅰ.予算

「大好きいばらき地方創生応援事業」
(茨城県の助成金)

http://www.daisuki-ibaraki.jp/h29chihousousei-ouen.html

→ 14万円の獲得

22

プロセス

Ⅰ.予算

Ⅱ.バスツアーへの歩み

Ⅲ.外部との関わり

23

Ⅱ.バスツアーへの歩み

①準備

②広報

③当日

24

Ⅱ-① 準備

【合宿】
＊バスツアーの場所決め→投票し決定

【しおり作成】
＊タイムテーブルを細かく決定
＊雨天時の対応

【ガイド】
＊自分たちの言葉で

25

日程（小雨決行）

時間	場所	内容
5:30	宗紋大学	宗紋大学　発
9:00	現合所	
9:30	道の駅ひたちおおた　東門の前	トイレ休憩
9:45		道の駅ひたちおおた　発
10:30	大中神社	大中神社　着
		散策
11:00		大中神社　発
11:30	プラトーさとみ	プラトーさとみ　着
		昼食休憩
12:30		プラトーさとみ　発
12:45	荷見様宅	荷見様宅　着
		里川ガヴァッロ収穫
15:00		荷見様宅　発
15:30	横川の下滝	横川の下滝　着
		散策
16:00		横川の下滝　発
16:05	里美農業所	里美農業所　着
		お土産購入
16:30		里美農業所　発
17:05	道の駅ひたちおおた　東門の前	
17:30	現合所	
17:50	宗紋大学	宗紋大学　着

26

Ⅱ-② 広報

【チラシ・ポスター】

＊バスツアーを学校で告知
＊ニュース番組への出演

【Twitter・Facebook】

＊広報担当者がバスツアーのことを更新

27

Ⅱ-③. 当日

しきり
＊タイムキーパー等の全体まとめ

バスガイド
＊担当箇所の説明

28

さとみ・あいが選ぶ

大中神社のここがすごい！

29

30

プロセス

Ⅰ.予算

Ⅱ.バスツアーへの歩み

Ⅲ.外部との関わり

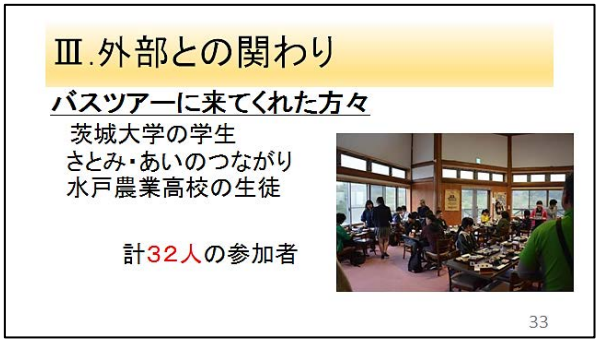
31

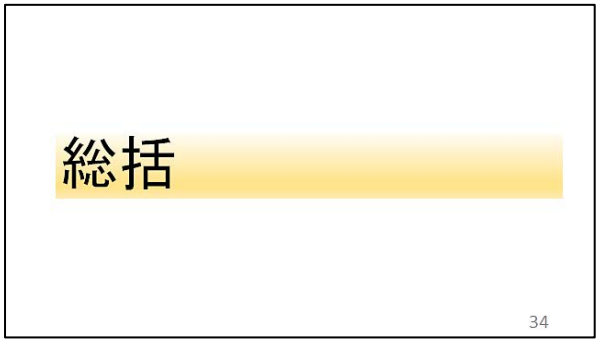
Ⅲ.外部との関わり

荷見様ご夫妻

6月　初顔合わせ・種植え
7月　畑の整備
9月　畑の確認
10月　バスツアー当日

32





６：当日の活動

(1)学生の報告

報告会当日は 13:30 に会場入りをし、空き部屋を使って最終の打ち合わせとリハーサルを行った（図５・6)。

図５：会場前での記念撮影

図６：リハーサルと最終打ち合わせ

会は吉野代表理事の発声でスタートし、まず対馬市役所市民協働・交通対策課の前田剛様による趣旨説明がなされた（図 7)。以後、所定のプログラムに沿って進行され、岩佐教授による講評（図 8)、前田様のご挨拶を以て滞りなく終了した。

図７：前田様のご説明（右隣は MIT の吉野代表理事）

図８：岩佐教授の講評

「学外からのお声掛け」という経緯、「東京」という場所、「経験豊富な他大学の学生・院生に伍して」というシチュエーションと、初めてづくしのプレゼンであったにもかかわらず、さとみ・あいの代表メンバーたちは動ずることなく堂々と報告し、質疑応答をこなしてくれた（図 9）。

図 9：さとみ・あいの報告

⑵教員のミスと学生のリカバリ

本項 5－⑴－②に記した通り、報告会の準備に先立ち、鈴木は学生たちに対して「今回の報告では＜学び＞ではなく＜活動内容＞に重点を置くように」と伝達していた。これは主催者側からの具体的な要望等によるものではなく、過去の域学連携合同報告会に関する HP の記載等に基づく推測であった。

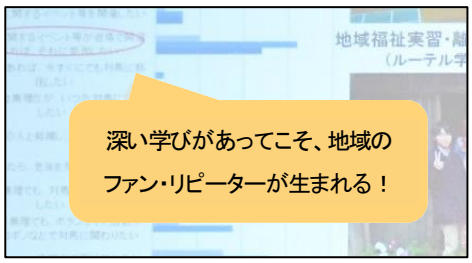


図 10：前掲図 7・前田様スライドの拡大図

しかし、前記の前田様のご説明は、随所に「学び」の重要性を強調するものであり（図 10）、鈴木は自らの指示が見事に的外れであったことを悟った。既に会は始まってしまっており、急遽リーダーの田島に「発表の末尾で＜学び＞にも言及してほしい」旨を耳打ちしたものの、無茶な要請であることは十分自覚しており、よって至る結末についても観念していた。

ところがリーダーの田島を始めとするメンバーは、自分たちに発表の順番が回ってくるまでの僅か数分の間に語るべき内容を頭の中で整理し、かねて準備していた報告コンテンツの末尾に口頭で追加する形で、実にあっさりと・見事にこの難局をクリヤしてしまったのである。自らのミスを敢えて棚に上げて申せば、予定通りの進行であれば決して顕在化しえない「底力」を、彼らがしっかりと身に着けていたことが図らずも明確になった瞬間であった。原因者たる鈴木としては、申し訳なさと嬉しさが綯交ぜになった何とも複雑な心境になった。

７：報告会を終えて

今回、他大学と共に「報告者」として登壇させて戴けたことは、さとみ・あいチームに限らずプロジェクト実習全体にとっても大きな画期となる出来事であった。折しも、全学根力育成プログラムの廃止と人文学部改組に伴うカリキュラム改変により、「プロジェクト実習」は 2018 年度から人文社会科学部地域志向教育サブメジャーを構成する一科目「プロジェクト演習」として新たなスタートを切ることとなる。新たなステップに向けて、最高の節目となった。

また、プロジェクト実習では、かねてより履修生が他大学の取り組みに学ぶ場を提供すべく「先進地実地研修(近郊)」「先進地実地研修(遠郊)」を設定しており、それぞれに成果を上げて来た。今回の登壇は、図らずも既存の「近郊」とも「遠郊」とも異なる、「第三の形式」の可能性を示すものとなった。現時点ではまだ各種要件を整理できていないが、今後検討して行きたい。

最後に、この貴重な機会にお声掛けを下さった対馬市の皆様、仲介して下さった笹川様、財政状況の逼迫する中で学生たちの東京への派遣を実現して下さった本学人文社会科学部執行部ならびに学部総務係の皆様始め、ご支援を下さったすべての皆様に重ねて御礼申し上げます。ありがとうございました。

４：D-CEP チーム

プロジェクト実習Ｃ

リーダー：山本　麻由　茨城キリスト教大学文学部現代英語学科　２年
メンバー：助川　里奈　同　上　２年
メンバー：細川　茜　同　上　２年
メンバー：小野　千秋　同　上　２年
メンバー：川本　李音　同　上　２年
メンバー：大津　里奈　同　上　２年

主担当教員：上野　尚美　茨城キリスト教大学文学部　教授
主担当教員：ジャブコ　ユリヤ　同　上　助教
副担当教員：神田　大吾　茨城大学人文社会科学部　准教授

2017 年度
茨城大学人文社会科学部　プロジェクト実習 C
「D-CEP チーム」活動報告

１：はじめに

川本　李音

(1)チーム成立の経緯

私たちが行った活動である「異文化交流プロジェクト」は、2011 年度に茨城キリスト教大学の国際理解センターと茨城大学の留学生センターとの間で連携関係が結ばれたことに始まる。翌 2012 年度に結成されたインターナショナルチームを基盤として、2013 年度の Cross Cultural Project チーム、2015 年度の Link チームといったように、前年度の活動を引き継ぎ活動してきた。毎年、「異文化交流会」の開催をメインの活動として継続・発展させつつ、独自の新たな活動を企画し、行っている。

今年度は、茨城キリスト教大学 6 名の“D-CEP”として活動した。チーム名は、私たちの所属学科である現代英語学科（Department of Contemporary English）と、異文化交流プロジェクト（Culture Exchange Project）の二つを組み合わせて考案した。

(2)プロジェクト課題

「国際交流・異文化理解」というプロジェクトテーマのもとで活動を行うことになった私たちは、グローバル化に注目した。まず現状として、英語を学ぶ子供たちにとって、外国人と関わる機会があまりないという点に着目した。そこで、学生を対象に国際交流の機会を提供したいと考え、イベント企画に取り組んだ（図 1）。

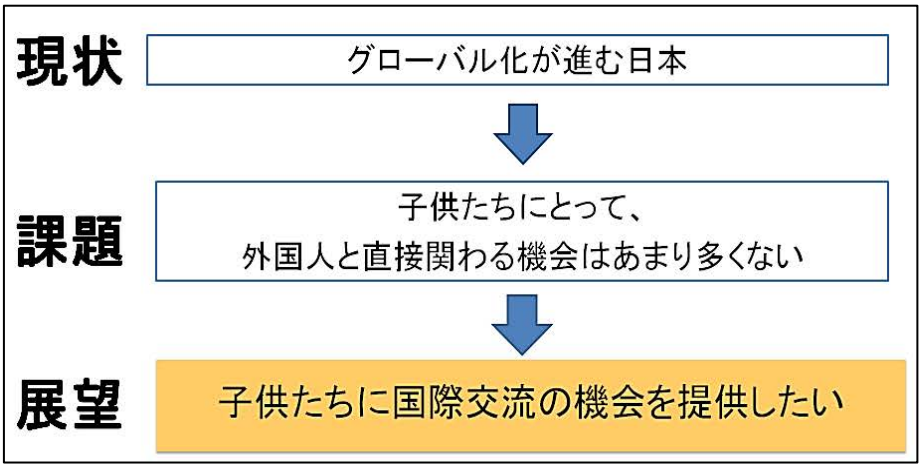


図１：現状・課題・展望

(3)プロジェクト課題からプロジェクト構想へ

前年度までの活動を参考にしつつ、KJ 法などで各自のアイデアを収集した結果、「留学生と日本人学生の交流」という活動テーマが掲げられた。これをもとに、前年度と同様、高校生と小学生に対象を絞り、地域の学生が参加できるイベントを企画した。さらに、留学生と外国人インターン生を対象にした日本文化イベントを新しく企画した。

これらのイベントにより、学生に国際交流を体験してもらい、異文化理解を深めてもらうことが狙いであった。また、チームとしてイベント企画・実行の手法を学び、自主性や団結力、コミュニケーション能力、および異文化理解をより深めることを目指した。

２：活動概要

助川　里奈

グローバル化や国際化が進むこの時代で、英語力を身につけることは私たち日本人にとって必要不可欠なものとなっているといえるだろう。しかし、グローバル化や国際化が進んでいるといっても私たち日本人が英語に興味・関心がなかったり、外国人と接する機会が少なかったりと様々な課題があるように思われる。

このような状況を受けて、英語に興味・関心を持ってもらいたい、そして少しでも外国人と接する機会をつくりたいと考え、高校生と小学生を対象に異文化交流プロジェクトや国際理解活動を行うことを目的として設定した。

具体的には、以下の 3 つの催事を計画・開催した。

⑴異文化交流プロジェクト

日時：平成 29 年 7 月 17 日（月・祝）

対象：茨城県内高校生

目標：茨城キリスト教大学・茨城大学の留学生と茨城県内の高校生を対象に、アイスブレイクやダンス、フリートークを通じて、異文化に触れてもらう。

⑵小学校国際理解活動

日時：①平成 29 年 11 月 24 日（金）

②平成 29 年 12 月 7 日（木）

対象：日立市内小学生

目標：クイズやゲームなどを通して、異文化について楽しく学んでもらう。

⑶IC 祭

日時：平成 29 年 12 月 18 日（月）

対象：茨城キリスト教大学留学生・インターン生

目標：留学生とインターン生にお祭りを通して日本文化を学んでもらう（図 2）。

図 2：IC 祭記念写真

３：議事録・活動記録

大津　里奈

1	2017年　2017/4/20 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 シオン館208教室	先輩からの情報提供、担当高校決め、具体的な活動内容と場所の説明	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
2	2017年　2017/4/27 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 シオン館208教室	高校打ち合わせメンバーと小学校訪問の担当国の確認	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
3	2017年　2017/5/11 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	高校訪問で使用する文書作成、交流会のタイムスケジュールと内容考案	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
4	2017年　2017/5/18 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	高校配布の企画書、概要作成ならびに今後の計画	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
5	2017年　2017/5/22 10:30　－　11:00	茨城キリスト教学園高等学校	茨城キリスト教学園高等学校様へイベント概要の説明と参加者募集の依頼のため訪問	小野、細川	0:30
6	2017年　2017/5/25 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	高校訪問の日程確認、メインアクティビティ考案	小野、川本、助川、細川、山本	1:40
7	2017年　2017/5/26 16:00　－　16:30	茨城県立水戸第三高等学校	水戸第三高等学校様へイベント概要の説明と参加者募集の依頼のため訪問	大津、川本	0:30
8	2017年　2017/5/30 －	茨城キリスト教大学 11号館302教室	日立第二高等学校様へメールでイベント概要の説明と参加者募集の依頼	助川、山本	0:00
9	2017年　2017/5/30 16:30　－　17:00	茨城県立日立北高等学校	茨城県立日立北高等学校様へイベント概要の説明と参加者募集の依頼のため訪問	助川、山本	0:30
10	2017年　2017/6/1 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	担当高校との連絡に関しての現状報告、留学生とインターン生に向けたチラシ作り	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
11	2017年　2017/6/8 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	留学生への参加依頼、イベント内容考案、チラシ作り	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
12	2017年　2017/6/15 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室、3号館	入試広報部へ会場許可依頼ならびに下見、買い出し計画	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
13	2017年　2017/6/22 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	パンフレット作成、留学生の参加者確認、アイスブレイク考案	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
14	2017年　2017/6/29 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室、3号館	使用教室と機材確認、パンフレットやアンケート作成	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
15	2017年　2017/7/6 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	会場レイアウト考案、ネームカードと参加者名簿作成	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
16	2017年　2017/7/13 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	イベント流れ確認、役割割り振り、準備物作成	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
17	2017年　2017/7/17 12:50　－　16:00	茨城キリスト教大学 3号館	異文化交流イベント当日	大津、小野、川本、助川、細川、山本	3:10
18	2017年　2017/7/20 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	イベントで使用した備品の片づけ、反省会	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
19	2017年　2017/9/21 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	小学校訪問に向けての授業計画、日本文化体験イベント計画	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
20	2017年　2017/9/28 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	小学校訪問に向けての授業計画、日本文化体験イベント計画	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
21	2017年　2017/10/5 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	小学校訪問シンガポールチームの決定、日本文化体験イベント計画	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
22	2017年　2017/10/12 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	小学校訪問計画、日本文化体験イベント計画	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
23	2017年　2017/10/19 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	小学校訪問計画、日本文化体験イベント計画	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
24	2017年　2017/10/26 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	スローガン考案、小学校訪問計画、日本文化体験イベント計画、司会者決め	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
25	2017年　2017/11/9 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	シンガポールチーム留学生のロビーさんと発表リハ―サル、イベント参加呼びかけ計画	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40

26	2017年　2017/11/16 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	ウクライナチーム訪問準備、活動報告会作成資料確認	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
27	2017年　2017/11/24 8:40　－　9:25	水木小学校	水木小学校にて国際理解活動	助川、山本	0:45
28	2017年　2017/11/24 17:40　－　18:30	茨城キリスト教大学 ジャブコ研究室	ウクライナチーム教員ジャブコとPPTの確認、ゲーム考案	大津、川本	0:50
29	2017年　2017/11/28 14:20　－　16:40	茨城キリスト教大学 11号館302教室	ウクライナチームPPT完成、活動報告会用ポスター作成、	大津、小野、川本	2:20
30	2017年　2017/11/29 14:20　－　16:00	茨城キリスト教大学 7号館	ウクライナ発表改善、活動報告会PPTとポスター作成	大津、小野、川本、助川、山本	1:40
31	2017年　2017/11/30 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	ウクライナチーム発表リハーサル、活動報告会PPTとポスター作成	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
32	2017年　2017/12/2 10:00　－　13:00	マクドナルド 50号大工町店	活動報告会打ち合わせ、原稿の改善	大津、小野、川本、助川、細川、山本	3:00
33	2017年　2017/12/2 13:00　－　17:00	茨城大学	活動報告会リハーサル	大津、小野、川本、助川、細川、山本	4:00
34	2017年　2017/12/5 16:00　－　19:15	茨城キリスト教大学 11号館302教室	ウクライナチーム宮田小学校へ電話、内容の詳細説明、報告会PPTとハンドアウト作成	大津、川本	3:15
35	2017年　2017/12/6 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	名刺作成、報告会PPTと原稿の手直し	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
36	2017年　2017/12/7 8:45　－　9:30	宮田小学校	宮田小学校にて国際理解活動	大津、川本	0:45
37	2017年　2017/12/7 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	活動報告会リハでの講評をもとに反省会、改訂版を作成し再通しリハーサル	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
38	2017年　2017/12/9 13:00　－　16:30	茨城大学	活動報告会	大津、小野、川本、助川、細川、山本	3:30
39	2017年　2017/12/14 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	日本文化体験イベント内容確認、準備物作成	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
40	2017年　2017/12/18 17:40　－　20:00	茨城キリスト教大学 5号館5100教室	日本文化体験イベント	大津、小野、川本、助川、細川、山本	2:20
41	2017年　2017/12/21 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	日本文化体験イベント反省会、備品整理、報告書作成担当分担	大津、小野、川本、助川、細川	1:40
42	2017年　2017/1/11 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 7号館7401教室	各自の担当の報告書作成、進行状況確認	大津、小野、川本、助川、細川	1:40
43	2017年　2017/1/18 12:40　－　14:20	茨城キリスト教大学 上野研究室	各自担当の報告書記載事項作成	大津、小野、川本、助川、細川、山本	1:40
				合計	10:25

４：会計報告

細川　茜・小野　千秋

品名	単価	数量	合計
ボールペン	108	2	216
ネームペン	108	1	108
風船	108	3	324
紙コップ	413	1	413
けん玉	108	2	216
竹とんぼ	108	1	108
紙風船	108	1	108
ポイ	108	5	540
折り紙	108	4	432
色紙	108	5	540
風船（赤・白）	108	2	216
軽食代	8,532	1	8,532
お菓子代	10,589	1	10,589
飲料代	1,446	1	1,446
		総計	23,788

５：活動トピック

⑴異文化交流プロジェクト

細川　茜

日時：平成29年7月17日（月・祝）
場所：茨城キリスト教大学3号館

高校生に日本に留学している留学生と共に異文化を体験してもらうことを目標に企画した（図 3)。茨城キリスト教学園高等学校様、日立北高等学校様、日立第二高等学校様、水戸第三高等学校様にお声掛けし、36 名もの高校生にご参加いただいた。

異文化交流フォーラム　企画書

①日程　7月17日(月・祝)

②場所　茨城キリスト教大学

③対象　水戸第二高等学校様、水戸第三高等学校様、茨城キリスト教学園高等学校様、日立第二高等学校様、日立北高等学校様 （合計25名程度）

④スタッフ　異文化交流プロジェクト
茨城キリスト教大学（10名）
茨城キリスト教大学所属の留学生(合計20名程度)

⑤目的　自分とは異なるバックグラウンドをもつ人々と交流することで、異文化にふれ、貴重な経験を得ること。
また、参加者同士がフォーラム後も続くような関係を築き、豊かな人間関係を構築すること。

⑥内容　現時点での検討案であるため、変更になる可能性があります。
13：00～13：10　受付、ネームカード作成
13：10～13：30　開会式
13：30～14：00　アイスブレイク
14：00～15：00　アクティビティ
15：00～15：10　休憩
15：10～15：40　フリートーク
15：40～16：00　閉会式
(当日は、10時から茨城キリスト教大学のオープンキャンパスが開催されています。)

⑦その他　・**参加費は無料**です。
・参加者の方には、全員当日限り有効のイベント保険への加入をお願い致しておりますので、参加者が確定しましたら、必要な情報(名前、性別、住所、生年月日)を、事前にお知らせください。保険料は無料です。

図3：異文化交流プロジェクト企画書

当日、学園内でオープンキャンパスが実施され、看板（図 4）を用いて告知を行い、参加者にはパンフレット（図 5）を配布した。

図 4：看板

図5：パンフレット

異文化交流プロジェクト

2017年 7月17日（月・祝）

茨城キリスト教大学 学生チーム D-CEP

異文化交流プロジェクト主催

目次

1．タイムテーブル p.3

2．注意事項 p.4

3．異文化プロジェクト紹介 p.5

4．留学生プロフィール p.6

注意事項

1. 全員で動くときは、スタッフの指示に従ってなるべく早く動いてください。
2. 気分が悪くなった場合には、近くにいるスタッフに声をかけてください。
3. 休憩の時間ではないときにトイレに行くときは、必ずスタッフに声をかけてください。
4. その他に困ったことがあったら、遠慮なくスタッフに声をかけてください。

異文化プロジェクト 紹介

本プロジェクトは茨城キリスト教大学の「プロジェクト実習」という授業の一環として留学生と交流することで国際理解を深める目的で行われています。
至らないことが多いと思いますが、楽しんで頂ければ幸いです。（スタッフ一同）

小野　千秋　（茨城キリスト教大学文学部現代英語学科　2 年）
大津　里奈　（　　同上　　）
川本　李音　（　　同上　　）
助川　里奈　（　　同上　　）
細川　茜　（　　同上　　）
山本　麻由　（　　同上　　）

顧問
上野 尚美　　（茨城キリスト教大学文学部　教授）
ジャブコ･ユリヤ　（茨城キリスト教大学文学部　助教）

補助
信原　史織（茨城キリスト教大学大学院文学研究科英語英米文学専攻　2 年）
堀江　光平（　　同上　　）

タイムテーブル

13：00	受付開始・ネームプレート作成
13：10～13：30	開会式
13：30～14：00	アイスブレイク
14：00～15：00	アクティビティ
15：00～15：10	【休憩】
15：10～15：40	フリートーク
15：40～16：00	閉会式・写真撮影

参加者に対してアンケート（図 6）を実施し、機会があれば再度このイベントに参加したいか聞いたところ、85%の方がまた参加したいという回答であった。

また、イベントに参加しての感想は、「会話が楽しかった」、「他国の人と交流ができた」など、交流に関しての意見がとても多かった。

その一方で、留学生から「パンフレットが日本語で読めなかった」という意見もあった。

異文化交流プロジェクト　アンケート

学校名[　　]　　性別　男・女

1．あなたは事前に申し込みをして参加しましたか？
　a.　はい　　b.　いいえ

2．今回、参加していかがでしたか？
　a.　楽しかった　　b.　普通　　c.　楽しくなかった

3．一番楽しかった企画は何ですか？
　a.　アイスブレイク(ゲーム)　　b.　ダンス　　c.　フリートーク

4．次回、またこのようなプロジェクトがあれば参加しますか？
　a.　参加する　　b.　参加しない　　c.　分からない

5．次回、このプロジェクトに参加するとしたらどんな企画をやってみたいですか？
　ご自由にご記入ください。

6．今回、参加した感想や意見をご自由にご記入ください。

ご協力ありがとうございました。
茨城キリスト教大学　D-CEP チーム

図6：アンケート

9 つのグループを作り、アイスブレイクを行った（図 7）。内容としては、聖徳太子ゲームと伝言ゲームの 2 点を行った。高校生と留学生が初めて交流する場で緊張している様子だったが、徐々に緊張が解けていき、楽しく交流している様子が見られた。

図 7：アイスブレイク

留学生が創作した振り付けでダンスを踊った。チームごとに分かれ、高校生は留学生にダンスを教わり、最後はチームごとのダンスをつなげてひとつのダンスとし、ビデオ撮影を行った。踊っているときの楽しそうな笑顔が印象的であった。留学生と高校生が 1 つになれた瞬間である（図 8）。

図 8：ダンス

チーム内でお菓子を食べながら自由に話してもらった。どのチームも楽しそうにお互いの国について話していて、とても盛り上がっている姿が印象的であった。終わり際には別れを寂しがり、思い出として高校生と留学生で写真を撮る場面もみられた（図 9）。

図 9：フリートーク

今回、高校生だけでなく留学生にも楽しんでもらうことが出来た。この異文化交流プロジェクトを通して、高校生と留学生に国際交流の楽しさを実感してもらい、国際交流の輪を広げるサポートができたのではないかと思う。

企画や運営に関して反省点が幾つかあったので、今後の個々の活動に活かしたい（図 10）。

図 10：集合写真

⑵小学校国際理解活動

助川　里奈

第 1 回小学校国際理解活動
日時：平成 29 年 11 月 24 日（金）
場所：日立市立水木小学校
対象：日立市立水木小学校 6 年生 64 名

第 2 回小学校国際理解活動
日時：平成 29 年 12 月 7 日（木）
場所：日立市立宮田小学校
対象：日立市立宮田小学校 6 年生 67 名

外国語活動で英語を学んでいる小学生に異文化にも触れてもらい、外国に興味・関心を持つきっかけとなることを目標とした。

パワーポイントを使用し、小学生にわかりやすいようクイズを交えながら発表した。内容は、国の基本情報（国旗・位置・人口）、有名な食べ物、観光名所、伝統衣装などである（図 11）。また、その国の言葉で挨拶を一緒に練習した。

図 11：使用した教材の一例

授業の中で、その国の伝統ゲームを紹介し、実際に体験してもらった。初めてするゲームに小学生は積極的に参加していた。質問コーナーでは、たくさんの小学生が手を挙げ質問し、異文化について興味を示していた（図 12）。

図 12：授業風景

⑶IC 祭

小野　千秋

内容：17：40～17：50　開会式
17：50～18：05　ゲーム説明
18：05～18：35　各ブースで遊ぶ
18：35～18：45　お茶会の準備
18：45～19：05　お茶会
19：05～19：15　書道説明
19：15～19：50　書道体験
19：50～20：00　閉会式

昔ながらの日本遊びをよく理解してから体験してもらうため、遊び方などを説明(図 13)。

図 13：ゲーム説明

図 14：ブースごとに遊んでいる様子

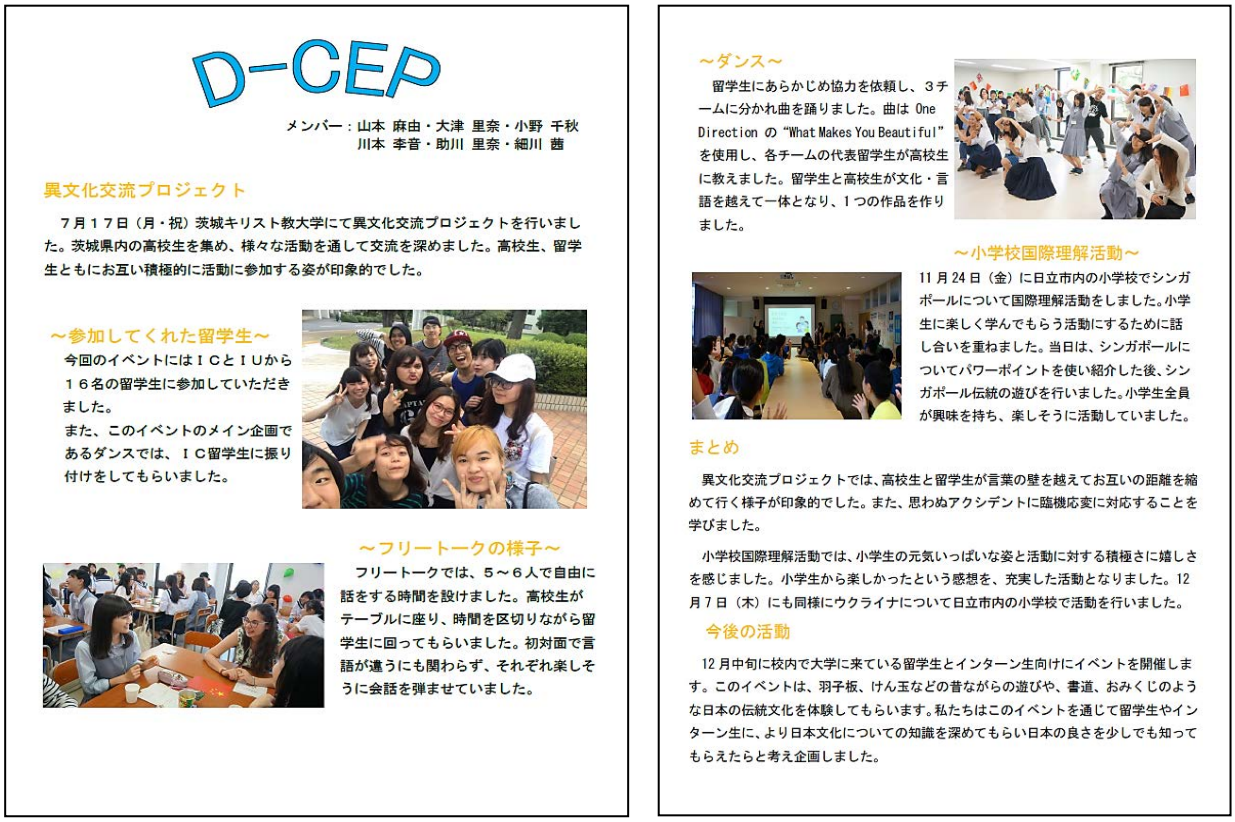
図 15：書道体験

参加者が自ら様々なブースに興味をもってくれて、企画した自分たちも一緒に参加し盛り上がった。最初、けん玉がなかなかうまくできなかった参加者が何度も挑戦して成功した時のとても喜んでいる姿が印象的だった(図 14)、

書道では自由に書きたい文字を何度も練習し、最後には記念に持ち帰れるように色紙に自分の書きたい漢字を一文字選び書いてもらった。参加者はとめ・はらいが力強く上手に書けていて驚いた(図 15)。

６：年度末活動報告会のポスターパネルと発表風景

助川　里奈



D-CEP

メンバー：山本 麻由・大津 里奈・小野 千秋
川本 李音・助川 里奈・細川 茜

異文化交流プロジェクト

７月１７日（月・祝）茨城キリスト教大学にて異文化交流プロジェクトを行いました。茨城県内の高校生を集め、様々な活動を通して交流を深めました。高校生、留学生ともにお互い積極的に活動に参加する姿が印象的でした。

～参加してくれた留学生～

今回のイベントにはＩＣとＩＵから１６名の留学生に参加していただきました。
また、このイベントのメイン企画であるダンスでは、ＩＣ留学生に振り付けをしてもらいました。

～フリートークの様子～

フリートークでは、５～６人で自由に話をする時間を設けました。高校生がテーブルに座り、時間を区切りながら留学生に回ってもらいました。初対面で言語が違うにも関わらず、それぞれ楽しそうに会話を弾ませていました。

～ダンス～

留学生にあらかじめ協力を依頼し、３チームに分かれ曲を踊りました。曲は One Direction の“What Makes You Beautiful”を使用し、各チームの代表留学生が高校生に教えました。留学生と高校生が文化・言語を越えて一体となり、１つの作品を作りました。

～小学校国際理解活動～

11 月 24 日（金）に日立市内の小学校でシンガポールについて国際理解活動をしました。小学生に楽しく学んでもらう活動にするために話し合いを重ねました。当日は、シンガポールについてパワーポイントを使い紹介した後、シンガポール伝統の遊びを行いました。小学生全員が興味を持ち、楽しそうに活動していました。

まとめ

異文化交流プロジェクトでは、高校生と留学生が言葉の壁を越えてお互いの距離を縮めて行く様子が印象的でした。また、思わぬアクシデントに臨機応変に対応することを学びました。

小学校国際理解活動では、小学生の元気いっぱいな姿と活動に対する積極さに嬉しさを感じました。小学生から楽しかったという感想を、充実した活動となりました。12 月 7 日（木）にも同様にウクライナについて日立市内の小学校で活動を行いました。

今後の活動

12 月中旬に校内で大学に来ている留学生とインターン生向けにイベントを開催します。このイベントは、羽子板、けん玉などの昔ながらの遊びや、書道、おみくじのような日本の伝統文化を体験してもらいます。私たちはこのイベントを通じて留学生やインターン生に、より日本文化についての知識を深めてもらい日本の良さを少しでも知ってもらえたらと考え企画しました。

図 15：ポスターパネル(1/16 縮小)

図 16：活動報告会での発表風景

７：個人レポート

［編者追記］　D-CEP チームの個人レポートについて

神田　大吾

2016 年度のプロジェクト実習報告書では、個人レポートは「2 段組み・1700 字程度」でした。

2017 年度は「1 段組み・2100 字程度」で書くことにしましたが、この変更について連絡する前に、既に D-CEP チームは 2016 年度の書式「2 段組み・1700 字程度」でレポートを提出済みでしたので、2017 年度は、茨城大チームは 2017 年度新書式、茨城キリスト教大学チームは 2016 年度書式にすることで、両大学担当者間で合意のもとに編集いたしました。以上、両大学の書式が異なることになった経緯を補足させていただきました。

1年間の活動を通して

茨城キリスト教大学2年　助川　里奈

私は、この一年間の活動を通してたくさんのことを学び、前までの自分よりも大きく1歩成長することができたように感じる。

学んだことの1つ目は、「仕事に責任を持つこと」である。異文化交流プロジェクトも、小学校国際理解活動も、12月に行われた報告会も、最後のイベントIC祭も1人1人が責任を持って行動することが大事であった。私は、今まであまり責任というものを深く考えたことはなかったが、この活動を通して自分の行動次第で進み具合や内容が変わってきてしまう、周りの人に迷惑がかかってしまうなど、責任を持つことの大変さ、重要さを学んだ。

2つ目は、「時間の有効活用」である。限られた時間の中でいくつもの仕事をこなしていくことはとても大変なことだ。しかし、これは社会に出たら当たり前のことになると私は思う。初めてのイベントの異文化交流プロジェクトでは、時間の使い方がまだ上手にできず、イベント間近になって慌てて準備をしていた。この経験から、イベント実行のためには、細かく計画を立て、時間に余裕を持って準備することが大切だということを学んだ。

3つ目は、内容や進行状況の把握である。イベントを開催するにあたって仕事の分担をするが、その仕事の進行状況などをメンバー同士で把握することはとても重要なことだと学んだ。周りの進行状況を把握していないと何がどこまで進んでいるのかわからず、準備が遅れてしまう。それを防ぐためにも情報共有は欠かせないものだと感じた。また、イベント中も周りとの連携や情報共有が大切だということをこの活動を通して実感した。

12月に行われた報告会では、様々な刺激をもらうことができた。リハーサルでは先生からのアドバイス、特に

図：異文化交流プロジェクト

「プレゼンテーションは聞いている方たちに届けるプレゼントだ」という言葉はとても印象的で、私の今までのプレゼンテーションに対する考え方が変わった。本番では、企業の方や他の学校の先生方などの前での発表に不安と緊張があったが、良い経験となった。

最後に、私はこれまであまり自分から意見や行動を起こせるタイプではなかった。この1年間の活動を通してたくさんの方と関わり、同じ活動をしているメンバーに刺激をもらい、数々のイベントをしていくにあたって、前よりも企画の時に意見を言えるようになったり、人任せではなく自分から動けるようになったりと、1年間という短い時間の中で、これまでの私より少しずつではあるが成長できたのではないかと感じている。この活動で得たものは、社会に出ていくうえで必要なものとなるので決して忘れないよう、そして、活動を通して出会えた仲間やお世話になった先生方に感謝を忘れずにこれからを過ごしたい。

プロジェクト実習を通して学んだこと
自分自身の成長

茨城キリスト教大学２年　細川　茜

私は大学生活の中で、自分の苦手意識のあるものをできる限り克服し、自分自身の成長につなげることを大きな目標としていました。しかし、大学に入って１年が経っても、苦手意識のあるものに触れることすらできていませんでした。

そのような時、プロジェクト実習に出会いました。私は他人の意見に任せることが多く、あまり自分の意志で決断したり、行動したりすることが苦手だったので、克服するいい機会だと思いました。また、今まで企画をするという経験もなかったので、新しいことにチャレンジしたいという思いもあり、この授業を履修しました。

最初に企画したイベントは、異文化交流プロジェクトで、このイベントのコンセプトは高校生と留学生の交流でした。イベントを企画する際、一番大変だったのが各高校の先生方に依頼をすることでした。メールのやりとりがメインでしたが、なかなかスムーズにやり取りをすることができず、企画の進行をうまく進めることができませんでした。当日の運営でも、留学生とのやり取りがうまくいかなかったり、時間通りにイベントを進めることができなかったりなど、反省点が幾つかありました。初めてのイベントで、うまくいかないこともたくさんありましたが、違う文化や言語を持つ日本人の高校生と留学生が楽しそうに会話やダンスをしている姿を見て、きちんと国際交流のサポートができたのだと実感しました。また、アンケート結果で参加してくれた人のほとんどがまた参加したいと回答してくれたことにとても喜びを感じました。

12 月に行った報告会では、メッセージを伝える難しさを痛感しました。限られた時間の中で伝えたいことをまとめるのがとても難しく思われました。先生のアドバイスを頂きながら、本当に必要なことだけを抽出し、より簡潔に分かりやすくなるように改善を重ねました。その結果、表彰はされなかったものの、先生方からお褒めの言葉を頂き、良い発表ができたのではないかと感じました。他のチームの発表も色々なアイデアが溢れていて、刺激を受けました。あまりこのような場で発表することがないので、とても緊張しましたが、貴重な体験ができたことをうれしく思います。

図：異文化交流プロジェクト参加者へ説明

最後に行ったイベントは、IC 祭でした。このイベントは縁日をモチーフにして、日本文化を留学生やインターン生に伝えることを目的とした。射的やけん玉などの日本の遊びや書道を体験してもらうイベントですが、全て英語での説明だったので、私たちが普段学んでいる英語を最大限に生かすことの出来るイベントでした。留学生や外国人インターン生も楽しそうに体験してくれて、とても達成感があり、私にとっても楽しい時間を過ごすことが出来ました。

このプロジェクト実習を通して様々なことを体験し、学ぶことが出来ました。チームでの活動なので、協調性はもちろんですが、それぞれ役割分担した際、自発性も大切であることを学びました。苦労した事もありますが、得られた事もたくさんあり、この一年を通して、自分自身大きく成長出来たと感じました。

プロジェクト実習を履修して

茨城キリスト教大学２年　山本　麻由

私は始め、なんとなくの気持ちでこのプロジェクト実習を履修しました。この授業がほかの授業とは違うこと、正直知っていたのはそのくらいでした。ちょうど１年前、新しいことに挑戦してみたい、他と違うことがやりたいと考えていた私にこの授業がぴったりだと、何も考えずに履修してしまったのです。しかし、授業が始まるとこんなにも大変で、こんなにも自分を成長させてくれる授業であることに気づきました。ここではその大変さと成長できた点を中心に１年間を振り返ります。

まず初めに私たちに大きく憚かった壁は積極性・自主性の乏しさです。いつも何かを与えられ、何かを学んできた私たちにとって自分たちで授業を作り上げながら学ぶことに戸惑いを感じました。自分たちが何をしたくて、何をすべきなのかが不明確で、分からないという状況が幾度もありました。また、チームで活動するからこそ問題になったのが“みんなに合わせる”ことでした。これにより、チーム内でお互いに遠慮し、様子をうかがうことで何も進まず、そこから学ぶものを得ることができませんでした。しかし、それではいけないと気づいたときに、私たちに足りないのは積極性や自主性であると痛感しました。そこからというと、皆お互いに意見を出し合い、ぶつかりながらもより良いものとするために話し合い、模索し、積極性・自主性の大切さを学びつつ、チームの団結にもつながりました。

次に苦労した点は、目上の方との連絡の仕方でした。異文化交流プロジェクトを行う際に、高校の先生方と連絡を取り、直接高校にも訪問させていただく機会もありました。今まで経験がなかった私たちにとっては、毎度丁寧な言葉を使って送るメールには何度も悩み、チームメンバーと協力しながら連絡をしていました。挨拶の仕方や、メールを送る際の礼儀など多くのことを学びました。また、要望に耐えられないときや、こちらからのお願いなど、失礼がないように自分たちの意思を伝えることの難しさを学びました。加えて、訪問に行く際の礼儀や電話連絡なども学ぶことができ、少しだけ社会経験を積むことができたように感じます。そして一番悩み、私を成長させてくれたのはリーダーという責任でした。初めは積極性や自主性が欠けていたこともあり、役割分担が不明確でイベントが近くになってから焦ってしまうことがありました。その際に、情報共有の大切さについても大いに学ぶことができました。その経験から、誰が何をいつまでにやらなくてはならないのか明確に指示をだし、また、情報共有を徹底して行うように呼びかけました。また、チーム内での個人のやる気の差が時折イベント準備に支障を来す恐れがあったので、リーダーとして声をかけ、周りに気を配りながら物事を進めていくことが大切であると痛感しました。私にとってこの１年間は大変で、辛く感じたこともありましたが、それ以上に多くのことを吸収し、学ぶことのできたとても充実した１年を過ごすことができたと思っています。

図：異文化交流プロジェクト

プロジェクト実習に参加して学んだこと

茨城キリスト教大学２年　小野　千秋

私はこのプロジェクト実習を通じて主に 3 つのことを学びました。

1 つ目は大きな目標に対する達成感と苦労です。初めての企画では何から始めればいいかもわからず、先生方に教えていただきながらもなんとか終えることができました。どのイベントでも正直なにをすればいいのかわからず、何もできないことがあり、辛いと思うことがありました。しかし、実際に参加者の楽しそうな姿やまたイベントに参加したいという感想を聞いた時、自分まで楽しくなって頑張ったかいがあった、またこんな企画したいと感じました。

2 つ目は人とのつながりです。普通の授業とは違い、自分たちで企画したイベントに参加者を募って、いろんな人と交流する機会が多かったので、つながりの大切さを知ったとともに大勢の人や文化の違う他国の人をまとめる難しさ、どんなに計画してもその通りに進まない大変さを同時に知りました。異文化交流プロジェクトで行ったダンスでは、練習した後全体で通して発表をしました。グループに分かれて練習していた時はスムーズにいっていたので本番でもうまくいくと思っていましたが、実際に通しでやってみるとグループごとの入れ替わり方が決まってなかったり、カメラに全員が映り切れなかったりして、予定の時間通りに進みませんでした。急遽、その場で入れ替わり方を決め、なんとか終えることが出来ましたが、なかなかうまくいかない場合もあることを考え、突然の問題にも対応できるように、留学生ともきちんと話をしておくべきだったと実感しました。人と関わるということは、交流が増え、楽しい思いをするだけでなく、時には人をまとめると苦労することもあると実感しました。また、将来社会にでれば人とのつながりはとても大切になってくるので、その時に必要な人と接するときのマナーや気遣いなどを学ぶことができました。

図：ダンス練習風景

3 つ目はチームワークです。今回のプロジェクト実習では、茨城大学の学生が一人もいないということもあり、去年までの先輩方が行ってきた実習よりも比較的取り組みやすかったと思います。企画の案を考えるとき、自分の意見を提案してみたり、他のメンバーから自分では思いつかなかったアイデアが出たりして、新しい考え方ができるようになったことは、自分にとっても周りにとってもいいことだと思います。今まで一緒に活動してきて、意見がまとまらなかったり問題が起こったりしたときにはどうすればこの問題を解決できるのか一緒に考え悩み解決していきました。今思えばこの大変さがあったおかげでチームの絆をより深めることが出来たのではないかと思います。

一年間、微力ながらも異文化交流の場を与えてきた D-CEP として活動し、いろんな人と出会い、いろんなことを経験して得たものは、これからの人生で大きな財産になると思います。この機会に特別な経験ができたことを本当にうれしく思います。

プロジェクト実習に参加して

茨城キリスト教大学２年　川本　李音

このプロジェクト実習に参加したのは、異文化交流への興味と、自分を成長させたいという思いからであった。始まってまず驚いたのは、この授業ではかなり主体性が求められるという点だ。方針など、大まかなことは教授の指示を受けるが、大部分は全て自分たちで決める権限があった。主体的であることは、自由である反面、多くの責任を伴うと感じた。成功も失敗も、すべて自分たち次第である。

授業開始当初に強化目標とした社会人基礎力は、発信力・計画力・対応力の三点だ。

発信力については、イベント企画で大いに身についた。企画する際、図解を用いてアイデアを説明するなど、自分の意見を明確に、魅力的に伝えられるよう努力した。初めは他人の顔色を伺い、異議を唱えるのが苦手だったが、活動を通して積極的に発言する力が付いた。

計画力についてはまだまだ至らない点が多い。イベント参加者の連絡の遅れやトラブルを予期しないために慌てることが多々あった。計画する際は、全体を考慮しもっと余裕を持つべきだったと考える。

対応力については、渉外で多くの苦難を経験した。異文化交流プロジェクトで高校生参加者を募集する際、思い通り進まないことがあった。対象の高校の先生が行事等で忙しく、期日を伸ばしてほしいと頼まれたが、開催日が迫っている為、止むを得ずキャンセルの判断をした。急遽、定員以上の募集があった他校の生徒を全員受け入れ対応したが、これは想定外の事態であった。また、小学校国際理解活動でウクライナを担当したが、本来はキルギスについて行う予定だった。キルギス人留学生が協力してくれる予定だったが、なかなか連絡が取れず、急遽ウクライナ人の先生に依頼し紹介国の変更に至った。このような思わぬ事態が起こった際、冷静に的確な判断をすることが大切だと感じた。

図：異文化交流プロジェクト

プロジェクト実習で１つ後悔した点は、１年を通した取り組みにすればよかった、という点だ。これは活動報告会の際にいただいた講評で気づかされた。私たちの活動は、当初、先輩の見よう見まねで活動してきて、前年とあまり変化がない活動だった。講評でいただいたのが、「1 年を通して改善したかったプロジェクトは何だったのでしょうか」というコメントだ。確かに、私達の行ったイベントはそれぞれが独立していて課題設定が曖昧だ。もしもう一度このプロジェクト実習に参加するなら、もっと１年を通してできる課題を発見したいと思う。

プロジェクト実習に参加できたことを大変嬉しく思う。PBL 授業、Project Based Learning においての経験は、これからの課題解決の際に、大いに役立つであろう。培った社会人基礎力能力を活かし、社会を生き抜いていきたい。

プロジェクト実習を通して

茨城キリスト教大学２年　大津　里奈

1 年前、私はこのプロジェクト実習での活動を始めるにあたって達成目標を 3 つたてた。

はじめに、1. 現状を分析し課題を明らかにする能力を身につけるという目標について述べたい。前期のイベントは、高校生と留学生の異文化交流プログラムの一つだけであったため、各々の進行状況や、計画をしていくなかで生じたトラブルを比較的把握しやすかった。しかし、後期のイベントは、いくつものイベントの計画・準備を同時に進めなければいけなかったため、自分の担当に必死になりすぎてしまい、担当外のことに目を配る余裕が持てなかった。現状を把握できていないため当然トラブルにすぐに対応することができなかった。そのため、一度全員で現状を確認し、決定事項と見直すべきことを明らかにしてから再び作業に取り掛かった。すると明らかに作業効率が良くなったのを感じることができた。各々の現状を把握できていないことに途中で気付くことができて良かった。

つぎに、2. 意見や立場の違いを理解する能力を身につけるという目標について分析したい。この能力は異文化交流をする上で 1 番大切であると思う。今回イベントに参加してくれた留学生やインターン生は、出身国がさまざまだ。そのため文化や考え方が日本とは異なる点も多々あった。時間に対する考え方は大きく日本と異なっていた。だからといって日本人の感覚を押し付けるようなことはメンバーの誰一人しなかった。日本ほどきっちり時間や期限を守る国は珍しいということを理解していたからこそ、柔軟な考え方と広い心で対応できたのだと思う。今回だけに限らず、これから異文化交流をするうえで、宗教による考え方の違いや国ごとの生活スタイルの違いは必ず生じる。そこで一方的に自分の感覚や考え方を押しけることをしないで、互いを理解し尊重し合うことが、この世の中で異文化の人々が共存していくために大切であると感じた。

図：異文化交流プロジェクト

最後に 3. プレゼンテーション能力とコミュニケーション能力の向上という目標について報告したい。活動報告会での発表を終えて、プレゼンテーションの奥深さを知ることができた。PPT やハンドアウトの役割、話し方や目線など一つ一つに意味があることを理解した。今まで土台としてあったプレゼンテーションの知識にプラスになった貴重な経験ができたと思っている。指摘された点は真摯に受け止め、今後改善していきたい。

これまで 3 つの目標を振り返ってきたが、全てに共通する重要な能力、それはコミュニケーション能力だ。グループ活動において相手の話を聞くこと、自分の考えを伝えることは基本的なことである。この 1 年間のプロジェクト実習の活動を通して、その能力は確実に高めることができたと実感している。

はじめは何をするのか分からない状態で履修を悩んでいたこのプロジェクト実習だったが、あの時に楽しそうだからやってみようかなと軽い気持ちながらも履修することを選んで良かったと心から思っている。6 人で必死に頑張ってきた 1 年間は、私にとって大きな財産になった。この経験を糧にグローバル化が進む社会で活躍できる人間になれたらと思う。

８：おわりに

山本　麻由

今年度の活動を振り返ると、問題や課題の壁に何度も直面したが、無事三つの企画を終えることができ、充実した一年であった。この一年間で多くのことを学ぶことができた。

自発的に活動すること、企画・実行の難しさ、また社会経験など他にも多くのことがある。この授業を受けたからこそ、他では学ぶことのできない多くの経験をすることができた。

異文化交流プロジェクトでは、イベントの内容や準備はもちろんだが、一番苦労したのは高校の先生方との連絡だった。普段目上の方にメールや電話をする機会がなかったため、初めての経験であった。イベントに想定以上の参加希望者がおり、人数調整やそれを行うために、各高校を担当するチームメンバー同士内の連携も苦労しながらも、無事にイベント当日には問題を乗り越えることができた。参加者が名残惜しそうにイベントから帰っていく姿を見て、チーム一同、達成感と充実感で胸がいっぱいになった。

他にも小学校国際理解活動やIC祭を行い、イベントを重ねるにつれてチームの団結力が高くなるのを実感しながら、有意義な活動を行うことができた。小学生の好奇心には何度も驚かされ、小学生に授業をするという立場ながらも、小学生から多くのことを学んだのも事実である。また、IC 祭では茨城大学での報告会の直後で準備に時間をかけることができなかったが、工夫を凝らして楽しく日本の文化を紹介することができた。

残された課題として、今回、異文化交流のイベントの対象を高校生と小学生に限定したことだった。本来であれば国際化が進んでいる現在において、その他の年齢層（幼稚園生、保育園生、中学生等）にもこれらのイベントを行うべきであったとチーム内で声が上がった。時間や予算の関係で多少の問題が発生するかもしれないが、次回があるならば対象を増やし、より発展した活動にしていきたい。

一年間、異文化交流をするきっかけを作るイベントを通して、私たち自身その難しさや困難に直面しながらも、相手の文化について関心を持つことができ、よりこの活動に意味があることを実感することになった。また、それだけではなくグループで活動するときの難しさや企画・実行の大変さ、目上の方との連絡など、多くの社会経験を学ぶことができた。これらの経験を私たちの糧とし、これからの未来に役に立てていきたい。

最後に、この活動にあたって協力して頂いた、茨城キリスト教学園高等学校大川通昭教頭先生・皆様、日立第二高等学校黒沢吹美子先生・皆様、水戸第三高等学校片岡卓治先生・皆様、日立北高等学校長山裕司先生・皆様、水木小学校萩庭千佳子先生・皆様、宮田小学校大宮舞先生・皆様、茨城キリスト教大学入試広報部の皆様、同国際理解センターの皆様、茨城キリスト教大学・茨城大学の留学生の皆様、そのほか私たちの活動にご尽力いただいたすべての方々に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

５：Domaine MITO チーム

プロジェクト実習Ｄ

リーダー	：鶴町　直輝	茨城大学人文社会科学部社会科学科	２年
副リーダー	：三枝　奈央	同　　上	２年
副リーダー	：水戸部麻美	同　　上	２年
書記	：今川奈津美	同　　上	２年
書記	：中野　拓哉	同　　上	２年
会計	：大徳ちはる	同　　上	２年
渉外	：吉川奈緒子	同　　上	２年

主担当教員：鈴木　　敦　茨城大学人文社会科学部　教授
副担当教員：神田　大吾　茨城大学人文社会科学部准教授

2017 年度
茨城大学人文社会科学部　プロジェクト実習D
「Domaine MITO チーム」活動報告

１：はじめに

鶴町　直輝

私たち「Domaine MITO チーム」は昨年度からの継続しているチームだ。Domaine MITO 株式会社とともに、水戸の中心市街地にある泉町２丁目商店街の活性化のために活動をしている。Domaine MITO 株式会社は一昨年の平成 27 年に設立された、水戸の市街地で、茨城のブドウなどを使いワインを作るまちなかワイナリーである。継続といいながらも、チームのメンバーは総入れ替えとなり、実質新チームとしての活動となった。

私たちチームは活動を通し、多くの課題にぶつかり、多くのことを学んできた。そこには、協力者である宮本様をはじめとした多くのご助力があり、地域の方々との交流があった。

これから、この１年間の私たち七人が、手探りで、右往左往しつつ、学んできた活動を記していく。この報告が交流や地域について考える、興味をもつきっかけになることを期待している。

⑴活動課題の設定（チーム成立の経緯）

チームのテーマとして私たちは、地域活性化とは人々の交流が活発であることだと解し、「まちなかワイナリーでお友達を作ろう」というものを掲げた。昨年度から Domaine MITO チームは、まちなかワイナリーと交流という点に着目しており、我々は特にまちなかワイナリーの活動から普段かかわらない人同士が交流し、地域が活性化することを目標としたのだった。

⑵プロジェクト課題

水戸産のワインをツールとしたコミュニティの拡大

⑶プロジェクト課題からプロジェクト構想へ

①絞り込みの経緯

Domaine MITO ワインの特徴としては、まだまだ珍しい日本産のワインであるということ、まちなかにあるワイナリーということで、生産地と消費地がとても近いということ、を武器にプロジェクト構想をしてきた。 まずいろいろな案をたくさん出してその中から良いものを選び取るというような方法をとった。珍しい日本産のワインという面から、日本産のワインというだけでまだブランド力がきくのではないかという考えから、まず水戸のまちなかで何か認知度を上げられる企画をするという方向に方針が固まった。

まちなかにあるワイナリーという面からは、やはり消費地が近いこと、地元に興味を持ってくださっている方々に対して企画ができそうであるという面から絞り込みをした。

②プロジェクトの目的①プロジェクトとして何をするか／達成するか

イベントに参加、ワイン醸造、PR をすることで、市民の方々とかかわり地域コミュニティを広げる。より具体的には、あまりかかわることのない人同士、例えば学生と地域の方々などをワインというツールを使い結び付ける。

具体的には、飲み方講座を行うということで方針が固まったが、補助金審査に落ちてしまい、代案も出すことができずに終わってしまったため、当初の案を変更して京成百貨店での試飲販売会を企画した。

③プロジェクトの目的②チームとして何を得るか／学ぶか

活動をとおして多くの人とかかわることで、社会に出たときや通用するコミュニケーション能力をきたえる。
試飲販売会を通して、企画の立案、実行に必要なこと、マナーについてなど学ぶことができた。

④成果の検証方法・「成功」の基準

学生を中心に醸造体験の人数が増やせるか

- 試飲販売会でのアンケート
  - 来てくれた方に DomaineMITO に興味を持った OR コミュニティが広がったかなどの項目についてシールなどによって、答えてもらう。

２：活動概要

水戸部　麻実・吉川　奈緒子

⑴活動の目的

イベントに参加、ワイン醸造、PR をすることで、市民の方々と関わり地域コミュニティを広げる。より具体的には、あまり関わることのない人同士、例えば学生と地域の方々などワインというツールを使い結び付ける。

⑵活動の概要

①ワインの販売

日時：7 月 29 日（土）13:00～16:00
場所：京成百貨店前
参加者：大徳
内容：
(i)お客さんの呼び込み
(ii)グラスワインをサーバーから注ぐ

②牛久シャトーフェスタ～“シャトーカミヤ”から“牛久シャトー”へ

日時：9 月 3 日（日）11:00～16:00
場所：牛久シャトー　サンクンガーデン特設会場
参加者：中野
内容：
(i)ブース準備、片付け作業
(ii)ワイン販売、接客
(iii)ぶどう畑見学
所感：
(i)自分なりに説明しながら販売することができた。
(ii)暑かったこともあり、白ワインやスパークリングワインなど飲みやすいものを求める声があった。
(iii)近隣商店街からの出店やステージイベントが盛りだくさん、吹奏楽やジャズの演奏やトークショー、抽選会やクイズラリーなど家族連れも楽しめる内容で思っていたよりも大盛況だった。
(iv)興味を持ってくれる人が多くいた。

(v)ぶどう畑では生食用と変わらないくらい甘くて上質なぶどうが栽培されていた。

③水戸まちなかフェスティバル

日時：9 月 24 日（日）8:30～17:00

場所：ホテル・ウエストヒルズ

参加者：鶴町、三枝、今川、中野、大徳、吉川

内容：

(i)マルシェと呼ばれるブースでのワインとフランスのお菓子の販売

(ii)アペリティフの会場見学

所感：

(i)人通りは少なく忙しいということはなかった。

(ii)チームメンバーと他校のメンバーとで和気あいあいと元気に販売することができた。

(iii)準備、片付けもスムーズにすることができた。

(iv)アペリティフの会場見学では外とは一変した上品な空間に一同緊張を隠せなかった。

(v)普段ビールしか口にしないという方にパスティスをおすすめしたところ美味しいといって下さったことが一番印象に残っている。

(vi)どのように Domaine MITO のワインを知っていただくかの切り口となった。

④新作ワインのリリースパーティ

日時：11 月 3 日（金）14:30～19:00

場所：ホテル・ザ・ウエストヒルズ　水戸

参加者：鶴町、三枝、今川、中野、大徳、吉川

内容：受付、ワイン提供

所感：学生と Domaine MITO の関係に興味を持つ方が多かった。

⑤第 68 回茨苑祭参加

日時：11 月 11 日（土）、12 日（日）9:30～17:00

場所：茨城大学人文 23 番教室　※さとみ・あい、チームみなと☆ミライと共同

参加者：三枝、水戸部、今川、中野、吉川、大徳

内容：活動紹介のパネル、Domaine MITO のワインボトル展示

所感：

(i)集客があまりできなかった。

(ii)パネル作成を通じて活動の見直しができた。

(iii)他のチームと繋がることができた。

⑥試飲販売会

日時：11 月 24 日（土）16:00～19:30、25 日（日）12:00～18:00

場所：京成百貨店 B1　食品売り場

参加者：24 日水戸部、今川、中野、25 日水戸部、今川、中野、大徳、吉川

内容：

これまでの経験を踏まえ、中野発案の『試飲販売会』を実現。

客層→主婦、サラリーマン

販売数→両日合わせ 15 本程度

試飲者数→50 人超

アンケート→33 人

認知度：知っていた 39%　知らなかった 61%

興味を持ったか：はい 90%　いいえ 10%

所感：

(i)水戸産ワインということで興味を持ってくれる方が多かった。

(ii)多くの方に Domaine MITO と水戸産ワインを知っていただくことができた。

(iii)自家用車でご来店のお客様への配慮をもっと考えるべきだった。

(iv)今回は認知が目的だったが、もしも次回があるならばこれをどう販売数につなげるか考えてもよいかもしれない。

(v)Domaine MITO を知らない多くの人に興味を持っていただいた。

(vi)お客様とワインについての話題で盛り上がった。

(vii)役割分担が上手くいかず、円滑に進められなかった。

(3)プロジェクトを通して学んだこと

プロジェクトを通して Domaine MITO 株式会社の宮本紘太郎様や、試飲販売会において京成百貨店の方々にご協力していただいた。そのつながりにおいて礼儀やマナーを身につけることができた。また、試飲販売会などの企画を実行するにあたり一つの企画を実行する大変さ、目的や意義を明確化しながら企画イメージを具体的に落とし込むテクニックを学んだ。地域やそのコミュニティについて考えることができた。

３：議事録・活動記録

今川　奈津美・中野　拓哉

No.	日時（10分単位）	場所	活動内容	参加者	実働時間
1	2017年　5月8日 12:40　－　14:00	図書館1Fラーニングコモンズ	チームの方向性の決定	鶴町、三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	1:20
2	2017年　5月26日 12:40　－　14:00	図書館1Fラーニングコモンズ	企画案の検討と補助金申請について	鶴町、三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	1:20
3	2017年　5月29日 13:30　－　14:30	図書館1Fラーニングコモンズ	チームの方向性を提案者様の宮本様と改めて打ち合わせ	鶴町、三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	1:00
4	2017年　6月2日 12:40　－　14:00	図書館1Fラーニングコモンズ	提案企画と茨苑祭を進めるためにチームを分担。	鶴町、三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	1:20
5	2017年　6月9日 9:30　－　10:10	人文C棟　406	茨苑祭企画に関して	鶴町、水戸部、今川、中野	0:40
6	2017年　6月10日 10:00　－　16:00	泉町会館	提案者様による企業説明会とブドウ畑の見学	鶴町、水戸部、今川、吉川	6:00
7	2017年　6月14日 13:30　－　16:00	泉町会館	提案者様による企業説明会と水戸まちなかフェスティバルの役員会議へ同行	三枝、中野、大徳	2:30
8	2017年　6月16日 12:40　－　14:00	図書館1Fラーニングコモンズ	企業説明会の内容をチームで共有。茨苑祭の企画に関して	鶴町、三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	1:20
9	2017年　6月23日 12:40　－　14:00	図書館1Fラーニングコモンズ	助成金申請書作成。	鶴町、三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	1:20
10	2017年　6月26日 10:30　－　11:30	図書館1Fラーニングコモンズ	宮本様提案の『元気な農山村創生チャレンジ事業』に関して	鶴町、吉川	1:00

11	2017年　6月30日 12:40　－　14:00	図書館1Fラーニングコモンズ	助成金の申請書の提出	鶴町、三枝、今川、中野、大徳、吉川	1:20
12	2017年　7月5日 14:30　－　15:30	共通教育棟1Fラーニングコモンズ	飲み方講座と茨苑祭の企画の具体的な落とし込み	三枝、水戸部、今川、大徳、吉川	1:00
13	2017年　7月6日 8:00　－　9:30	人文C棟　406	飲み方講座に関して	鶴町、三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	1:30
14	2017年　7月7日 9:30　－　10:00	人文C棟　406	茨苑祭共催について	鶴町、三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	0:30
15	2017年　7月9日 10:00　－　13:30	人文A棟　241	企画書・計画書の作成	水戸部、今川	3:30
16	2017年　7月10日 12:40　－　14:00	共通教育棟1Fラーニングコモンズ	企画書作成。夏休みの予定確認。	三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	1:20
17	2017年　7月14日 13:00　－　15:30	図書館2F共同学習室	宮本様に作成した企画書を見せ、アドバイスをいただいた。今後の予定に関して	三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	2:30
18	2017年　7月19日 13:00　－　14:30	図書館1Fラーニングコモンズ	中間報告会への打ち合わせ。計画書作成。	鶴町、三枝、今川、中野、大徳、吉川	1:30
19	2017年　7月27日 8:40　－　10:00	人文C棟　406	申請した助成金の落選を受けての今後の対応に関して。夏休みの日程の最終確認	鶴町、三枝、今川、中野、大徳、吉川	1:20
20	2017年　7月29日 13:00　－　16:00	京成百貨店前	ワイン販売	大徳	3:00
21	2017年　9月3日 11:00　－　16:00	牛久シャトー	ワイン販売	中野	5:00
22	2017年　9月23日 9:00　－　11:30	ホテル・ザ・ウエストヒルズ水戸	水戸まちなかフェスティバルの事前打ち合わせ	鶴町、今川	2:30
23	2017年　9月24日 8:30　－　18:00	ホテル・ザ・ウエストヒルズ水戸	水戸まちなかフェスティバルでワイン販売(インターンシップ)	鶴町、三枝、今川、中野、大徳、吉川	9:30
24	2017年　10月3日 14:20　－　17:30	人文	今後のメインイベントに関して	三枝、今川、大徳、吉川	3:10
25	2017年　10月4日 20:00　－　21:00	みやもと酒店	今後のメインイベントについて報告と相談	三枝、今川、吉川	1:00
26	2017年　10月5日 21:00　－　22:30	マクドナルド(大工町)	1か月後に行われる新作ワインリリースパーティの広告に関して	三枝、今川、大徳、吉川	1:30
27	2017年 10月6日 13:30　－　15:30	水戸セントラルビル3F	株式会社関東朝日広告社様と宮本様による打ち合わせの見学	今川	2:00
28	2017年　10月11日 13:00　－　16:00	図書館2Fグループ学習室	新企画『試飲販売会』の検討	鶴町、三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	3:00
29	2017年　10月16日 14:00　－　16:00	喫茶　富2階(水戸市泉町2-2-16)	新企画『試飲販売会』を宮本様にご提案	中野、大徳、吉川	2:00
30	2017年　10月24日 14:30　－　17:00	図書館2Fグループ学習室	試飲販売会広告に関して	鶴町、三枝、今川、吉川	2:30
31	2017年　11月1日 12:00　－　16:00	図書館1Fラーニングコモンズ	茨苑祭展示物作成	三枝、大徳	4:00
32	2017年 11月2日 14:00　－　17:00	図書館1Fラーニングコモンズ	茨苑祭展示物作成	三枝、大徳	3:00
33	2017年　11月3日 14:30　－　19:00	ホテル・ザ・ウエストヒルズ水戸	新作ワインリリースパーティのお手伝い。その後、京成百貨店の担当者様と試飲販売会の打ち合わせ	鶴町、三枝、今川、中野、大徳、吉川	4:30
34	2017年　11月10日 9:00　－　11:30	人文講義棟23	茨苑祭の会場準備	水戸部、今川、三枝	2:30
35	2017年　11月11日 9:00　－　18:00	人文講義棟23	茨苑祭展示	三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	9:00
36	2017年　11月12日 9:00　－　18:00	人文講義棟23	茨苑祭展示	三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	9:00
37	2017年　11月17日 8:40　－　10:10	人文C棟　406	試飲販売会に関して	鶴町、三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	1:30

38	2017年　11月22日 18:00　－　20:00	京成百貨店	試飲販売会当日の日程などの確認	中野	2:00
39	2017年　11月23日 9:00　－　17:00	泉町会館	会社説明(インターンシップ)	鶴町、水戸部	8:00
40	2017年　11月24日 15:00　－　19:30	京成百貨店	提案企画『試飲販売会』①	水戸部、今川、中野	4:30
41	2017年　11月25日 12:00　－　18:00	京成百貨店	提案企画『試飲販売会』②	水戸部、今川、中野、大徳、吉川	6:00
42	2017年　11月28日 17:00　－　18:00	図書館1Fラーニングコモンズ	報告会の準備	鶴町、三枝、今川、中野、大徳、吉川	1:00
43	2017年　11月29日 17:00　－　18:00	図書館2Fグループ学習室	報告会の準備	鶴町、三枝、水戸部、中野、大徳、吉川	1:00
44	2017年　12月6日 13:00　－　16:00	図書館1Fラーニングコモンズ	ポスターセッションのパネル貼り	三枝、大徳	3:00
45	2017年　12月8日 16:00　－　18:00	図書館2Fグループ学習室	報告会発表練習	鶴町、三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	2:00
46	2017年　1月16日 16:00　－　17:00	図書館2Fグループ学習室	チームでの反省	鶴町、三枝、今川、大徳、吉川	1:00
47	2017年　1月17日 15:00　－　17:30	図書館2Fグループ学習室	Domaine MITO team反省会	鶴町、三枝、水戸部、今川、中野、大徳、吉川	2:30
				合計	132:00

４：会計報告

大徳　ちはる

品　　名	単価	数量	合計
プリンターインク	4,626	1	4,626
コピー用紙	1,728	1	1,728
写真用プリント用紙	415	2	830
色画用紙	324	1	324
養生用布粘着テープ	478	1	478
ノック式ボールペン	397	1	397
タックタイトル	144	1	144
		総計	8,527

５：活動トピック

中野　拓哉

⑴Domaine MITO 株式会社 会社概要説明会

6 月中旬頃、プロジェクト活動を本格的に開始するにあたり、Domaine MITO 株式会社主催の会社概要説明会に参加し、会社設立の経緯や目的等についての説明を受けた。また、泉町会館にある醸造所の見学を行った（図 1・2）。

図 1：会社概要説明

図 2：泉町醸造所での説明

⑵水戸京成百貨店前でのワイン販売

7 月 29 日（土）に水戸京成百貨店前で開催されたワイン販売のイベントに参加し、お客様の呼び込みをしながらグラスワインの提供を行った。どのようにワインをプロモーションしているのかを間近で体験することで Domaine MITO の活動への理解を深めることができた（図 3）。

図 3：水戸京成百貨店前でのワイン販売

(3)牛久シャトーフェスタ

9 月 22・23 日（土・日）に開催された「牛久シャトーフェスタ～‘‘シャトーカミヤ’’から‘‘牛久シャトー’’へ～」の 2 日目に参加し、ワイン（グラス、ボトル）の販売と接客の他、ブースの設営や片付け作業を行った。牛久シャトーフェスタはシャトーカミヤから「牛久シャトー」への愛称変更を記念したイベントで、近隣商店会からの出店やステージイベントもあり大盛況だった。売れ行きは 1 日目よりも良く、グラスワインは赤とロゼそれぞれ 30 杯以上、ボトルワインはレギュラーサイズが 2 本販売でき、ハーフサイズは用意していた 8 本が完売した。自分なりに説明しながら販売することができ、Domaine MITO に興味を持ってくれる方も多かった（図 4）。

図 4：ブース設営

(4)水戸まちなかフェスティバル／アペリティフ 365 in 水戸（インターンシップ）

9 月 24 日（日）に「水戸まちなかフェスティバル」が開催され、企画出店「アペリティフ 365 in 水戸」の当日の会場準備や運営補助、ブースでの外販等、インターンシップとして業務に携わった。会場となったホテル・ザ・ウエストヒルズ・水戸のバンケットルームでは、フランス人の講師を招いての講演会やシャンソンの演奏などとともに、気軽にお酒や軽食を楽しむフランスの文化を伝える「アペリティフ」のイベントが催された。また会場の外でもテントを張りブースを設け、Domaine MITO の赤ワインをはじめビールやシャンパンなどのフランスの酒と、笠間駅前にあるフランス菓子店「グリュイエール」の焼菓子セットを販売した（図 5・6）。

図 5：ブースでの外販

図 6：アペリティフのイベント

⑸リリースパーティー

11 月 3 日（金・祝）に Domaine MITO 主催のリリースパーティー（新作ワインのお披露目会）が開催され、受付やワインの提供といった当日の運営補助を中心に参加した。ひとくちオーナーの方々が招待され、2017 年度の新作ワインが紹介された（図 7・8）。

図 7：ワイン提供

図 8：筑波大学学生製作のオーナメント

⑹茨苑祭

11 月 11・12 日（土・日）に茨城大学で開催された茨苑祭において、「さとみ・あい」「チームみなと☆ミライ」との合同企画として Domaine MITO やこれまでの活動を紹介するパネルやコルクボードの他、ワインボトルやリーフレット等の展示を行った。また、試飲販売会の広報としてフライヤーの配布を行った（図 9～11）。

図 9：紹介パネル、コルクボード

図 10：ワインボトル、リーフレット等

図 11：茨苑祭パンフレット掲載デザイン（中野作成）

(7)試飲販売会

11 月 24・25 日（金・土）に水戸京成百貨店で行った試飲販売会は、水戸にあるまちなかワイナリーに対して興味を持つ方へのプロモーションを私たち自ら実現させたいという思いから生まれた企画である。また、アンケートを用いたプロジェクト自体の成果検証の場としての意義も併せ持っている。チーム内はもちろん、Domaine MITO や水戸京成百貨店との協働が実現される場であると同時に、企画イメージから関係企業への提案、企画実施までをチームが主体となって行動することで、目的や目標を再認識する場となった（図 12）。

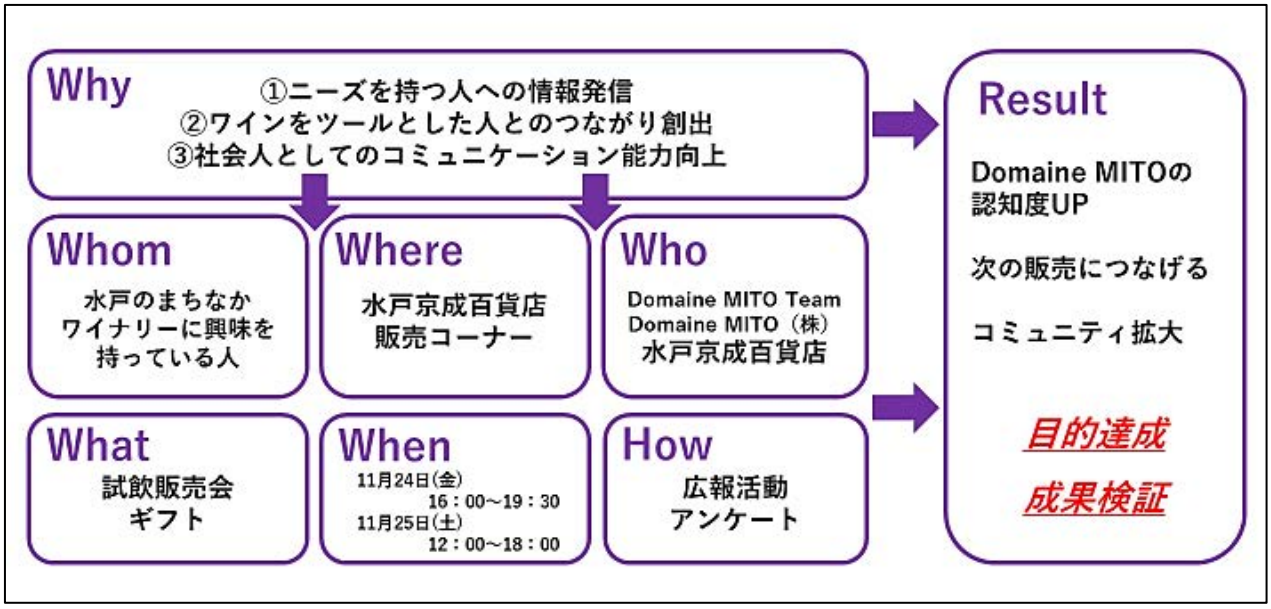


図 12：試飲販売会 企画イメージ（中野作成）

６：Domaine MITO 株式会社でのインターンシップレポート

足りていないものを実感

茨城大学２年　鶴町　直輝

１．参加の動機

Domaine MITO 株式会社様のインターンシップにプロジェクト実習という授業の中で参加しました。もともと、大学生のうちにしてみたいこと、大学生のうちだけしかできないことをできる限り多くしたいと考えていたので、参加を決めました。

私はこのインターンシップを通して、普段、もしくは一生かかわることのないような経験と、コミュニケーション能力やスピーチなどの話す技術、行動力や積極性を学ぶことができると考え、参加を決めました。あと、友達を増やしたかったからです。

２．派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO 株式会社は、2015 年に立ち上げられました。県内でブドウの栽培をして、水戸の市街地にある泉町会館でワインを醸造している地域に密着したまちなかワイナリーです。ワインを作って終わりなのではなく、ワインをツールとして、ワインを売るだけでなく、ワインづくりや、畑を観光資源とすることで、生産地や、消費地など様々な場所や人をつなぎ、交流を増やし、地域を活性化させていくことが目的です。そのために、ワインに関連したもの、地域に関連したものなど多くのイベントに参加しています。また茨城大学だけでなく、ほかの学校とも協力をなさっています。

今回のインターンシップでは、9 月 24 日にまちなかフェスティバルでの出店での売り子、アペリティフ 365 in 水戸の設営、片付けなどの手伝いをさせていただきました。他校の方々とブースに来てくださった方に商品を売るなか、アペリティフ 365 や、Domaine MITO の紹介をしました。会場設営のほうでは、ホテルの方や車の会社の方などを手伝い、外のブースを設営しました。

３．インターンシップを通して修得したこと

学んだものの中で特に自分にとって大きいのは、連絡を取ることの重要性、完全に伝えることの難しさ、前準備の大切さの三つです。今回のインターンシップを通じて多くのことを学び、新しいことを体験することができましたが、この三つは特別感じました。自分がメールを見落とすことや、こまめに連絡を取らないことで起きる失敗や、失礼があること。チームの中で、先生方との連絡の齟齬や、取らないことで動きが止まってしまうことのまずさを強く感じました。また、メールなどの作法、文章の作り方の重要性も知りました。これらを疎かにしてしまい失礼な文章、分かりづらい文章にしてしまい齟齬を多くつくってしまいました。話し合いの場でも反省の点は多かったです。逆にもっとしっかり連絡を取っていれば、うまく伝えることができたのなら、しっかりと準備をもって行動できたのなら、もっとスムーズに活動ができ、多くの経験がつめたのではないかと悔やみます。反省点をいかし、次から頑張っていこうと思います。また、設営や売り子をさせていただくなかで、お客様であるアペリティフやまちなかフェスティバルにいらっしゃった方、同じくイベントを作り上げていく方々など、イベントの中には様々な人がいて、関わり合い、作っているということを、客としてではない目線から見ることができたのは、本当に貴重な体験でした。

４．後輩へのアドバイス

何を学びたいのか、学ぶためにはどうすればいいのかなどをよく考えていくこと。考えたことを実行していく、自分から多くのことにかかわっていく積極性。意見や、考えを周りに伝えられる、良い関係を築けるコミュニケーション能力など、多くの面で人並みであることが前提として要求されていたのかなと考えます。私にはどれも足りていないので、グループの人や先生方、協力をしてくれている宮本様、周りの方々に多くのご迷惑をかけてしまいました。正直に言って何がわからないのかがわからない状態が多かったです。

ですが、このインターンシップで学んだことは多くあります。今自分に何が足りていないのかが知れたというのも、とてもありがたかったです。また教えられるのではなく、自分で学んでいくことの大事さと大変さをしることができました。辛いからこそ、得られるものもあります。友達も増えました。

ワインを通して学んだこと

茨城大学２年　三枝　奈央

１．参加の動機

私は大学生活の中で、バイト以外では社会に出て活動する機会がありませんでした。大学生のうちに社会勉強になることを体験してみたいと思っていました。私は茨城県の出身ではないのですが、大学 4 年間を水戸で過ごすことになったことを生かし、水戸という地域で行われている活動に参加したいと思っていました。プロジェクト実習の授業では、地域と関わる機会を得ることができると思い履修を決めました。Domaine MITO 株式会社様は水戸産のワインを作っているということで、ワインについての知識は全くありませんでしたが、ワインを売るだけでなく、ワインをツールとして地域の活性化を行っているという点にもとても魅力を感じました。

私は将来、地元の活性化に携わることができる職業に就きたいと思っています。しかし漠然としたもので、はっきりとした目標は持てていませんでした。この Domaine MITO 株式会社様との活動を通して何か将来に役立つ経験を得られるのではないかと思い、参加を決めました。

２．派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO 株式会社様は、水戸初のワイナリーで、ぶどうの栽培、ワインの醸造まですべてを行い、販売をすることを目指して 2015 年に作られた企業です。Domaine MITO 株式会社様のワインは水戸市内の泉町会館という場所で造られています。ワインを通してぶどうの生産地と水戸だけでなく東京などの消費地をつなぐ役割も果たしていいます。ひとくちオーナーという制度があり、1 口 1 万円から申し込むことができます。ひとくちオーナーになるとぶどうの栽培や収穫、醸造体験ができるなど貴重な体験ができる特典が付いてきます。ワインは、京成百貨店などで売られていますが、東京や茨城での販売会でも販売しています。今回はこの販売の業務を行わせていただきました。

３．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップでは、9 月 24 日に行われた水戸まちなかフェスティバルの中でワインを販売しました。前を通りかかった人に「水戸産のワインです」と伝えると、興味を持ってくださる方が多かったです。Domaine MITO 株式会社様のワインのことを知っている人も、もちろんいました。しかし水戸でワインを作られていることを知らない人も多かったので、もっと知ってもらいたいと感じました。当日は、ホテル・ザ・ウエストヒルズ・水戸で「アペリティフ 365 in 水戸」というワインのイベントが行われていました。少しの間でしたが見学させて頂きました。スケジュール表を見させていただき、このイベントには入念な準備があったということを知りました。今回のような大きなイベントは早い段階から計画を立て、きちんとスケジュールを管理して行うことが大切なのだと感じました。

自分から声をかけてワインを紹介し、売れたときはとてもうれしかったです。勇気を出して自分から積極的に売ろうとする姿勢が大切だと感じました。

ワインの販売を通して水戸の様々な年代の方々と接する機会を設けてくださった Domaine MITO 株式会社様にはとても感謝しています。本当にどうもありがとうございました。

４．後輩へのアドバイス

今回のインターンシップは、準備の段階から関わるのではなく当日の運営のお手伝いをするという形でした。準備の段階から関わることができるのが一番良いと思いましたが、準備には参加できませんでした。当日の運営もとても勉強になりましたが、やはり準備の段階から関わることができれば、さらに学べることが増えると思いました。積極的に様々なイベントに参加することが大切だと実感しました。大学生 2 年生から社会に出る体験ができるというのは、これからの大学生生活にだけでなく、社会に出た時にも役立つと思います。ぜひ社会勉強ができるこの授業を活かし、大学生をさらに充実させて欲しいです。インターンシップをすると働く大人の人達を間近で見ることができるので、バイトとは違った社会勉強ができます。

酒類業界と地方創生

茨城大学２年　水戸部　麻実

１．参加の動機

私は将来、地元に帰って公務員になろうと考えています。私の地元は過疎化が進んでいて町が寂れたものとなっているので公務員の立場から地方創生に関わりたいと思っています。

私のインターンシップ先である Domaine MITO 株式会社様は水戸産ワインを通じて泉町二丁目の活性化に取り組んでいらっしゃいます。つまり私の目指している行政の立場ではなく企業の立場から地方創生に取り組んでおられるのです。

このように地方創生は行政と企業、官民共同で行うものですので、私が将来公務員になるとしたら行政の立場からの地歩創生だけでなく企業の立場からの地方創生も学びたいと思い、Domaine MITO 様のインターンシップに参加しました。

２．派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO 様は泉町二丁目の泉町会館にあるまちなかワイナリーで水戸産ワインを生産していらっしゃる企業です。まずまちなかワイナリーに関して、ワイナリーがまちなかにあることによってニーズを捉えやすく、省スペース、スモールビジネスでできるという利点があります。次に水戸産ワインに関して、茨城は首都圏に近いのでブドウは生食用にすることが多く、加工用のブドウの生産は少ないのでワイン生産はほとんどありません。そこで生食用にできなくなったブドウの使い道としてワインにするという道を示すことができます。このまちなかにワイナリーがあるという意外性、「水戸産ワイン」は水戸出身の人にとっては「地元産ワイン」、水戸市外の人にとってはおみやげとしてお買い求めいただくという強みがあります。

午前は社会人の時間の使い方など社会人の現状、日本の酒類業界についてのレクチャーをいただきました。お昼にかけて水戸駅のジュピターコーヒー、ビックカメラ、北野エース、京成百貨店のワインコーナーでそれぞれどのような工夫を施してワインを販売しているのかを見学しました。いちばん印象に残ったのは意外とこの 4 店の中でワインの品揃えが充実しているのはビックカメラだということです。午後は 4 店がどのような工夫を施していたのかをそれぞれ発表し Domaine MITO 株式会社代表取締役宮本紘太郎様にまとめていただきました。その後は Domaine MITO 株式会社、今年の Domaine MITO の新作ワインについてのレクチャーをいただきました。

３．インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップに参加する前は Domaine MITO のプロジェクト実習に参加させていただいてるにも関わらず Domaine MITO、ワインに関する知識がほとんど皆無でした。今回のインターンシップに参加し Domaine MITO、ワインに関する知識が増えました。

また、水戸駅、京成百貨店のワインコーナーを見学し宮本様にレクチャーを受け、経営学がどのように社会で役立っているかが分かりました。それぞれのお店のコーナーでマーケティング層に合わせた価格設定(price)、商品性（product）、プレゼン（presentation）、売り場（place）の 4 つの P を活用させていることが分かりました。

４．後輩へのアドバイス

持っていくメモ帳は縦に開く形式のものはメモをできる量が少なく、ルーズリーフなどは机などを汚してしまう可能性もあるのでノートのような横に開く形式のメモを持って行ったほうが便利です。また、事前準備は大事です。レポートでどのようなことを問われているかなど、事前に何を聞いておくべきか考えておくと良いインターンシップになると思います。

社会人疑似体験とは

茨城大学２年　今川　菜津美

１．参加の動機

私は、大学生活で何か自分を成長させることがしたいというささやかな理由でこのプロジェクト実習を履修した。社会人疑似体験ということで、さまざまな社会人ルールを学ばせていただいた。受け入れ先の Domaine MITO 株式会社様は、お忙しい中、さまざまなアドバイスや経験をくださった。大学で講義を受けているだけでは、到底体験できない貴重な体験である。当初、私が考えていたよりもかなりハードな授業だが、１年後には確実に成長していることが予想される授業だと思う。

２．派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO 株式会社は、設立２年目のワイナリーで、水戸のまちなかにある泉町会館でワインの醸造を行っている。代表の宮本紘太郎様は、ワインを販売することはもちろん、ワインをツールにして、地域活性化をすることを目標としている。

９月 24 日、Domaine MITO 株式会社主催の「アペリティフ 365 in 水戸」のレセプションを屋外のブースで行った。水戸産ワインの販売に加え、水戸にフランスの風を吹かせようというコンセプトの元、フランスのパスティスというお酒やシャンパン、フランスのお菓子を販売した。

３．インターンシップを通して修得したこと

商品を販売するということは、その商品を宣伝するために理解を深めることが大切だ。ワインを買い求めてくださったお客様のほとんどが Domaine MITO を知っており、説明に苦労したということはほとんどなかった。ただ、一番印象に残っているのが、普段ビールしか飲まないというお客様に対して、フランスのお酒を販売したことである。こういうことをきっかけにして、フランスのこと、ひいては、日本ワインについての理解や認知が広がっていくといいなと思った。今回の場合はお客様への直接の発信であった。そこで気づいたことは、丁寧に発信しなければならないということだ。雑談を交えながら、笑顔で丁寧に接客するとお客様もこちらの話に耳を傾けてくれた。この発信とは、当たり前のことだが、案外難しいことだ。

また、コミュニケーション能力も身についた。宮本様はじめ、多数の協力者様と他校のインターンの方々と協力して行ったこと、お客様と対話したことでたくさんの交流をすることができた。その場面に合ったコミュニケーションの仕方を学ぶことができた。まとめると、私がこのインターンシップで学んだことは、丁寧に発信することと、場面に合ったコミュニケーションの仕方である。

４．後輩へのアドバイス

私が特に苦労したことはスケジュール管理である。自分のスケジュールはもちろんだが、チームみんなでのスケジュール調整が難航し、外部の企業様にはとてもご迷惑をおかけした。しかし、外部の企業様からのアドバイスとして、①全員で集まろうとしない。②「調整」という意味をはき違えない。つまり、「調整」ということは、この日に集まると決めたならば、予定を入れないことはもちろん、予定がある場合は既存の予定を別日に移動させるなどの工夫が必要であるとおっしゃっていた。比較的スケジュールが合わなかった私たちのチームは、夜の９時に集合するなど自分たちの生活スタイルに合わせて集合していた。

ただプロジェクト実習をする、ただインターンシップをするでは到底学びにつながらないので常に目標を持たなければならない。その目標はしばしば忘れてしまうことが多いので、行き詰まったり、周りが見えなくなったならば、原点の目標に立ち返ってみるとよいかもしれない。

「まちなかワイナリー」で学んだこと

茨城大学２年　中野　拓哉

１．参加の動機

私がプロジェクト実習Ｄへの参加を決めたのは、この授業が一年を通して目的達成に取り組む「PBL 型学習」と実際に就業体験ができる「インターンシップ」という二つの要素を併せ持っており、普段はなかなかできない貴重な経験になるというところに大きな魅力を感じたためです。コミュニケーション能力やチームワーキング能力は社会に出て働くうえで極めて重要です。しかしいろいろなことに挑戦しようと思ってはいても、実際に行動するとなると難しいものです。授業の一環としてこうした活動に取り組めるということで、また社会人の基礎力を身に付ける場として絶好の機会だと思い参加を決意しました。

２．派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO 株式会社は、一昨年の 10 月に設立された新しい会社で、茨城県産のぶどうを使用し泉町会館にて醸造を行っているまちなかのワイナリーです。ワインをツールとしたコミュニティの拡大を目的としており、各種イベントへの出店はもちろん、「ひとくちオーナー」制度や収穫・醸造体験等の企画運営も行っています。

このインターンシップでは、9 月 24（日）に行われた「水戸まちなかフェスティバル」への企画出店「アペリティフ 365 in 水戸」の運営補助と外販、接客の業務に携わりました。会場となったホテル・ザ・ウエストヒルズ・水戸のバンケットルームではフランス人の講師を招いての講演会やシャンソンの演奏などとともに、気軽にお酒や軽食を楽しむフランスの文化を伝える「アペリティフ」のイベントが催されました。また会場の外でもテントを張りブースを設け、Domaine MITO の赤ワインをはじめビールやシャンパンなどのフランスのお酒と笠間駅前にある有名なフランス菓子店「グリュイエール」の焼菓子セットを販売しました。ブースが駅から遠く少し奥まった場所に位置していたこともあったせいか、売れ行きはあまり好調ではありませんでしたが、来て頂いたお客様は Domaine MITO を知っている、興味があるという方が多く、ワインを通じた交流が生まれコミュニティが広がるその場にいることができ、とても感慨深く思いました。

３．インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップを通して、特にコミュニケーション能力とチームワーキング能力の向上を実感しました。実際に接客しワインを販売するにあたり、来て頂いたお客様に Domaine MITO の紹介やそのワインの特徴を自分の言葉で説明するということは、学生であってもプロとしての質が求められ、責任ある態度で業務に臨む必要があります。私は 9 月 3 日（日）に開催された「牛久シャトーフェスタ」のイベント出店の際も、ワインの販売と接客を経験しました。それを踏まえての「水戸まちなかフェスティバル」だったので、得た知識や情報を活かしながらお客様とのコミュニケーションを通じて Domaine MITO のワインや取り組みを知ってもらえる、あるいは興味をもってもらえる説明ができた時は、達成感も一入でした。またこのイベントには筑波大学や茨城県立農業大学校の学生もインターンシップとして参加しており、チーム内はもとより、チームを越えて協力し新たなつながりが生まれたことも大きな収穫でした。

４．後輩へのアドバイス

インターンシップを含めこの授業では、連携して頂いた Domaine MITO 株式会社の宮本様をはじめ諸先生方の力添えのおかげで活動を充実させることができました。とりわけインターンシップは、本来の業務もあり多忙にもかかわらず私達のために時間を割いてプログラムを組んで頂くということなので、目的意識を明確にして積極的に取り組むことが必要です。当日になって慌てることのないように事前の準備や学習を十分に行い、また連携先への感謝の気持ちを忘れずにインターンシップに臨むべきです。PBL にインターンシップにとボリュームたっぷりの授業ですが、大学の授業だけでは決して得ることのできない視点やノウハウを実践的に身に付けることができます。学生である今だからこそできる活動に、皆さんも是非取り組んでみませんか？

社会人になる前に学ぶべきこと

茨城大学２年　大徳　ちはる

１．参加の動機

私が今回、このインターンシップに参加させていただいた動機は、地域の方たちと交流をすることができると考えたからです。私が地域との交流を重視する理由は、将来自分がしたいと考える仕事の一つとして、地域を活性化させる仕事に携わりたいと考えているからです。派遣先である Domaine MITO 株式会社様の、ワインをツールとしてまちなかを活性化させ、地域とのコミュニティ形成をはかるという考え方に共感し、今回のインターンシップを通して、地域の方々と少しの時間でもコミュニケーションをとることができたらと考え、参加させていただきました。

２．派遣先の概要と業務内容

派遣先である Domaine MITO 株式会社様は、水戸の市街地にまちなかワイナリーをオープンし、ただワインを作り販売するのではなく、「水戸市で作られたワイン」というキーワードをもとに水戸市と近隣の農村などの絆をつなぐ参加型のコミュニティ形成をはかることを目的としています。水戸初のまちなかワイナリーが茨城の新しい魅力となるため、地域の方々との様々なコミュニティをつくるため、ワイン造りなどのワークショップを通して地域の活性化に取り組んでいます。

今回のインターンシップでは、9 月 24 日（日）に開催された、水戸まちなかフェスティバルでの「アペリティフ 365 in 水戸」という室内で行われる企画の一環として、屋外でのワイン販売のお手伝いをさせていただきました。業務内容としては、販売の場としてのテント設営、グラスワイン・フランス産のビールなどの販売を行いました。

３．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップを通して、地域を活性化させたいと考えたときに、実際に地域の方たちと交流する機会をもつことが、いかに大切かということを学びました。私は今まで水戸のイメージとして、人が少なく活気があまりないというイメージを持っていましたので、活性化させることは難しい課題なのではないかと考えていました。しかし、実際に地域の方々と交流してみて、お年寄りの方や小さなお子さんがいる方など、一人ひとりに活気があり、明るい印象をもちました。なぜ今まで私が水戸に対して、マイナスなイメージを感じていたのか考えたところ、人には活気があるが、地域間での交流をする機会が少ないため、水戸に対して全体的に活気がないというイメージを感じていたのではないかと考えました。そのため、地域の人々が交流し、かかわりあう機会を増やすことで、水戸の活性化は大いに期待できると感じました。このような考え方の変化は、実際に水戸で開催されたイベントに、販売員として参加できたことで得られたものです。今回の水戸まちなかフェスティバルでのワイン販売という業務は、私たちチームの事情により企画の段階から携わることはできませんでしたが、私にとって非常に有意義なインターンシップになりました。将来、地域を活性化させるような仕事についた際には、その地域の人々と直接交流し、そこで感じた地域の雰囲気などを大切にしていきたいと考えました。

４．後輩へのアドバイス

私は今回のインターンシップに参加させていただいて、このような経験をするのはできるだけ早い方がいいと感じました。多くの学生は 3 年生でインターンシップに参加すると思います。しかし、早いうちに企業の方と関わり社会で働くことを擬似体験することで、働くということに対して今までとは違った価値観や考え方を持つことができると考えます。したがって自分の職業選択における視野を広げることが可能になり、明確な意欲を持って就職活動に望むことができると感じます。また、インターンシップに参加するにあたって気をつけるべき点は、スケジュールの管理能力が求められるということです。プロジェクト実習のように、長期的に企業の方と関わりを持たせていただく中で、授業やアルバイトなどと重なり、自分の時間に余裕がなくなってしまう時期が必ずあると思います。そのような時期に、いかに時間を有効に使うかということや、無理のないスケジュールを組むことができるのかということが重要になってくると思います。このようなスケジュールの管理能力は、社会人になってからも役に立つ力だと思うので、ぜひ身につけてほしいと考えます。

ワインを通してつながりを作る

茨城大学２年　吉川　奈緒子

１．参加の動機

私がこのインターンシップに参加した理由は、一つは水戸まちなかフェスティバルに参加することによって、町の人たちとじかに話をして、情報を得られると思ったからだ。町を活気づかせるには何が必要か、現時点で何が足りないのか。そして参加させていただいているDomaine MITO 様のワインの知名度をじかに実感することで、自分たちがこれからしなくてはならないこと、現時点での知名度について知ることができそうだと思ったからだ。二つ目には自分自身の学びである。これだけのことをするにはどれだけの準備が必要で、どれだけの人が参加、協力してくださっているのかを知ることで自分が将来物事を動かそうと思った時の指標になると考えた。今回は販売業務だったので、お客さんの反応を見ることで接客に必要なこと、興味を持ってもらうため、目を引くために何が必要なのかを考えて行動するきっかけになると考えた。

図：新酒リリースパーティーにて

２．派遣先の概要と業務内容

今回参加させていただいた会社は Domaine MITO 株式会社様だ。代表取締役は宮本紘太郎様。現在先代から続く宮本酒店の六代目店主も務めながら経営されている。自身の中で、都市部でワインを造るという構想を持ち、すでに日本で実践しているところもあると知り、水戸でもワインを造ろうと、平成 27 年 10 月に起業された。ワインの消費だけではなく、葡萄の収穫、醸造を体験できる活動もおこなっている。町中でワインを醸造することで地域の交流もできる。水戸だけでなく、東京などほかの都市とのつながりも持っている。参加させていただいた 9 月 24 日の水戸まちなかフェスティバルでの業務は、Domaine MITO 様のワインと、何種類かのお酒、洋菓子を販売する業務と当日の会場の設営、片付けである。そして同時に開催していたアペリティフ 365in 水戸というイベントのポスター展示なども行った。

３．インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップを通して自身のためになったことは、まずはイベントの企画運営の難しさについて一番に実感した。自分たちが考えるよりも前から、物事は考えられていて、企画され、自分たちはあまりかかわることのないまま当日のみの参加となってしまった。これは修得したというよりも今後への反省となってしまった部分が多いが、社会に実際に出ると、反省ばかりではどうしようもないので、今度からはしっかり終点から見据えた計画を立てられるようにしたい。そしてスケジュールの調整、分担決め、話し合いの内容など、社会に出て必要な基本的なところの見直しが必要だと感じた。やはり自分たちは用意されているものに参加させてもらうのではなく、自分からもっと積極的に参加しようという意思を強くもって　行動しなくてはならないことを学んだ。

４．後輩へのアドバイス

私は上の項目にも書いたように、あまり積極的に行動することができず、どちらかというと受け身な行動をとってしまいがちなところがあった。自分が参加すると決めたら相手方からの連絡を待つのではなく、どん欲に、積極的に行動していってほしいと思う。活動ではないが、メールや電話などの基本的な作法をきちんと学ぶこともおすすめする。直接会って話せない相手ならばなおさらメールの文面や、電話における作法などがこちら側の第一印象をきめてしまう。文面では相手に伝わりにくいことを十分に考え、これから先どのような関係を築いていきたいか十分に考えながら文面や話すことを考えてほしいと思う。

7：年度末活動報告会のポスターパネルと発表風景

Domaine MITO チーム

メンバー：鶴町直輝・水戸部麻美・三枝奈央・中野拓哉
今川菜津美・大徳ちはる・吉川奈緒子

水戸産ワインを通して
～まちなかワイナリーでおともだちをつくろう～

水戸産ワインをツールとして、地域内でのコミュニティの拡大を目的として、まちなかワイナリーを通して地域の方々と、コミュニケーションをとり、新たな茨城の魅力として水戸産のワインをアピールしようと考えた。

イントロダクション

Domaine MITO 株式会社様にご指導いただきながら、多くの方々に水戸産ワインを知ってもらう活動を行った。Domaine MITO 株式会社様のワインは決して安くはないため、「水戸産」という他のワインにはない付加価値をアピールした。またこの付加価値を生かす販売方法として、ご自宅用に加え、ギフトにも使えるという点をアピールした。

材料・方法

茨苑祭では、地域の方々や、学生に水戸産ワインの存在や活動紹介をした。また、京成百貨店様のご支援を頂き、試飲販売会を行なった。そこで、アンケートを取りワインについての一般の方々の意見を知ることにした。

結果1 (茨苑祭)

Domaine MITO 株式会社様の紹介、および私たちのこれまでの活動について、写真などを用いたパネル展示を行った。茨城大学の学生や一般の方々に水戸産ワインの存在を知ってもらうことができ、やはり水戸でワインを造っているということを知らない方が多かったことから、水戸産ワインと地域の方々を繋ぐための良いきっかけとなったと考えられる。

結果2 (試飲販売会)

Domaine MITO 株式会社様が昨年と今年に造った３種類のワインの試飲、および販売を行いながら、地域の方々との交流の中で、水戸産ワインということをアピールポイントとして紹介することができた。立ち寄って頂いた方々にアンケート調査を行い、Domaine MITO 株式会社様のワインについての感想や認知度を調査した（右グラフ）。

まとめ

今回の活動で、私たち学生が直接、地域の方々に「水戸産ワイン」という茨城の新たな魅力を紹介できた。その結果、地域の方々と様々なコミュニケーションをとることができ、新たなコミュニティの拡大に繋がった。

図 13：ポスターパネル(1/16 縮小)

図 14：活動報告会での発表風景

８：個人レポート

プロジェクト実習での学び
貴重な体験の数々

茨城大学２年　鶴町　直輝

図１：リリースパーティーの様子

私にとって、この授業をとったのは大きな決心によるものであった。

２年生に進級して、大学に入学してからの１年を振り返るとサークルに入り活動や、授業を受けつつも、ふと、無為に時間を消費してしまっているのではないかと、疑問が沸き上がってしまう。

学生という身分が最後であり、社会に出るということが、より具体的になっているなか、はたして高校時代などのような、今までと同じような学生生活をすごしていていいのか、大学生としてすべきことや、大学生だからこそできること、社会に出る前にしておかなくてはいけないことがあるのではないかと考えていたときに、この授業を知った。

２年次が始まるときにこの「プロジェクト実習」という授業を聞いた時は、自主性が重んじられている、社会とかかわる、グループワークなどを行う実習型の授業形式などの点から、自分にとっては遠い意識が高いタイプの授業だなと感じていた。だからこそ、自分にとって今までの学生生活を変えるために実にあっているとも、これこそが必要であるとも、感じた。

私はこのプロジェクト実習によって、人と接することへの苦手意識を改善し状況に応じて人に良く対応できるよう、目的を持って、能動的に動ける人間に変わることを目標とした。正直この時点では、「自分を変えよう」、「地域の活性化について学び、活動を行おう」と考え、授業をとったのだから、すでに目的を持って行動をおこなうという目標が達成されているのではと考えた。ましてやリーダーという役割に着けたので、かなり達成したのではと考えてしまっていた。

もちろんそんなはずはなく、活動が始まり、その後このように活動報告を書いている間にも、自分の至らなさに辟易し続けている。

プロジェクト実習というものは、私にとって体験したことのない形式の授業であり、活動もまた、未知の領域であった。何をすればいいのかわからない、何がわからないのかすらわからないなどの多くの疑問や、課題、問題にあたりながらの活動となってしまった。なので、チームのメンバーには多大なる迷惑や負担をかけてきた。なぜ私のようなものがリーダーになってしまったのだろう、せめてほかの役割であればもう少しうまくできるのではないか、いったいどれほどほかのチームとの差があるのかなど悩むときもあったが、チームのメンバー、先生方、提案者の宮本様をはじめとする多くの人に支えられて何とか活動していくことができた。一つ一つプロジェクトが進むごとに大きな達成感、成長を感じた。

悩むことや、つらいと感じることもあったが、この授業だからこそ多くの貴重な体験ができたと切実に思う。

今まで漠然としか認識していなかった、地域とは、交流とは、コミュニケーション、コミュニティ、活性化とはどのようなことなのかを問い、しっかりととらえようとすることができた。このことによって、きっと以前とは異なった視点を持つことができただろう。

社会というものの一端に触れることができた。多くのイベントに参加することで客としてではない、設営、片付け、接客などの普通ならできない体験、さらに来場者のかた、運営の方などたくさんの人とかかわることができた。特に図のリリースパーティーの体験は強く印象に残った。あのようなきらびやかな場に少しでも携われたことが本当にうれしい。

今回チームという小さいながらも組織のリーダーを体験することができたことで、難しさを知った。個人での活動とは大きく異なるもので、計画、協力、共有、団体行動、リーダーシップなどいまだにほとんど理解することはできていないとは思うが、今回一端でも触れることができたのは大きいだろう。

このように、プロジェクト実習では多くのことを学ぶことができた。大学生のうちにしかできない体験であり、重要なことを学ぶ体験であった。自分には何が足りていないのかを知ることができ、何を磨くべきかを知ることができた。これらをよく考え残りの学生生活をすごし、社会に出れたらと思う。

多くの反省から学んだこと

茨城大学２年　三枝　奈央

このプロジェクト実習を始めるにあたり、三つの目標を立てた。一つ目は、自分の意思をはっきり相手に伝えられるようになること、プレゼンなどもしっかり自分の言葉で堂々と話せるようになること。二つ目は、目的を設定し確実に行動できるようになること。三つ目は、課題の本質を捉え、適切な解決に導けるようになること。

一つ目の目標については、プロジェクト実習を始めた段階では、人に自分の思っていることを伝えることが得意ではなかった。この活動では自主性を持つことが大切であるため、自分の意見を相手に伝えなければならない。自分たちの活動を報告する時やチーム内、課題提案者であるDomaine MITO株式会社の宮本様との話し合いの場で鍛えられたと感じている。最終報告会の発表では、事前に全体でのリハーサルやチーム内での練習も行った。これまで相手に伝えるために、どのようにしたらよいのかなどを真剣に考える機会はなかった。最終報告会の発表についてもたくさんの試行錯誤を重ねたが、結果は自分たちの活動や思いをうまく伝えられなかった。改めて多くの伝えたいことの中から、相手にわかりやすく伝えることの難しさを知った。話し合いの場では、自分の思っていることを積極的に発言しなければ意味がない。ここで身についた力は、これからの学生生活だけでなく社会人になってからも活かせるはずである。

二つ目の目標については、この活動を振り返るにあたり多くの反省がある。目的を明確にしておかなければ、個人だけでなく、チームとしても活動がうまく進んでいかないことを学んだ。例えば、水戸まちなかフェスティバルやワインのリリースパーティーに参加した際には、チームとしての当初の目標であった、ワインをツールに多くの人と関わることということを意識して参加することが重要であった。しかしチームで活動を進めていく上で、当初の目標としていたことから遠ざかってしまうことや、本来の目的を忘れかけてしまうこともあった。目的意識を持たずに活動しても、自分たちから積極的にアイディアを出していくのは難しい。積極的に自分の意見を言わなければ、行動も伴わない。チームに積極性がないと言われることもあった。それはチームのメンバー全員が目的を明確に持つことを心掛けることで、積極性が生まれる。

三つ目の目標については、プロジェクト実習を通して成長できた。チームの最初の計画では、補助金の制度を利用し、その補助金をもとにイベントを企画しようとしていた。しかしその補助金の選考から落選してしまった。その際、すぐにお金がなくてもできるイベントや、別の資金を得る手段を考えるべきであった。しかし、私たちはまず何をするべきなのかしっかり考えることを怠ってしまった。何か問題が発生したときには、まず何をするべきか、何が問題となっているのかなどをしっかり考えることが大切であると学んだ。

プロジェクト実習では、計画が思うように進まないことや、学内だけの活動ではないことの難しさもたくさん経験することができた。また、水戸まちなかフェスティバル、茨苑祭、リリースパーティーなどのイベントでは、学生だけでなく地域の方々とも接する機会があった。学生のうちに水戸という地域で何か活動がしたい、と考えていたため、このような機会があったことはとても嬉しく、貴重な経験となった。

プロジェクト実習は一週間や数か月では完結しない、長期での活動であったためスケジュール管理がとても重要であった。スケジュールを立て、計画に沿って進めていくことがあまり得意ではなかったため、スケジュール管理には苦戦した。スケジュールを逆算し、やらなければならないことを整理して、しっかりとこなす大変さを痛感した。私たちが、プロジェクト実習でうまくいかなかった点は、多くがスケジュール管理の甘さが関係しているといえる。このスケジュール管理は社会に出たときにはもちろん、学生である今から、計画を立て確実に実行していく力をさらに身に付けていきたい。また、一つ目の目標にも上げていた人に伝える力は、発表や話し合いの場だけでなく、日常の中でも問題が生じた時、人にどうすればよいのか助言をもらうことにも生きてくるはずだ。

約一年間このプロジェクト実習をやってきたが、途中でこんなに大変な授業だと思わなかったと感じた。私たちのチームは全員が今年からのメンバーなので、０から何をするのか考える必要があった。普段の学生生活の中での授業のように先生から問題を出され答えを導くこととは違った、別の能力が必要であると感じた。多くの問題が発生したことや、メンバー間でのコミニケション不足で活動が思うように進まない時期もあった。決して楽しいことばかりのプロジェクト実習ではなかったが、普段の学生生活では経験することのできない貴重な経験を得ることができた。そしてプロジェクト実習で学んだことを今後にも活かしていきたい。

プロジェクト実習を通じて学んだこと
地方活性化の方法・社会人でも活用できる企画立案法

茨城大学２年　水戸部　麻実

今年度 Domaine MITO 株式会社様でプロジェクト実習を一年間続けさせていただいてたくさんのことを学びました。この１年間は私にとって辛くもありましたが多くのことを学びました。

まず一つ目に学んだことは Domaine MITO 株式会社様による地方商店街の活性化の方法です。

Domaine MITO 株式会社様は泉町二丁目商店街にある泉町会館の横にワイナリーを構えていて、泉町二丁目商店街振興組合に属している。泉町二丁目商店街は全盛期と比べるとシャッターの閉まっているお店も増え、シャッター商店街のイメージがある。その泉町二丁目商店街を活性化させるために泉町会館ではファーマーズマーケット@水戸、まちゼミ、まちカル、水戸バー・バル・バールなど様々なワークショップで体験を売りとしている。Domaine MITO 株式会社様でもワークショップとしてひとくちオーナーの方を対象として収穫醸造体験を行っている。収穫醸造体験は消費地、農村地帯、醸造所の３点をつなぐ役割を果たしている。Domaine MITO 株式会社様では常陸太田市という農村地帯、泉町二丁目商店街にあるまちなかワイナリーという醸造所で収穫醸造体験が行われている。

以上のように商店街活性化を行っていることを学んだ。この学んだことを通じて私の地元の商店街に関しても興味が広がり調べることができた。この学んだことで大事だと思うことは「体験を売りとすること」である。いままでの私にはその発想がなかったのでこれから社会人になったときに活用したいと思う。また、収穫醸造体験の企画を考える方法が参考になった。

企画書を考えるときは①現状分析、②目的、③解決策の３段階で企画を練ることを学んだ。今回の収穫醸造体験を例として挙げる。現状分析として常陸太田市のブドウ産業は昭和 30 年からの継続であり新規性がない。目的として新しいい息吹を起こすことが挙げられる。解決法としてくるのが収穫醸造体験である。

この企画書を書く時に３段階を考えることは日常のいろんな場面で活用することができた。この方法を活用することで効果的な企画を考えることができるようになった。

次に２つ目に学んだことはスケジュール管理、時間を守ることの大切さです。スケジュール管理をするうえではその企画の実行日から引き算してスケジュールを管理することが大事ということだ。企画書を考え、企画実行までにやらなければならないことをリストアップしてどの段階でどれをやらなければならないかを引き算して考えるということを学んだ。このことも日常の中で活用することができる大切なことも学ばせていただいた。

しかし活用できないこともあり時間を守れずチームメンバーなど様々な人に迷惑をかけてしまうことが多々あった。この経験をつうじて学んだことは自分でできる範囲やキャパシティを自分で理解しできる範囲の仕事を引き受けて仕事はやるということだ。自分のキャパシティ以上の仕事を引き受けできなかったら周囲のひとに迷惑をかけてしまうことになったら台無しになってしまうからできる範囲で仕事は引き受けることが大事だと思った。

最後に３つ目に学んだことはチーム内での情報共有の大切さである。チーム全体が集まることは難しいためチーム内の一部が集まりミーティングをすることは必須になる。そのとき集まることのできなかったチームメンバーにも情報共有ができるようにすることが大事だと実感した。またチーム全体で集まることができた場合にも後から情報の確認ができるように情報のメモや記録などを作り情報共有ができるようにすることが重要だと実感した。情報共有ができないと円滑な話し合い、活動ができなくなるのはもちろん、チーム内の一体感もなくなることが分かった。一体感がなくなるとモチベーションも減るためチームでの活動への参加率も低くなり負の循環が生まれることが分かった。

このように日常につながる大事なことや地方活性化の現状をプロジェクト実習から学ぶことができた。自分のチーム内だけでなく他のチームから学ぶことも多くあった。他にもこのプロジェクト実習の経験を通じて他にも様々なことを学んだ。例えばメールのマナーなども実践を通じて学ぶことができた。これらの経験をこれからの大学生活、就職活動、大学を卒業してからの社会人生活に活用できるようにしたい。

この一年の学び
次に生かせる経験

茨城大学２年　今川　菜津美

図：水戸まちなかﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙにて

このプロジェクト実習を通じてたくさんのことを学んだ。それを学ぶ過程というものは、決して良いことばかりではなかった。時には、厳しいことを言われ、チーム全体で落ち込みながらも懸命に前に進む努力をしてきた。私がお世話になったDomaine MITO株式会社様は『水戸』で栽培されたブドウを『水戸』にある醸造所で造り、販売を行っている。そして、この水戸産ワインを通じて地域活性化を目指している企業様だ。ワイナリーというものは普通はブドウ畑に近い郊外などにあるものだが、Domaine MITO株式会社様のワイナリーは「まちなか」にある。この「まちなかワイナリー」という斬新な言葉に惹かれ、一年間お世話になることを決めた。

チームの活動が始まり、最も苦労したことが「地域活性化」である。言葉自体からもわかる通り、非常に広範囲な意味を持つ。また、何が基準で地域が活性化されたと言えるのかと問われ、何も答えることができなかった。結局、チーム全体で一年間この問いに対する答えが見つからないまま活動が終了してしまった。つまり、チームの根本を支える目的が明確化されていなかったため、すべての活動の目的が不明確で自分たちはなんのために企画をして、実行しているのだろうという気持ちが全員の頭の片隅にあっただろう。活動の初めは全員生き生きとしていたし、積極的かつ活発に意見などを出せていたが、中盤を越えたころからちょっとたるんできた気がした。もちろん、自分も例外ではない。では、どうするべきだったのだろう？提案者様の宮本様を含め、Domaine MITOteamの反省会を行った時に、「チームとしての目的が抽象的過ぎてイメージすることが困難だった。続けて、チーム像としての統一もできていなかった」という反省点があがった。そこから、目的を明文化した方がイメージしやすく、チーム像としての統一も可能ではないかという解決策がでてきた。このことから、目的はチームの士気に大きく関係するもので、全員がわかる必要があると学んだ。また、地域活性化のような大きな目標とともに、直近でできる小さな目標の設定も重要だと感じた。

次に、チーム内での活動について振り返ってみると、初めこそはみんなの出席率が高かったものの、中盤を越える時点からはメンバーの半分しか来ない状況であった。都合がつかない場合の欠席のため仕方ないにしろマナーのない欠席の仕方などがたいへん目立ち、それを私は寛大な心で許すことはできなかった。私とチームメンバーの関係はいわゆるビジネスパートナーのようなもので仲の良い友だちではない。仲の良い友だちでさえ無断欠席は許されるものではない。Domaine MITOteamは人数も少なくだれか一人が欠けると他の人にかなりの負担がかかってしまうのだが、実際にかなりの負担を背負った人もいれば、人任せにして楽に一年間を終えた人もいるだろう。チーム活動において最も大切なことは、相手に礼を尽くすことだと感じた。一年という時間を一緒に過ごすため、時には衝突したり、気に食わないと思うこともあるだろう。しかし、衝突したままというわけにもいかない。いくら気に食わないからといって暴言を吐いたり、わざと連絡を伝えない・連絡をしないなどという行為はしてはいけないし、するはずもないだろう。社会に出るとなおさらやりたくない仕事や人間関係が複雑になるため今回のチーム活動ではその末端を体験できたと感じる。その中で私が学んだことは、「親しき仲にも礼儀あり」ということだ。というのも、無断欠席や直前の連絡になってしまう、またその後の対処(謝罪や釈明)が甘かったりなど納得のいかない部分が多々あった。それを自分の中で消化することにも苦労した。チームで協力しているからといって、礼儀を欠いてはいけない。感謝の気持ちをもって接し、悪いと思ったら謝る、当たり前のことだが、これを基本にしたい。そうは言っても、集合時などには必ず「お疲れ様です」と声をかけあっていたことはとても心地よかったように感じている。

最後に、今後の就職活動などにおいて再びインターンシップをする機会があるだろう。そして、チームでの活動をすることももちろんある。この一年で学んだことを活かせるチャンスということだ。多くの人がこのようなインターンシップを経験していない中で経験した私たちは有利になり、それだけ輝ける存在になれる可能性もある。このプロジェクト実習はそれだけ大きな価値があったと感じている。この一年間は、正直に言うと、とてもつらく、たいへんな思いをした。私たちの活動が未熟なためこれといった達成感を感じることはできなかったが、それでも学ぶこと、吸収することは多かったように感じている。問題は、この経験を次に続けることだと思っている。これからどうするかが今の私の課題である。

活動を通しての学び
社会人基礎力の育成・強化

茨城大学２年　中野　拓哉

私は、プロジェクト実習の履修にあたり、特にコミュニケーション力、働きかけ力、状況把握力という３つの社会人基礎力の育成・強化に重点を置き、１年間様々な活動に取り組んできました。

まずコミュニケーション力について、活動開始当初は、人前で話すことはあまり苦手ではなくロジカルな説明やプレゼンはできるものの、オーディエンスとコミュニケーションしながらのプレゼンに苦手意識を持ち質問や批判には思わず身構えてしまうという状態でした。

チームとしての目的が「社会に出た時に通用するコミュニケーション能力を鍛える」だったということもあり、コミュニケーション力の強化にはとりわけ意識的に取り組むことができました。目上の方へのメールや電話でのやり取りをはじめ、普段なかなか関わる機会のない方々と会話する機会も多く、人と人のつながりにおける礼儀やマナー、敬語等のスキルをレベルアップさせられたという実感から、その目的は概ね達成されたと言えます。各種イベントでの接客では、ワインについてだけでなく Domaine MITO とチームの活動も説明し、来て頂いた方に興味を持ってもらえる場面が多かったです。一方で、Domaine MITO の一員（プロ）として信用問題に関わることであるという意識を持ちつつも、自分の知識が浅かったり間違っていたりということが多かったため、今後改善すべき点として反省しています。プレゼンテーションの集中講義では、基本的な礼法に始まりロジカルでわかりやすい説明やプレゼン方法を知ることができました。活動報告会を集大成として印象的な表現技法や伝える力が強化されたものの、本番の発表は振るわず不本意な結果となってしまいました。

次に働きかけ力について、活動開始当初は、他のメンバーへの気配りは十分でき、また立場や年齢の近い人に対してはあまり親しくなくても課題を分かりやすく説明し協力を促すことができるものの、初対面の人への説明は緊張であまり上手くできた経験がないという状態でした。

チームの中で目立ってリーダーシップをとるということは少なかったですが、企画やイベントのアイデアを出し実際の活動へとつなげ、まとめ役として先頭に立って取り組むことができました。特に、11 月 24・25 日（金・土）に行った「試飲販売会」は自身が発起人となって企画し、チーム内はもちろん、他チームや Domaine MITO、水戸京成百貨店等を巻き込み、立場や年齢の垣根を超えた協働が少なからず実現できたことは大きな成果です。同時に、企画イメージから関係企業への提案、企画実施までをチームが主体となって行動することで、目的や目標を再認識する場になりました。目的や意義を明確化しながら企画イメージを具体的に落とし込むテクニックを身に付けられ、また企画の提案から実施、成果検証までを経験し、行動力に自信が持てるようになりました。しかし、連絡が疎かになったり言葉足らずになったり、また自分だけで解決しようとしたりして企画の進行が遅れ気味になることが多々あり、連携先に迷惑が掛かってしまったことは反省すべき点です。

最後に状況把握力について、活動開始当初は、基本マイペースであるものの相手の気持ちを考えながら行動でき、また飲食店でのアルバイトをしているため臨機応変な対応は得意な方だと思っており、幅広い視野や多角的な捉え方を意識しながら考えられるという状態でした。

チームの中では書記担当として議事録や活動記録、資料の作成等に取り組み、他にも企画提案や日程調整などチーム内で上手く分担できました。また、イベントへの参加や「試飲販売会」の企画、実施にも積極的に取り組み、チームへ貢献することができました。特に「試飲販売会」の企画、実施では、何でも自分でやってしまうという自分の頑固な性格が良くも悪くも影響したと感じます。プロジェクトやチーム全体を見渡しつつ優先順位を明確にし、今何をすべきかについて見極めるには、適切なスケジュール管理が大切であることを学びました。目先のことを一所懸命やるのも大事だと分かっていましたが、幅広い視野で先を見据えてチームや企画にどう影響するのかまで考慮しながら行動することの大切さは、目的や目標を常に意識することで実感できました。また、自分の長所短所をよく分析しチームワークに活かすということや、次につながる反省を心掛けることの重要性に気付けたことは、これから社会人として生きていく上で非常に役に立つことだと感じます。

以上のように、私はプロジェクト実習の諸活動を通して、特にコミュニケーション力、働きかけ力、状況把握力という３つの社会人基礎力を育成・強化することができました。ここでの学びを糧に、今後も自分の強みと弱みをしっかり分析し、更なる社会人基礎力の向上を目指します。

「学ぶ」ということ

茨城大学２年　大徳　ちはる

私はDomaine MITOチームの一員として１年間活動したことにより、通常の授業では得られない「学び」を得ることができたと感じる。この授業を受けるにあたっての私の個人の目標として、常に主体性を持って活動すること、および擬似社会を経験し、社会人に必要な能力を理解することで、少しでも「社会で働く」ことに慣れるということであった。この目標を意識し活動していくことで、プロジェクト実習での「学び」を得られると考えた。

目標の一つ目である、常に主体性を持って活動するということに関して、私たちのチームは当初予定していたプロジェクトが様々な要因により頓挫したことで、その後の活動に主体性を持って取り組むことができなかった。これは、チームとしての主体性が欠如していたことも原因であるが、個人としての主体性が足りていなかったことが最大の要因であると考える。今までの学習において、主体的に考えるということを経験してこなかったために、提案された課題に対してどのような活動を行えばその目的を達成することができるのか、何のためにこの活動を行うのかというような、物事の本質などを考えることが非常に難しいと感じた。そのために、何をしたらいいのか分からず、プロジェクトの進行が停滞してしまったのだと考える。プロジェクトに行き詰まった時に、課題提案者の方や先生などに相談していたらよかったと今なら思うが、当時は主体性という言葉を意識しすぎていたために、「自分たちで答えを出さなくてはいけない」ということに固執していたように感じる。そのため、答えがわからずに時間だけが過ぎてしまっていた。この経験から、「主体性を持って行動する」ということは、「自分一人、もしくはチームだけで答えを見出し、行動する」ということではなく、「何かに疑問を持ったり、どうしたらいいか分からなくなったりした時に、その疑問などをそのままにせず分かる人に相談した上で、自分で考える」ということなのだと強く感じた。私は、常に主体性を持って活動するという目標を達成することはできなかったが、主体性の本質を理解できたと感じるため、単に目標を達成したという実績よりも、私の将来にとって得られたものは大きかったのではないかと考えた。

目標の二つ目である、擬似社会を経験し、社会人に必要な能力を理解することで、少しでも「社会で働く」ことに慣れるという目標においては、概ね達成できたと感じる。なぜなら、プロジェクトを進めるにあたって、課題提案者をはじめとした、様々な分野の社会で働く大人の方と接する機会があったからである。この機会は、社会人としてのメールのマナーや、スケジュールの設定方法、プロジェクトを共同で進めるために必要なことなど、様々な知識を学ぶことへとつながった。このような知識は、普段の学校生活で教えられることはほとんどないため、通常では社会人になってから、経験により学ぶことが多い。しかし、今回のプロジェクト実習を通して、そのような知識を身につけるまではいかなくとも、知ることができただけで、社会人になった時の苦労を和らげることになったのではないかと、私は考える。また、社会で働くことの厳しさも同時に学ぶことができたと感じる。私たちはまだ学生であり、社会で働く大人の方に比べて、知らないことがたくさんあると痛感させられた。そのため、プロジェクトを進める中で、学生にそこまで求める必要があるのか、と感じることもあったが、その経験が自分の将来の役に立つということも実感することができた。

この授業は、単独で行うものではなくチーム単位で行うものであるため、プロジェクトをチームで進めることの難しさを多々感じた。何かを決定するだけでも、チームの総意として進める必要があり、価値観が合わない部分があっても、折衷案などで解決していく必要がある。私は実際、一人だったら責任も全て自分が負わなくてはいけないが、全てを独断で決定することができるため、プロジェクトの進行もスムーズにいくのではないか、と考えたこともあった。しかし社会に出たら、ほとんどの場合で誰かと一緒に仕事を進めなくてはならず、円滑な人間関係を築いていくことは、仕事をしていく上で重要なことである。自分と全く違う考え方の人や、協調性に欠けた人などとも一緒に働いていかなくてはいけないのである。そのような状況になった時、相手を突き放して一人で仕事を進めることはできないため、いかに相手との折り合いをつけながら最善の仕事をするか、ということが求められる。今回のチーム単位で進めるプロジェクト実習は、そのための練習につながったと感じた。また、チームで活動するということは、それぞれの負担を平等にする必要があると私は考える。チーム内の雰囲気の悪化や、やる気を低下させないためにも、負担を均等にすることは必要だが、それは簡単なことではない。チームメンバー全体を見渡せる力や、客観的な視点が必要である。また、時には負担の少ないメンバーに対して、協力を促すことも必要になってくる。このようなことにも注意することが、より良いチームとして活動していくためには必要なことであると学んだ。

以上のように、この授業において私は様々な学びを得ることができた。この経験を活かし、社会に出たときの力へと変えていきたいと考える。

実行することの難しさ
ワインを通して学んだこと

茨城大学　2年　吉川　奈緒子

図：水戸まちなかフェスティバル

私はこのDomaine MITO株式会社様と一年間関わらせていただいて、たくさんのことを学んだ。授業などでは学ぶことのできない、社会人として大切なことを中心に吸収できた。

今回の経験としては、ワインというツールを使って、どのように企画やイベント、計画をするかということであったが、その企画運営があまりうまくいかなかったのが反省である。私たちはまず、ワインを使って何ができるかとたくさん意見を出して、その中から、ワインの飲み講座を開くということに決定した。しかし結果的にこの計画は頓挫してしまった。そもそもこの計画は、助成金を取れることを前提に話が進んでおり、それができなかった時の代案を何も考えていなかった。ここで学んだことは、計画実行をするということは、いくつかのパターンを考えて、様々なアクシデントに対応できるようにしておいてこそ、だということである。そして、助成金の審査落ちをした時も、事実を知っていたにも関わらず、みんなで集まって次の手を考えたり別の企画の案をすぐ出したりすることができなかった。メンバーに頼りがちなところがあり、自分から提案したりすることがうまくできなかった。この経験を生かして、今後企画運営をするときはいくつかの案を考え、迅速に行動することが重要だと反省をした。

インターンでの経験としては、今回はみとまちなかフェスティバルにおいて、ワインとお菓子の販売を行った。私は体調がすぐれず、少し早めに上がらせていただいたのだが、いろいろな学び、経験を得られた。私たちは企画部分ではなく、当日のみの参加であったが、準備をしていくにあたって、やはりDomaine MITO様がどのように構想して企画をしたのかの部分に触れることができて今後の参考になった、人脈がとても広く、実行力も大切であるが、人間的な部分でも必要になってくる部分もあることを学んだ。実際の販売では、たくさんの方がワインを買いに来てくださった。お話をしていく中で、地元の人たちの間でも、まちなかにワイナリーがあるということを知らない方も多くいらっしゃって、話がひろがるきっかけとなるとともに、認知度をもっと上げていきたいという意欲にもつながった。地元の方々の意見を聞けたことはとてもいい経験になった。

最後に試飲販売会について、これは京成百貨店で行わせていただいた企画である。できなかった飲み方講座に変わる別の企画として提案させていただいた。この試飲販売会の企画段階では自分たちの絞り込みが足りず、たくさんのご指摘を受けた結果となった。まず企画を行うにあたって、企画をしなければという思いが強く、どうしてその企画が行いたいのか、最終的に企画を行ってどのような未来を想像しているのか、考えが足りずに企画をしてしまっていた。企画の意味というものをもう一度考えられるきっかけとなった。ここでは、ワインの認知度などを調査するため、アンケートを行った。反省としては、京成百貨店という立地もあり、たくさんの人たちに興味をもっていただき、試飲をしてもらうことができた。試飲をしてもらいながら、地元のお話を聞いたり、ワインの説明をしたりしてコミュニケーションをとることができた。アンケートの結果としては、認知度としては半分に届かなかったものの、興味をほとんどの方が示してくださった。京成百貨店様とのかかわりを通して、社会人としてのマナーやルールなどを学ぶいい機会になったと感じた。

個人的なまとめとして、やはり企画実行力が課題であると感じた。企画はうっすらと頭の中にできていても、いざそれを文字に起こしてプレゼンして、実行にこぎつける力が今後課題になってくると感じた。それに加えて、日程調整などの面でも課題が残った。チームの全員の日程があまり合わず、顔を合わせられる機会が少なくなってしまった。さらにDomaine様がイベントへの参加を提案してくださった際も、日程の調整がつかず、参加できない事態が多くあった。一か月のみのスパンではなく、三か月ほどの長い見通しをもって計画をして、調整をすることが大切であると感じた。二人や三人で進めてしまってチーム全体で進めていくという意識が少し足りない部分があったので、議事録の共有などを通して、全員で進めるという意識があるとなおよい企画ができたと感じた。

９：おわりに

三枝　奈央・大徳　ちはる

プロジェクトの目的は当初予定していた「飲み方講座」が開催できなかったため、成功の基準であった「醸造体験の人数を増やす」ことができなかった。そのため成功の基準を、DomaineMITO に興味を持ったか、コミュニティが広がったか、などアンケート結果をもとに判断することにした。アンケート結果は、興味を持った方が 9 割を超えた。

チームの目的については活動を通して、普段の学生生活では体験できない大変さや対処法、マナーなどを学ぶことができた。自分たちから行動を起こすことの大切さを学び、多くの人と関わることで社会人としてのコミュニケーション能力も向上したと感じる。

残された課題として、まず、私たちのチームの反省点として 2 つの観点から振り返りを行う。まず一つ目に、全体の活動を通して、チームとしての自発性が足りなかった、ということが挙げられる。私たちは、課題提案者の方にイベントや企画の情報を提供していただき、参加することが多く、チームとして何かを提案し活動を進める、ということができなかった。次に、チーム内でプロジェクトに対する目的意識の明確化ができていなかったことが挙げられる。「コミュニティ」という言葉の定義づけや、何のためにそのプロジェクトを行うのか、という根本的な意識がチーム内で共有できていなかった。以上の 2 つの反省点を踏まえチームの残された課題として、自発性を意識して活動に取り組むこと、および目的意識を定期的に見直し、時には改善しながら進めていくことである。

プロジェクト実習を通し、自発性や主体性を意識して活動を行うということを念頭に置いていたはずであったが、活動をしていくうちにその意識が薄れていってしまい、主体性を持ってプロジェクトを進めることの難しさを経験した。また私たちのチームは、当初予定していた結果とは異なる結果となったが、この経験により、企画から達成までのスケジュールを逆算した考え方が必要であることを学んだ。チームとしての活動は今期で終了であるが、この経験を活かし、社会に出た時の糧にしていきたいと考える。

末筆になりますが、課題提案者である DomaineMITO 株式会社社長の宮本紘太郎様、株式会社水戸京成百貨店の勝村謙司様をはじめ、多くの方々にお世話になりました。未熟な私たちを最後までご指導していただき、ありがとうございました。

６：チームみなと☆ミライ

プロジェクト実習Ｄ

リーダー	：秋葉　翔太	茨城大学人文社会科学部人文コミュニケーション学科	２年
副リーダー	：清水　悠花	茨城キリスト教大学文学部現代英語学科	３年
書記	：川田　綾香	茨城大学人文社会科学部社会科学科	２年
書記	：斉藤　祐羽	茨城キリスト教大学文学部現代英語学科	３年
会計	：庄司　彩乃	同　　上	３年

主担当教員：鈴木　　敦　茨城大学人文学部　教授
副担当教員：神田　大吾　茨城大学人文学部准教授

2017 年度
茨城大学人文社会科学部　プロジェクト実習D
「チームみなと☆ミライ」活動報告

１：はじめに

秋葉　翔太

我々のチーム、チームみなと☆ミライは「みなとみらいプロジェクト実行委員会」様のご提案を受けて結成された。しかしチーム員全員、ご提案者様ともにプロジェクト実習の履修が初めてということもあり、すべてが手探り状態での活動となった。

今回のご提案は「おさかな市場の観光客を商店街に呼び込み回遊性をもたらす」というものである。近隣にあるおさかな市場は休日になると観光客で賑わう。しかし商店街に観光客が来ることはあまりない。商店街が、那珂湊駅やひたちなか IC からおさかな市場へ行く道のりを横切っていることも原因の一つであろう。このような現状を危惧したご提案であり、我々も当初はそれに共感した。そこで現状把握のために 2017 年 8 月 20 日（日）に二回目の那珂湊訪問を行った（一回目は大雨のため車中からの見学）。夏休み期間の日曜日ということもあり、やはりおさかな市場は観光客で賑わっていたが、肝心の商店街はというと人とすれ違うことがあまりなかった。商店街の見学で一つ気付いたことがあった。それは「休日は商店街のお店が休みで、来ても何もない」ということだ。つまり商店街のターゲットは地元の人である、ということであった。おさかな市場のターゲットは地元の人と観光客でありどちらにもウケるコンテンツがあるが、商店街には地元の人をターゲットとしたコンテンツしかない。このような「ターゲットの違い」が今回のお題には含まれており、このままでは不可能ということが分かった。そこで我々はお題からおさかな市場を外し、商店街の活性化のみで考えることとした。しかし、今年度の活動のみで商店街全体の活性化は無理だと判断し、今年度の活動は那珂湊の認知度を上げるための「広報」と、ほしいもをアピールし実際に来てもらうため「商品開発」に絞って活動をスタートした。

このプロジェクトにおいて我々は、既存の資産である「ほしいも」を今までになかった珍しい違った形で発信し那珂湊商店街の一体感を演出するとともに人々の交流を活発にすることと、那珂湊商店街へ足を運ぶきっかけをつくる、という 2 つの目標をたてた。また、それを通して那珂湊地区特有の問題発見や課題解決方法や PR 活動を通しての地域活性化の工夫、多様な社会や人々と交流することによるそれらに対する理解や将来へのヒントを会得することをチームとしての目標に掲げた。

２：活動の目標・概要

川田　綾香

⑴活動の目的・目標

活動開始当初は「那珂湊商店街の活性化」とざっくりしたものだった。しかし、那珂湊地区の視察を終え、様々な問題点が挙げられる中で、まずは那珂湊地区の認知度向上を目的として活動することに決定した。チームの達成目標は以下の３つである。

①那珂湊へ足を運ぶきっかけづくりとなる活動を行うこと

②既存の資産ほしいもを利用した商品の開発

③広報としてメディア（新聞やテレビ等）露出、茨苑賞（茨城大学学園祭模擬店人気投票上位３位に贈られる賞）の獲得

⑵活動の概要

①那珂湊地区視察

日時：2017 年 6 月 21 日（1 回目）、8 月 20 日（2 回目）

目的：那珂湊地区の現状把握のため

内容：一回目は激しい雨のため車内から那珂湊地区の視察を行った。二回目は徒歩で主に那珂湊商店街、おさかな市場、ほしいも専門店大丸屋等の視察を行った。

結果：那珂湊商店街はおさかな市場が賑わう土日を定休日にしているお店が多く、ほとんどの店でシャッターが下りていた。観光客で賑わうおさかな市場が近いにも関わらず、商店街の認知度が低い等の問題が分かった。

②開発：ほしいもパウダー、ほしいもぷりん、ほしいも焼きそば

目的：ほしいもを扱いやすい粉末にすることでパンや麺類として幅広く活用できるのではないかと考えたため。また、ほしいもの粉末を那珂湊商店街の飲食店とコラボレーションすることで一体感が生まれ、那珂湊でしか味わえない商品を開発することで那珂湊へ足を運ぶきっかけづくりになるのではないかと考えたため。しかし、一年間という限られた期間で商店街とのコラボレーション実現までは達成できなかった。

内容：(i)寒天がご専門の伊那食品様からコラボレーションのお話をいただき、「ほしいもぷりん」を開発することに決定。

(ii)那珂湊焼きそばからヒントを得て、「ほしいも焼きそば」をイベント限定で開発した。麺にほしいもパウダーを練りこむ予定だったが、日程的に実現できず焼きそばの具材としてほしいもを使用した。

③販売（広報と同時進行）

・夜市 Do Night マーケット（毎月第三土曜日に那珂湊商店街付近で行われるイベント）

日時：10 月 21 日

目的：新商品「ほしいもぷりん」を地元の方々に知ってもらう。味などの感想をいただく

内容：「ほしいもぷりん」初販売、フリーペーパーの配布

結果：ほしいもぷりん 50 個が約 40 分で完売した。ほしいもぷりんの容器は蓋がしてあるため、持ち帰る方が多く、味などの感想があまり聞けなかった。

・シオン祭（茨城キリスト教大学 学園祭）

日時：11 月 2 日、3 日

目的：ほしいもを使用した商品の販売を通して、学生や来場者の方に那珂湊地区を PR するため。

内容：(i)「ほしいも焼きそば」の販売

(ii)フリーペーパーの配布

結果：2 日で 432 食完売

・茨苑祭（茨城大学 学園祭）

日時：11 月 11 日、12 日

目的：学生や来場者の方に那珂湊地区を PR するため。

内容：(i)「ほしいもぷりん」の販売を通して那珂湊地区の PR

(ii) フリーペーパーの配布

(iii) 人文社会科学部棟 23 番教室にて活動紹介パネルを設置

（Domaine MITO チーム、さとみ・あいチームと合同）

結果：1 日目の投票で茨苑賞 2 位獲得。販売やフリーペーパーの配布を通して那珂湊の紹介ができたと感じる。2 日間で 751 個完売。

④広報

目的：那珂湊地区やほしいもを使用した新商品を PR するため

内容：(i) フリーペーパーの作成→夜市や両大学学園祭で配布。

(ii) ポスターの作成（常磐大学様のご協力のもと作成。各大学内に掲示）

(iii) チームの Twitter、Instagram アカウント開設

結果：フリーペーパーを夜市や学園祭で配布することで、SNS だけでは伝えきれない幅広い年齢層の方々に宣伝できたのではないかと考える。また、茨苑賞を獲得したことで「ほしいもぷりん」が話題となり、普段はどこで購入することが可能か聞かれるようになり、那珂湊へ足を運ぶきっかけづくりになったのではないかと考える。

３：議事録・活動記録

川田　綾香

No.	日時（10分単位）	場所	活動内容	参加者	実働時間
1	2017年　5月17日 19:00　－　21:00	ひたちなか商工会議所会議室	自己紹介、各大学構想提案発表、チーム名・役割決め、プロジェクト内容絞り込み	秋葉、清水、庄司、斉藤、川田	2:00
2	2017年　5月19日 10:00　－　14:30	茨城大学 C406	プロジェクト内容の絞り込み、年間スケジュール構想、予算について	秋葉、清水、庄司、川田	4:30
3	2017年　5月22日 19:00　－　20:30	茨城大学	商品開発について、市からの補助金について	秋葉	1:30
4	2017年　5月24日 18:30　－　21:00	ひたちなか商工会議所	商品開発、商品の販売、PR活動について今後の方向性を検討	秋葉、庄司、斉藤、川田	2:30
5	2017年　5月31日 10:20　－　12:30	茨城大学 C406	プロジェクト内容・達成目標の再確認、補助金申請	秋葉、庄司、斉藤、川田	2:10
6	2017年　6月2日 13:00　－　15:30	ガスト茨城大学前店	夏休みの活動について、ほしいもパウダーの活用法について、達成目標の確認	秋葉、清水、庄司、斉藤	2:30
7	2017年　6月21日 13:30　－　15:30	那珂湊商店街、おさかな市場、大丸屋	那珂湊商店街、おさかな市場、大丸屋視察	秋葉、清水、庄司、斉藤、川田	2:00
8	2017年　6月30日 10:20　－　12:30	茨城大学 C406	広報のターゲット層確認、インターンシップについて、八朔祭りについて	秋葉、清水、庄司、斉藤、川田	2:10
9	2017年　7月21日 11:00　－　12:30	茨城大学 C406	伊那食品様とのコラボ決定、フリーペーパー・ポスターの内容について	秋葉、清水、庄司、斉藤、川田	1:30
10	2017年　7月28日 8:40　－　10:10	茨城大学 C406	茨苑祭や夜市の出店内容について、フリーペーパーの内容について	秋葉、清水、庄司、斉藤、川田	1:30
11	2017年　8月20日 12:00　－　16:30	那珂湊地区 商店街、おさかな市場	那珂湊地区視察、商店街視察、フリーペーパーの内容について	秋葉、清水、庄司、川田	4:30
12	2017年　9月29日 13:00　－　14:30	常磐大学	ほしいもぷりんパッケージ依頼、ポスターデザイン依頼	秋葉、川田	1:30
13	2017年　10月1日 17:00　－　18:00	茨城キリスト教大学 屋外テラス	フリーペーパー内容変更、今後のスケジュール見直し	清水、庄司、斉藤、川田	1:00
14	2017年　10月10日 19:00　－　22:00	ひたちなか市子育て支援・多世代交流施設	学園祭にて出店するほしいも焼きそばの試作	秋葉、清水、庄司、斉藤	3:00
15	2017年　10月21日 16:00　－　21:00	那珂湊商店街	夜市Do Nightにてほしいもプリンの販売	秋葉、斉藤、川田	5:00
16	2017年　11月2日 8:00　－　18:00	茨城キリスト教大学	茨城キリスト教大学学園祭にてほしいも焼きそばの販売	清水、庄司、斉藤	10:00
17	2017年　11月3日 8:00　－　18:00	茨城キリスト教大学	茨城キリスト教大学学園祭にてほしいも焼きそばの販売	秋葉、清水、庄司、斉藤、川田	10:00
18	2017年　11月11日 9:00　－　17:00	茨城大学	茨苑祭にてほしいもプリンの販売	秋葉、庄司、斉藤、川田	8:00
19	2017年　11月12日 9:00　－　18:00	茨城大学	茨苑祭にてほしいもプリンの販売	秋葉、庄司、斉藤、川田	9:00
20	2017年　11月14日 13:00　－　15:00	大丸屋	茨城県庁職員の方による取材	秋葉、庄司、斉藤、川田	2:00
21	2017年　11月22日 10:00　－　14:00	スターバックスコーヒー水戸エクセル店	活動報告会準備	秋葉、清水、庄司、斉藤、川田	4:00
22	2017年　12月22日 15:30　－　17:30	大丸屋	茨城新聞取材	秋葉、川田	2:00
23	2018年　2月9日 19:30　－　22:00	那珂湊駅周辺　Bar Restaurant Andra	みなとみらいプロジェクト実行委員会の会議に参加	秋葉、清水、庄司、斉藤、川田	2:30
				合計	84:50

４：会計報告

庄司　彩乃

⑴大学予算

品　　名	単価	数量	合計
のりパネ	1,000	2	2,000
インクカートリッジLC213－BK	1,215	1	1,215
ルーズリーフコクヨキャンパスルーズリーフ	260	1	260
レバーファイル	497	1	497
リングノート	432	1	432
フリーペーパー印刷代	5,421	1	5,421
茨苑祭参加負担金	4,000	1	4,000
検便代（両大学文化祭）	1,969	1	1,969
		総計	15,794

⑵外部予算

みなとみらいプロジェクト実行委員会様が、ひたちなか市「平成29年度新製品等開発事業費補助金」（ https://www.city.hitachinaka.lg.jp/kigyo/6/1/5042.html ）を獲得され、同委員会メンバーのマルダイフレッシュフーズ株式会社運営統括責任者　大曾根一毅様の管理の下に新商品開発に活用されました。チームみなと☆ミライは、その活動に参画することで間接的にご支援を戴いたことになります。ありがとうございました。

５：活動トピック

斉藤　祐羽

(1)開発

チームみなと☆ミライでは、通年にわたり、ほしいもをパウダーにした「ほしいもパウダー」を使った商品の開発を進めた。話し合いにより、ほしいもの甘さを十分に生かすことができる「ほしいもぷりん（図 1)」と、既存の那珂湊焼きそば（ http://www.ibarakiguide.jp/seasons/gourmet2012/act1.html ）からヒントを得て「ほしいも焼きそば（図 2)」の二つの開発を行った。

図 1：ほしいもぷりん

図 2：ほしいも焼きそば

(2) 販売活動

①Do Night（那珂湊商店街夜市）

〈日時〉2017 年 10 月 21 日　16 時～21 時

〈場所〉ひたちなか市那珂湊地区那珂湊商店街

〈活動内容〉

夜市の一角をお借りし「ほしいもぷりん」（1 個 200 円）の販売を行った。50 個用意していたぷりんが約 40 分間で完売した。同時に那珂湊の地元の方にチームの活動を知ってもらう機会になった。

②シオン祭（茨城キリスト教大学学園祭）

〈日時〉2017 年 11 月 2 日、3 日　両日 8 時～18 時

〈場所〉茨城キリスト教大学キャンパス

〈活動内容〉

焼きそばの中に細かくしたほしいもを入れた「ほしいも焼きそば」（1 個 200 円）の販売を行った。担当を受け付け・接客、下ごしらえ・調理の二つに分け活動した。2 日間で 432 食販売した（図 3)。

図 3：シオン祭

③茨苑祭（茨城大学茨苑祭）（図 4）

〈日時〉2017 年 11 月 11 日 9 時～17 時、12 日 9 時～18 時

〈場所〉茨城大学水戸キャンパス

〈活動内容〉

Do Night にて販売した「ほしいもぷりん」（1 個 200 円）の販売を行った。2 日間で 751 個販売した。茨苑祭では「ほしいもぷりん」にお客様のお好みで生クリームのトッピングをできるようにした。11 日に投票・表彰が行われた茨苑賞では、第 2 位を獲得した。茨苑賞の獲得により、12 日はより多くのお客様に手に取ってもらうことができた。

図 4：茨苑祭

(3)フリーペーパーの作成と配布

広報活動の一環として、ほしいもを軸に那珂湊の魅力を紹介するフリーペーパー（図 5）を作成し、みなとみらいプロジェクト実行委員会様を通じて配布して戴いた。ご支援に感謝申し上げます。

図 5：フリーペーパー

⑷取材

①茨城県知事公室広報広聴課による取材

〈日時〉2017 年 11 月 14 日 13 時～15 時

〈場所〉ひたちなか市釈迦町　大丸屋

〈活動内容〉

茨城県知事公室広報広聴課広報戦略室・小澤早由里様よりマルダイフレッシュフーズ株式会社の取り組みに対する取材があり、同社運営統括責任者・大曾根一毅様よりお声掛けを戴いて、チームみなと☆ミライも同席させて戴くことができた（図 6・7）。

取材者側として、茨城県広報 PR 事務局の株式会社アサツー　ディ・ケイ佐藤えり子様・石田薫様も同席された。チームみなと☆ミライは、チームの活動内容ならびにプロジェクト実習に関するご質問にお答えした。特に、「ほしいもぷりん」と「ほしいも焼きそば」の開発経緯について、ご質問を戴いた。

当初は、上記広報戦略室の活動を取材中の NHK 水戸放送局も一緒に取材にみえるとのことであったが、残念ながら別件の取材が生じたとのことで叶わなかった。しかし、小澤様のご配慮により 11 月 22 日の NHK 水戸放送局「いば 6」の中で言及して戴くことができた。

貴重な機会をご提供下さった大曾根様ならびに小澤様に篤く御礼申し上げます。

図 6：取材前の名刺交換

図 7：取材風景

②茨城新聞社による取材

〈日時〉2017 年 12 月 22 日 15 時半～17 時半

〈場所〉ひたちなか市釈迦町　大丸屋

〈活動内容〉

マルダイフレッシュフーズ株式会社運営統括責任者・大曾根一毅様のご手配により、茨城新聞によるプロジェクト実習及びチームみなと☆ミライの活動を取材して戴くことができた。大曾根様のご配慮に篤く御礼申し上げます。取材風景を図 8 に、掲載記事を図 9 に示す。

図 8：取材風景

2018年(平成30年)1月10日　水曜日

ほしいもぷりん発売

ひたちなか「大丸屋」

活性化へ大学生と開発

ひたちなか市釈迦町の干し芋専門店「大丸屋」は大学生がプロデュースした新商品「ほしいもぷりん」を発売した。茨城大による授業の一環で、商品目当てに人が訪れることで地域活性化になれば、と学生たちは期待している。

ほしいもぷりんは同店の干し芋を加工したパウダーを使い、底の方には干し芋片が入っている。学生がインターンシップ(就労体験)に参加して企画する同大の授業で連携した。学生向けのプレゼンテーションで同店は、同市那珂湊地区の活性化につながる干し芋関連の商品開発を挙げた。これに興味を持った茨城、茨城キリスト教、常磐の3大学の学生計6人が参加した。

「チームみなと☆ミライ」と銘打ったプロジェクトは昨年4月にスタートし、学生たちの発案を受けて同店が製造を担当した。当初は綿菓子やクレープなど約20に上るアイデアが出た。料理専門家から干し芋のパウダーを勧められ、最終的にプリンでまとまった。

また、アレルギー対策のため、卵は一切使用していない。同店を運営するマルダイフレッシュフーズの大曽根一毅専務(42)は「卵アレルギーでプリンを食べたことがない子どもにも味わってほしかった」と話す。

商品開発に合わせて学生はポスターとチラシも作成し、プリンや同地区をアピールしている。

ともに茨城大2年、秋葉翔太さん(19)は「プリン目的で多くの人が那珂湊に買いに来てほしい」、川田綾香さん(20)は「生まれも育ちもひたちなか市。小さい頃から食べている干し芋の新商品でひたちなかを宣伝したい」と意気込む。

大曽根専務は「ほしいもぷりんが活性化の起爆剤になればいい」と期待する。

ほしいもぷりんは1個200円(税込み)、同店で販売中。

(斉藤明成)

大学生がプロデュースした「ほしいもぷりん」

ほしいもぷりん

図9：2018年1月10日付　茨城新聞　17面　（掲載許可取得済）

６：インターンシップレポート

みなとみらいプロジェクト実行委員会（以下、「委員会」）様からは、今年度初めてプロジェクト課題のご提案を戴いた。課題内容に照らして「プロジェクト実習B」でのご提案も考えられたが、委員会様のご希望によりインターンシップを組み込んだ「同・D」でのご提案に落ち着いた。

しかしながら、「インターンシップ」というものについて担当教員からのご説明が不十分であったために、委員会メンバーの皆様のご尽力にも関わらず、最後まで理念型としてのインターンシップに合致する活動の場をご提供戴くことはできなかった。インターンシップ以外では、活動の場も各種ご支援も手厚くご提供戴いていただけに、誠に申し訳ないことであった。今後新規にご提案下さる方々に対しては、これまでにも増して詳細かつ丁寧なご説明を行っていかねばならないと猛省している。

最大の被害者は、世に言う「インターンシップ」への参加を前提に、当課題を選択した学生たちである。担当教員としては、正に「看板に偽りのある」授業を提供してしまった訳であり、ただただお詫びすることしかできない。本報告書にチームみなと☆みらいのインターンシップレポートが収載されていないのはこのような事情によるものであり、学生には一切落ち度がないことを明記した上で、重ねてお詫び申し上げる次第である。

7：年度末活動報告会のポスターパネルと発表風景

チームみなと☆ミライ

メンバー：秋葉翔太、清水悠花、庄司彩乃、
川田綾香、斉藤祐羽

私たちは、ひたちなか市那珂湊で活動する「みなとみらいプロジェクト実行委員会」と共に那珂湊地区を活性化させるために結成された学生チームです。茨城大学生２名、茨城キリスト教大学生３名の計５名で活動しています。

目的

那珂湊地域の現状把握のため実施した那珂湊訪問では、那珂湊商店街は閉まっている店が多い、認知度が低いという二つの問題点が分かりました。そこで、学生ならではのフレッシュなアイデアを用いて、一人でも多くの方に那珂湊及び那珂湊商店街を知ってもらい、足を運ぶきっかけ作りをしていくことになりました。

活動内容

①広報

広報活動として、私たちは那珂湊を題材としたフリーペーパー「みなとさんぽ」、常磐大学とのコラボレーションが実現したポスター、また Twitter や Instagram などの SNS を作成し、那珂湊や私たちの活動を夜市や学園祭等で PR しました。

□開発

那珂湊の認知度を上げるにあたり、那珂湊の特産物である干し芋に着目しました。様々なアイデアが出てくる中で、干し芋をパウダーにすることで応用が効き、いろいろな料理に生かせるのではないかと考えました。そこで、私たちはそのほしいもパウダーを活用した、ほしいも焼きそばとほしいもプリンを開発することにしました。

ほしいも焼きそばは、那珂湊のご当地グルメの「那珂湊焼きそば」からヒントを得ました。またほしいもプリンは、身近なスイーツであり尚且つほしいもの甘さを十分に感じられるものであると考えたため、開発にいたりました。

□夜市・学園祭への出店

10 月には那珂湊で毎月行われている夜市にてプリンの試作、販売を実施しました。11 月の両大学の学園祭では、ほしいも焼きそばとほしいもプリンをそれぞれ販売しました。

まとめ

一年間という限られた期間では、那珂湊の活性化や知名度の大幅な向上には至りませんでした。しかし、プリンや焼きそばの開発と販売、広報活動を通し、文化祭に足を運んでくださった方々や学生に那珂湊の魅力を発信し、「足を運ぶきっかけ作り」ができたと思います。また、私たちも今回の活動で、新たな那珂湊の魅力を発見し、地域活性をする難しさを学んだ一方、学生や若者の可能性を実感しました。

図 10：ポスターパネル(1/16 縮小)

図 11：活動報告会での発表風景

８：個人レポート

意識の変革
チームリーダーとして

茨城大学２年　秋葉　翔太

図：茨城新聞社の取材

私にとってこのプロジェクト実習の履修は、自分の意識を根底から変えるようなものになった。私は大学入学当初から「何かしたい」と考えていたが、機会がなく１年生のころは全く動けずにいた。そんな時、２年生の初めのガイダンスでこの授業に出会った。先ほどの「何か」は漠然とはしていたものの、地域に貢献出来たらなと考えていたので履修を即決した。自分は複数のご提案の中から、PBL 型インターンシップにわけられた那珂湊の商店街を活性化させるプロジェクトに参加した。理由としては、インターンシップに参加できることと地域活性化に興味があったことがあげられる。しかしインターンシップへの期待が果たされないことになったのは一つの心残りとなった。

自分はチームリーダーとしてこのプロジェクト実習を進めてきた。その中ではたくさんのことを学ぶことができたが、以下の三つは特に今後に活かしていきたいと考える。

一つ目がチームメンバーをまとめることの難しさである。自分はこれまで、他人をまとめた経験があまりないので、他人をまとめる役職として足らない部分があったと考えている。実際、仕事の割り振りや内容について詰めていく途中にメンバーとギクシャクしてしまう場面が多々あった。そこには各人の主張する意見の食い違いや、効率を重視した割り振りができなかったことが原因としてあったのではないかと考える。我々のチームは茨大と茨キリの生徒が参加しており物理的な距離があったが、精神的な距離もあったように思える。話し合いは基本 LINE でのみ行ったため解釈の違いが生まれ、結果的に求めていたものと違う結果になったということが発生した。このことから、このようなことがないようにきちんと対話をすることが重要だということを学ぶことができた。

二つ目が情報共有の重要性である。先ほども述べたように我々のチームは二大学の学生で構成されており、顔を合わせて話し合う機会がとても少なかった。そのため情報交換は基本的に LINE で行われたが、それにより完璧な情報共有がなされなかった。情報共有が完全でなかったためにチーム内での情報量に差が生まれてしまいその結果、思っていた結果にならなかったりイベント当日になっても理解していなかったり、ということになってしまった。このことは自分たちの仕事に影響を及ぼしただけでなく、協力してくれている人たちに迷惑をかけてしまうことにつながった。また、先生方への情報共有も不完全だったため独断で進めてしまったこともあった。このように我々のチームは情報共有の甘さが最後まで残った。情報共有に関してはこれから個人の問題となってくるのでこの経験を活かして仕事をしたい。

三つ目が様々なトラブルに対応したことである。このチームは初年度ということもあり、すべてがゼロからのスタートであった。何を目標に活動していくのか、その目標を達成するにはどのようなコンテンツや行動が必要でどのような計画で進めていくのか、をチームで考えることから始まった。そうして考えることができたが、机上と現地では大きなギャップがあった。それは商店街とおさかな市場のターゲットが異なること、そもそものお題を達成できるだけのコンテンツが商店街に揃っていないことである。そのため元々のお題とは違う目標を急遽設定し直した。目標を設定し直したことにより、コンテンツを考えることができプロジェクトを進めることができ茨苑賞の獲得やメディア露出など、当初立てた目標を達成することができた。この経験から、柔軟な姿勢で物事に取り組むことの重要性を学ぶことができた。以上三つを特に今後の生活に活かしていきたいと考える。

この一年は今までの学生生活の中で、一番活動量が多くまた変動が多くみられた一年であったように感じる。高校の時はもちろん、大学一年生の時もなにもせずにただ毎日を過ごしてきた。しかしこのプロジェクトを履修し、様々なことを経験したり学んだりすることができた。自分たちのプロジェクトの内容に関わること以外にも、名刺交換など基本的な社会のルールも学ぶことができた。ここで学んだことを学生生活だけではなく、社会に出ても心に留めて仕事をしていけたらいいなと感じる。

コミュニケーションの重要性

茨城キリスト教大学３年　清水　悠花

図：シオン祭にて

私は、プロジェクト実習で那珂湊という地域の魅力を発見し、人々に発信することを目的としていた。しかし、那珂湊の商店街はお店が少なく、那珂湊にあるお店たちは日常の生活の地元の人たちのお店ばかりであることもあり、私は那珂湊地域の魅力を発見することはできなかった。その失敗のなかで、私はコミュニケーションの大切さを学ぶことが出来た。ここ最近、企業や学校といった様々な場所で「コミュニケーション」という言葉を頻繁に聞く。就職において求められるのも「コミュニケーション能力のある人材」という企業は数多くある。これまでコミュニケーションが重要だということを私は、「良い人間関係を保つため」だとしか考えてこなかったが、企業の求めるコミュニケーションの重要性は他にもあることが分かった。それは、情報を共有し、チームメンバーが同じ目標や意識をもって活動に取り込むことである。私は、プロジェクト実習の活動を通してコミュニケーションの重要性を学んだ。

私のグループでは、コミュニケーション不足が原因で起きた失敗が多かった。次に集まるまでに準備しておくものや、活動の詳細をグループ内で共有することを怠り、それぞれの認識が曖昧なまま集まることがあった。そのため、グループ内で考えの方向性のずれが多々あった。

主に原因は、確認不足と一部のメンバーの発言不足だと考える。確認不足の点では、リーダーが情報を一番に把握していたことが多く、それを安心材料に「リーダーが分かっているならば大丈夫だろう」というリーダー以外のメンバーの甘えが少しはあったと思う。さらに、グループ内で発言をするメンバーがいつもきまって同じだったことから、一部のメンバーが発言することを遠慮し、活動に対する考えの方向性のずれが生まれてしまうことがあったと思う。

このチームの反省点は、メンバー間でのコミュニケーション不足である。直接会って話し合いをする機会が少なかったのはもちろん、分からないことをそのまま放って置くことでチームの一部しか情報を共有できていないこともあった。プロジェクト実習は自ら動くことで学びを得ることのできる授業なので、与えられた情報のなかで疑問や不安があれば細かなことでも確認するべきだった。この反省から情報や考えの共有は、活動の方向性や役割分担に大きく影響すると学んだ。異なる大学の学生が共に活動することで難しく感じることもあったが、活動できる範囲を広げることが出来た。複数の大学の学生がいることで、両大学の文化祭で出店しフリーペーパーを配布することで、那珂湊を広範囲にPRすることが出来たと思う。さらに、チームの活動をメディアの取り上げてもらうことによって「学生が活動することによる影響力」を実感した。

茨城キリスト教大学の学園祭で出店した際には、準備の連絡を茨城キリスト教大学の学生３人ですることが多く、直接会う機会も多いため情報の共有をこまめにでき、作業がスムーズであった。学園祭当日２日目は、茨城大学の学生２人が加わり、足りないものや必要な作業をお互いに確認することで役割分担をそれぞれがみんな把握し、自分の担当の仕事に取組み、出店はいい結果になった。

今後、コミュニケーション不足が原因となる失敗を防ぐためには、頻繁にコミュニケーションを取り、情報を共有することが重要だと思う。与えられた情報のなかに疑問や不安なことがあれば、細かなことでも面倒がらずに確認すること、そしてなにかアイデアや意見があればとりあえず発言してみること、そうすることでグループ内では情報を漏れなく共有できるだろう。

このように企業の求めるコミュニケーションとは、ただ良い人間関係を築くためだけではなく、共に仕事をしていくにあたってアイデア・情報の共有や確認をする業務的な基本も含まれているのだと分かった。社会人になって基礎となる「報告」「相談」「連絡」の重要性をこの授業を通じて痛いほど理解できた。

私の成長

茨城大学２年　川田　綾香

図：最終報告会でのプレゼンテーション

私がプロジェクト実習を履修しようと思ったきっかけは、高校三年生の時に当時の社会科の教員から「プロジェクト実習活動報告会」をご紹介いただき参加したところ、先輩方の行動力やプレゼンテーション能力等に魅力を感じ、興味を持ったからである。座学だけでは知ることが出来ない地域の現状や課題の解決に携わり、自らも成長させたいと考え、その時すでに履修を決意していた。無事、大学に入学し、履修できる二年生になってから、生まれ育ったひたちなか市で地域の課題に向き合いながら社会人基礎力を身に着けたいと考え、迷わずひたちなか市のプロジェクトに飛び込んだ。このプロジェクト実習は、想像以上に辛く、忙しく、毎日プロジェクトのことを考えていたと言っても過言ではないと思うほどであった。

しかし、それ以上に学ぶことが多くあり、私はプロジェクト実習を通して、主に三つの社会人基礎力を身に着けたと実感している。一つ目は、生活を送る上で必要な人間関係を円滑にするための力「人間関係構築力」である。プロジェクト実習を履修する前は、人と話すとき緊張してうまく話せない、公の場で発言するとき、顔が赤くなるくらい緊張してしまっていたため、これらは特に改善したいと思っていた点だった。しかし、日頃のミーティングや中間・最終報告会によるプレゼンテーションにおいて人前で発言する機会が多くなり、一年前の自分と比べてあまり緊張しなくなったと感じている。また、提案者の方や先生方とのメールのやり取りも増え、マナーについてその都度ご指摘をいただくため、基本的なメールマナーを学ぶことができた。さらに、12 月 9 日に行われた最終報告会では、トップバッターの司会を務めるなど、公の場で発言すると顔を真っ赤にしていた以前までの私からは想像できない成長に周囲も驚いている。最終報告会には、高校時代の先生方をお招きし、自分の少しでも成長した姿お見せすることができ、嬉しく思った。一年間の活動を通じて多くの人と出会い、社会人の方の言葉遣いや立ち居振る舞いを見習い、実際の日常生活から実行するよう心がけたため、一年前の自分から確実にレベルアップ出来ていると感じる。

二つ目は、課題の本質を捉え、適切な解決に導く力「課題解決能力」である。地域にはその地域特有の課題や解決方法があり、一年間という限られた期間でどこまで達成することが可能なのか、実習内容の絞り込みに私達のチームは大変苦労した。当初は、「那珂湊商店街の活性化」が課題だったが、現地調査から商店街は開いているお店が少ない、おさかな市場付近にもかかわらず認知度が低い等の問題が分かり、メンバーで話し合いを重ね、那珂湊地区に足を運ぶきっかけとなる活動をすることを目標にした。課題に対して以前までは理想ばかり述べていたが、この実習を通して、物事解決のための勘所を捉え、実現可能性を検討し、具体的な取り組みを整える力が身についたと感じる。一年間という限られた活動期間では、那珂湊商店街の活性化という課題の解決まで導くことはできなかったが、課題解決能力は社会人に必要な能力の一つであると考えるため、これからも様々なことに挑戦していきたいと思う。

三つ目は、意見の違いや立場の違いを理解する力「柔軟性」である。私達のチームは二大学混合チームで全員揃う機会も少なく、情報交換や決定事項の話し合いにおいて非常に苦労した。しかし、今までのミーティングにおいて、どんなことにおいても相手の意見を否定せず尊重できるよう意識することで一人だけの意見より良いものが生まれる喜びを学んだ。特にフリーペーパーやポスター作成の際には、デザインや盛り込む内容の意見がそれぞれ異なり、一つにまとめることに苦労したが、形になって完成したときはとても大きな達成感を味わうことができた。チームで一つのことを成し遂げる喜びも学び、チームワークの重要さを改めて実感した。このようにチーム内でも意見が分かれることが多々あり、考えの違う人を受け入れることは簡単なことではないが、自分の意見に共感してもらえた時は嬉しいので、自分も相手の意見を尊重するよう心掛けができたと思う。これからも様々な意見の対立場面に出くわすと思うが、相手の意見、立場になって考え、「違う」ことを前提に相手を理解することを忘れずに行動していきたいと考える。

最後に、感謝してもしきれないほど、プロジェクト実習を履修したからこそできた経験が本当にたくさんあった。一度は解散も考えられていたチームだったが、続けて良かったと思っている。茨城新聞への商品掲載の際に取材を受けた経験や、多くの人との出会いはこれからの糧にしていきたいと考える。そして、このような貴重な経験を支援してくださった多くの方々に感謝申し上げるとともに、自らをもっと成長させて将来は茨城県の発展に貢献したいと考える。

自分を知る
様々な活動を経て

茨城キリスト教大学３年　斉藤　祐羽

図：茨苑祭にて

私はこの一年間の様々な活動を通して、普段の学校の教室内だけでは学ぶことができない数多くのことを学ぶことができたと思う。それと同時に、大学生としてだけでなく、今後社会に出ていく一人の社会人として、自分自身の成長を遂げることができた。

この授業及び私たちの活動は、あくまでも学生が中心となり、自ら計画を立て、行動に移していくものである。しかし、町や地域を巻き込んだ活動をしていく上で、提案者様を含め多くの大人の方々の協力は必要不可欠である。活動をしていく中で、大学生が活動しているという点での世間の注目度の高さや影響力を感じる一方で、大学生の力不足や大学生であるため学校に守られているという安心感から来る甘えなどを感じるようになった。もちろん、提案者様や学校のバックアップがあるからこそ、私たちがのびのびと活動できることは事実であり、感謝してもしきれない。しかし、社会に出て働く上では、年齢や立場に関わらず一人ひとりに責任があり、そのような甘えは通用しない。そう思うようになり、自分の言動により一層の責任を持ち、チームでの活動を円滑により良く進めていくために、リーダーや書記といった分担された役割の他に、チームの中でどのような役割を果たせば良いのかを考えた。

自分がチーム内でどのような役割をしているのか、またどのような役割を果たせば良いか知るためには、まずチームのメンバーがどのような人かどのような役割をしているかを知るべきだと考えた。話し合いや様々な活動を進めていくうちに、それぞれのメンバーが担う役割が分かってきたのと同時に、自分がチーム内でどんな役割を果たしているかが分かった。私は、特に話し合いなどの場において、一歩外側に立ち客観的に物事を捉え分析をし、チームを導くような役割をしていると知ることができた。それと同時に、自分の短所も見えてきた。自分の長所や短所、更にはチームのメンバーの理解を深めることで、チーム内において自分が何をすれば良いかが具体的に分かるようになり、話し合いや活動をよりスムーズに行うことができるようになったと思う。

またこの授業の大きな目的の一つでもある、社会を知るという面においては、学生である今のうちから社会や会社で仕事をする上での基本的なマナーを実践的に学ぶことができた。例えば、メールでのやり取り、名刺交換のマナーや作法、プレゼンテーションや会議において使用する書類の作成についてなど様々である。名刺交換は、学生ではほとんど行う機会がない一方で、就職し社会で多くの方々と仕事をしていく上では欠かせないことである。そのため今回の活動の中で、実際に自分で行う機会を作っていただき、具体的に詳しく学ぶことができた。また書類に関しては、12 月に行われた活動報告会にて使用するハンドアウト及びパワーポイントの作成の際に詳しく学んだ。授業の中で、プレゼンテーションをするために、ハンドアウトやパワーポイントを作成することはあった。しかし、会議や大きな発表の場において相手に伝わりやすくするために、言葉やスライドの見え方など細部にまで気を付けて作成することはできていないことが多く、報告会の準備を進めていくうちにポイントを学ぶことができた。また活動を進めていく中で、どうしても連絡や情報の伝達が上手くいかないことが多々あった。プロジェクト実習のチームの活動や仕事となると、個人の問題だけでなく、チームまた会社など団体での問題に発展し、活動及び仕事に支障が出てしまう。また多くの人に迷惑をかけてしまうことになる。そうしないためにも、メールでのやり取りを含め、報連相の大切さに改めて気付いた。

更に、自分について知ることができたことで、実際に私が社会に出た時に、どのような役割を果たすことができるのか、また何が得意で何が不得意なのかを学ぶことができた。これは、今後就職活動を進めていく中で知っておくべきことであり、就職活動を始めるときにまず誰もがすることが自己分析である。一般的には自分で考えて整理していくことが多いが、考えるだけではなく、今回の活動を通してより具体的でリアルな自己分析をしていくことができた。

教室の中で、受動的に見聞きするだけでは分からないことや自分の新たな一面などを、実際にアクティブに行動することで学ぶことができた。教室から一歩踏み出したことが、私自身の成長に繋がっていると思う。

プロジェクト実習から得たもの

茨城キリスト教大学３年　庄司　彩乃

図：茨苑賞受賞！

就職活動を１年後に控えた３年生の４月、私は大学生活で頑張ったことが、あまりにも少ないことに危機感を感じていた。そんな時にふと目に留まったのが、茨城大学の生徒さんたちと合同で何か活動をするプロジェクト実習という科目だった。他大学の授業ということで上手く一緒に活動していけるか、授業の流れについていけるか不安に思う部分はたくさんあったが、その不安以上にこの１年で自分にとって大きな実りがあったように感じる。ここからは、どのような実りがあったかを述べていこうと思う。

まず１つ目は、自分の積極性が養われた点である。私は、この授業を履修する前まで主体性が乏しいと感じていた。しかし、この授業は自由度が高い授業のため自発的に動かなければチームの一員として活動に貢献できない。このことをふまえ、この活動での個人目標として１つは主体性の向上を掲げた。初めは、自分の行動に自信がなく行動することへのためらいがあった。しかし、補助金の申請や両文化祭の活動を通して自主的に活動することが増え、チームメンバーも手助けしてくれたことが私の主体性の向上につながったと感じる。

２つ目は、チームワークの中で何が大切であるか学べた点である。チームでの活動は、協力してうまく進むこともあるが、意見の衝突やすれ違いが生まれることもある。しかし、その中で学びを得るものは多くあると思う。私たちのチームも、２つの大学の合同チームである故、情報や意見のすれ違いなどが多く起こったが、学んだことはたくさんあった。たとえば、活動における情報共有の大切さである。お互いの大学が、現時点でどのような行動をしているのか「報告」、今後どのような活動をするのか「連絡」、そしてどのように仕事を進めていくべきなのか「相談」、この３つを適切に行えていればもっと活動の幅が増えていたのではいないかと感じた。個人の反省としても、もっと双方の活動に対して目を向けるべきだったのではないかと思う。ほかにもチームメンバー、一人一人が責任を持って働くこと、互いがフォローをしあって活動していくことがチームワークを進めていく上で大切なのだと考えた。

３つ目は、努力することの大切さを改めて学んだ点である。私たちのチームは、最初の中間報告会でテーマがまとまらず筋が通っていなかったこともあり活動自体が空中分解してしまいそうになった時があった。しかし、そんな中でもチーム内でテーマや内容を見直し、那珂湊へもう一度足を運んだり、試作品の試食会に参加したりなど活動を続けてきた。最終的には、これらのことが実になり茨苑賞や最終報告会の結果につながったのではないだろうか。このことから自分たちの活動を一生懸命やることが結果につながってくるのだと改めて考えさせられた。

４つ目は、普段の授業では学べないことを学べた点である。その１つが、社会人のマナーについてである。普段の大学の授業では、名刺交換のやり方など教えてもらうことはないので貴重な経験であったと感じる。そして、それを実際の社会人の方々とやり取りをすることは大学生のうちになかなかできる体験ではなかったので緊張をした反面、新鮮であった。他にもプレゼンテーションの講座は、自分たちの大学とはまた違う視点からプレゼンテーションについて学べた。例えば、聴衆を惹きつけるために質問を投げかけたり、アイコンタクトをしたりなどである。私は、今までプレゼンテーションをやるとなったらスライド作成に重点を置いてきたので、新たにプレゼンテーションをやるうえで何が大切なのかを知ることができた。

以上の３つ以外にも活動を通して、那珂湊の良さ、ほしいもの良さを再確認することができ、そして地域おこしがいかに大変かということを学べた。また、個人の達成目標ルーブリックから、自分の強み・弱みを知りそれを一年間でどのように成長させることができたか考えられた。これらは、来年度の就職活動においても自己分析として身になったことであり、自分自身がどのような人間なのか見直すきっかけにもつながった。この一年間は、私の大学３年間の中で一番自分を成長させた年であったなと感じる。この授業で学んだことは、忘れず今後自分に生かしていきたい。

最後に、この授業で大変お世話になった先生方、私たちの活動のサポートしていただいた大曾根様をはじめみなとみらいプロジェクト実行委員会の皆様、そしてチームみなと☆ミライとして一緒に活動をしてきたメンバーのみんなに感謝申し上げます。ありがとうございました。

８：おわりに

清水　悠花

このチームの反省点は、コミュニケーション不足である。直接会って話し合いをする機会が少なかったのはもちろん、分からないことをそのまま放って置くことでチームの一部しか情報を共有できていないこともあった。プロジェクト実習は自ら動くことで学びを得ることのできる授業なので、与えられた情報のなかで疑問や不安があれば細かなことでも確認するべきだった。この反省から情報や考えの共有は、活動の方向性や役割分担に大きく影響すると学んだ。異なる大学の学生が共に活動することで難しく感じることもあったが、活動できる範囲を広げることが出来た。複数の大学の学生がいることで、両大学の文化祭で出店しフリーペーパーを配布することができ、那珂湊を広範囲にPRすることが出来たと思う。さらに、チームの活動をメディアの取り上げてもらうことによって「学生が活動することによる影響力」を実感した。

最後にこの場を借りてお世話になった皆様へお礼を申し上げます。マルダイフレッシュフーズ株式会社の運営統括責任者大曾根一毅様、川﨑達也様を始めとするみなとみらいプロジェクト実行委員会の皆様、常磐大学の皆様、ありがとうございました。

７：いばっピ団チーム

プロジェクト実習Ｄ

大チーム「いばっピ団」

小チーム「AB 革命起こし隊」

リーダー	：五位渕　梓	茨城大学人文社会科学部社会科学科	２年
書記	：池田真梨果	茨城大学人文社会科学部人文コミュニケーション学科	２年
書記	：堀　奈津美	茨城大学人文社会科学部社会科学科	２年
会計	：井上　晴香	茨城大学人文社会科学部人文コミュニケーション学科	２年
渉外	：大場　貴史	茨城大学人文社会科学部社会科学科	２年

小チーム「カフェめぐり宣伝部」

リーダー	：小宮山弥来	茨城大学人文社会科学部社会科学科	２年
書記	：大山　愛莉	茨城大学人文社会科学部人文コミュニケーション学科	２年
書記	：鹿野はるか	同　　上	２年
会計	：川瀬　葉月	同　　上	２年
渉外	：片見　恵都	茨城大学人文社会科学部社会科学科	２年

主担当教員：鈴木　　敦　茨城大学人文社会科学部　教授
副担当教員：神田　大吾　茨城大学人文社会科学部准教授

2017 年度
茨城大学人文社会科学部　プロジェクト実習D

「いばっピ団チーム」活動報告

１：はじめに

小宮山　弥来・川瀬　葉月・大場　貴史

⑴活動課題の設定（チーム設立の経緯）

「水戸の公共交通の未来を一緒に創ろう」という水戸市市長公室交通政策課の須藤文彦様のお言葉を受けて、水戸の公共交通をより便利なものにしたい、そして、公共交通の利用者を増やしたいといった思いを抱いた 10 人のメンバーが集結した。そして、茨城交通株式会社様の IC カード「いばっピ」から名前をとった水戸公共交通プロジェクト・チーム「いばっピ団」が結成された。

「いばっピ団」は、2 つのグループに分かれて活動を行った。１つ目は、水戸の町にあるカフェを、バスを利用して巡ることを提案する「バスで巡る　水戸カフェマップ」の作成を行う「カフェ巡り宣伝部」である。2 つ目は、水戸駅北口 4 番乗り場にある案内板の改訂を行う「AB 革命隊」である。「AB」とは案内板（ANNAIBAN）の略である。

水戸公共交通プロジェクトは 2015 年度にも活動が行われていたが、2017 年度ではメンバーが新たに入れ替わり、2015 年度のチームメンバーの意思を引き継ぐ形となった。2017 年度のメンバーでの活動は、この報告書を作成している現時点（2018 年 2 月）ではまだ継続しており、4 月ごろまで引き続き活動を行う予定である。

⑵プロジェクト課題

「茨大生による水戸の公共交通の未来の創造」

⑶プロジェクト課題からプロジェクト構想へ

①絞り込みの経緯

私たち公共交通チームは、水戸市の公共交通活性化ということで、水戸市交通政策課の須藤様からお話を頂き、人文学部生 10 人で発足された。公共交通といえば電車、バス、タクシーとあるが、当チームが選んだものはバスである。茨大生にとって、バスは通学などで使う身近な存在であることが、バスを選んだ理由である。

②プロジェクトの目的　1.プロジェクトとして何をするか／達成するか

このプロジェクトの目的は、毎日通勤・通学をする人々や水戸のバスを初めて使う人、高齢者に向けて水戸のバスをより快適に利用できるようにすることである。現在、水戸では様々な種類の、様々な行き先のバスが運行している。行きたい場所があるのにどのバスに乗ったらよいのか分からない、水戸に不慣れな方々には大変不便な状況である。「わからないからバス以外の手段で行こう」、「バスでしか行けないならこの場所に行くのをやめよう」、そう思われてしまっては、バスを利用する人が減ってしまい、水戸で外出する人が減り衰退していってしまうのではないかと考えた。

また、もう一つの目的として、茨大生の水戸におけるバス利用者を増やすことを挙げた。

茨大生に利用してもらうためにはどうすればよいか考えたところ、バスで行ける・行きやすいおすすめの店を紹介するのがよいのではないかということになった。それにより、通勤・通学以外でも水戸の町に出かけてもらうことで水戸の経済発展に貢献でき、水戸の魅力を多くの人に広めることができる。そして、それらがバス会社の利益にも繋がり、バスの本数が減ってしまうことも防げると考えた。

③プロジェクトの目的　2.チームとして何を得るか／学ぶか

このプロジェクトで私たちは、アンケートを通して現状を分析し、課題をどのように改善・解決すべきか、そのために何をすればよいのかを明らかにする力を得ることを目的とした。また、様々な人との協力を通して、相手の立場を理解し自分の意見を分かりやすく説得できる内容で伝える力を得ることも目的とした。

④成果の検証方法・「成功」の基準

私たちは最初、成果の検証方法・「成功」の基準を、

・最後に、事前におこなったアンケートの対象者にもう一度アンケートをおこない、前回の結果と見比べて「不満」を選ぶ人が減ったか、また利用頻度が上がったかなどを確認する。

・茨苑祭で鉄道研究会と協力し、マップの配布等で宣伝。→100 人以上に配布

・水戸の行事の場（水戸まちなかフェスティバルなど）で看板を宣伝。チラシを配布。
　→100 人以上に配布。

・茨城新聞または朝日新聞で記事にしてもらう。

・水戸放送局にビデオを送り活動を知ってもらう。

などとしていた。しかし、活動を進めていく中で、メンバーで再度検討を行い、カフェ巡り宣伝部は作成したカフェマップを 2018 年度の人文社会科学部の新入生に配布すること、AB 革命起こし隊は、水戸駅北口バス乗り場の案内板の内容を改善し、新たな案内板を設置することとした。

２：活動概要

川瀬　葉月・大場　貴史

いばっピ団チーム全体の活動概要は、以下の通りである。

6 月に水戸市交通政策課の方々との顔合わせを行い、今後の作業の進め方の打ち合わせをした。また、いばっピ団チーム内を「AB 革命起こし隊」、「カフェ巡り宣伝部」の 2 つに小チームに分け、それぞれの活動をしていくことにした。

7 月には茨城県公共交通活性化会議が実施する、地域公共交通利用促進活動助成事業の助成金を獲得するべく、申請書を提出した。また、案内板を見ている人に、案内板の見やすさ等に関する聞き取り調査を行い、調査結果と 2 つの小チームの夏休みの活動についてメンバーで話し合いをした。

10 月には上記助成金を獲得することができた。この外部予算を戴けたことで、案内板改訂計画に予算的裏付けを持たせることができた。それによって各団体様に理想として案内板改訂について話すのではなく、具体的に説明することができた。また、案内板改訂に必要な予算額に関する情報を茨城交通の山口里詩様から頂いた。それと自分たちの予算を照らし合わせ、実現可能という結論を出すこともできた。

小チーム「AB 革命起こし隊」としての活動は、聞き取り調査の結果を基にして案内板の内容を考え、それについて 10 月に茨城交通様や茨城県バス協会様と話し合いを行い、そこで頂いたご指摘を基にして、案内板の内容を修正した。また、案内板のデザインについて、10 月から 1 月にかけて常磐大学非常勤講師の小佐原孝幸先生から多くのアドバイスを頂いた。今後は、各バス会社様から承諾を頂き、完成した案内板を 3 月に水戸駅北口バス乗り場に設置する予定である。

小チーム「カフェ巡り宣伝部」としての活動は、8 月～10 月にカフェ巡りをしてマップに掲載するカフェの検討、マップへの掲載許可を頂きにカフェに伺った。そして、私たちが考えたデザインをもとに、茨城大学教育学部情報文化課程社会文化コース 2 年の町田京香さんにマップのデザインをして頂いた。この段階で試作版として 100 部を印刷し、11 月の茨苑祭で配布して使い勝手等についてご意見を集めるプリテストを行った。その調査結果をもとに試作版に改良を加えて正式版とし、4,000 部を作製した。このマップは 2018 年度の人文社会科学部の入学生に配布する他、ご協力いただいたカフェや茨城交通株式会社様、水戸市役所様等に配布して拡散して戴く予定である。

３：活動記録

池田　真梨香

No.	日時（10分単位）	場所	活動内容	参加者	実働時間
1	2017年　5月29日 13:40　－　15:40	茨城大学人文講義棟 22番教室	自己紹介、プロジェクト構想立案	小宮山、鹿野、大山、片見、五位渕、堀、池田、井上、大場	2:00
2	2017年　6月16日 8:10　－　9:20	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	水戸市交通政策課の皆様と今後の作業の進め方による打ち合わせ	小宮山、鹿野、大山、川瀬、片見、五位渕、池田、井上、大場	1:10
3	2017年　7月5日 8:30　－　9:30	水戸駅北口4番 バス案内板前	水戸駅北口4番乗り場のバス案内板を見ている方への聞き取り調査	川瀬、池田	1:00
4	2017年　7月5日 12:30　－　13:30	水戸駅北口4番 バス案内板前	水戸駅北口4番乗り場のバス案内板を見ている方への聞き取り調査	大山、井上	1:00
5	2017年　7月9日 16:00　－　17:00	水戸駅北口4番 バス案内板前	水戸駅北口4番乗り場のバス案内板を見ている方への聞き取り調査	小宮山、大場	1:00
6	2017年　7月10日 8:40　－　10:00	茨城大学図書館 共同学習エリア	看板調査とアンケート、夏休みの活動について話し合い	小宮山、堀、池田、井上、大場	1:20
7	2017年　7月20日 8:30　－　9:00	水戸市役所臨時庁舎3階	地域公共交通連携支援事業助成金申請書について	小宮山、川瀬	0:30
8	2017年　7月28日 8:40　－　10:10	茨城大学人文棟 C棟406	夏休みのカフェ巡り宣伝部とAB革命隊それぞれの計画立案	小宮山、鹿野、片見、堀、池田、井上	1:30
9	2017年　8月8日 16:00　－　17:00	茨城大学図書館共同学習スペース　S2	看板のデザイン、カフェの絞り込みの話し合い	小宮山、大山、堀、池田	1:00
10	2017年　8月11日 9:00　－　12:30	水戸市南町 商店街	カフェ巡り宣伝部でピックアップしたカフェの確認、マップ掲載の許可の要望	大山、堀	3:30
11	2017年　8月14日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	大山、片見	8:45
12	2017年　8月15日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	大山、片見	8:45
13	2017年　8月16日 11:10　－　15:20	水戸市内 マップ掲載カフェ	カフェ巡り宣伝部でピックアップしたカフェの確認、マップ掲載の許可の要望	鹿野、川瀬	4:10
14	2017年　8月16日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	大山、片見	8:45
15	2017年　8月17日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	大山、片見	8:45
16	2017年　8月18日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	大山、片見	8:45
17	2017年　8月21日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	鹿野、井上	8:45
18	2017年　8月22日 13:00　－　18:00	水戸市内 マップ掲載カフェ	カフェ巡り宣伝部でピックアップしたカフェの確認、マップ掲載の許可の要望	小宮山	5:00
19	2017年　8月22日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	鹿野、井上	8:45
20	2017年　8月23日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	鹿野、井上	8:45
21	2017年　8月24日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	鹿野、井上	8:45
22	2017年　8月25日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	鹿野、井上	8:45
23	2017年　8月28日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	五井渕、大場	8:45
24	2017年　8月29日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	五井渕、大場	8:45
25	2017年　8月30日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	五井渕、大場	8:45
26	2017年　8月31日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	五井渕、大場	8:45

27	2017年　9月1日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	五井渕、大場	8:45
28	2017年　9月4日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	小宮山、堀	8:45
29	2017年　9月5日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	小宮山、堀	8:45
30	2017年　9月6日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	小宮山、堀	8:45
31	2017年　9月7日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	小宮山、堀	8:45
32	2017年　9月8日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	小宮山、堀	8:45
33	2017年　9月11日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	池田、川瀬	8:45
34	2017年　9月12日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	池田、川瀬	8:45
35	2017年　9月13日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	池田、川瀬	8:45
36	2017年　9月14日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	池田、川瀬	8:45
37	2017年　9月15日 8:30　－　17:15	水戸市役所臨時庁舎 交通政策課	インターンシップ	池田、川瀬	8:45
38	2017年　10月1日 12:00　－　18:30	水戸市内 マップ掲載カフェ	カフェ巡り宣伝部が制作したマップの掲載許可の確認	小宮山	6:30
39	2017年　10月5日 11:00　－　12:00	茨城交通(株)本社総務部	看板のデザインについてのご意見	池田、大場	1:00
40	2017年　10月10日 17:30　－　18:50	ロイヤルホスト水戸東原店	看板のデザインについてのご指導	池田、大場	1:20
41	2017年　11月11日 10:30　－　16:30	茨城大学 茨苑祭	カフェ巡り宣伝部が制作したマップの配布、そのマップの聞き取り調査	鹿野、大山、川瀬、池田、井上、大場	6:00
42	2017年　11月12日 10:30　－　16:30	茨城大学 茨苑祭	カフェ巡り宣伝部が制作したマップの配布、そのマップの聞き取り調査	小宮山、大山、片見、五位渕、堀	6:00
43	2017年　12月22日 17:30　－　18:40	ロイヤルホスト水戸東原店	看板のデザインについてのご指導	五位淵、池田	1:10
44	2017年　12月25日 12:40　－　13:20	茨城大学　理学部棟 MM1	案内板デザインについて話し合い	五位淵、池田、大場	0:40
45	2018年　1月12日 9:30　－　12:00	茨城大学　印刷室　人文図書館	案内板の実寸大印刷　話し合い	五位淵、池田	2:30
46	2017年　1月16日 16:30　－　18:30	水戸市内 マップ掲載カフェ	カフェ巡り宣伝部が作成した マップの掲載許可の確認	小宮山	2:00
47	2018年　1月16日 17:30　－　19:00	ロイヤルホスト水戸東原店	案内板デザインについてのご指導	五位淵、堀	1:30
48	2018年　2月1日 14:00　－　17:30	茨城交通(株)本社総務部	看板デザインについての説明・ご意見	五位淵、堀、池田	3:30
49	2018年　2月4日 13:20　－　14:20	茨城大学　図書館　共同学習室	進捗状況と今後について話し合い	五位淵、堀、井上	1:00
50	2018年　2月6日 14:30　－　15:00	茨城交通(株)本社総務部	入稿と発注について話し合い	五位淵	0:30
51	2018年　2月17日 11:00　－　12:00	茨城大学　図書館　共同学習室	進捗状況と今後について話し合い	五位淵、井上、大場	1:00
				合計	276:35

＊2/17 以降も活動したが、原稿締め切りの関係でこの表には盛り込めなかった。

４：会計報告

井上　晴香

(1)大学予算

品　　名	単価	数量	合計
インク brother　4 色パック LC211-4PK	3,449	1	3,449
マップ印刷代		3,000	11,047
		総計	14,496

(2)外部予算

上記のチーム予算に加え、茨城県公共交通活性化会議（ http://www.koutsu-ibaraki.jp ）の地域公共交通利用促進活動助成事業助成金（ http://www.koutsu-ibaraki.jp/kasseika/jyosei.html ）に申請を行い（図 1)、30 万円の助成を戴くことができた。同補助金は水戸駅北口の 4 番乗り場横の案内板を改訂するための予算として活用させて戴きました。心より感謝申し上げます。

（様式第１号）

平成　29　年　7　月　20　日

茨城県公共交通活性化会議
会　長　　橋　本　　昌　　殿

（団体・グループの）
名　　称　　いばっピ団
代表者名　　印

平成 29 年度地域公共交通利用促進活動助成金の交付申請について

標記について，下記により実施したく，地域公共交通利用促進活動助成金を交付されるよう申請します。
記

1　応　募　区　分　（該当する事業の□印にレを記入してください。）			
□　（A）地域公共交通利用促進活動支援事業（上限10万円，**（別紙）**の添付は不要）	☑　（B）地域公共交通連携支援事業（上限30万円，**（別紙）**の添付が必要）		
	連携先	市　町　村：水戸市	
		交通事業者：茨城交通株式会社	
2 事業名	水戸公共交通プロジェクト		
3 助成金申請額	300,000　円 千円未満の端数は切り捨て）	**4マイスターの関与**	□あり　氏名：　　☑なし　）
5 活動の概要※	＜目的＞ １．観光客等、水戸駅発の市内バスを初めて利用する方、並びに高齢者等、スマホでの情報収集に不慣れな方々がより快適に利用できるようにする。 ２．茨城大学の学生の市内バス利用頻度を増やす。 ＜内容＞　活動内容は分かりやすく記載して下さい。 水戸駅北口バス停での一般利用者への聞き取り調査や茨城大学の学生に向けたアンケートを基にして、水戸市役所の交通政策課並びにみとの魅力発信課、茨城交通株式会社、茨城大学の教職員のご支援を頂き、以下の活動をしていく。 １．水戸駅北口バス停にある既存のバス案内板をより見やすく、分かりやすいものに改良する。 ２．若者に向けた、バスを利用した「カフェ巡り」マップの作成と配付 ３．水戸市役所公式アプリ「水戸のこと」の検証と改善提案		
6 スケジュール	７月中…水戸駅北口での聞き取り調査、 現状把握のためのアンケートの配布・集計 ８月前半…改良版バス案内板のデザイン決定 ８月…カフェ巡りマップ作成のための取材 ９月…案内板の張替え終了、 水戸まちなかフェスティバルで案内板についてのチラシ配布 ９月～１０月…「カフェ巡りマップ」の編集・印刷 １１月前半…茨城大学の茨苑祭（学園祭）でマップ配布 １２月後半…改善後の効果確認のためのアンケートの配布・集計	アプリ改善 ↓	

（別紙）連携先の意見等

(B) 地域公共交通連携支援事業にご応募される場合のみ，連携先に作成を依頼してください。

市町村名	水戸市	担当課名（記入者）	市長公室　交通政策課 （役職・氏名　　） TEL：

【市町村の事業と申請者の事業との関係】
本市は，茨城大学の課題解決型学習の連携団体のひとつであり，解決すべきテーマのひとつとして，本市の公共交通の課題を提示したものである。申請者の事業は，その解決策として提案されたものであり，本市とともに協働で取り組む事業である。

【申請者の事業に対する意見】
複雑な路線バスの運行情報を整理して分かりやすく発信したり，路線バスの利用を促すような情報を提供したりすることにより，ひとりでも多くの方に路線バスの有用性を理解していただき，実際に路線バスを利用していただけるようになることを期待している。

交通事業者名	茨城交通株式会社	担当課名（記入者）	運輸部　運輸統括課 （役職・氏名　　） TEL：

【交通事業者の事業と申請者の事業との関係】
・当社が運行している路線バスに関し、申請者が利用促進を図る。
・申請者は今回の事業以外にも、利用促進活動を行っており、乗り方教室やＩＣ販売に協力いただいた

【申請者の事業に対する意見】
・申請者の事業は、バス利用の利便性向上、利用促進に繋がる活動と思われる。
・申請者の事業の実施により、水戸駅から目的地への検索が容易になるため利便性向上に繋がり、利用促進が期待される。

※マイスター（茨城県・関東運輸局）	氏　名	

【申請者の事業に対する意見】

※いばらき公共交通マイスター又は地域公共交通マイスターの支援・助言等を受け入れる場合，マイスター本人に記入してもらってください。

図１：申請書（部分）

５：活動トピック

鹿野　はるか・堀　奈津美

カフェ巡り宣伝部

5～8 月　方針決定

授業での話し合いで、バスの利用者を増やすことを目的としたカフェマップを作成することを決定した。はじめは、「茨大生」というおおまかな対象であった。しかし、ターゲットをもっと絞り込んだほうがいいというアドバイスを頂き、ターゲットは、茨城大学に入学したばかりで周辺にあるカフェについて詳しくない来年度の女子新入生に決定した。それとともに、女子が好きそうな手書き風のデザインにすることや入学式時に配られるサークル案内などと一緒に封入して配布できればいいのではという案も決定した。

8 月　実地調査

バスを利用しカフェマップに載せる候補のカフェをチームメンバーで手分けして訪れた。メンバーは実際にバスを使ってカフェを訪れた。カフェマップにふさわしいかの検討やマップの掲載許可をいただいた。実際に訪れることによりインターネット検索で分からなかったことも把握することができた。例えば、美味しいケーキと飲み物を食べることができるケーキ屋である。雑貨がたくさん置いてあり店員さんもとても親切で雰囲気はよかったが、飲食スペースがあまり広くなく、他に飲食したいお客さんが来たら退かなければいけなかった。長居することは困難そうだったので候補から除外することにした。自分たちにとっても新しいカフェの発見が多い調査であった。

11 月　茨苑祭でプリテスト

メンバーで案を出し合ってマップのデザインを決定し、教育学部情報文化課程学生の町田京香さんに試作版の作成を依頼した（図 2）。これを茨苑祭で 100 人に配り、意見を頂いた。いい点として「かわいくて見やすい」「食べ物の写真がおいしそう」、改善すべき点として「道が分かりづらい（ランドマークが少ない）」「表面の空白（上段と下段の間が寂しい）」「画質が悪い」といった意見が特に多く寄せられた。他にも多くの意見をいただいた。実際に見て頂くことで、カフェに行ったことがない人たちにとって使いやすいマップとして機能するかどうかを知ることができた。

図 2：試作品マップ

11 月～　改善

茨苑祭のプリテストで頂いた意見をもとに、裏面のインスタグラム風のお店紹介は枠線をつけて見やすくし、表紙は他のページと見分けをつけるため文字を多くし、表面のマップでは目印となるものを追加、バスで巡ることの明記、バス停を見やすくするなど、様々な改善を行った。また、掲載していた 2 店舗が閉店になってしまうことが判明し削除した。また、修正後カフェに確認に伺った。

完成品のマップ（図 3）は入学式で配布する予定であったが、手続き的にハードルが多いことが分かったため断念し、

代わって人文社会科学部の１年生ガイダンス資料の一つとして参加者全員に配布して戴くことになった。

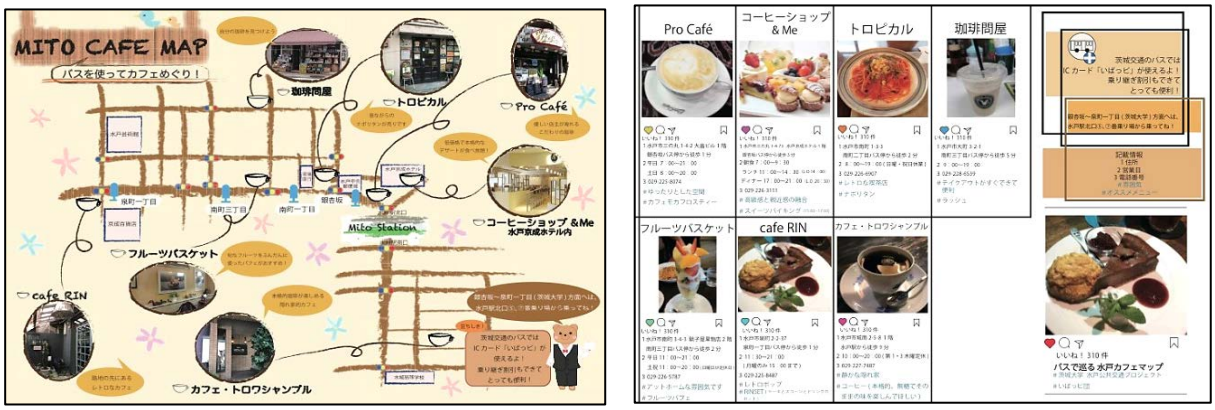


図３：完成品マップ

AB 革命隊

５月～６月　情報収集とターゲットの決定

水戸市の公共交通の利用促進を図るために既存の案内板を改良したいと考え、水戸市交通政策課の須藤文彦様に JR 水戸駅の北口と南口に設置されている各種案内板の所有者や内容について実際に現地で説明して頂いた（図４）。

その結果私たちが改良対象に選んだのは、北口４番のりば左手の「水戸市バス路線主要図」だった（図５）。この案内板は、北口に設置されている沢山の案内板の中でもとりわけ大きな物（縦約１メートル・横約 1.8 メートル）であり、しかも鉄道で水戸駅に到着した方が駅を出てすぐ目につきやすい位置に設置されている。しかし、複雑な情報を網羅的・平面的に掲載しており、初めて見る方には容易に目的の情報にたどり着けないと思われたからである（図６）。

図４：須藤様にご説明戴く（南口設置の案内板）

図５：北口設置の「水戸市バス路線主要図」

図６：
「水戸市バス路線主要図」
板面の拡大図

7 月　初期デザイン完成

利用者のニーズを把握するために、案内板を見ている方に聞き取り調査を行った。情報が多すぎて却って乗るべき系統のバスとそののりばが分かりにくいというご意見が目立った。そこで、「情報を絞り込んで系統とのりばの関係を分かりやすく表示すること」を基本方針とした。こうして作成した、初期のデザインを図 7 に示す。

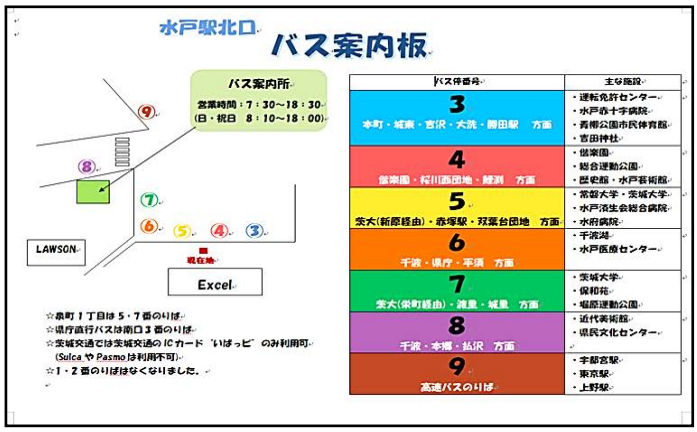


図 7：初期デザイン

9 月～11 月　関係者との交渉

案内板を改訂することに承認を頂くため関係者の方を訪ねた。茨城県バス協会様からは主要施設の場所が分かるようにすること、記載する施設を再考するべきだということなどをご意見として頂いた。茨城交通様からはバス停乗り場の地図が大き過ぎる一方、施設名の記載が少なくバランスが悪いなどのご意見を頂いた。

自分たちは人文社会科学部の学生であり、デザインについて本格的に学んだことがなかったため、デザインがご専門の常磐大学の小佐原孝幸先生に指導して頂いた。小佐原先生には、「伝えたい情報の優先順位を決めること」「情報の性質に合わせて色使いや表現方法を統一すること」など、素人には漠然と「センスの問題」としてしか感じられないことを、論理的に教えて頂いた。水戸市役所様からは、「みとバス MAP」の路線図を仮の路線図として記載し、施設名については「みとバス MAP」に記載されているものから採用してはどうかといった、具体的なご提案を頂いた。これらのご意見を取り入れ、デザイン修正案 1（図 8）を完成させた。

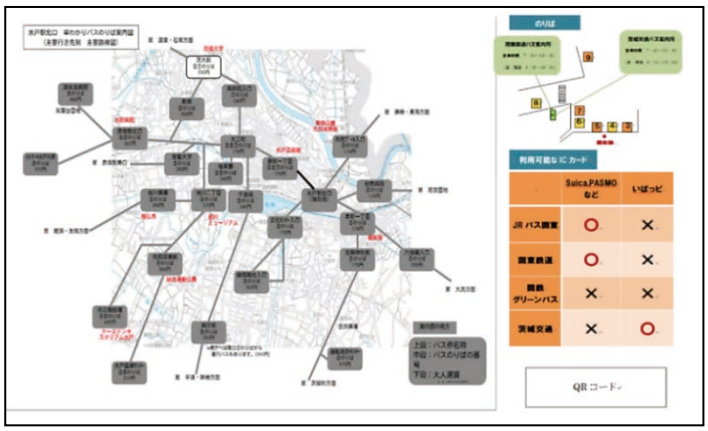


図 8：修正案 1

12 月～1 月　デザインの修正

須藤様から乗り場表と路線図を併合した図のアイデアを頂いた。また、小佐原先生からは表現に当たっての考え方等について、より詳しく具体的にご指導頂いた。それらに基づいてメンバーが手描きした図を電子データ化するに当たっては、イラストレーターを使用できる茨城大学人文学部社会科学科 2 年の久野明有実さんに協力して頂いた。

沢山のご支援を戴きながら試作と修正を積み重ねて行ったが、残念ながらメンバーの中には本格的なデザイン技術を持った者は一人もおらず、イメージ通りにデザインできないまま時間だけが過ぎて行った（図 9）。

図 9：修正案 2

2 月　川野邊様へのデザイン依頼

アイデアと下図作成は自分たちで行うが、版下のデザインについてはプロにお願いすべきではないかという考えは以前からあった。しかし、チームとして意思統一ができないままに制作日程や最終調整に行き詰まっていた所へ、茨城交通様から「公共の場に掲げるものであるので、版下作製に当たっては最終的にプロの手を借りるべき」とのご意見を戴いた。これで踏ん切りがつき、主担当教員の鈴木教授にお願いして、プラスデザインズの川野邊悦子様をご紹介戴いた。

川野邊様が最初に作って下さったデザインを、修正案 3 として図 10 に示す。盛り込む情報は何も変わっていないにも関わらず、別物のように見やすいデザインにして戴くことができた。

修正案 3 を土台に、路線図の位置関係や記載する施設や乗り場の名称や位置の確認を進め、記載する施設の選択基準を明確にする作業を行った。同時に、引き続き関係者の方々からご意見をお寄せ戴いて修正を重ねた。川野邊様には、修正が出る度にご対応戴いた。正確に数えていた訳ではないが、少なくとも 30 回以上にわたって修正して戴いたことになる。その都度ご対応下さった川野邊様に心より感謝致します。

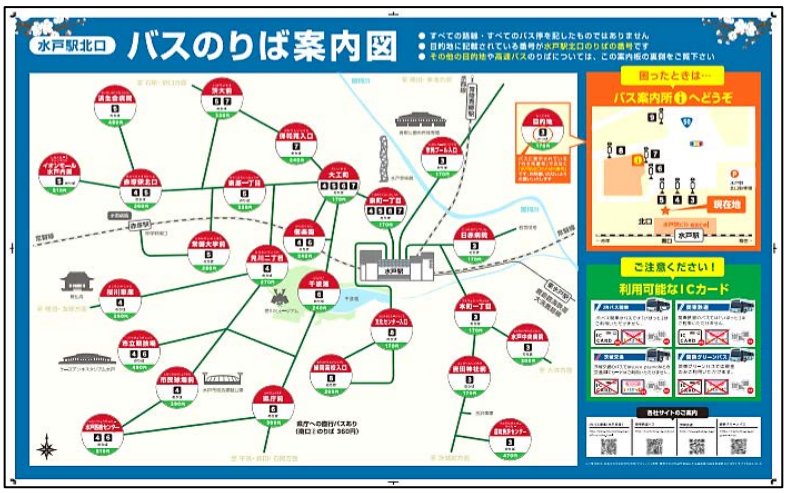


図 10：修正案 3

3 月　最終デザインの完成と設置

授業期間も試験週間もとうに終わった 3 月になって、ようやく以下のデザインとなって完成した(図 11)。現在、やまざき看板様で貼り付け用のシートに加工して戴いている。3 月 20 日に設置される予定である。

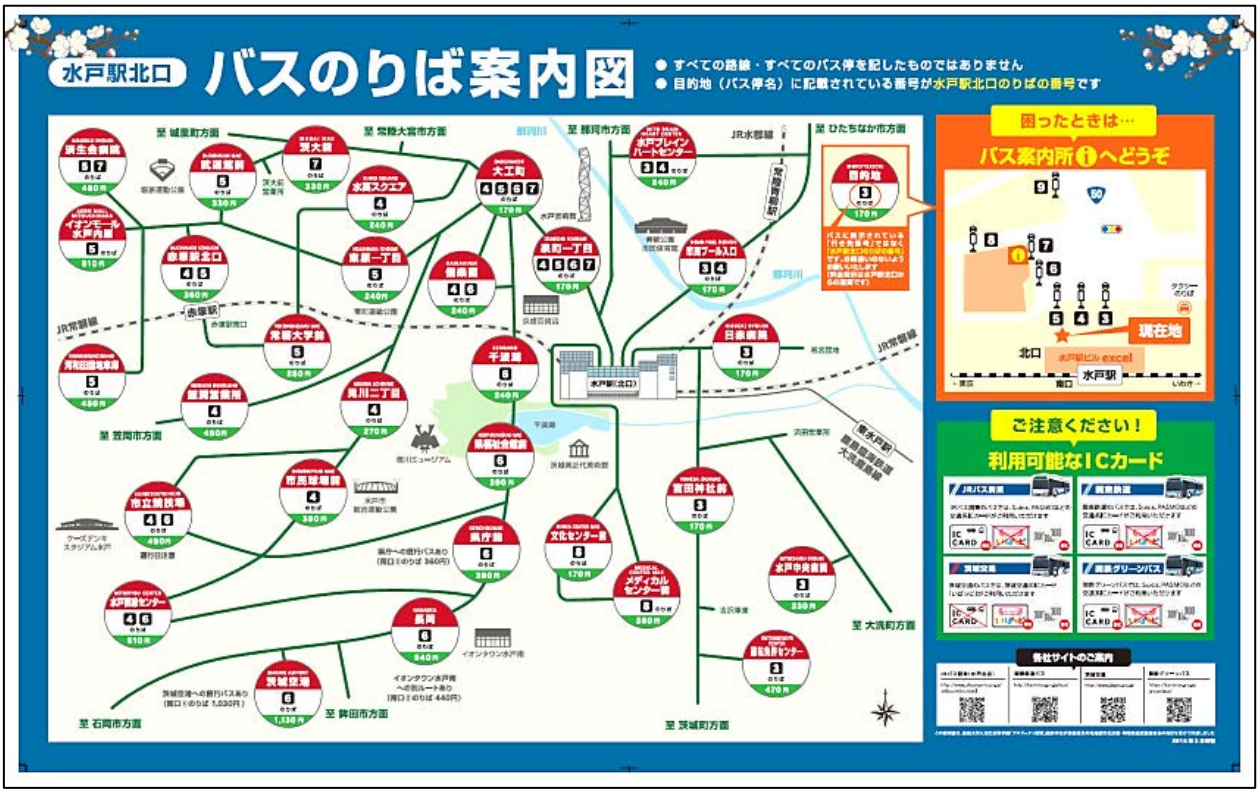


図 11：完成版

7：年度末活動報告会のポスターパネルと発表風景

いばっピ団

メンバー：
（カフェ巡り宣伝部）小宮山弥来・鹿野はるか・大山愛梨・川瀬葉月・片見恵都
（AB 革命隊）五位渕梓・堀奈津実・池田真梨果・井上晴香・大場貴史

水戸市のバス利用促進に向けて

水戸市の路線バスの利用者数は、多いとは言いがたい現状である。対策として、(1)学生のバス利用増加策としてのカフェ巡りの提案、(2)水戸駅発のバスを利用しやすくするための、案内板の改善提案に取り組んだ。

カフェ巡り宣伝部の活動

①方針決定(5 月)
バスを利用して巡るカフェマップの作成
②ターゲット決定（8 月）
茨城大学に入学直後の女子学生
③実地調査（8～9 月）
オリジナルカフェマップに掲載する
カフェの実地調査と掲載許可依頼
③茨苑祭でのプリテスト（11 月）
試作品のマップを 100 人に見てもらい、
アンケート調査を実施

結果と今後の展望

アンケートでは、「かわいい」という声が多かった一方、「作成意図が不明確」「道がわかりづらい」など、マップの本質に関わる多くの指摘を受けた。

茨苑祭で得たご意見を踏まえてマップを修正の上で本印刷し、来年度の入学式で配布する予定である。

AB 革命隊の活動

①方針決定（5 月）
わかりやすいバス案内板の作成
②地域公共交通利用促進活動助成金の獲得(5～8 月)
案内板作成の費用へ
（マップやチラシにも利用）
③聞き取り調査（6～7 月）
案内板に対しての意見を伺う
④ターゲット決定(7 月)
遠方から来た人、水戸駅を頻繁に利用しない人
⑤ご意見を元にデザインを練る
バス協会様との交渉（9 月）、茨城交通様からのご意見（10 月）、小佐原先生からのご指導（10 月）、水戸市役所様からのご意見（10 月）をもとに話し合いながら、案内板のデザインを改善していった

今後の展望

12 月：最終デザイン案決定
小佐原先生、市役所様にご相談
1 月：バス協会様、各バス会社様にデザイン案のご確認
2 月～3 月 31 日：
案内板作成、完成

まとめ

今回、カフェ巡り宣伝部も AB 革命隊も多くの人のご支援のおかげでここまでプロジェクトを進めることができた。チームの目的である様々な方との協力を通して、相手の立場を理解しわかりやすく伝える力、アンケートによる現状分析の力を身につけることができたと考える。授業期間終了後も活動が続くが、ご支援を無駄にしないよう、最後までしっかりこのプロジェクトをやり遂げたい。

図 12：ポスターパネル(1/16 縮小)

図 13：活動報告会での発表風景

８：個人レポート

成長の１年
様々な人々との関わりを通じて

茨城大学２年　小宮山　弥来

私は実家に住んでおり、普段から通学でバスを利用する機会が多いこともあり、水戸の公共交通に関心があり、水戸の公共交通の活性化に積極的に貢献したいという思いから当プロジェクトに参加し、リーダーに立候補した。
外部の方々とも関わりが深く、責任も重大である当プロジェクトのリーダーとしての活動には大変苦労したが、非常に多くのことを学ぶことができた。

私が「プロジェクト」というものに参加したのは今回が初めてであった。他のメンバーも「プロジェクト初心者」であり、リーダーとしてどうみんなを引っ張っていけばよいか悩むことも多かった。プロジェクトが始まった当初は、役割分担が上手くできず、自分１人で仕事を背負ってしまうこともあった。しかし、メンバーのスケジュールの把握を行い、はやめに活動のスケジュールを組むようにすることで改善された。茨苑祭行った「みとカフェ巡りマップ」の試作品の配布では、時間単位で配布のスケジュールをたて、交代性で配布を行うことにより、メンバー全員に役割を与え、効率的に配布することに成功し、目標枚数の配布を達成することができた。メンバー間の協力の大切さを改めて実感することができた。

一方で、プロジェクト開始当初のスケジュール通りに活動がなかなか進まず、見通しの甘さを反省した。様々な場合を予測し、計画性を持つことが大切だということを改めて学ぶことができた。私がプロジェクトの活動にあたって特に意識したのは「自らが率先して活動に取り組むこと」と「報告・連絡・相談を意識すること」である。「報告・連絡・相談」については、先生方や外部の方々との遣り取りの中で重要な部分を、SNS を用いてメンバー全員にすぐに共有することを意識した。また、問題が発生した際にはメンバー全員に相談を即座にすることで、問題解決がスムーズにできるよう意識した。「報告・連絡・相談」は活動をスムーズに行うために欠かせないものであり、その大切を学ぶことができた。

また、当プロジェクトでは、目上の方々とメールで遣り取りする機会が多くあり、メールでの遣り取りにあたってのマナーも学ぶことができた。プロジェクトの活動を始める前までは、目上の方々とメールで連絡を取り合うといったことをする機会がほとんどなかった。社会に出てからも非常に役に立つスキルを得ることができたと感じる。加えて、連絡をスムーズに取るために、メールの返信を即座に行うことの大切を改めて学ぶことができた。さらに、語弊のないように伝えるにはどうしたらよいか、口頭ではなく文書によって正確に伝えるということの難しさも知ることができた。出来るだけ簡潔に要点をまとめられるように意識することや、相手の立場に立ち、情報に抜けがないように意識することの大切さを学ぶことができた。

加えて、私はリーダーという立場上、報告会などで前に出て発表する機会が多々あり、その成果もあって、人前で発表することへの抵抗感は薄れた。また、その中で、事前の準備が大切だということを学んだ。最初は質問をされると戸惑ってしまうこともあったが、報告の前に事前に「想定質問集」を作成することで最後の報告会でもスムーズに対応できた。事前の準備というのは人前で発表する前だけでなく、目上の人と話し合いをする前にも非常に役立った。目上の人とお話しをするというのはどうしても緊張を伴うが、準備をしっかりすることで焦らずに話をすることができた。社会に出てからも、人前で発表する機会や、目上の人とお話をする機会が多々あると思うので、その際もこのプロジェクトでの経験の中で得た知識を生かしたい。

プロジェクト活動の一環として水戸市市長公室交通政策課でのインターンシップの体験でも非常に多くのものを得たが、その件については、「インターンシップレポート」のほうに記載したのでここでは省略する。

当プロジェクトでは水戸市役所の方々、各バス会社の方々、担当教員の鈴木先生、イラストレーターの方々、各カフェの経営者の方など様々な方々のご協力を得て活動を進めてきた。まだ現時点では活動は残っているが、ご協力を頂いている皆さんに改めて深く感謝を申し上げたい。また、ここまでプロジェクトを進められたのはメンバーの支えがあってこそであり、頼りないリーダーについてきてくれているメンバー達にも感謝している。思い通りに進まず、自分の至らなさに落ち込むことも多々あったが、失敗を乗り越えていくことで新たな発見もあり、このプロジェクトでの活動の中で得た経験は私にとって貴重なものとなった。プロジェクトでの経験が私を大きく成長させてくれたと感じる。活動の中で得た知識や経験を活かして残りの活動にも全力を尽くしていきたい。

苦労を乗り越えて得られたもの

茨城大学２年　五位渕　梓

私たちいばっピ団は、水戸のバスの利用促進を目的に約一年間活動してきた。いばっピ団ではそれぞれ二つの小グループに分かれ、片方は水戸駅のバスを利用しやすくするために、水戸駅北口４番のりば付近の案内板を改善することを目指したAB革命起こし隊、もう一方は茨大生に通学以外でもバスを利用してもらうための、バス巡りカフェマップを作成し配布することを目指したカフェ巡り宣伝部に分かれて活動してきた。私はAB革命起こし隊のメンバーとして活動し、今現在も設置完了を目指している。ここから、今までの活動を振り返ろうと思うが、思い返せば苦難の連続であった。

まず、水戸駅北口のバス案内板の改善を行うと決めた理由は簡単なもので、見づらいし存在があることさえ知らなかったという意見が多く、せっかくあるものが使えないものであるというのはもったいないと思ったため、他には何も考えることなく、あっさり決まった。この時、案内板を改善するということが、どんなに難しく大変なことであるか、考えてもみなかった。

やることが決定し、そこからまずどこをどのように直すべきなのかという改善点を明確にすべく、聞き取り調査を行った。全くの赤の他人に、自分たちの知りたいことについて聞くというのは初めてのことであったため、声をかけるのはとても勇気が必要であった。自分の聞きたいことをまとめて、さらに聞き出したことをまとめるということができるようになった。

どこをどう改善すべきかを把握し、デザイン案の作成に入った。振り返って考えると、ここに時間をかけすぎてしまった気がする。予定では10月にはデザイン案を完成させて、11月に設置を完了させるとなっていたのだが、自分たちが実行に移すまでが遅く、結局今の今までまだデザイン案が完成させられなかった。このプロジェクトを始めたころから、デザイン案を作るという過程を行っているときは、自分たちのプロジェクト実習の重みに全然気づけておらず、無責任な行動が多々あった。例えば、バス協会様へ案内板の改善を承諾してもらうための交渉に伺った際に、チーム内での連携が取れておらず、結局何をしに行ったのかがわからない事態になってしまったり、現状報告が関係者の方々にできておらず、不安にさせてしまったり、先生の力を過剰に借りてしまったりと、様々な失敗をしてしまった。この失敗から、チームでは情報共有を怠らないように、常に新しい情報は入り次第伝えるということや、関係者の方々にも共有することを忘れないようにするということの大切さを、身をもって知り、今後欠けることのないようにと大きく反省した。

小佐原先生や、イラストレーターの久野さんに協力してもらい、デザインの修正を何度か繰り返し、ようやく完成に近づき茨城交通様から許可をもらおうとしたら、プロの方に頼んだデザインでないと厳しいといわれたときは、正直どうなることかととても不安に陥った。今までのことがすべて水の泡になってしまうのかと。しかし、鈴木先生の助け舟で、何とかプロの方にお願いし修正してもらうことができ、茨城交通様から承諾を得ることができたとき、本当に安心したし、鈴木先生とカワノベ様への感謝の気持ちでいっぱいだった。諦めなければ必ず突破口を見つけることができるということを実感することができたし、ここまで頑張ってきてよかったと心から思った瞬間だった。

ここまでの活動で、チームメンバーの存在がどれだけ大切かという仲間の存在の大きさや、自分たちが動かなければ何も始まらないという、自分たちの持つ責任の重さ、相手の立場や自分の立場を考えながら相手とやり取りを交わす難しさ、自分たちの思いを相手方が納得できるように説明し、質問にはしっかりと受け答えるということの難しさを知ることができた。このプロジェクトをする前までは、他の誰かがやってくれるだろうというように人任せなところがあったが、自分がやらなければいけないという状況を経験したことにより、自分から動くということができるようになったと思う。また、自分の甘さによって迷惑をかけてしまったにもかかわらず、見捨てずにサポートしてくれた方々のやさしさを肌で感じ、とても難しいプロジェクトであるにもかかわらずここまでやってくることができ、本当にありがたかった。今までにないくらいの様々な方とか関わったことで、礼儀や交渉の仕方など普段の生活では絶対に身につかないことを習得できた。まだこの活動は続くが、案内板完成まで気を抜かず、チームメンバーや先生方、関係者の方々と協力・共有し、絶対にやり遂げたい。

公共交通の配慮の難しさ

茨城大学２年　池田　真梨果

私はプロジェクト開始時に授業で身につけたい・到達したいことを決め、個人の達成目標ルーブリックに書いた三つの要素を伸ばせる活動にできるようにと考え１年間活動しました。一つ目は書き（文章作成能力　論理的思考力　分析力）です。これはメールと議事録の作成で練習ができました。二つ目は話す（説明能力　プレゼンテーション能力　コミュニケーション能力）です。元々人前で発表するときに不必要に緊張してしまうのを直したいと考え設定しました。これはプロジェクト班で決定したことなどを協力していただいた方々に説明する時や活動報告会などの機会、夏休みのプレゼン講座で練習できたと思います。三つ目は課題発見能力（現状を分析し目的や課題を明らかにする力）を選びました。実際にプロジェクト活動をするにあたって平行して行っていかなければならないことを整理したり、目標や先の予定を考慮して今ことを考えたりしなければならないのだなと多くの場面で実感しました。この三点から１年間を振り返ると伸ばせたものもあればあまり伸ばせなかったこともあります。メールを書くことにはとても慣れてプロジェクトが始まった頃よりもスムーズに書けるようになったと思います。学内のみならず学外で協力していただいた方々にも送る機会があるこれはこの授業を取ったからこそ身についた物だと思うので今後のメールを送る機会にも積極的に活用していきたいと思います。しかし三つ目の課題発見能力はあまり進歩の無いままになってしまったと感じています。なぜなら、先の見通しを上手くできないことで進捗状況に遅れが出てしまったり協力していただく方々に迷惑をかけてしまったりしたことが多くあったからです。この点は反省して改善すべきだと思います。活動中に自分が現状で取りかかっていることだけに集中してしまい、一つ終わったら次をやろうという考えで行動してしまったことがいけなかったと思います。スムーズな計画の進行には一つに集中しすぎず、次にすることは何があっただろうかと客観的に気にかけると滞らないと改めて感じられたので、その点を念頭にもう少し同時に物事に取り組めるようになりたいと思います。

そして１年間様々あったプロジェクト中で一番印象に残っている活動は水戸駅北口案内板の作成です。公共交通の利用促進を目的に水戸の公交通の一つであるバスの利用促進のきっかけになるようにと、案内板を新しく作り替えることを目標に活動してきました。6 月に水戸駅で案内板を見ている人にアンケートをとり案内板の需要を調べ、遠方から来た人や水戸駅をあまり利用しない人向けに作ることを決めました。7 月には地域公共交通利用促進活動助成金を獲得し活動資金を確保しました。そこからデザインを考えて 9 月からはバス協会様や茨城交通様、水戸市役所様から記載内容について、常盤大学の小佐原先生からはデザインについてご意見とご指導を受けてデザインを改善してきました。デザインの案を実際に形にするために茨城大学生の方、Plus Desings のカワノベ悦子様にも手伝っていただきました。デザインを考えるに当たって私たちで考えられる考慮はしたつもりでしたが、ご指導を受けて気がつくことも多くありました。その中でも色盲の方への配慮は本当に指摘をいただくまで全く念頭にありませんでした。その時公共の案内板を作るのはとても神経のいることなのだと実感しました。意識にあってもなくてもデザインに盛り込まないとすれば、それが必要な方はそのデザインにおいて対象外となり、はじき出されてしまうことにも意識が必要だと思いました。何か見落としている配慮する項目は無いかどうか考えながらデザインの案を出すのはとても難しいことだと思いました。しかし全ての考慮すべき点をデザインに盛り込むこともまた不可能であり、情報が過多になってしまうので、何のために何を入れるのか誰が対象の物なのかということを常に明確にしていかないといけないものなのだと強く感じました。それを見失わないように現在もデザインの改善を班員と関係者の方々の協力で行っています。現状はまだデザインの改善途中で案内板の完成には至っていません。しかし、作るならより良い案内板を作ろうと期限ぎりぎりの完成予定になっています。あと約一ヶ月、3 月以内に案内板の完成の目標を無事達成するべく、案内板が新しく張り替えられ、助成金の報告が済むところまでしっかりと活動し、完成した案内板を早く見たいと思い、あと少しですが頑張ります。

最後に、１年間初めは社会のマナーやルールも曖昧で分からないような私たちいばっピ団の活動に理解を示してご協力いただいた皆様に大変感謝いたします。私たちだけでは絶対にできないことも本当に多くの皆様のおかげでできるようになったことがたくさんありました。本当にありがとうございました。

社会人失敗を経験したプロジェクト実習

茨城大学２年　井上　晴香

私がこのプロジェクト実習を受講しようと思ったきっかけは、将来に漠然と不安を持っていたからである。大学に入り、１年間過ごしたが、特にやりたいことも見つからず、ただ焦っていた。そんな時、ガイダンスでプロジェクト実習の説明を受けた。キャリア系科目という位置付けだった。この授業は、会社や団体様から依頼を受け、それによって学生が活動するという内容であった。このプロジェクト実習は、通年の授業であり、学生のうちに１年という長い期間社会人の方々と関わることができることは魅力の１つであった。また、長い期間活動することで、他の授業より成長を感じられるのではないか、と考えこの授業を受講することにした。

授業のはじめ、様々な会社や団体様から説明を受けた。その中で私が興味を持ったのは、市役所様ご提案の「公共交通利用促進プロジェクト」であった。その理由は、体験的に水戸市のバスの乗り方や案内が複雑でわかりにくいと感じていたからである。大学に通い始めた頃、どの乗り場で待てば大学へ向かうことができるのかすぐに理解することができなかった。また、バスに乗ってからも支払いの方法がわからず不安に思ったこともあった。そのような思いを次入る１年生が覚えないように私たち学生ができるのならばやってみたいと思った。市役所様からは、いくつかヒントをいただき、私たちがしたいことをやっていいととてもフリーな状態で内容を決めさせてもらった。はじめは、問題だと思うことをチームで出し合い分類し、最終的に２つの活動をすることになった。私が選んだのは、水戸駅北口４番乗り場横にある案内板の改訂をするチームであった。

この担当が決まってから、私は失敗しかしなかった。とてもこの授業を甘くとらえていたことと、自分のだらしなさが原因である。失敗するごとに大きく落ち込み、何度も意識の低い私がこの授業を取るべきではなかった、と後悔した。例えば、物品発注の際、型の名称を間違えて伝えてしまい、発注の直前でそのような型の商品がないと担当の方々に迷惑をかけた。バス協会様へ案内板改訂の許可をいただきに伺う際も、何をどう伝えるかということをまとめずに伺ったため、相手先だけでなく、同行してくださった市役所の小林様にも迷惑をかけた。他にも発表の仕方がなっていなかったことや、メールの書き方など、失敗が多すぎて書ききれないくらいである。それでもこの授業を続けられたのには２つの理由がある。

まず、初期の「公共交通をより良き状態にし、利用者に快適に使用してもらいたい」という気持ちを思い出す度に頑張ろうと思えたからである。私が受験期から入学早々の頃、本当にバスに乗るのが怖かった。それは、自分が無知であると、乗っている全員に迷惑をかけるからである。支払いで問題があると、その間乗車中の他の人に待ってもらわなくてはいけない。その状態が苦痛でしかなかった。新入生は、何もかもがわからない状況で大学へ入ってくる子もいる。通学でその不安を少しでも取り除けるなら、頑張りたいという気持ちが常にあった。それが原動力となり、今まで活動することができた。

次に、チームの皆や先生、市役所の方など私を支えてくれる存在があったからである。失敗するたびに精神的に辛かった。その時私を励ましてくれたのは、チームの皆である。同じ志で集まった10人は、いつも強い味方だった。そんなチームのため、自分ができることは率先してやるようにしていた。例えば、急な問い合わせに対応できる人がチーム内でいなければ、やりとりをし、問題をはっきりさせておくなど、その時自分がチームもためにできることをする、ということをした。また、提案者である市役所の方々にも感謝の念でいっぱいである。計画性がなく、報告を怠ることもあった私たちに憤りを感じることも多かったに違いない。それにもかかわらず、メールでもお会いしてもいつも私たちを明るく励ましてくださった。こうすればいいのではないか、と様々なご提案をくださり、何をしていいかわからなかった私たちに優しく手順を教えてくださった。失敗の連続でも見放さずにいてくださった。社会人のルールを知らない私たちに勉強する場も与えてくださったことなど、本当に感謝している。最後に、プロジェクト実習担当の先生に感謝の言葉を述べたい。他の授業やその他仕事があるのにも関わらず、私たちの活動を支えてくださった。特に私は、失敗ばかりしていた分、ご迷惑をおかけした。何が問題であったか、どうすればよかったのかなど、私の行動を見てからアドバイスをくださった。そのことで、以前より自主的に考えて行動する力が身についた。いい先生に会えたこと、本当にこの授業をとってよかったと思える理由の１つとなった。

社会に出る前に社会人失敗を経験した。ここで学んだことは多くある。それを無駄にせず、まず残りの大学２年間さらに成長し、就職する頃には、社会人の基礎の出来上がった人間になって、社会に貢献できる人材になりたい。

プロジェクト実習は自分に成長をもたらしたか

茨城大学２年　大山　愛莉

１番目に身に付けたいと考えていたのは物事に進んで取り組む力であった。他人の指示を待たないで動くことや自分の行動の失敗を恐れないことを中心に改善したいと考えていた。自分の意見を持たなければならない、意見を相手に伝えなければならないという場面が多かった。グループ内での話し合いのときは自分の意見をもって参加できたと思う。しかし、物事に対して自ら進んで取り組んだことはなかった。誰かの指示、特にリーダーの指示に従って動いていたと振り返る。これをしなければならないと考えることはあるが、自分から行動しようと働きかけることはなかった。

２番目に身に付けたいと考えていたのは目的を設定し、確実に行動する力であった。自分を取り巻く状況を把握し、目標を設定して、目標に向かって行動する力を得たいと考えていた。しかし自分から課題の目標を設定することはなかった。目標の問題点を見つけようと、慎重に今の状況を確認することもなかったと思う。チームの誰かがやるだろうという安易な考えで、目標を設定するのがどんどん遅くなってしまった。そのために外部の人に情報を伝えるのが遅れ、迷惑をかけてしまった。目標を設定してから行動するときは、しっかりと行動できたように思う。自分がまかされた業務は果たせたように思う。ひとつひとつに目的を設定することがいかに大切かということを実感した。もし目標を設定しなければ、どこに向かって活動すればよいのか分からない。大きなチームは個人で活動するよりもより大きな結果を出せる。けれど目的を設定しなければ何も成し遂げることはできないのだなと思った。

３番目に身に付けたいのは意見の違いや立場の違いを理解する力であった。異なる意見を受容し、相手の立場を理解して物事が考えられるようになりたいと考えていた。今回の活動では異なる意見が出るということはあまりなかったように感じる。チーム皆の意見を取り入れて、より良いものにするということはあった。それは自分の意見と全く違うものではなかったのですんなりと受け入れることができた。立場の違いというものも比較的理解できたと思う。

１年の活動が終わり、私はどこが成長したのだろうかと考えている。主体性も実行力も積極性も得ることができなかった。チームの活動には参加したが、自分でチームを集めてより良い活動にしようと働きかけたことは全くなかった。チームの活動状況も自分から把握しようとせずに、時間だけが過ぎていった。そのため発表会は、得られた成果を発表することができたとは言えないものだった。なぜ自分から活動しなかったのか。この原因は重すぎる責任からの逃避と行動することへの恐怖だと考える。この講義をとろうと思った一番の理由はインターンシップがあるからであった。現場の人々と関わることができるプロジェクトであり、生の声を聴いて自分の将来の参考にしようと思ったため受講した。しかしこの講義はそんな軽い考えでは務まらないと後悔した。正解が何かわからない状況で、知識と活力をもって何か成果を得なければならないということは、常に受け身で生きてきた自分には荷が重かった。どうすればいいのか、全くわからない。わからないことを言い訳に、自分から動かない。自分が動かなければプロジェクトは進まない。周囲の人々は課題を解決するために活動しているのに、自分はしていない。そして活動していないことに対して後悔や自己嫌悪に陥る。早くこの講義を終わらせたいと逃げることばかりを考える。行動はメンバーに同調するばかりだった。誰かが動けば動く、誰も活動していないなら動かない。自分が動けないのは性格のせいだ、リーダーシップがないからだ、自分は誰かに従って動いたほうがよいのだと原因をいくつも考えて、責任を何かに押し付けていた。誰かの指示ばかりを待っていた。私は公共交通のいばっピ団で活動したが、チームの活動に貢献できたかと言われれば、出来なかったと答える。もっと積極的になれていれば、チームにも良い影響を与えられたかもしれない。場の雰囲気がもっとよくすることができて、討論が活発にできていたかもしれない。もっと頑張れただろうと後悔している。これまでの活動はどうすることもできないが、案内板を完成させること、カフェマップを入学パンフレットに同封することという目標までしっかりと活動しようと思う。

これまでいろいろと考えてきたが、プロジェクト実習を履修してよかったと考えている。学生という守られた立場でプロジェクトを計画して、実行するなどという体験はめったにできるものではない。社会人になる前に目的を設定することや計画を立てることの重要性、素早い行動と報連相の大切さを身をもって感じることができた。逃げ癖がある自分とどう向き合っていくかがこれからの私の課題である。大学を卒業する前には自分に誇りが持てるような存在になれていればよいと思った。

プロジェクト実習から得られたこと

茨城大学２年　川瀬　葉月

私が、根力育成プロジェクト対象科目「プロジェクト実習Ｄ」の授業をとろうと思ったきっかけは友人です。何気ない会話から、このプロジェクト実習をとってみたいと思うようになりました。この授業の、就職に必要な力を今のうちに身につけていくことができる、就活のときにも役に立つ、という２つの点がとても魅力的でした。また、「プロジェクト実習Ｄ」ではインターンシップに参加することができます。私は２年生でこの授業をとったので、２年生のうちからインターンシップに参加できることはとてもいい機会でした。ただ学生生活を過ごしていくのもそれはそれでいいですが、なにかに参加して、活動したという自分の中で自信になるものがほしかったのです。

活動していく中で、バスの利用促進のためには、カフェマップを作って、バスでまわってもらうのがいいのではないかということになりました。最初に作成した案についてアンケートをとって、客観的な意見をもらい、修正していきました。このような作業は今までに経験がありませんでした。アンケートでいただいた意見をもとに、茨大生に協力をお願いして完成したマップはとてもいいものができたと思っています。来年度の茨大の入学生に配ることが楽しみです。

また、今年度は、９月に３日間の「プレゼン講座」が開講されました。プレゼンの基礎から学び、最終日には自由なテーマで発表をするものでした。今年度が初開講だったので、いいタイミングで授業をとることができたと思いました。前に出たときは堂々とする、アイコンタクトを忘れずに、といったアドバイスを頂き、12 月の活動報告会のときには意識しておこなうことができました。

私はこの授業をうけて本当に良かったと思っています。その理由は、社会に出たときに必要な力を身につける機会を得ることができたからです。私は、「自ら考え、行動する」ということがとても苦手です。中学生や高校生の時を思い返してみても、言われたことしかできませんでした。言われたことをやっていれば大丈夫という考えがあったからだと思います。大学生になって、自らがやることを見つけ、行動していくことが求められることが多くなりました。社会に出ても言われたことしかできないままではまずいと思い、プロジェクトに参加することで、これを変えようと思いました。私は、人の前で何か意見を言ったり、自分の思いを伝えたりすることがあまり得意ではないです。意見を言って、「伝わらなかったらどうしよう」と思っていました。しかし、このプロジェクト実習では、言わなくては伝わらない、関係者の方々に迷惑がかかることがある、ということで、気になったことは発言していけるようになりました。中でも、伝える力に関して、何回も同じ伝え方をするのではなく、分かりやすくなるように言い方を変えたり、身振り手振りで伝えたりすることで伝わりやすくなるんだと思いました。一緒に活動しているメンバーに意見を伝えた際、１回目の説明でわかってもらえなくても、２回目で少し言い方を変えるとわかってくれるということがあり、ますます自信になりました。また、私たち学生自身が考えたことを、実現するためには何をしたらよいのか、うまくいかなかった原因はどこにあったのか、学生が自ら考え、動く授業は新鮮でした。演習が主体の授業でもなかなか経験することのないことを経験できたと思います。

実際、この授業を振り返ると、プロジェクト開始直後、半年後、年度末で、わずかではありますが、「自ら考え、行動すること」や、「意見を伝える」ことに良い変化が見られました。中学生・高校生の６年間で何も変わらなかったことに比べれば大きな進歩だと思います。このプロジェクトに参加したから得られた結果だと考えます。

前述した「プロジェクト実習Ｄ」でしかできないインターンシップでは水戸市役所の方々にお世話になりました。公務員のお仕事に興味があったので、市役所のお仕事を体験、間近で見ることができてよかったです。２年生で市役所の方々と一緒に働かせていただけて、とてもいい経験になりました。

正直、私は大学生になって２年たった今でも、将来何をしたいか漠然としか決まっていません。少し焦っています。そのため、今経験できることはどんどんしていきたいと思いました。そして、いろいろなことを吸収していきたいと思います。その１つとしてこの授業をとりました。社会人になるまでに身につけておきたい力を養う機会を得られること、インターンシップで仕事を経験できることなど、１つの授業で得られるものがたくさんありました。インターンシップなど、ある程度の期間企業が学生を受け入れてくれるものは、大学生の今しか経験できません。今やらなければ、この先もずっと何がしたいか決まらないかもしれないのです。このような点からも、この授業をうけてよかったと思いました。

社会人になるために

茨城大学２年　鹿野　はるか

大学１年生の終わり、卒業後に自分が社会人になるにあたって、自分はこのままで社会人として働くことができるのか、大学１年生が気付いたら終わってしまっていて何も成し遂げていない現状に不安を覚えた。もしかしたら、将来自分が就職するときに役に立てることができるかもしれないと考え、プロジェクト実習を履修することを決意した。

このプロジェクト実習を通して私が学んだことは３つある。１つめは、自分の課題である。１年間の活動を通して、自分の課題を見つめなおすことができたのである。私が見つけた自分の課題は、コミュニケーションと主体性についてである。プロジェクト実習の一環として、水戸市役所でインターンシップを１週間体験させていただいた。そのとき、ポスターの改善点について意見を求められた。私は、二段階右折という言葉がわかりづらいと意見を述べることしかできなかった。一方で、一緒にインターンシップを受けていた友人は多くの意見を述べていた。プロジェクト実習を履修するまで、私はコミュニケーションをとることが苦手だと漠然と認識しているだけであったがこのとき、私がコミュニケーションを不得意とする要因として、知識と経験の少なさがあると感じた。コミュニケーションが嫌いということを言い訳に、友達との会話やグループディスカッションでは聞き手に回ることが多くあった。そのことにより、私には圧倒的に自分の意見を相手に述べる機会を経験することが少なかったのである。そのため、公の場で意見を述べるとき緊張してしまい考えを浮かべることができなかった。また、なにが見やすいポスターなのか知識が浅かったことも意見を述べることが出来なかった要因であると考える。インターンシップを経験することによって、漠然としか捉えることができなかったコミュニケーションが不得意である要因を知ることができた。また、プロジェクト実習の報告会では、数回報告に対する質問を投げかける機会が与えられた。しかし、１度も手を挙げて発言することができなかった。自分には主体性が著しく欠けていることを実感させられた。プロジェクト実習の活動を通して、社会人になるまでに克服したい課題を見つめなおすことができた。

２つめは、水戸の魅力についてである。水戸は田舎であるから、お洒落な場所はない、東京に行かないとお洒落は体験できないと思って生活してきた。しかし、カフェ巡り宣伝部の活動で水戸駅周辺のカフェを巡ったとき、自分の知らないカフェがあることを知った。いつも通っている道でも気を付けて見たら、少しだけ道を曲がってみたら、バスでいつも乗らない方向へ移動してみたら、今まで知らなかった水戸の魅力があったのである。水戸は何もないという先入観に捉われていたため、水戸でお店探しはしたことが今までなかった。しかし今回、カフェ巡り宣伝部のカフェ巡りによって、20 年間水戸で生活していて気づかなかった水戸の素敵なカフェを知ることができた。住み慣れているからこそ、視野が狭くなって見えなくなっている水戸市の魅力があることを学ぶことができたのである。

３つめは、期限のある仕事に責任感をもってやり遂げる大変さである。大学生になってからアルバイトを始めて、仕事を通して給料をいただいたくという社会人と同じ体験をさせていただいている。しかし、アルバイトの仕事は１日１日で完結するものであり、長期間１つのことをやり遂げる仕事を経験したことがなかった。今回、プロジェクト実習では、自分たちでやり遂げる目標を定め、期間内で成し遂げるという経験をすることができた。例えばインターンシップでは、１週間の中で決められた時間内に任された自分の仕事を完成させるという貴重な体験をした。自分で終わらせるべきことが明確であったこと、自分の仕事が次のメンバーに引継がれるということで間違いが発生しないよう気を付けながら仕事に取り組んだ。アルバイトでは感じられない仕事に対する強い責任感を感じた。また、チームの活動としては、外部の方々との関わりが発生することによって、改善を要求される機会が多くあった。カフェマップ作成については、ただ好きなようにマップを完成させ自己満足で終わらせるのではなく、ニーズに合ったものを作ること、掲載するカフェ等に失礼がないよう配慮することなどが求められた。仕事とは、自分が達成する目標ややりがいだと考えていたが、達成するためには自分だけでなく外部の方々との協力が必要であり、外部の方々にも満足いただけるように、自己満足だけでは終わらせることができない責任あるものであるということを強く学んだ。

１年間のプロジェクト実習を通して、私は自分を見つめなおし社会人としての生きていくための課題の発見、水戸市の新しい魅力の発見、仕事は自己満足だけで終わらせてはいけないものであり、強い責任感を伴うものであるということを学ぶことができた。普段の授業で体験できない活動を通して、仕事を経験することができてよかったと感じる。この活動を生かして、いい社会人になれるよう努力していきたい。

公共交通と向き合う

茨城大学２年　大場　貴史

茨大の入試で初めて水戸に来た時、どのバスに乗ったら良いのか分からなかったという覚えがある。それから約１年、水戸のバスには慣れたが、やはり初めて来た人には分かりにくいと感じていた。そのような中、水戸市役所の須藤様から公共交通プロジェクトのお話を頂き、「水戸のバスを改善するチャンスだ」と感じ、いばっピ団として活動することを決めた。

僕は、いばっピ団の中のAB(案内板)革命起こし隊として、水戸駅北口バス乗り場の案内板の改装に着手することになった。最初に案内板の話を聞いた時、「案内板なんて見る人いるのだろうか」と感じた。しかし、実際に現地で聞き取り調査を行うと、遠方から仕事で来た人など、多くの人が案内板を参考にしてバスを利用していることが分かった。一方で、案内板を見ていた人に話を聞くと、「これでは分かりにくい」や「何番のバス乗り場に行ったらよいのか分からない」といった声があった。そのため、行き先と乗り場が一目で分かるような案内板を作ろうということになった。

当初は、「案内板はすぐに完成するだろう」と軽い気持ちで考えていた。しかし、実際に取り組むと様々な困難に直面した。

まず、案内板にどのような情報を掲載するのかということである。バスの停留所については、聞き取り調査で利用者が多かった停留所を中心に掲載したが、それ以外のバス停を載せないというわけにはいかない。そのため、公共施設や病院の最寄りであることなどを基準にして掲載した。停留所以外にも、会社ごとの利用できるICカードの違いや、バスの時刻などを調べるためのQRコードなども掲載した。これらの情報は、普段から水戸のバスを利用している我々にとっては当たり前のことであるが、初めて利用する人にとっては分からないことである。そのような利用者の立場に立って、必要な情報は何なのかを考えていった。

次に、情報面だけでなくデザイン面についても多くの課題に直面した。ただバス乗り場と停留所が書いてあるだけの案内板では、見た人にその情報が伝わらない、或いは見る気も起こらないだろう。今考えると当然のことであるが、案内板を作成し始めた当初は、情報面にばかり注力しており、デザイン面には手が回っていなかった。その状況を改善するために、常磐大学の小佐原先生からデザイン面について多くのアドバイスを頂いた。文字による情報だけでなく、もっと視覚に訴えかける情報の伝え方を学ぶことができ、とても良い機会となった。

これらの案内板の作成を通して学んだことは、「公共の場に設置するものを作ること」の難しさである。多くの人が利用する水戸駅のバス乗り場に設置する以上、「バスを利用する全ての人が、困った時に見れば何でも分かる案内板」が理想的である。そのためには、全ての停留所とその乗り場を記載しなければならず、情報量が増えすぎてかえって分かりにくくなってしまう。そのため、今回作成した案内板は、対象を「遠方から来た人や初めて水戸に来た人」とし、停留所の数を絞り込み、それで分からない時のためにバス案内所の位置も掲載した。このように、公共の場に設置するもので、全ての人を満足させるのはとても難しいと感じた一方で、対象を絞り込みその中で最大限の対応をすることの大切さを学ぶことができた。

また、チーム内での作業が続く中で、ミスやおかしな点に気付かず、外部の方からのご指摘で初めて気付くということも多かった。自分達での内容のチェックはもちろん大切であるが、公共の場に設置する以上、外部の方の視点はとても大切なものである。主観性と客観性の両方をもって、物事に取り組むことの大切さも学ぶことができた。

このように作成してきた案内板は、この報告書を執筆している２月中旬時点では設置に向けての最終段階の作業を行っており、３月中旬～下旬の設置を予定している。そのため、新しい案内板を見た人への聞き取り調査といった「成果の検証」は、今年度の授業として行うことはできない。しかし、新しい案内板が果たして人々に受け入れられるのかは、作成に関われた者として非常に気になる。そのため、個人的にでも新しい案内板を見ている人に話を聞くなどしたいと思う。また、案内板が設置されて月日が経てば、新たな問題も見えてくるだろう。そのような問題の解決にも、できる限り関わっていけたらと思う。

僕は鉄道などの交通が好きで、将来は交通関係の職に就きたいと考えている。そのような中で、今回のプロジェクトに取り組めたことは、自分にとって大きな経験になったと思う。また、自分の中に当たり前に存在していた公共交通というものに、改めて向き合うことができた。これらの経験を、今後の学生生活や仕事に積極的に活かしながら、公共交通を使いやすくするために自分ができることに取り組んでいきたい。

プロジェクト実習での学びを今後へ

茨城大学２年　片見　恵都

私は、このプロジェクト実習を通してたくさんのことを経験することができました。その経験は今までの学生生活では経験することがあまりできない、「社会」を意識した活動でした。「社会」にでたときに必要なメールの送り方のルールや、仕事を任されたときの対応の仕方など、実際に「社会」に出たときに必要なマナーをたくさん学ぶことができました。今回はその中の２つのことについて紹介します。

一つ目は、チーム内での情報共有の大切さについてです。家族の中においても情報共有というものは大切ですが、同じ目標を持ち、仕事をするチーム内での情報共有は、その仕事を達成させるためにも非常に大切であるということをとても感じました。プロジェクトの協力者の方々にお会いする際、きちんとそれまでの過程や、チーム内の状況を把握していなければ、相手が必要としている情報を伝えることができなくなってしまう可能性がでてきます。また、知っていれば一度ですんだことを何度も確認をするといった作業を増やしてしまうことにつながり、相手の方の手間を増やしてしまうといったいらない作業を増やしてしまうことにもつながってしまうのです。チームの代表としてその場に臨むのであるから、そのチームのことは何でも知っていなければなりません。また、情報共有がなされていないことで、今現在のチームの動きをチーム内の人間が把握できず、協力をする体制を作ることができないということにもつながってしまい、プロジェクトをうまく進めることができないといった状況にもつながってしまいます。こういった失敗を経験する中で、情報共有の大切さを知ることができました。また、チーム内だけではなく、担当教員に対する状況報告も非常に大切であるということも分かりました。状況を聞かれてからでは遅く、自ら現在の状況を報告し、確認してもらうという作業も活動を成功させるためにとても大事でした。きちんと報告をしなければアドバイスをもらうことも、状況を客観的に見た意見をもらうこともできません。逐一チーム、そして担当教員に報告することがよりよいものを作るためにはとても重要であることを学ぶことができました。

二つ目は、物事の進め方についてです。私は相手に依頼する作業がある場合、自分がやるべき作業がすべて終わってからでなければならないと思っていました。もちろんそういう場合もありますが、相手に依頼してからの時間が多くかかることが予想される場合、依頼してから自分がやるべき他の作業をやることで、よりスムーズに物事を進めることができるということが分かりました。このことを知ったとき、これは先を見ることができているから考えることができることであると感じました。先を見ることができていれば、その時の優先順位を考え、どう行動することが一番物事をスムーズに行うことができるかというところの目を向けることができるのです。もちろんその術を知らなければできません。しかし、知っていても先を見ることができていなければ、時間をかけるべき事柄とその他の区別をすることができなくなってしまうのです。物事をうまく進めるためには、先を見る力と物事をうまく進めるためのコツを知っていくことが非常に重要であるということが分かりました。

以上の二つのことについて、このプロジェクト実習の授業を通して学ぶことができました。

このプロジェクト実習を通して、たくさんの困難と向き合ってきました。自分たちがやりたいことを一から進めることはとても難しく、ただやりたいだけではなく、きちんとした理由やその社会的意味を考えなければならず、やりたいことと、周りがのぞんでいることのギャップに悩んだりしました。また、1年間という期間の中で、授業時間外の活動がメインの実習に時間を割くことができない期間があり、この実習のために十分な時間をかけることができていなっかたという反省も残りました。その中で、先生や水戸市役所の交通政策課の皆様や茨城交通の皆様は自分の仕事が大変な中、私たちの活動に協力してくださり、感謝の気持ちと、自分は甘かったという後悔が残りました。もっと上手な時間の使い方をすることができればもっと様々な経験をし、自分を成長させるための時間を作ることができます。自分にとって今大事にするべきことは何なのかを長期的視点から考え、行動することができるよう心掛けていかなければならないと、この授業を通して学ぶことができました。

プロジェクト実習を通して、様々な体験と学びを得ることができました。この授業で学んだことは社会人になったときにも、今後の大学生生活でも活かすことができることなので、大事にしていきたいと思います。

挑戦と責任

茨城大学２年　堀　奈津美

私がプロジェクト実習を履修しようと思ったのは、履修を考えている数人の友人の話を聞き興味を持ち、就活のネタになるような特別な取り組みをしてみたいと思ったためである。実際に一年間プロジェクト実習を履修し、チームで活動してみて仕事というものを疑似体験し、その難しさと自分の認識の甘さに気づかされ、多くのことを学んだ。

私たちのチームは水戸市の公共交通の促進を大きな目標として、そのなかでも水戸駅北口バス案内板の改善により、遠方から来た人やあまり水戸のバスを利用しない人が快適に利用できるように活動をしてきた。案内板には多くの関係者が携わっており、その改善のためには関係者との交渉や協力が不可欠であった。自分ひとりでできる仕事ではないため、先を見越した計画力というものがとても大切であると分かった。案内板を見ている人を対象に行った街頭アンケートの結果から、乗り場と経路を分かりやすく表示した図案を自分たちで作成した。それをもって交渉に伺い、その意見を取り入れた図案を考え、協力者にデザインを作成して頂いた。最終的にはデザインをカワノベ様に依頼し、関係者から意見を集め、再びカワノベ様に修正して頂くというかたちをとった。補助金を頂いており、その期限までに完成されなければならなかったため、関係者にもカワノベ様にも厳しい日程で動いてもらわなければならなかった。当初の計画とずれてきていることを感じながらも細かくスケジュール調整を行わず、自分たちで行う作業に時間をかけてしまったためである。このような経験から、課題を甘く捉えず、自分たちの作業を迅速に行うこと、期限から逆算し、適宜計画を立て直すこと、関係者への交渉や依頼を優先させることが重要であると感じた。

関係者と交渉をするときに、自分たちがどのような目的で活動しているのか、どうしてこのような案内板にしようとしたのかといったことを説明する必要があった。10 月某日、関係者に交渉に行った際、準備を怠っており、交渉をスムーズに進めることができなかった。質問に対しても上手く対応できず、同行した市役所の方にフォローして頂いた。そういった経験の中で、考えをまとめ、分かりやすく伝える力が大切であると感じた。今後は、あらかじめ想定される質問と回答を考え、資料を準備し、シミュレーションを行っておくことで堂々と交渉に臨めるようにしたい。同時に、関係者は仕事として責任をもって取り組んでくださっているにも関わらず、私には授業の一環であるという甘えがあったことに気づかされた。関係者を巻き込む以上、自分たちも仕事として責任感を持って取り組んでいかなければならないと思った。交渉に臨む前提として、学生という身分に甘えることなく、名刺の携帯、適切な身だしなみや言葉遣いなどを徹底しておかなければならないと感じた。

プロジェクト実習として、チームで活動する中で、協調性と行動力が大切であると感じた。前述した交渉を行うときに、交渉の日程などの調整を行うメンバーと交渉に臨むメンバーが別であり、どういった交渉を行うのかを共有できていなかった。そういったチーム内での打ち合わせが不十分なまま、交渉に臨んでしまったことが反省点である。関係者との交渉の前に、チーム内で考えを共有して、打ち合わせを入念にしておかなければならないと思った。チーム内で報告を徹底し、課題を共有していく必要があると感じた。チーム内で役割を分担しているが、自分の役割をこなすだけで満足し、他のメンバーが対応できないとき、議論が停滞しているときに自発的な行動ができなかった。今後は、チーム内のコミュニケーションを重視し、役割に固執することなく、自ら課題を探し、積極的に取り組んでいきたい。

軽い気持ちで履修したプロジェクト実習のなかで、その難しさを知らないまま設定した案内板の改訂という目標であった。メンバーとこんなに大変だとは思わなかったと苦笑しあったこともあった。関係者に迷惑をかけ、先生にフォローして頂くことも多かったが、この授業を履修し、この目標を設定しなければできなかった経験を積むことができた。深い懐で受け止めて頂き、温かく見守って下さった先生や関係者には深く感謝している。プロジェクト実習を通じて得た経験は、就活のネタにとどまらず、様々な場面で活かしていける学びになったと思う。この経験を無駄にせず、目標を更新しながら挑戦していきたいし、挑戦からフィードバックして学んでいきたい。挑戦することは大切だが、多くの人を巻き込み、迷惑をかけることもある。挑戦するとき、同時に伴う責任についても自覚的でいることを自分に言い聞かせていたいと思う。案内板の完成に向けて、やらなければならないこともまだまだ多い。より一層、精力的に取り組んでいきたい。私たちのプロジェクト実習はこれからだ。

９：おわりに

五位渕　梓

公共交通の未来を考える私たち「いばっピ団」チーム 10 名は、⑴水戸駅のバスをより快適に利用できるようにすることと、⑵茨大生の水戸のバス利用者を増やすことを目的として活動をスタートしました。

⑴について当初は、毎日通勤・通学に利用する人々も、初めて利用する人も、高齢者も利用しやすいようにしようと考えていましたが、ミーティングを重ねて案内板の改善をすることが決まった時、ターゲット層を絞り、遠方から来た人や、水戸駅をあまり利用しない人たち向けの改善策を練ることにしました。すべての人が利用しやすいよう、さまざまな要素をすべて案内板に盛り込んでしまうと逆に見づらくなってしまうと考え、案内板を最も必要とする人たちを対象にして改善しようと考えた次第です。主な活動としては水戸駅北口 4 番乗り場付近の案内板を見ている人に聞き取り調査を行い、案内板の問題点・改善点を調査し、今の案内板は何がいけないのかを理解し、改善する目標を明確にすることができました。また、案内板のデザインに関して、関係する皆様方の考えをよく聞き、また、自分たちの考えを説明することができたと思います。未だ案内板は完成まで至っていません（2 月 19 日時点）が、観光スポットを記したり、IC カードの補足説明を付記したりと、遠方から来た人たちにとって必要な情報をコンパクトにまとめたデザインになるよう工夫できたと思います。

⑵については、バスで行ける・行きやすいカフェを紹介することにより、水戸の魅力を多くの人に広めようと考えました。初めは茨大生がバスを利用したくなるような、バスで行けるカフェを紹介するマップの作成を目指しましたが、ターゲットを新入生に絞ることにしました。先ず水戸市内のカフェを回って候補店を決め、各カフェの経営者様方に直接お会いして自分たちの意思を伝え、マップ掲載の許可をとることができました。次に茨苑祭において、新入生と性質の似ている現 1 年生に 100 枚の試作版マップを配布してプリテストを行い、問題点や改善点を見つけ出すことができました。この結果、より明確なコンセプトの下で、無駄のないデザインのマップに仕上げることができたと思います。茨苑祭でのマップ配布調査を契機としてカフェ巡りに関心を持ってくれた人も多かったので、その点でもバスの利用促進に貢献できたのではないかと思います。

チームに残された課題としては、先ず現段階（2 月 19 日）でバス案内板が完成しておらず、2 月 28 日までに発注して 3 月 20 日までに完成させ、年度内の 3 月 31 日までに案内板の設置を実現させることです。計画してから実行するまでが遅かったために、年度の後半がとても厳しいスケジュールとなったこと、またチーム内で連携が十分には取れていなかったために情報伝達に不足があり、多くの人にご迷惑をかけてしまったことが反省点です。カフェ巡りマップについては、マップ自体はほぼ完成したものの、茨大新入生に完成品の配布は行っていないため、実際にこのマップを見てバスを利用し、カフェ巡りをしてくれるかが課題です。

末尾になりましたが、須藤文彦様をはじめとする水戸市役所の方々、茨城交通の山内隆之様、山口里詩様、デザイナーの川野邊悦子様、常磐大学小佐原孝幸先生、益子吉美様をはじめとするやまざき看板の方々、茨城大学の町田京香さんと久野明有実さん、マップ掲載カフェの経営者の方々、皆様のご協力のおかげで、様々な壁を乗り越え、理想を現実のものに近づけることができたこと、深く感謝申し上げます。自分たちがもう少してきぱきとやるべきことを理解し、行動していたら、ここまでぎりぎりのスケジュールになることはなく、余裕をもってより良いものを完成できていたことと思います。無理なお願いをしてしまったことが多々あったにもかかわらず、文句ひとつ言わずにサポートしてくださったこと、本当にありがたかったです。このプロジェクトを通して、自分たちの考えの甘さや、責任感を持つこと、チームの連携の難しさ、自分の意見を人に伝え納得してもらうことの難しさなど、本当に多くのことを学ぶことができました。プロジェクトを行う前とは比べられないほど成長できた自信があります。ここまで成長できたのも、皆様のご厚意があったからに違いありません。まだ、案内板改善に関しても、カフェ巡りマップ作成に関しても終わってはいませんが、ここまで、私たちを見放さずに協力してくださり、誠にありがとうございました。最後まで私たちのプロジェクト活動にお付き合いいただけましたら幸いです。

［編者追記］　水戸駅北口バスのりば案内図　プレスリリース

鈴木　敦

チーム成立から約 11 か月後の 2018 年 3 月 20 日、水戸駅北口バスのりば案内図は無事設置工事を終えた(図 1～6)。

プロジェクト実習は、通常 12 月の活動報告会を経て 1 月のリフレクション授業を以て完了となる。本プロジェクトは、3 月後半に入ってもなお活動が続くという前代未聞の進行となったが、幸いにして何とか年度内完成に漕ぎ着けることができた。ご支援を賜った皆様方に篤く御礼申し上げます。

図 1：課題提案会（2017 年 4 月 21 日）

図 2：基本構想策定（2017 年 5 月 19 日）

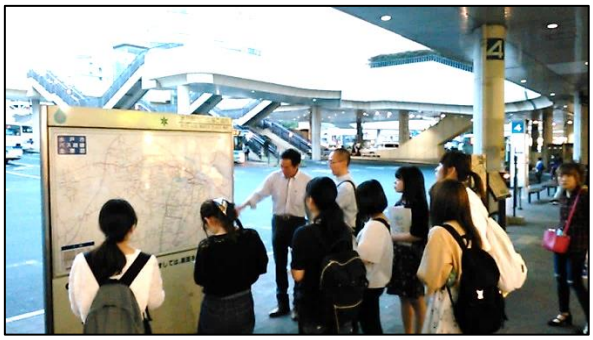


図 3：現地調査（2017 年 6 月 26 日）

図 4：小佐原先生のご指導（2017 年 10 月 10 日）

図 5：設置作業（2018 年 3 月 20 日）

図 6：完成！（2018 年 3 月 20 日）

完成を受けて水戸市役所様がプレスリリースをご準備下さり、チームメンバーの代表が現地で取材を受けることとなった（図 7)。当日の模様は、残念ながら刊行期日との兼ね合いでこの抜刷には盛り込むことができなかったが、2018 年度にプロジェクト演習の HP にアップする完全版の報告書には収載する予定である。

図７：プレスリリース通知文

水戸市マスコットキャラクターみとちゃん

水戸市ニュースリリース

平成30年３月19日

市政記者各位

水　戸　市

水戸市初！大学生の考案で水戸駅北口バス案内板を一新！シンプルで分かりやすいデザインにリニューアル！

水戸市では，学生たちの新鮮な発想を公共交通の利用促進にも活用することを目的として，茨城大学と連携した取組を進めています。

この度，同大学人文社会科学部が開講している課題解決型授業（Project Based Learning）「プロジェクト実習」の中で，水戸市を運行する路線バスの利用促進に取り組んできた10人の学生の発案により，水戸駅北口のバス案内板が大幅にリニューアルされることになりました。

従前のバスの案内板は，複雑な情報を網羅的に掲載していたため，路線バスに馴染みのない方にとっては難解で分かりにくいものとなっていました。

新しいバス案内図は，普段，路線バスを利用しない方にターゲットを絞り，複雑な情報を取り除き，行き先を限定した上で，「どの乗り場から乗車すればよいのか」，「運賃はいくらなのか」といった利用者が求めているであろう情報を，シンプルに，かつ，分かりやすく配したものとなっています。

なお，バス事業者をはじめとする関係各者との協議や，財源として利用した茨城県公共交通活性化会議の地域公共交通利用促進活動助成金の申請手続きなど，様々な事務を，学生自身が行いました。

１　新しい案内板の設置日

平成30年３月27日（火）　11時00分

※リニューアルに携わった10人の学生のうち４人が，現地で取材に応じます。

２　案内板の設置場所

水戸駅北口４・５番乗り場付近（裏面を参照）

３　案内板の規格

全長：縦２m10cm×横１m89cm

板面：縦１m７cm×横１m77cm

４　新しい案内板の特徴

（1）複雑な情報を整理して，水戸駅北口を起点とする路線バスの情報に限定

（2）路線バス利用者の主要な行き先を選定してその最寄りのバス停のみを掲載

（3）各バス停までの運賃を掲載

（4）水戸駅北口バス乗り場には６つの乗り場があるので，どの乗り場から乗車すればよいかを案内

（5）利用可能な交通系ICカードの情報を掲載

（6）関連ホームページをQRコードで案内

従来のバス案内図

新しいバス案内図

【お問合せ先】
課　　名　　市長公室　交通政策課
担　当　者　　須藤　文彦
電 話 番 号　　029－291－3804
Ｅ－mail　　transport@city.mito.lg.jp

Ⅲ：年度末活動報告会

１：趣旨と経緯

２：2017 年度活動報告会のテーマ設定

３：2017 年度活動報告会の構成

４：ポスターセッション

５：活動報告会

Ⅲ:年度末活動報告会

鈴木　敦

1:趣旨と経緯

プロジェクト実習では、2012 年度の初開講以来、年度末に本学水戸キャンパスにおいて学外の方にもご参加戴く形で活動報告会を開催している。意図する所は、以下の 4 点である。

①履修生のリフレクションとプレゼンテーション実習

②教員による授業運営と授業改善の報告

③お世話になった方々への御礼

④学内と学外への情報発信（広報）

例年、会の前半は「履修学生がどんな活動を行い、そこから何を学んだか」の発表と質疑応答、後半は年ごとにテーマを設定してトークセッションや交流会等を行い、年度ごとの特色を出すことに努めてきた。

2:2017 年度活動報告会のテーマ設定

2017 年度は、活動報告会全体のテーマを「取り組む・学ぶ・伝える」とした。

開講当初（2012 年度～2013 年度）のプロジェクト実習は、学生は「プロジェクトの遂行」で、教員は「授業の運用」で手いっぱいの状態であった。勢い活動報告の内容も「何をしたか」に終始し、肝心の「活動から何を学んだか」への言及は希薄であった。この反省に立って、2013 年度からは「学び」を強く意識させるよう努め、教材ならびに授業運営の改善を進めてきた。

開講 6 年目となる 2017 年度は、従来の「如何に取り組んだか」「如何に学んだか」を踏まえて、さらに「如何に伝えるか」にまで意識を向かわせることとした。具体的な施策の中核は、本書Ⅰ－2－(2)－②に記した「総合プレゼン講座」の新設である。今年度の活動報告会全体のテーマである「取り組む・学ぶ・伝える」は、正にその成果を問おうとするものである。

なお、プロジェクト実習の概要ならびに授業改善については、過去の活動報告書でもその都度触れてきたが、この夏に独立の文章としてまとめることができた（鈴木敦・神田大吾「就業力育成支援 PBL 科目『プロジェクト実習』の 6 年―地域志向教育科目『プロジェクト演習』への移行に向けて－」茨城大学人文社会科学部紀要『人文コミュニケーション論集』第 2 号　2018 年 3 月 http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/bitstream/10109/13525/1/20170213.pdf）。併せてご参照戴ければ幸である。

3:2017 年度活動報告会の構成

2017 年度の活動報告会は、「ポスターセッション」と「報告会本体」のみのシンプルな構成とした。一方で、報告会本体においては「伝えることができたか」を検証することに時間を割いた。具体的には

①会場の投票による「最も伝わった報告」の選出（本章 5－(3)ならびに(7)）

②総合プレゼン講座をご担当下さった渡辺しのぶ先生による講評（本章 5－(6)）

の 2 点である。以下、時系列に沿って記す。

4:ポスターセッション

活動報告会の開会に先立ち、恒例のポスターセッションを行った（図 1～4）。例年通り、歴史・文化遺産コース院生の支援の下で各チームが A1 判 2 枚組でポスターパネルを作成し、人文学部講義棟廊下に張り出すと共に長机に成果物を並べ、参観者に自チームの活動を紹介するという形式である。「伝える」をテーマとする今年度は、例年にもまして積極的な取り組みが求められた。

プロジェクト実習履修 6 チームに加えて、今年度も水戸農業高等学校食品化学科チームに出展して戴いた。高校の授業時間との兼ね合いで、ポスターパネルの製作だけは本学側で行ったが、ポスター原稿の製作から成果物の展示、会場での説明まで、大学生チームに互して立派にこなしてくれた。

各チームが作成したポスターは、本書Ⅱ－2～7 のチーム別報告文の項にそれぞれ「年度末活動報告会のポスターパネルと発表風景」として、また茨城県立水戸農業高等学校生徒が作成したポスターは、本章 5

ー(5)に図 26 として収載している。

図 1:ポスターセッション会場(準備作業中)

図 2:ポスターと成果物の展示(準備作業中)

図 3:茨城県立水戸農業高等学校のコーナーで
新堀俊博先生と高校生チーム

図 4:D-CEP チームのコーナーで
ジャブコ・ユリヤ先生と茨城キリスト教大学生チーム

５：活動報告会

活動報告会は、例年通り人文学部 10 番教室で開催した。

内容確定後速やかに大学の HP（ https://www.ibaraki.ac.jp/events/2017/11/151130.html ）に掲載すると共に、教育学部・岩佐淳一教授を介して情報文化課程アート文化コースの川又花奈さんにチラシ（図 6ー右）を作成して戴き、広報に努めた。

また、会場設営と運営・撤収についても例年通り人文学部歴史・文化遺産コースの院生・学生にアルバイトで協力して戴いた。

人文学部執行部ならびに事務方からも、例年通りの手厚いご支援を戴けた。

以上、沢山の方々のご支援を戴き、報告会はほぼ例年並みの 126 名の参加者を得て開会となった（図 5)。以下、式次第（図 6ー下）に沿って列記する。

図 5:会場風景

図 6：活動報告会チラシ並びに式次第

右：チラシ（表面）

下：式次第（チラシ裏面データ）

平成 29 年度　プロジェクト実習　活動報告会

0　ポスターセッション（人文社会科学部講義棟）　12:20－12:50
プロジェクト実習受講全 6 チームならびに茨城県立水戸農業高等学校食品化学科の活動報告

1　開会挨拶
田中裕（人文社会科学部副学部長・評議員）　13:00－13:10

2　趣旨説明
鈴木敦（プロジェクト実習担当教員）　13:10－13:25

3　評価の観点と投票方法の説明
神田大吾（プロジェクト実習担当教員）　13:25－13:35

4　プロジェクト実習活動報告第一部　13:35－14:20
(1) KITAIBA Art Project（キタイバ アート プロジェクト）チーム
(2) さとみ・あいチーム
(3) D-CEP（ディーセップ）チーム

5　休憩（10 分）　14:20－14:30

6　プロジェクト実習活動報告第二部　14:30－15:10
(4) Domaine MITO（ドメーヌ ミト）チーム
(5) チームみなと☆ミライ
(6) いばっピ団チーム

7　投票　15:10－15:20

8　水戸農業高等学校活動報告　15:20－15:40
(1) 新堀俊博（食品化学科教諭）
(2) 食品化学科生徒

9　講評
渡辺しのぶ　（ラシャンス　代表）　15:40－15:55

10　表彰式・総括と閉会挨拶
佐川泰弘（人文社会科学部学部長）　15:55－16:15

司会：①～③　川田　綾香（茨城大学２年）・山本　麻由（茨城キリスト教大学２年）
④　小宮山弥来（茨城大学２年）・髙土　夏花（県立水戸農業高等学校１年）
⑥・⑦　神田　紗帆（茨城大学２年）・塩畑　見咲（茨城大学２年）
⑧～⑩　今川茉津美（茨城大学２年）・鈴木　真由（茨城大学２年）

(1)式次第 1： 開会挨拶

図 7: 田中副学部長挨拶

田中　裕（人文学部副学部長・評議員）

皆様、こんにちは。

ただいまご紹介にあずかりました、人文社会科学部副学部長の田中でございます。当学部では、教務委員長とプログラム運営委員会の統括役を兼ねて仰せつかっております関係で、私より開会のご挨拶を申し上げます。

昨年もこの席でご挨拶をさせていただきましたが、今年もプロジェクト実習の活動報告会を無事開催できますことを大変喜んでおります。当科目にご協力を賜りました関係者の皆様、関係教員、そして本日運営に協力をしてくれている学生スタッフに、まずは厚く御礼を申し上げます。

今回活動報告会をさせていただきます「プロジェクト実習」ですが、平成 22 年度に文部科学省の大学生の就業力育成支援事業が採択をされまして、それを契機に置かれました「根力育成プログラム」の、中核的な科目という位置づけでございます。

いま述べました「就業力」と申しますのは、「就職力」とは異なりまして、就職の後に社会人として活躍していくために必要な知識や技能をはじめ、課題解決能力、職業観、それから人生観まで、より広く深い力をつけるというものでございます。

茨城大学では、このような「就業力」を育てるプログラムを「根力育成プログラム」として置き、全学的に取り組むことといたしました。とりわけ当プログラムでは、基礎的な素養はもちろんですが、「社会生活力」とか「行動力」、「思考力」、それから「チームワーキング能力」などの要素を育くむことを掲げてまいりました。

プログラムの入り口は全学統一のものでして、大学に入ってからすぐに受ける最初のゼミナール形式の授業を「フレッシュマンゼミナール」と位置づけ、就業力をどうつけていったらいいのかといったガイダンスから学びのトレーニング、自発的学びへの意識付けを行い、その後に社会人として要求される能力を養成する科目が置かれる構造になっており、その後、学生自身が選択して「チームワーキング能力」、「課題解決能力」を鍛えられるように置いているのがこの「プロジェクト実習」でございます。当科目は一般的に PBL と呼ばれる「プロジェクトベースドラーニング」に基づいており、例えば、企画を考えてそれを遂行していくとか、地域に参画して、そこの問題を認識して課題を解決していくということを、自ら主体的に考えながら学んでいく課程そのものを授業としております。実際に現実の地域社会において問題を認識して課題を発見し、そしていかに課題解決に導くか、実際に地域の実態に触れ、さまざまな人々と考えて、共に歩んでいくという積極性が必要となってまいります。

その意味で、プロジェクト実習は、まさにこの社会においてみんなと共に生き抜いていくために必要な能力を養うという、当プログラムの目玉の科目となっております。学生自身が何を考え、どう行動したのか、本日の活動報告が大変楽しみでございます。

なお、6 年間にわたり運営してきました当科目ですが、全学の「根力育成プログラム」の科目としては、今回報告を担当していただく学生が、最後のプログラム受講生とになります。これまでご支援・ご協力をいただきました多くの方々に改めて厚く御礼申し上げます。

ただし本学部としましては、当科目を通じて育まれてきた地域との絆や、学生の主体的な学びへの蓄積・実績は非常に貴重なものと考えております。と申しますのは、本年度より人文学部を改組して発足したばかりの人文社会科学部におきましても、文系の学習を通じて、地域の持続的発展に積極的に関わり、活躍できる人材を幅広く養成するということを到達目標として掲げさせていただいているからでございます。

ここで、新カリキュラムの特徴を述べさせていただきますと、新学部では、とかく「たこつぼ的」だとの批判を浴びがちな文系教育について、一つの専攻だけの学びにとどまらない、複眼的な視野や、プラス α の実践力を身に付けるため、「メジャー・サブメジャー制」を導入しました。主専攻としての「メジャー」のほかに、副専攻として「サブメジャー」を組み合わせ、その 2 つが卒業要件となるという、日本では他に例を見ない画期的なカリキュラムです。その肝となる「サブメジャー」には、7 つの「メジャー」が用意するサブメジャー・プログラムのほか、実践力養成を主眼とする 4 つの「サブメジャー専用プログラム」を用意しておりまして、その中に、地域に向き合い、その課題に取り組むことを通じて「課題解決能力」などを養成する「人文社会科学部地域志向教育プログラム」を置くことといたし

ました。その中核科目「プロジェクト演習」に、本日御報告する「プロジェクト実習」で積み重ねてきた豊富な実績や経験を引き継ぎたい、と考えております。

これからは学部という身の丈にあった運営にはなりますけれども、卒業要件として選択できるようになったという点で、これまで以上に大学教育のなかに組み込まれました。そのような意味で、私どもは、より発展的に位置づけられたものと考えております。

これまで多くの方に支えていただきまして、当プログラム、当プロジェクト実習を運営させていただいてまいりましたが、これまで以上にご高配を賜りますようお願い申し上げまして、開会のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

(2)式次第 2：趣旨説明

鈴木　敦（プロジェクト実習担当教員）

それでは、スライド（図 8・9・14・15）とお手元にお配りした資料冊子（図 10－12）を使いながら、授業紹介と報告会の趣旨説明を申し上げます。

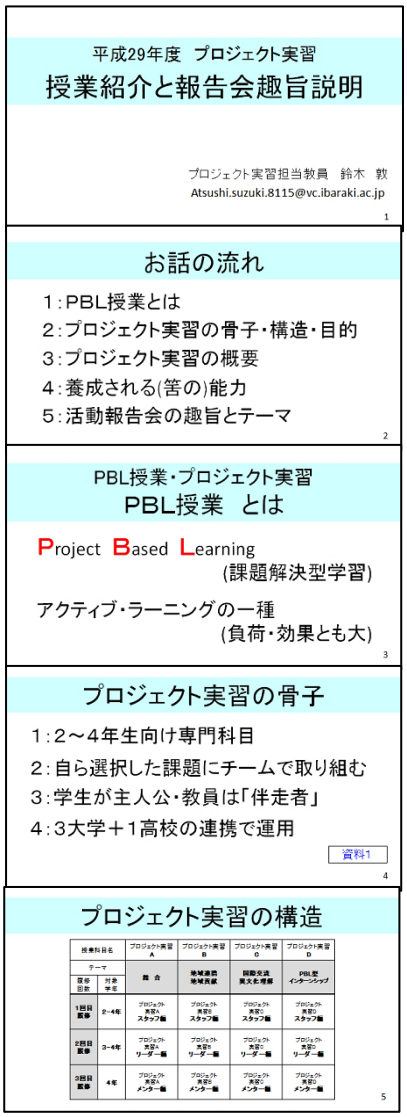
本日のお話の流れです。まず PBL 授業というのはどういうものなのか。次いで、プロジェクト実習というのはどういうものなのか、そこで養成されるはずの力とはどういうものなのか。最後に、本日の報告会の趣旨とテーマということでご説明致します（図 8 スライド 2)。

まず、PBL 授業でございますが、Project Based Learning の略で、日本語にすると課題解決型学習ということになります。昨今、盛んに導入が言われているところの Active Learning、すなわち、教員が教壇から一方的に話すのではなくて、学生が自ら学ぶというやり方一般を指しまして Active Learning と申しますが、そのうちの一つである技法です。Active Learning という技法の一つが PBL というものでございます。Active Learning の中では一番負荷も大きいし、その分、効果も大きいと言われております（図 8 スライド 3)。

プロジェクト実習の骨子でございます（図 8 スライド 4)。

お手元の資料冊子の 4 ページに、ポンチ絵風にまとめたものを掲載しております（図 10)。2 年－4 年向けの専門科目である。自ら選択した課題にチームで取り組む。学生が主人公で教員は伴走者である。教員が主導するのではなくて、まずは学生がやる。それを教員は生暖か～く見守りながら、いよいよ困ったときには手助けをするというものです。3 大学 1 高校の連携で運用している。茨城キリスト教大学、常磐大学、県立水戸農業高等学校、そして茨城大学の 4 校で運用しております。

図 8：趣旨説明 PPT①



構造なのですが、プロジェクト実習 A が「総合」、B が「地域連携・地域貢献」、C が「国際交流・異文化理解」、D が「PBL 型インターンシップ」という 4 カテゴリーで運用しております（図 8 スライド 5)。当初は、A、B、C、D とも全て茨城大学で開講でしたが、2 年前から C については茨城キリスト教大学さんのほうで主として開講していただくという格好になっております。それでお互いに学生が自分が履修したいカテゴリー、例えば C を履修したければ茨大の学生は茨キリさんへ行くし、茨キリの学生さんが A、B、D を履修したければ茨大に来るという形で、動きながらやっております。

プロジェクト実習の目的でございますが、Project Based Learning ですので、プロジェクトに取り組みます。当た

り前なのですが、プロジェクト自体が目的ではございません。プロジェクトへの取り組みを通じて、実践的・多面的に学ぶことが目的である。概して、プロジェクトの遂行に追われて、プロジェクト自身が目的になってしまうということがありがちですが、そうではないのだよということを常々気をつけながらやるようにしております（図 9 スライド 6）。

この授業、見方を変えますと、Active Learning の実践なのですが、地域連携、高大連携、異文化理解活動、先ほど田中からもお話がありましたように、こういうものの実践という形にもなるのかと思います（図 9 スライド 7）。

茨城大学版の社会人基礎力、これを「根力」と呼んでおりますが、茨城大学版社会人基礎力育成をした結果として、各種の連携ができる。各種の連携の結果として、茨城大学版の社会人基礎力が育成されるという構造です。

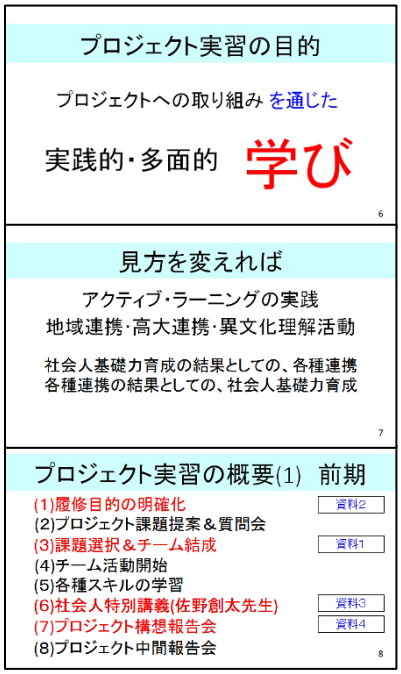


図 9：趣旨説明 PPT②

この後、概要を時系列に沿ってお話しいたします。先ほどの図面（図 10）、この右端のほうにざっと書いてありますが、まず前期です（図 9 スライド 8）。4 月に開講しまして、夏休み前まで、大まかに言ってこういうようなことをやっております。時間の都合でかいつまんでご説明致します。まず履修目的の明確化、もちろん学ぶことが目的ですからこれはとても大事です。

次に、隣の白黒の図をごらんください。茨城大学版社会人基礎力（根力）構成要素ルーブリック（図 11）というものがあります。ここにぐらっといろいろな能力が書いてあって、1、2、3、4 と段落分けして、こういうところだったら何番というような表になっております。昨今、大学教育で非常に多用されるようになってきたルーブリックですが、これでまず自己分析をする。自分の力は今どの辺にあるのかというのを確認してもらいます。

茨城大学版社会人基礎力（根力）の構成要素ルーブリック

	構成要素		4	3	2	1
1 基礎的素養	読み	文章読解能力 論理的思考力 分析力	難解で長大な文章でも、論旨を的確に捉えることができる。筆者の主張を論理的に理解・分析し、自らの見解を組み立てることができる	比較的平易で短い文章であれば、論旨を的確に捉えることができる。筆者の主張を理解・分析し、自らの見解を組み立てることができる	比較的平易で短い文章であっても、主張を読み通すことが難しい。たとえ読み通せても、筆者の主張を理解・分析することができない	比較的平易で短い文章であっても、主張を読み通すことができない。たとえ読み通せても、筆者の主張を理解・分析することができない
	書き	文章作成能力 論理的思考力 分析力	特定のテーマについて、論理的に思考・分析することができ、必要な資料をルールを踏まえて提示できる。4,000字以上の論旨が明確な文章に起 million ることができる	特定のテーマについて、論理的に思考・分析することができ、必要な資料をルールを踏まえて提示できる。4,000字以上の文章を書いた経験は無い	特定のテーマについて、短い文章を書くことができる。論理的な思考・分析や、必要な資料をルールを踏まえて提示することは難しかろ	「つぶやき」的に短い文章を書くことはできるが、論理的な思考や分析を提示することはできない
	パソコン	基本的なＩＴ能力	基本的なソフトの操作法やネット利用のルール等について、初心者に分かりやすく説明することができる	基本的なソフトの操作法やネット利用のルール等について、基本的にマニュアル無しで自力で対応できる	基本的なソフトの操作法やネット利用のルール等について、マニュアルを参照しながら自力で対応できる	基本的なソフトの操作法やネット利用のルール等について、自力では対応できない
	話す	説明能力 プレゼンテーション能力 コミュニケーション能力	会の場で、相手の理解度や受け止め方を聞き取りながら、説得力のある説明・魅力的なプレゼンができる。質問や批判をコミュニケーション的に受け止めることができる	会の場で、論理的な説明やプレゼンができる。アイコンタクト等、聞き手とのコミュニケーションにも躍ける。質問や批判には思わず身構える	プランクな場では、論理的な説明やプレゼンができる。アイコンタクト等、聞き手とのコミュニケーションにもふれ、質問にも平静心で対応できる	親しい人たちとの気楽な会話・コミュニケーションはできるが、第三者への論理的な説明やプレゼンはできない
2 社会生活力	生活力	自立した生活を実践できる力	起床・食事・登校・各種活動から就寝までの、健康的で安定したペースで送ることができる。社会生活に必要な諸手続き、確実にこなすことができる	起床・食事・登校・各種活動から就寝までのペースの乱れが多いである。社会生活に必要な諸手続き、確実にこなせない（うっかり忘れることがある	起床・食事・登校・各種活動から就寝までのペースの乱れは慢性的である。社会生活に必要な諸手続き、確実にこなせないことが多い	起床・食事・登校・各種活動から就寝までの、健康的で安定したペースで送ることができない。社会生活に必要な諸手続き、確実にこなすことができない
	人間関係構築力	生活を送るために必要な、人間関係を円滑にするための力	生活を送るために必要な、人間関係を円滑にするための力	思慮的熟慮いやすぎな対応をしない等の基本ルール、並びに振舞や場に応じた言葉遣い・態度がふれる等の基本マナーを、ほぼ確実に遵守できる	思慮的熟慮いやすぎな対応をしない等の基本ルール、並びに振舞や場に応じた言葉遣い・態度がふれる等の基本マナーを、しばしば遵守できない	思慮的熟慮いやすぎな対応をしない等の基本ルール、並びに振舞や場に応じた言葉遣い・態度がふれる等の基本マナーを、通常守できない
	情報収集力	生活を送るために必要な情報のあぶりだし、入手方法を把握する力	書籍を含む各種メディアや人脈等を広ふい今有効に活用して、情報の入手方法を的確に把握し、必要な情報を確実に入手できる	情報のあるべき情報を入手するための新たなルートの開拓方法も把握している。しかし、各種メディアの活用や人脈等が不十分で確実性に躍ふける	生活を送るとって必要な情報のあるべきものが分からない。どうすれば情報を入手できるかも分からない	生活を送るとって必要な情報のあるべきものが分からない。どうすれば情報を入手できるかも分からない
3 行動力	主体性	物事に進んで取り組む力	物事を自分の問題として受けとめ、指示や命令・切迫した必要などが無くても、自ら的確に判断して取り組むことができる	明確な義務を伴う事業については、責任感から考えて取り組むことができる	自らの利害や、興味関心が強い事柄については、自主的に取り組むことができる	指示や命令・切迫した必要があっても、なかなかに他人に任せていくことを考え、興味的に取り組むことができない
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	立場の異なる人や状況前の人にも、興味について説得力のある説明をし、協力を仰ぐことができる。また、自分の意見に説得力を伴う形で表明することができる	学生同士など、立場の近い人に対しては、ほぼ親しくなり、興味を引きつけて説明し、協力を仰ぐことができる。また他のメンバーへの気配りできる	親しい友人に対しては、興味について説明し、協力を仰ぐことができる	第三者に対して興味を説明し、協力を仰ぐことができない。親しい友人に対しては、興味について説明し、協力を仰ぐことができる
	実行力	自的を設定し確実に行動する力	明確な目的を設定し、自分の能力や客観的な諸条件を的確に踏まえた計画を立て、迅速かつ効率的に行動していくことができる	目的を設定し迅速に行動していくことができるが、計画性に難があり、迷走することもある	目的を設定し、行動して行くことができるが、迅速さや効率性に難があり、所期の目的を達成できないこともままある	目的を設定できないか、あるいは設定してもすぐ迷走して目的を達成に向けて確実に行動することができない
	対応力	物事に流されず疑問に思い主体的に対応する力	物事の多面・声の大小に拘らず、客観性や自らの定見に照らして疑問がある事柄には、関係情報を検討・確認した上で主体的に対応する	複雑者の多面・声の大小に拘らず、自分の意見に合わないものであれば反対の意思表示をすることができる	複雑者の多い意見や、「声の大きい」意見には、疑問を感じることもあるが、敢えてを捨てることはしない	複雑者の多い意見や、「声の大きい」意見には、疑問を感じず従ってしまいがちである
4 思考力	課題発見能力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	現状を分析し、背景や原因を追及した上で、事態を解決・改善するためには何が必要かを把握し、明確に言語化して第三者に伝えることができる	現状を分析し、背景や原因を追及した上で、事態を解決・改善するためには何が必要かを把握できるが、明確に言語化することができない	現状を分析し、背景や原因を追及することはできるが、事態を解決・改善するためには何が必要かを把握できるが、明確に言語化することはできない	現状を、疑問点した諸事象の集合としてしか認識できず、分析や課題発見ができない
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	解決の為のプロセスを全体的に考え、最後の時を選んで解決までの具体的手順・作業内容・時間配分等を、個人活動のレベルで構想できる	解決の為のプロセスを立案し、解決までの具体的手順・作業内容・時間配分等を、個人活動のレベルで構想できる	解決の為のプロセスを立案し、解決までの道筋を構想できる	解決の為のプロセスを立案することができない。或いは、立案はできるが解決までの道筋を構想できない
	想像力	課題が抱える影響・課題解決方法の新奇性、ものごとをイメージする力	課題自体や解決に向けた取り組みがもたらす影響はいったい？目に見えない物・ことについて明確なイメージを持ち、その得失を的確に把握する対応ができる	「目に見えない物」をイメージ、その得失を的確に対応を考える。イメージの多様性と明確さに難ふける。的確な対応策を組めない	「目に見えない物」をイメージ、その得失を的確に対応を考える。必要性は認識しているが、明確なイメージを組けない	「目に見えない物」をイメージしていっても？目に見えない物」について イメージすることができない。また イメージする必要性を自覚しない
	課題解決能力	課題の本質を捉え、適切な解決に導く力	課題の本質を捉え、解決のための動作を的確に上とて、具体的な取り組みに必要な条件を整えて確実に解決に導くことができる	課題の本質を捉えることができ、解決のための動作を的確に上とて、具体的な取り組みに必要な諸条件の整備に難ふける。失敗しも多い	理解を客観的に分析して課題の本質を捉えることができるが、解決のための動作を的確に上とることができ、適切な解決に導くことはできない	周辺情報や個人的利害・感情等に囚はれて、課題の本質を捉えることができず、課題解決に取り組めない
5 チームワーキング能力	発信力	自分の意見を わかりやすく伝える力	自分の意見を、相手の立場や前提とする知識・社会的常識の違い等も見据えたうえで整理し、分かりやすく説得力のある内容・話法で伝えることができる	自分の意見を論理的に整理し、知識・文化の共有ふさい相手に対しても、明確な内容・話法で伝えることができる	自分の意見を、家族や友人等、親密ふける知識・文化を共有する相手に対しては、それ程通性に欠熟しつつ分かりやすい内容・話法で伝えることができる	自分の意見を整理し、分かりやすい内容・話法で伝えることができない
	傾聴力	相手の意見をＴ寧に聞く力	話者が話しやすい環境を作り、適切なタイミングで内容の確認を行い、意図を汲み取りつつ、最後まで集中力を切らさずに聞くことができる	話者が話しやすい環境を作り、最後まで集中力を持って聞くことで、話の筋を正確に把握できる	一見最後まできちんと聞いているが、集中力が続かず、話の筋を正確に把握できない	目を逸らした話の腰を折ったりして、話者にとって話しにくい条件を作ったり、注意力を切らして最後まできちんと聞くことができない
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	意見の違いや立場の違いを理解する力	自分と異なる意見・立場があることを認識できるアンバイバイ(無責に受け入れることができる	自分と異なる意見・立場への違和感が強くアンバイバイを受け入れることは若干困難ふける	自分と異なる意見・立場が存在することを許容できない。アンバイバイを攻撃を受けたあと、受け入れることができない
	状況把握力	自分と関係の人々や物事との関係性を理解する力	組織における自分の責務を正確に認識し、自分の意思や言動が相手にが影響するかを考慮しつつ、組織全体を視野に臨機応変な対応ができる	組織における自分の責務を正確に認識し、組織全体を視野に入れて行動しているが、相手への影響を気にしすぎて臨機応変な対応ができない	組織の構成員としての自分という意識があるが、自分の意思や言動が相手にが影響するかという意識にとしく、臨機応変な対応ができない	「組織の構成員としての自分という意識が無く、物事を自分ひとりで考えられない ために、臨機応変な対応ができない
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力	社会や規則は自論、チーム内での取り決め等についても、決められたことは不本意でも遵守する。高い倫理観を持ち、自ら公平公正に努める	社会・規則・チーム内の取り決め等、明確に決められたことは従うが、公平公正等、本人の倫理観に照ら事柄への意識は高いとは言えない	原則を伴う社会や規則等は遵守するが、チーム内の取り決め等は軽視する。公平公正の意識の低く、仕 ＥＩＣＩ 我自分本位に陥る	時間厳守等、社会常識レベルの取り決めも遵守できない。公平公正への意識が低く、しばしば我自分本位に陥る
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力	ストレスを感じて心疲労の傾向が見られたとき、平静心で冷静な判断を下し、つつ課題を遂行できる。また、気晴らしの方法を持っている	ストレスを感じても平静心で冷静な判断を下しつつ課題を遂行できる。しかし、気晴らしの方法はなく、そうすることはできず、不調を継続する	ストレスを感じても我行出さず、親しい友人に対相し課題を遂行できる。しかし、気晴らしの方法はなく、終始イライラして攻撃的になる	ストレスを感じると、適切な判断や課題遂行ができなくなる。気晴らしの方法もないため、終始イライラして攻撃的になる

（左）図 10：プロジェクト実習のご紹介

（右）図 11：茨城大学版社会人基礎力（根力）構成要素ルーブリック

お手元の資料冊子の 6 ページをご覧ください。個人の達成目標ルーブリック（図 12）というものです。お手元の紙媒体では 1 ページに収めるために各欄を大分圧縮していますが、実際には電子媒体で提供し、必要に応じて適宜拡大して使ってもらっています。

春先に、この黄色い部分に、今年度のプロジェクト実習を履修することによって、こういう能力についてこのぐらいまで向上させたいのだという目標を書いてもらいます。次いで、夏休み明け、10 月のころに、だいだい色のところに中間時点での自己評価を記します。最後に、この報告会が終わって 12 月、1 月のリフレクション授業のときに、黄緑のところに最終的な達成度と今後の課題を書き込むということをしております。

個人の達成目標ルーブリック　学籍番号:　氏名:

(1) 根力の構成要素			(6) 比重	(3) 卒業時の理想像	(5) 2017年度末に できればここまで達成したい	(4) 2017年度末に ここまでは達成したい	(2) 現状

＊2017年度のプロジェクト実習の履修を始めるに当たり、現状と年度末の達成目標を文字にして確認しておきましょう
(1)の水色部分に、茨城大学版社会人基礎力(根力)の構成要素ルーブリックで選んだ「プロジェクト実習履修を通じて強化したい項目」をコピーして下さい
(2)の黄色部分に、自分の現状を記して下さい。根力の構成要素ルーブリックの文言を踏まえつつ、自分の言葉で記して下さい
(3)の黄色部分に、「2017年度末での実現可能性」とは一切関係なく、「卒業時に、こうなれたら理想・こうなることが目標」という姿を記して下さい
(4)の黄色部分に、「2017年度末には、ここまでは実現したい」という事柄を記して下さい(ハードルが高くなりすぎないように設定するのがコツです)
(5)の黄色部分に、「2017年度末に、できればここまで実現したい」という事柄を記して下さい(ちょっと大変だけれど、頑張れば何とか・・・というレベルを設定するのがコツです)
(6)の桃色部分に、それぞれの項目にかける比重を10刻みで全体が100になるように記して下さい(例えば、上から順に「60」「30」「10」という具合にメリハリをつけるのがコツです)
＊オレンジ色部分は10月末時点の・黄緑部分は、年度末のリフレクションで使用します。当面、空欄にしておいて下さい

図 12:個人の達成目標ルーブリック

次に課題選択とチーム結成です。また先ほどの図面（図 10）にお戻りください。その下半分です。

プロジェクト課題というのは、学外の協力者の方々からご提案いただくもの、それから、履修生自身が自分でやりたいことを提案するもの、さらに教員がこんなのどう？と提案するもの、その 3 つのラインからきまして、幾つものプロジェクト課題が提案されます。その内で、これやりたいという学生が 5 人以上集まったところがチームとして成立するという形です。

先程の図面（図 10）の下半分、ピンクでチーム名が書いてある課題は、無事チームが成立して取り組みが行われたものです。それがないところは、チームが成立しなくて没になってしまった課題であり、特に学外からご提案戴いた場合は大変申し訳ないことになってしまいます。

それから、社会人特別講義、これは昨年度からスタートしたもので、実社会で活躍していらっしゃる方にご講義をいただいて、「社会で活動する」ということに実感を持ってもらうことを目的としています。昨年度は金原 PR 企画研究所所長の金原榮先生にお願いしました。今年はパソナの佐野創太先生にご登壇いただきました。佐野先生には本日お越しいただく予定で、お手元の冊子の 7 ページに資料を入れておいたのですが、急用のためキャンセルとなってしまいました。大変残念です。

そして、プロジェクト構想報告会です。開催時期としては前期の中盤ぐらいになりましょうか。チームとして具体的なプロジェクト構想をまとめた時点で、報告をします。

お手元の資料冊子の 8 ページをご覧ください。その 1 です（図 13）。いただくプロジェクト課題というのは非常にざっくりしたものです。2015 年度水戸市役所様からいただいた課題は、青い字で記された「水戸市の公共交通活性化」というものでした。それを 2015 年度のチームは、どんどんと絞っていって、最終的には一番下の赤い字、茨城交通さんの市内バスの時刻表の改善という具体的なプロジェクトに絞り込みました。チームの活動は、まず提示されたざっくりとした課題を、具体的なプロジェクトに絞り込む所からスタートするのです。

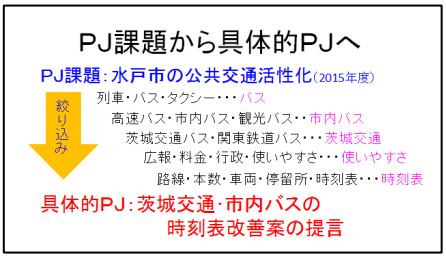


図 13：具体的なﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄへの絞り込み

ちなみに、今年度も水戸市役所様から全く同じお題をいただいております。それに取り組んだのが「いばっピ団」チームです。もともとのプロジェクト課題は同じで、2015 年度は茨城交通さんの時刻表改善提案。では 2017 年度のメンバーは一体どういう絞り込みをしたのかという比較をしていただくと、面白いかと思います（図 25 スライド 6）。

8 ページの下半分から 9 ページにかけて記しているのは、今年度から導入した「プロジェクト構想書作成フォーム」です（本書Ｉ－図 2）。「ざっくりとした課題から具体的なプロジェクト構想へと絞込む」と口で言うのは簡単ですが、漫然と思いを巡らしていてもできるものではございません。このフォームに記された項目を一つ一つ具体的な文言で埋めてゆくことで、絞り込んでゆきます。

構想報告会では、9 ページ下半分に示した「プロジェクト構想相互評価ルーブリック」（本書Ｉ－図 3）で各チームのプロジェクト構想の「でき」を学生たちが相互に評価し合います。その結果を自分たちのチームのプロジェクト構想にフィードバックして、さらに一段絞り込んでいくという段取です。

夏休みです（図 14 スライド 9）。夏休み中にどういう活動をするのかしないのかは、基本、チームの自由意思に任せています。ただし、プロジェクト実習 D に限ってはインターンシップが必須の活動として組み込まれております。それから、スライドの 11、12、13。これはプロジェクト実習単体ではなお足りないスキル部分を補強するために、別途、先生にご登壇をいただいて開いている授業です。そのうち、本日は総合プレゼン講座、今年、初開講ですので、これについてご説明したいと思います。

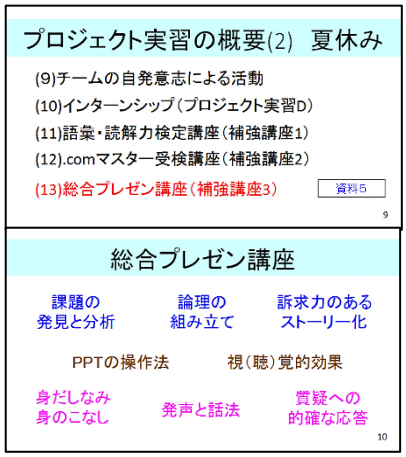


図 14：趣旨説明 PPT③

お手元の資料冊子の 10 ページをご覧ください（本書Ｉ－図 8）。こういうシラバスで授業をしていただきました。

プレゼン講座というと、ついついパワーポイントの操作法講座というふうにいきがちなのですが、それはほんの一部でしかない。スライドをご覧ください（図 14 スライド 10）。青い字で書いたのが第 1 段階です。まずは課題を発見して分析しなければなりません。さらにそれを論理的に組み立てる必要があります。他の人にわかってもらうわけですから、訴求力のあるストーリー化をする必要がある。その上で初めて、パワーポイントをどう作りどう操作するかという第 2 段階の話が出てくるわけです。それも、単純に操作法を知っていればいいというものではなくて、視覚的な効果等々を踏まえながら操作をする必要がある。その上でピンクの字で書いた第 3 段階として、実際のプレゼンになりますというと、身だしなみ、身のこなし、発声と話法・・・ここではアイコンタクトとか発問とかも含めて「話法」という言い方をしております。さらに質疑への的確な応答等が求められる。ついついプレゼン講座と同義にとられがちなパワーポイントの操作法というのは、実は、茶色の字で書きました第 2 段階のほんの一部にしか過ぎないということなのです。

こういう全体のことをちゃんと学ばなければいけないのですが、これまで本学としてはそういう機会を十分提供できていなかった。今年はぜひそれをプロジェクト実習の履修生に提供したいということで、学部執行部にお願いしまして非常勤講師枠 15 コマ分を宛がっていただきました。しかし問題はここからなのです。スライド 10 に記した、3 段階全部を一遍に教えることができる先生というのは、なかなかいらっしゃらないのです。パワーポイントの操作法だけなら私でもできます。だけれども、プレゼンに必要な諸要件全てを教えることは無理。いろいろつてをたぐって探していただきまして漸く見つかったのが、後ほどご登壇いただきます渡辺しのぶ先生であったということです。

お手元の資料冊子 11 ページに、オリジナルテキストの表紙と授業風景の写真等を収めております（本書Ｉ－図 10）。

この講義を、夏休みの最後の段階で 11 コマ使って実施していただきました。

後期に入りますと、こういう形でずっと動いて参ります(図 15 スライド 11)。

(18)の活動報告会リハーサルは、ちょうど 1 週間前に行いました。総合プレゼン講座の第 12・13 コマ目という位置づけで渡辺先生にお越しいただき、ご指導を賜りました。その時の様子は、お手元の資料冊子の 12 ページに収載しております（本書Ⅰ－図 11)。(19)の活動報告会、本日ですが、同じくプレゼン講座の 14・15 コマ目として最終のご指導を戴きます。

最後に(21)番、報告書作成です。これまでは紙媒体で作成しておりましたが、2018 年 4 月からこの授業用のホームページを開設することになりました。現在、公開に向けて最終段階の作業を進めております。公開後は、これまでに紙媒体で公表してきた各種データ等も含めて積極的にアップして参ります。その節は、お目通しを戴ければ幸甚に存じます。

さて、この授業で養成を目指す能力なのですが、額面通りに機能すればこんな能力が養成される筈、という授業設計になっています（図 15 スライド 12)。この 5 つ、ちょっと頭にとめていただいて、次のスライドへ参ります。経団連が毎年やっている「新卒採用時に重視する項目は何か」という調査です。先ほどの 5 項目、こういう位置づけで、上位 5 項目とドンピシャ一致しております（図 15 スライド 13)。中でもこのコミュニケーション能力なのですが、14 年連続 1 位なのです。こういう能力の養成を目指しているのです。

またさっきのスライドですが（図 15 スライド 14)、こういう能力がつくはずであると。「はず」なのですね。当たり前のことですがあくまでも「はず」であって、本当に身につけられるかどうかは実際に履修生がどういうふうに取り組むかにかかっております。

本日の活動報告会の趣旨でございます（図 15 スライド 15)。学生にとって、また教員にとっての一年間の活動の総括です。同時に、ご支援くださった皆様、ものすごくいろいろな方にいろいろな形でお世話になっております。いちいちお名前を挙げていますとこれで 3 時間終わってしまいますので、全部割愛させていただきますが、そういった方々へのご報告と御礼、そして学内、学外的な広報ということを目的にしております。

この報告会では、毎年テーマを設定しております。こういう具合で動いてまいりました（図 15 スライド 16)。「取り組む」「学ぶ」ときて、今年は「伝える」というのを初めて加えました。どういう流れか。こうなりまして（図 15 スライド 17)、2012 年度プロジェクト実習初開講のときは、学生はもちろん、教員のほうもプロジェクトを回すので精一杯でした。取り組みはしたけれどもそこまで。2 年ぐらいたったあたりから、もっと「学び」というものを意識しなくてはということで、強く、学び、学び、学びと言うようになりました。でも、それで内輪で終わっていたのです。いよいよ今年は取り組んで学んだことを皆様にお伝えするというところもちゃんとしようではないかということで、「取り組む、学ぶ、伝える」というテーマになった次第です。

苦節 6 年、漸くここまで来たということで、教員は今すごく達成感があるのですが、果たして本当に達成されたかどうかはこれからの皆さんの報告の質にかかっております。履修生の皆さん、おじさんは今、思いっきりプレッシャーをかけていますので、ぜひ頑張ってくださいね。

それではスタートといたします。

ご清聴ありがとうございました。

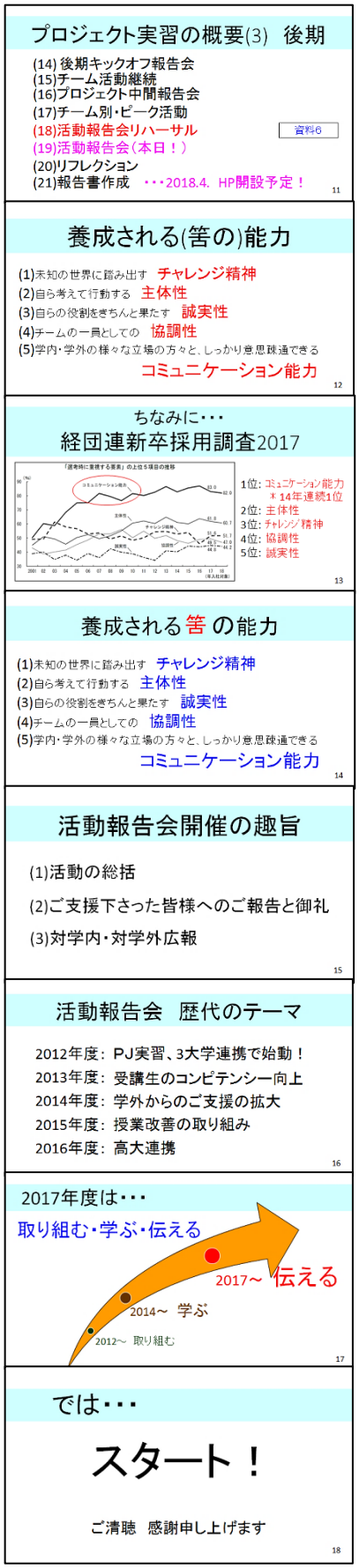


図 15:趣旨説明 PPT④

(3)式次第 3　評価の観点と投票方法の説明

神田大吾（プロジェクト実習担当教員）

続きまして、プロジェクト実習担当教員の神田より、評価の観点と投票方法の説明をいたします。

今年度の報告会では、参加されている皆様方にも実際に活動報告の評価をしていただき、そして投票をしていただこうと考えまして、先ほど受付のところで A4 判の評価採点シート（図 16）、そして B5 の小さな紙の投票用紙（図 17）をお渡ししているかと思います。

活動報告　採点シート

	記入例	KITAIBA Art Project	さとみ・あい	D-CEP	いばっピ団	Domaine MITO	チーム みなと☆ミライ
プロジェクトの設定	3						
取り組み	2						
対外的成果	1						
プロジェクトを通じての学び	2						
スライド＆配付資料の出来	3						
プレゼンの出来	4						
合計	15						
順位	4						

図 16:活動報告採点シート

活動報告　投票用紙:
あなたが合計点で「第一位」に選んだ報告の欄に「◎」（二重マル）を
「第二位」に選んだ報告の欄に「○」（マル）を書いてください

KITAIBA Art Project	さとみ・あい	D-CEP	いばっピ団	Domaine MITO	チーム みなと☆ミライ

以下はスタッフ用です。何も記入しないで下さい。

KITAIBA Art Project	さとみ・あい	D-CEP	いばっピ団	Domaine MITO	チーム みなと☆ミライ

◎＝3 ・ ○＝1

図 17:活動報告投票用紙

この A4 の採点シートに、活動報告の 6 つの項目、これからざっとご説明しますが、1.プロジェクトの設定、2.取り組み、3.対外的成果、4.学び、5.スライドと配布資料、6.プレゼン、この 6 つの項目に関して、この A4 のシートをご覧になりながら、各項目それぞれ、得点 1 点から 4 点を採点していただき、それを縦に合計していただいて、最後のところに合計点をお書きください。得点が 1 点ずつであるならば 6 項目で 6 点、6 項目が全部満点ならば 24 点ということになります。そして、一通り発表の終わったところでそれをご覧になり、合計点が一番高い発表が第 1 位、その次の発表が第 2 位ということで、こちら、B5 の投票用紙に第 1 位のチームについては二重丸（◎）、そして第 2 位だったとご判断のチームには一重丸（○）をつけて投票をいただければと思います。

なお投票につきまして、お手元の冊子の最初にも書いてありますが、最初に発表するチームから最後の六番目に発表するチームまで、全ての発表をご覧になられた方に投票をお願い申し上げます。と申しますのは、投票の公平・公正さを担保するために、六つの報告を一通り聞いて採点をして、結果的に第 1 位がどれか、第 2 位がどれかを決めていただきたいと考えます次第です。ですので、既にもう会場にお入りになっていらっしゃる方は問題ないのですが、報告会の途中から来られた方にはこの採点表はお渡ししませんので、その点、最初にご説明申し上げます。

さて、では実際にどういう観点から活動報告を発表するかをスライドを使ってご説明いたします（図 18)。第一の評価項目は、課題提案と具体的なプロジェクトの設定内容との関係です。この授業では大学外のご協力者の方々からいろいろな提案を頂戴しておりますが、そもそもチーム活動のスタートがご提案の趣旨に沿っているのかどうか。そして、その趣旨に沿ってはいても、先ほど鈴木が公共交通の昨年度の例をご説明しましたように、実際のプロジェクトが提案課題から十分に絞り込んでいるのかどうか。そして、絞り込んでスタートした活動が実際に実現可能なのか、という観点です。

それから、2 番目の評価項目は、では実際に取り組んだときに、その活動の質はどうか。また、活動の量はどうか。そして、活動を進める中で全く予想していないことがしばしば発生するのですが、そのときの対応はどうだったかという、言うならば危機管理能力はどうだったか、という観点です。

それから、3 番目は、活動の最後に得られた成果に対し、最初にご協力者の皆様から頂戴したプロジェクト課題と比較して、十分な成果が得られたか、という観点です。

そして 4 番目の評価項目は、先ほど鈴木からも申し上げましたが、ただ活動をした、頑張りましたというだけではなくて、活動から何を学んだのか、そもそも学ぼうという意識を持って活動していたのかどうか。そして、活動は年間を通じてのものですので、果たしてそれにふさわしい学びを得たか、という観点です。

そして､5 番目と 6 番目の評価項目はプレゼンテーションそのものに関わります。今年は専門の先生による総合プレゼン講座を受講しましたので、実際それが本当に身についているのだろうか、という点もまた重要です。スライドから言いたいことがきちんと伝わるか、配布資料からはどうか、という主に内容面。そして、もう一つはプレゼンの出来映え、声の大きさやアイコンタクトなど幾つか観点から、十分だったのかどうか。

以上、この 6 つの観点から発表を採点して、評価をしていただこうと思います。

さて、続きまして活動報告冊子の次のページをお開きください。

先ほど申し上げました 6 つの観点の具体的な説明が書かれてございます(図 19)。

例えば、最初の「プロジェクトの設定」をご覧ください。黒い太字のところが要約です。ただ、要約ですので、逆に短か過ぎて分かりにくいということもあろうかと思いまして、その下に説明を詳しく書いておきました。最初は、活動が課題の趣旨に沿っていないという、最低の 1 点の評価です。

その欄を右にご覧ください。製本の関係で見にくくなって恐縮ですが、その次の段階の説明が書いてございます。冒頭の文が要約で、それに続けて具体的な説明です。これが 2 点の評価です。そして、もう 1 つ横に行きますと、もうワンランク上がりまして、趣旨に沿っているし実現可能だけれども内容的にはもの足りないので評価は 3 点。そしてさらにその横が最高の 4 点の評価ですが、趣旨に沿っているし、実現可能だし、内容的にも魅力的なプロジェクトになっている、と、こういう形での 4 段階の評価になってございます。

図 18：評価項目

評価項目：プロジェクトの設定

課題提案と具体的なプロジェクトの設定内容を比較すると･･･

- 趣旨に沿っているか？
- プロジェクトを絞り込んでいるか？
- 実現可能か？

取り組み

プロジェクトで設定した内容に対して･･･

- 質は？
- 量は？
- 活動開始後に発生した課題には？

対外的成果

プロジェクト自体･･･

- 取り組みは十分だったか？
- 実施できたか？
- 対外的に成果を上げたか？

プロジェクトを通じての学び

活動内容の報告だけでなく･･･

- 学ぼうという意識は？
- 一年を通じた活動にふさわしい？

スライドならびに配付資料の出来

文字、図表や写真、そして配布資料により･･･

- 意図は伝わるか？
- 訴求力があるか？

プレゼンの出来

- 身だしなみ・動作・言葉遣い・言語の明瞭さ
- 原稿の棒読み･･･アイコンタクトの不足
- スライドならびに配付資料と口頭での説明内容との連携
- 質疑への応答

活動報告　評価基準シート

評価項目＼評点	1 （言うなれば「×」）	2 （「△」）	3 （「○」）	4 （「◎」）
プロジェクトの設定	**□提案趣旨を逸脱** 課題提案と具体的なプロジェクトの設定内容を比較すると、課題提案の趣旨を逸脱したプロジェクト設定になってしまっている	**□絞り込み不足で無理がある** 課題提案と具体的なプロジェクトの設定内容を比較すると、課題提案の趣旨に沿ったプロジェクト設定である。しかし、絞り込みが足りず無理のあるプロジェクト設定になってしまっている	**□現実的だが物足りない** 課題提案と具体的なプロジェクトの設定内容を比較すると、課題提案の趣旨に沿って、実現可能なプロジェクト設定になっているが、内容的には物足りなさがある	**□現実的かつ魅力的** 課題提案と具体的なプロジェクトの設定内容を比較すると、課題提案の趣旨に沿って、実現可能でかつ内容的にも魅力的なプロジェクト設定になっている
取り組み	**□活動が不十分** プロジェクトで設定した内容に対して、質的にあるいは量的に見合った活動ができていない	**□やや物足りない** プロジェクトで設定した内容に対して、最低限必要な活動はできている。しかし、質的にあるいは量的に物足りなさが残る	**□十分な活動をした** プロジェクトで設定した内容に対して、質的・量的に十分見合った活動ができている	**□十分かつﾌﾙｷｼﾞﾙに活動した** プロジェクトで設定した内容に対して、質的・量的に十分見合った活動ができている。加えてプロジェクト開始後に発生した様々な課題に対しても、臨機応変かつ積極的に対応している
対外的成果	**□成果が不十分** プロジェクト内容に無理がある、あるいは取り組みが不十分であったため、プロジェクト自体を貫徹できていない	**□やや物足りない** プロジェクト自体は、基本的に実施できた。しかし、プロジェクト内容の乏しさあるいは取り組みの不足により、対外的成果については物足りなさが残る	**□十分に評価できる** プロジェクト自体は、十分に実施できた。適切なプロジェクト内容としっかりした取り組みの結果、対外的に相応の成果を上げることができた	**□高く評価できる** プロジェクト自体は、十全に実施できた。適切なプロジェクト内容としっかりした取り組みに加えて、学生ならではの視点や取り組み方法が活きており、対外的に高く評価できる成果を上げることができた
プロジェクトを通じての学び	**□学びへの意識が感じられない** 活動内容の報告だけに留まり、「プロジェクトを通じた学び」自体への意識が感じられない	**□やや物足りない** 「プロジェクトを通じた学び」自体への意識は感じられる。しかし一年を通じた活動にふさわしいだけの学びが得られたとは感じられない	**□十分な学びを得た** プロジェクト全体ならびに個々の活動に「プロジェクトを通じた学び」への意識が認められる。同時に、一年を通じた活動にふさわしいだけの学びが得られたと判断できる	**□出色の学びを得た** プロジェクト全体ならびに個々の活動に「プロジェクトを通じた学び」への意識が認められる。同時に、一年間の活動としては出色の学びが得られたと判断できる
スライドならびに配付資料の出来	**□意図が伝わらない** 文字が多過ぎる、あるいは図表や画像が少な過ぎるスライドで、分かりにくい。またはスライドと配付資料がほぼ同一内容で、工夫が見られない。その結果、訴求力以前に意図そのものが伝わりにくい	**□訴求力が足りない** 左記1の問題はないが、スライドに図解やデータの提示が少ない。あるいはスライドと配付資料は別立てであるものの、それぞれの特性を活かせていない。その結果、意図は伝わるが訴求力という点では物足りなさが残る	**□十分な訴求力を持つ** スライドにアニメーションや色使い等で課題を残すものの、左記1・2の問題はない。スライドと配付資料がそれぞれに特性を活かした作りになっている。その結果、十分な訴求力を持っている	**□高い訴求力を持つ** 左記1～3の問題はない。スライドと配付資料がそれぞれの特性を活かすと共に両者が密接に連携する作りになっている。その結果、高い訴求力を持っている
プレゼンの出来	**□聞きたくならない** 身だしなみ・動作・言葉遣い・言語の明瞭さ等、プレゼンの大前提となる部分に難があり、聞きたいという意欲を持ちにくい	**□内容を理解しにくい** 左記1の問題はないが、原稿の棒読みやアイコンタクトの不足、スライドならびに配付資料と口頭での説明内容との連携が不十分等の理由により、内容を理解しにくい。あるいは、質疑への応答が不的確で、疑問が解消されない	**□内容を十分理解出来る** テーマに基づく説明の流れに不明瞭な部分を残すものの、左記1・2の問題はない。質疑への応答も的確で内容を十分理解出来る	**□内容を理解し共感を抱ける** 左記1～3の問題はない。明確なテーマに基づき、スライドや配付資料を活用しつつ論理的な説明が展開されており、質疑への応答も的確である。その結果、内容を十分理解できるだけでなく、共感を抱くことができる

図 19:活動報告評価基準シート

以上、最初の列だけご紹介しましたが、他の 5 つの評価項目も同様でございます。ご参加の皆様方にこれからこの A4 の採点シートの順に 6 つのチームが順次発表していきますので、その一つのチームについてどのような形でこれを評価されるか、ぜひ採点にご協力をしていただければ幸いと存じます。

なお、最後に投票用紙と採点シート両方を回収させていただきます。投票用紙のほうは集計して、最終的に最高得点を取ったチームと第 2 位のチームがどこだったかということを発表し、ここで表彰をする。そのためでございます。

それから、もう一つの採点シートは、教員側のこれからの学習材料といいましょうか、例えば、このチームは 15 点だった。別のチームも 15 点で同点だった。ですけれども、多分、中身の得点の分布は違うのではないだろうかと推測しておりまして、今後の私ども教員の教材と言いますか、授業の反省材料に使いたいと思いますので、どうぞ採点シートも回収にご協力をお願いしたいと思います。

さて、最後に、評価の観点に関係することで、発表時間のことも一言申し上げます。採点シートをご覧ください。左からこの順番に発表していきますが、実はチームによって発表の時間が異なります。先ほど鈴木からご説明しましたが、チームは 5 人から 9 人です。したがって、プロジェクト課題によっては希望者が 10 人を超えたため、小さなチーム、2 つに分かれて別々に行動しており、しかし発表は一つにまとめて行います。例えば、一番最初の KITAIBA Art Project は全体のチームの名前でありまして、実際はゴールデン・アートチームとオルタナティブ・アートチームという 2 チームで分かれて行った活動の成果発表ですので、このような合同チームのプレゼンは 12 分です。次の、さとみ・あいのチームも 12 分、しかし次の DCEP は単独チームですので、こちらは 7 分ですが、次のチームは 12 分、そして次は 7 分、そして最後も 7 分という形で時間が違います。

というように発表時間が異なりますので、今回は、それぞれのチームの発表時間の終了 30 秒前になると〔ベルの音〕という感じで 1 回鳴りまして、そして制限時間ちょうどになると〔ベルの音 2 回〕というふうに 2 回鳴るということで、定められた発表時間に対し、時間配分はどうだったかということが分かるようにいたしますので、この点も採点のご参考にしてください。

それではこれから発表を始めますので、その評価と採点をどうぞよろしくご協力のほどお願い申し上げます。

(4)式次第 4・6：プロジェクト実習活動報告

2017 年度プロジェクト実習履修 6 チームが、プロジェクト実習 A→D の順で活動報告を行った。会場で放映した PPT を、以下に収載する（図 20～25）。

なお、従来は放映する PPT をそのまま印刷してハンドアウトとしてきた。しかし、今年度から「総合プレゼン講座」での学びを踏まえて、必要に応じて「放映用 PPT」と「PPT を含むハンドアウト資料」とを別建てとするよう指示している。ハンドアウト資料については、プロジェクト演習 HP 資料庫「活動報告会資料冊子等」内「2018 年度活動報告会」ファイルを参照されたい。

http://pbl.hum.ibaraki.ac.jp/archive.html#intern

活動報告会での持ち時間は 1 チーム当たり 12 分と非常に限られる。加えて「時系列に沿った活動内容報告」が主眼ではなく「活動を通じて何を学んだか」に軸足を置いた報告が求められている。このため下記 PPT は必ずしも具体的な活動の全てを紹介するものではない。活動の全容については本書Ⅱ－2～7 のチーム別活動報告を参照されたい。また、学生の報告に対する渡辺しのぶ先生のご講評については、本章 5－(6)に収載している。併せてご参照戴くことで「具体的活動」「学生の学び」「活動と学びに関する第三者評価」の三者が揃うという構成である。

図 20：KITAIBA Art Project チーム

はじめに　なぜ北茨城市？

✓茨城県の最北の市

五浦美術文化研究所

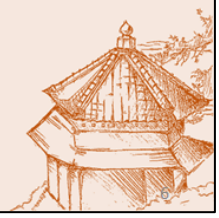
茨大生との接点が少ない！

出典 http://www.city.kitaibaraki.lg.jp/docs/2015030200106/

5

本日の発表内容

- はじめに
- プロジェクトの目的
- これまでの活動
- 成果と学び
- 今後の展望



6

プロジェクトの目的

●プロジェクト全体として

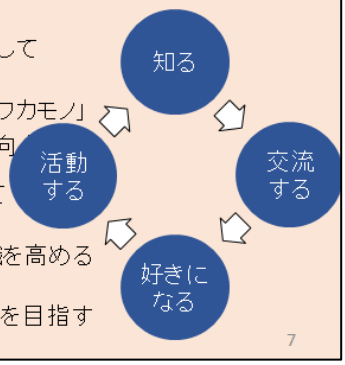
「アート×ヨソモノ×ワカモノ」

シビックプライドの向

●メンバー個人として

地域への帰属意識を高める

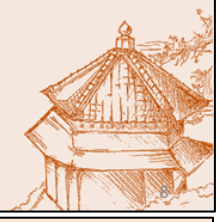
主体的な地域活動を目指す



7

本日の発表内容

- はじめに
- プロジェクトの目的
- これまでの活動
- 成果と学び
- 今後の展望



8

これまでの活動

6月23日(金)　第1回現地ミーティング

顔合わせ、今後の予定の話し合い

若者・女性企画提案チャレンジ支援事業

7月1日(土)　事業プレゼン

7月8日(土)　事業説明会

7月23日(日)　ブラッシュアップミーティング

9

これまでの活動

7月25日(火)　第2回現地ミーティング

五浦そばの方向性の決定

9月23日(土)　第3回現地ミーティング

五浦そば決定

10

これまでの活動

8月17日(木)18日(金)

WS企画準備

8月20日(日)

北茨城市民夏まつり

11

これまでの活動

10月21日(土)　五浦そば試作会

まるみつ旅館様にて

12

これまでの活動

11月11日(土)12日(日)　**五浦そば**
プレリリース

13

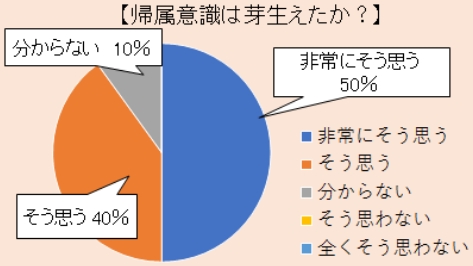
本日の発表内容

- はじめに
- プロジェクトの目的
- これまでの活動
- 成果と学び
- 今後の展望

14

成果と学び

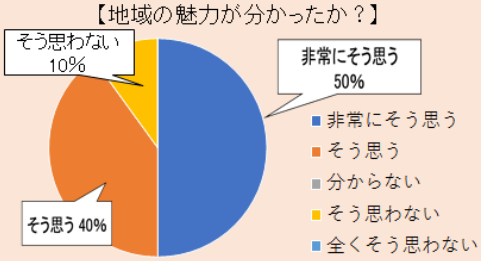
【帰属意識は芽生えたか？】



15

成果と学び

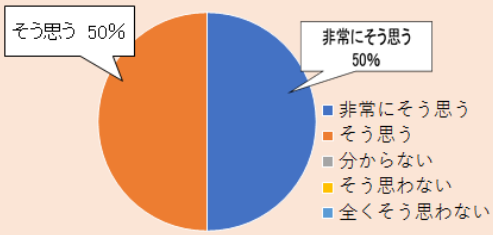
【地域の魅力が分かったか？】



16

成果と学び

【活動を継続したいか？】



17

成果と学び

①社会人としての基本的なマナー

②情報共有の重要性

③柔軟な発想とフットワークの軽さ

18

本日の発表内容

- はじめに
- プロジェクトの目的
- これまでの活動
- 成果と学び
- 今後の展望

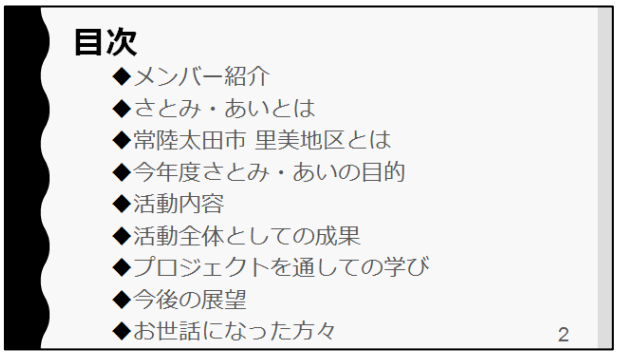
19

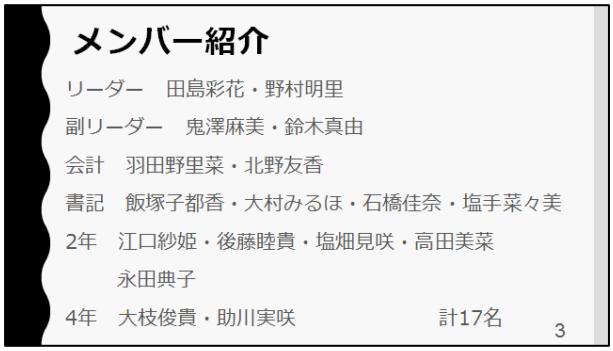
今後の展望

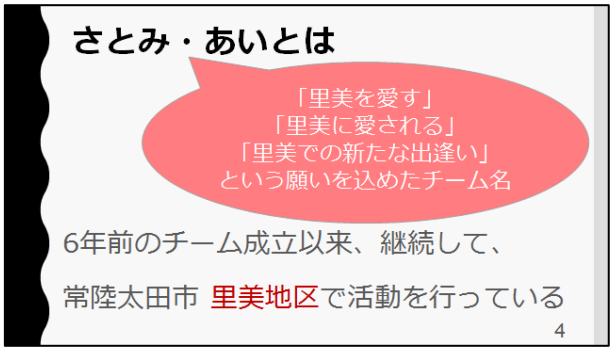
- 3月　桃源郷芸術祭

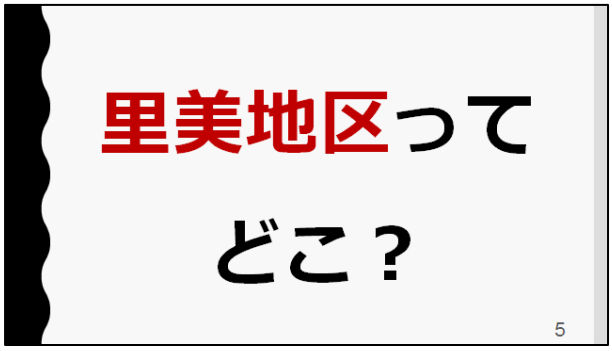
20

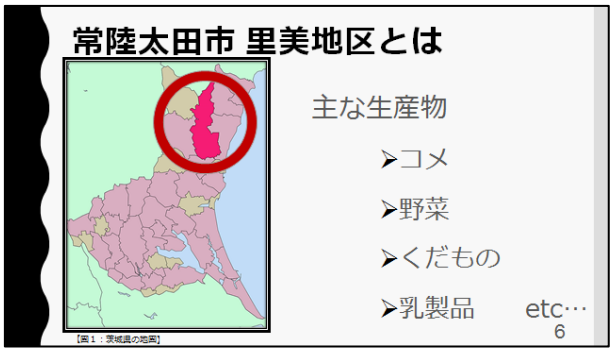
図 21：さとみ・あいチーム PPT



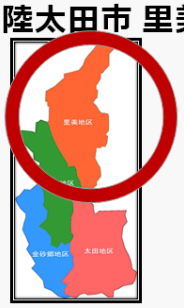








常陸太田市 里美地区とは



【図２：常陸太田市の地図】

主な生産物

- ➢コメ
- ➢野菜
- ➢くだもの
- ➢乳製品　　etc…

7

さとみ・あいが注目したのは…

8

コメ

カボチャ

9

さとみ・あいはなにをしたの？

10

今年度さとみ・あいの目的

A) 里美の魅力を若者・よそ者にしっかり伝える

B) 自らが里美に赴き、交流をすることによって里美を元気にする

C) 里美・茨城大学の両方においてさとみ・あいの知名度を上げる

11

今年度さとみ・あいの目的

➢コメ…Comer

活動１年目

➢カボチャ…カボチャで里美を盛り上げ隊

活動６年目

12

活動内容

Comer

- ➢9/16　稲刈り・おだがけ体験
- ➢11/３・４・５　さとみ 秋の味覚祭

カボチャで里美を盛り上げ隊

- ➢10/15　里美 魅力発見バスツアー
- ➢11/11・12　茨苑祭

13

活動内容

Comer

- ➢9/16　稲刈り・おだがけ体験
- ➢11/３・４・５　さとみ 秋の味覚祭

カボチャで里美を盛り上げ隊

- ➢10/15　里美 魅力発見バスツアー
- ➢11/11・12　茨苑祭

14

稲刈り・おだがけ体験

日付：９/16

場所：里美地区 大中町

里美倶楽部様 借り上げの圃場

15

稲刈り・おだがけ体験

内容：稲刈り・おだがけ

指導者：小林 信房様・豊田 紀雄様

参加者：一般参加者の皆様　3名
里美倶楽部の皆様　8名
さとみ・あい　10名
先生方　2名　　計23名

16

おだがけって

なに？

17

おだがけとは

刈り取った稲を天日干しすること

→おいしさが増す

藁納豆用の藁へ

18

稲刈り・おだが

19

活動内容

Comer

- ➢9/16　稲刈り・おだがけ体験
- ➢11/3・4・5　さとみ 秋の味覚祭

カボチャで里美を盛り上げ隊

- ➢10/15　里美 魅力発見バスツアー
- ➢11/11・12　茨苑祭

20

さとみ 秋の味覚祭

日付：11/3・4・5

場所：里美ふれあい館

イベント広場

← 同時開催の
「里美かかし祭」にて
展示されたさとみ・あい
公式キャラクター
おさとちゃんのかかし

【図3：さとみ 秋の味覚祭のチラシ】

21

さとみ 秋の味覚祭

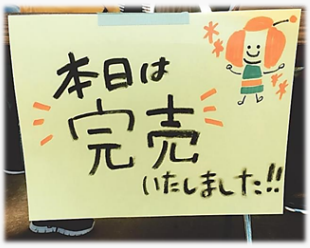
22

さとみ 秋の味覚祭

成果：

さとみまい 150kg

栗ご飯 43合 完売



23

活動内容

Comer

- ➢9/16　稲刈り・おだがけ体験
- ➢11/3・4・5　さとみ 秋の味覚祭

カボチャで里美を盛り上げ隊

- ➢10/15　里美 魅力発見バスツアー
- ➢11/11・12　茨苑祭

24

里美 魅力発見バスツアー

日付：10/15　　場所：　大中神社

↓

プラトーさとみ

↓

荷見様宅(カボチャ収穫)

↓

横川の下滝

↓

里美生産物直売所

25

里美 魅力発見バスツアー

参加者：一般参加者の皆様　17名

水戸農業高校の皆様　4名

さとみ・あい　8名

先生方　3名　　計32名

26

里美 魅力発見バスツアー

内容：(1)さとみ・あいメンバーの
おすすめスポットを巡る
(2)里川カボチャの収穫体験

27

里美 魅力発見バスツアー

(1) おすすめスポットを巡る

さとみ・あいによるスポットの紹介

28

里美 魅力発見バスツアー

(2) 里川カボチャの収穫体験

里川カボチャ
ってなに？

29

里川カボチャとは

➢里美地区の在来作物

➢特徴

1.ピンク色の皮

2.ほくほくの食感

3.甘さ

30

里美 魅力発見バスツアー

(2) 里川カボチャの収穫体験

指導者：荷見 誠様・カツ子様

31

活動内容

Comer

➢9/16　稲刈り・おだがけ体験

➢11/3・4・5　さとみ 秋の味覚祭

カボチャで里美を盛り上げ隊

➢10/15　里美 魅力発見バスツアー

➢11/11・12　茨苑祭

32

33

パイ

連携は4年目！

食品化学科の皆様

34

NHK出演

10/5「茨城ニュースいば６」

10/6 「おはよう日本 関東甲信越」

35

活動全体としての成果

➢稲刈り・おだがけ体験→目的A・B

➢さとみ 秋の味覚祭→目的C

➢里美 魅力発見バスツアー→目的A・B

➢茨苑祭→目的C

➢NHK出演→目的C

36

プロジェクトを通しての学び

➢自然に囲まれて生きているということ

➢学生であることの価値とその利用

➢たくさんの支えに気づくこと

37

プロジェクトを通しての学び

➢自然に囲まれて生きているということ

農作業を行うこと

電波の届かない場所での活動

↓

自然で育まれた物を食べている実感

自然の中で生きている実感

38

プロジェクトを通しての学び

➢学生であることの価値とその利用

異なる世代が関わること

↓

従来とは違った範囲に広報を行うこと、

興味を持ってもらうことができる

※特に学生は注目を惹きやすい

39

プロジェクトを通しての学び

➢たくさんの支えに気づくこと

活動を行うためには様々な方の協力が必要

↓

協力してくださる方がいるから

私達は活動を行うことができている

※私達の目にすべてが映るとは限らない

40

今後の展望

➢おだがけをした藁を藁納豆用の藁に？

➢里川カボチャ栽培・稲作の継続

➢「さとみまい」や里川カボチャを使用した料理を販売？

And more…

41

お世話になった方々

さとみ・あいを

知ってくださっている

皆様

42

歴史があるさとみ・あい。

今年度、個性豊かな17人のメンバーが

6年目の歴史を築いた。

里美と共に活動は続いていく。

To be continued…

43

ご清聴ありがとうございました！

44

参考・引用文献

図１Christian Today
http://www.christiantoday.co.jp

図２茨城県常陸太田市HP
http://www.city.hitachiota.ibaraki.jp/page/page001751.html

図３さとみ物語
http://satomimonogatari.jp/event/autumn_festival_2017/

45

図 22：D-CEP チーム PPT

D-CEPチーム

異文化交流プロジェクト
報告活動会

茨城キリスト教大学2年 リーダー　山本 麻由
サブリーダー　助川 里奈
書記　大津 里奈　川本 李音
会計　小野 千秋　細川 茜

チーム名について

Department of Contemporary English
現代英語学科
＋
Culture Exchange Project
異文化交流プロジェクト
D-CEP

目次

1. プロジェクト始動の動機
2. イベント①概要
3. 企画内容
4. アンケート結果
5. イベント②概要
6. 企画内容
7. 全体を通して学んだこと
8. 今後の活動
9. 御礼

1.プロジェクト始動の動機

現状　グローバル化が進む日本
↓
課題　子供たちにとって、外国人と直接関わる機会はあまり多くない
↓
展望　子供達に国際交流の機会を提供したい

高校生対象　イベント①　異文化交流プロジェクト
小学生対象　イベント②　小学校国際理解活動
↓
異文化に関心を持ってもらう

2. イベント①概要

〈異文化交流プロジェクト〉
日時：平成29年7月17日(月・祝)
場所：茨城キリスト教大学3号館
参加者：高校生　36名
(茨城キリスト教学園高等学校6名、
日立北高等学校4名、日立第二高等学校13名、
水戸第三高等学校11名、他2名)
留学生　16名　インターン生3名
(茨城キリスト教大学10名、茨城大学6名)

3. 企画内容

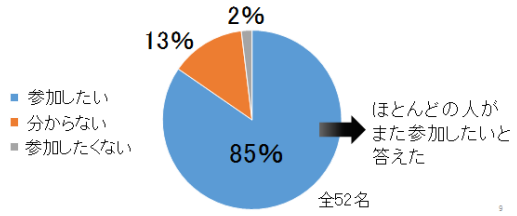
コンセプト：高校生と留学生の交流

Ⅰ. アイスブレイク
Ⅱ. ダンス
Ⅲ. フリートーク

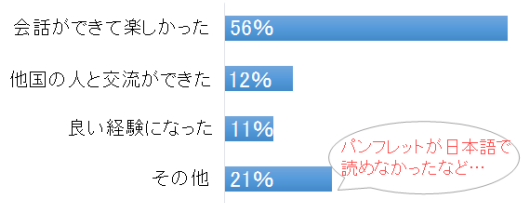
Ⅰ.アイスブレイク　Ⅱ.ダンス　Ⅲ.フリートーク

4. アンケート結果

Q. またこのイベントに参加したいか



Q.イベントに参加して感じたことは何か



5．イベント②概要

〈小学校国際理解活動〉

①シンガポール　日時：平成29年11月24日(金)
場所：水木小学校　ランチルーム
対象：水木小学校児童　6年生　64人

②ウクライナ　日時：平成29年12月7日(木)
場所：宮田小学校　視聴覚室
対象：宮田小学校児童　6年生　67人

11

6．企画内容

コンセプト：**小学生に異文化に触れてもらう**

Ⅰ．国紹介

Ⅱ．ゲーム

Ⅲ．質問コーナー

12

Ⅰ.国紹介　Ⅱ.ゲーム　Ⅲ.質問コーナー

13

全体を通して学んだこと

1．計画・実行の難しさ

発案（KJ法）→ 制約（時間・費用など）→ 実現可能か判断する

実行 → トラブル（機材・会場の大きさ）→ 事前によく把握する

14

全体を通して学んだこと

2．異文化コミュニケーション

留学生の意識の違い → 文化の違いによるもの

日本人中心に考えない

15

全体を通して学んだこと

・チームワークで大切なこと

役割が不明確 人任せ
進行状況が不明 効率が悪い

役割分担　**情報共有**

報告　連絡　相談

＋責任感

16

8．今後の活動

「　IC祭　」

日時：平成年12月18日(月)
対象：本学留学生、インターン生
内容：日本文化の体験(昔ながらの遊び、書道)

17

9．御礼

大川通昭教頭先生をはじめ、茨城キリスト教学園高等学校の皆さま
黒澤吹美子先生をはじめ、日立第二高等学校の皆さま
片岡卓治先生をはじめ、水戸第三高等学校の皆さま
長山裕司先生をはじめ、日立北高等学校の皆さま
萩庭千佳子先生をはじめ、水木小学校の皆さま
宮田舞先生をはじめ、宮田小学校の皆さま
茨城大学、茨城キリスト教大学留学生の皆さま
茨城大学　杉本妙子先生、神田大吾先生、鈴木敦先生
茨城キリスト教大学　入試広報部の皆さま
茨城キリスト教大学　国際理解センターの皆さま

18

ご清聴ありがとうございました

19

図 23：Domaine MITO チーム PPT

プロジェクト実習D

Domaine MITO team

リーダー：鶴町　直輝
メンバー：三枝奈央　水戸部麻実　今川菜津美
中野拓哉　大徳ちはる　吉川奈緒子

1

Domaine MITO(ドメーヌ ミト)とは…？

まちなかワイナリー	ワインツーリズム
・地域活性化 ・地産地消	・自然・人・文化を楽しむ ・水戸の魅力発信

2

目次

- チームの目的
- これまでの活動
  1 販売会
  2 インターンシップ
  3 リリースパーティーのお手伝い
  4 試飲販売会
- 成果と学び

3

目次

- チームの目的
- これまでの活動
  1 販売会
  2 インターンシップ
  3 リリースパーティーのお手伝い
  4 試飲販売会
- 成果と学び

4

チームの目的

まちなかワイナリーで“おともだち”を作ろう

・プロジェクトそのものの目的
　ワインを通じて地域コミュニティを広げる
・チームの目的
　社会に出たときに通用するコミュニケーション能力を鍛える

5

目次

- チームの目的
- これまでの活動
  1 販売会
  2 インターンシップ
  3 リリースパーティーのお手伝い
  4 試飲販売会
- 成果と学び

6

これまでの活動報告

7／23 京成百貨店でワイン販売
9／2・3 牛久シャトーフェスタ
9／24 水戸まちなかフェスティバル
インターンシップ
11／11・12 茨苑祭
11／24・25 試飲販売会
11／3 新作ワインのリリース

7

販売会

- 7/23　京成百貨店様　グラスワイン販売
- 9/2・3「牛久シャトー」グラスワイン販売

・Domaine MITO様の活動への理解
→どのようにワインをプロモーションしているのか
　間近で体験
・地域の方々との交流

8

インターンシップ

- 詳細：9/24　水戸まちなかフェスティバル
- 内容：「アペリティフ365in水戸」のレセプション形式で
  グラスワインとフランスのお酒・お菓子を販売

ワインの宣伝やフランスについて知ってもらう感覚を得た
→どのようにDomaine　MITOのワインを
　知っていただくかの切り口となる

9

リリースパーティー

- 2017年度ワインの紹介
  ◎水戸・ルージュ　鯉淵・アーリー・スチューベン2017(赤)
  ◎ヴィニフィエ・水戸　山形・デラウェア・ブラン2017(白)
- 内容：受付、ワイン提供

学生とDomaine MITOの関係に興味を持つ方が多かった

11

筑波大学の学生さん作↑

リリースパーティー

12

Domaine MITO
茨大生

ワイン

一口オーナー
地域の方々

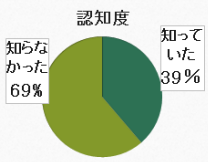
13

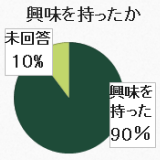
試飲販売会in京成百貨店

- 内容：これまでの経験をもとに自分たちで
  ワインのプロモーションを計画
- 茨城の人に「水戸産ワイン」を知っていただく
  ことに重点を置いた
  →アンケートにて成果検証

14

結果





15
(回答者数　31名)

成果と反省

〈成果〉
・Domaine MITO を知らない多くの方々に
　興味を持っていただいた
・お客様とワインについての話題で盛り上がった
〈反省点〉
・役割分担がうまくいかず、円滑に進められなかった

16

目次

➢チームの目的
➢これまでの活動
1　販売会
2　インターンシップ
3　リリースパーティーのお手伝い
4　試飲販売会
➢プロジェクト実習を通しての学び

17

プロジェクト実習を通しての学び

➢人と人のつながりにおける礼儀やマナーを身につけられた
　→チームの目的
➢一つの企画を実行する大変さ
➢目的や意義を明確化しながら企画イメージを具体的に
　落とし込むテクニック
➢地域やそのコミュニティについて考える

18

お世話になった方々

- Domaine MITO株式会社　様
  代表取締役　宮本紘太郎　様
  取締役　　大塚　巌　　様
- 株式会社 水戸京成百貨店 様

たいへんお世話になりました。ありがとうございました。

19

ご清聴
ありがとう
ございました。

20

図 24：チームみなと☆ミライ PPT

チームみなと☆ミライ

～那珂湊商店街を訪れるきっかけづくり～

リーダー： 秋葉翔太　　会計： 庄司彩乃

副リーダー： 清水悠花　　書記： 斉藤祐羽、川田綾香

目次

1. チーム紹介
2. 活動目的
3. 活動内容
   ①会議
   ②開発
   ③広報
   ④夜市・学園祭での販売
4. インターンシップ
5. 成果と今後の展望
6. 全体を通して学んだこと
7. お世話になった皆様

2

目次

1. チーム紹介
2. 活動目的
3. 活動内容
   ①会議
   ②開発
   ③広報
   ④夜市・学園祭での販売
4. インターンシップ
5. 成果と今後の展望
6. 全体を通して学んだこと
7. お世話になった皆様

3

チームの紹介

・連携先

みなとみらいプロジェクト実行委員会　様

・ひたちなか市那珂湊商店街を既存の資産

「ほしいも」で活性化すべく活動

4

那珂湊とは？

・ひたちなか市

勝田市と那珂湊市が合併

・那珂湊商店街

おさかな市場から
徒歩5分圏内

5

目次

1. チーム紹介
2. 活動目的
3. 活動内容
   ①会議
   ②開発
   ③広報
   ④夜市・学園祭での販売
4. インターンシップ
5. 成果と今後の展望
6. 全体を通して学んだこと
7. お世話になった皆様

6

活動目的

当初は「那珂湊商店街の活性化」

6/21,8/20那珂湊地区の視察

≪問題点≫

①商店街は閉まっているお店が多い

②認知度が低い

→商店街

→おさかな市場

7

活動目的

≪今年一年≫

認知度の向上

→那珂湊へ足を運ぶきっかけづくり

→ほしいもを使った「開発」

→「広報」メディア露出、茨苑賞獲得

当初の目的(商店街の活性化)は次年度以降に

8

目次

1. チーム紹介
2. 活動目的
3. 活動内容
①会議
②開発
③広報
④夜市・学園祭での販売
4.インターンシップ
5.成果と今後の展望
6.全体を通して学んだこと
7.お世話になった皆様

9

①会議

・那珂湊視察前(5月～7月)

→ほしいもをテーマにした那珂湊観光ツアー

“ファインディング・イモ”

→ほしいもと商店街のコラボレーション新商品開発

イモジャム、ほしいも＋わたあめ 等

10

①会議

・那珂湊視察後(8月以降)

開発：ほしいもをパウダーに！

いろいろな料理に活かせる のではないか

（パン類、麺類）

広報：新商品とともに那珂湊の魅力発信

11

②開発

ほしいも焼きそば

ほしいもプリン
（伊那食品様）

12

③広報

・チームみなと☆ミライの

Twitter、Instagram アカウント開設

・那珂湊地域を紹介する

フリーペーパー と ポスター 作成

13

フリーペーパー

・ 若者目線で那珂湊の魅力を紹介
→那珂湊へ足を運ぶ
きっかけづくり(特に若者)

・ ほしいもを特集
→新商品の告知

那珂湊の魅力を発信

14

ポスター

・9/15 那珂湊に関する会議への参加

→常磐大学中村泰之先生とお会いする

・9/23 常磐大学訪問

→ポスター、プリンのパッケージを依頼

（中村先生のゼミ生、履修生）

15

④夜市・学園祭での販売

・10/21 夜市(ドゥナイトマーケット)へ出店

夜市：毎月第三土曜日 那珂湊商店街近辺

→ほしいもプリンの販売

（50個が約30分で完売）

16

④夜市・学園祭での販売

・11/2,3 茨キリ学園祭(シオン祭)
→ほしいも焼きそば販売

・11/11,12 茨苑祭
→活動紹介展示
→ほしいもプリン販売

茨苑賞2位

17

メディア露出

・11/14 茨城県庁の方の取材
→大曽根様経由でプロジェクトに興味(特に焼きそば)

・11/22 放映
NHK水戸放送局「いば6」

目的達成！！

18

目次

1. チーム紹介
2. 活動目的
3. 活動内容
①会議
②開発
③広報
④夜市・学園祭での販売
4.インターンシップ
5.成果と今後の展望
6.全体を通して学んだこと
7.お世話になった皆様

19

インターンシップ

・個人の意見を反映させるために
・「インターンシップ構想書」を作成。
→みなとみらいプロジェクトの活動へ
参加
ほしいも、プリンの製造体験

地域おこしの概要

20

目次

1. チーム紹介
2. 活動目的
3. 活動内容
①会議
②開発
③広報
④夜市・学園祭での販売
4.インターンシップ
5.成果と今後の展望
6.全体を通して学んだこと
7.お世話になった皆様

21

成果と今後の展望

・一年間という限られた期間

那珂湊の活性化や知名度の大幅な向上×

開発・販売・広報を通して那珂湊の魅力を発信し、

「足を運ぶきっかけづくり」になった

22

成果と今後の展望

≪今後の展望≫

・那珂湊商店街とほしいもパウダーのコラボ

→那珂湊でしか味わえない「食」が

「那珂湊へ足を運ぶきっかけ」

23

目次

1. チーム紹介
2. 活動目的
3. 活動内容
①会議
②開発
③広報
④夜市・学園祭での販売
4.インターンシップ
5.成果と今後の展望
6.全体を通して学んだこと
7.お世話になった皆様

24

全体を通して学んだこと

①二(三)大学連携の難しさ

・5人そろう機会が少なく、
分担・情報共有がうまくできなかった

・連携先の増加による活動時間への影響

25

全体を通して学んだこと

②アクシデントへの対応

・活動目的及び内容の変更

→現状に合う解決策を模索、解決に尽力

➡ 想定外の出来事への対応力、柔軟性

26

目次

1. チーム紹介
2. 活動目的
3. 活動内容
   ①会議
   ②開発
   ③広報
   ④夜市・学園祭での販売
4.インターンシップ
5.成果と今後の展望
6.全体を通して学んだこと
7.お世話になった皆様

27

お世話になった皆様

大曽根　一毅様

川﨑　達也様

みなとみらいプロジェクト実行委員会の皆様

ひたちなか市商工会議所の皆様

中村　泰之先生

常磐大学の皆様

28

ご静聴ありがとうございました！

Twitter:@minato_mirai5
Instagram:team_minatomirai

29

図 25:いばっピ団チーム PPT

活動報告会

平成２９年１２月９日

いばっピ団

＜カフェ巡り宣伝部＞
リーダー：小宮山弥来
書記：鹿野はるか　大山愛莉
会計：川瀬葉月　渉外：片見恵都
＜AB革命隊＞
リーダー：五位渕梓
書記：堀奈津美　池田真梨果
会計：井上晴香　　渉外：大場貴史

1

目次

- ▶チームとしての目的
- ▶プロジェクトの概要
- ▶お世話になっている方々
- ▶これまでの活動
  - １．地域公共交通利用促進活動助成金
  - ２．カフェマップ作成
  - ３．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成
- ▶今後の展望
  - １．カフェマップ作成
  - ２．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成

2

目次

- ▶チームとしての目的
- ▶プロジェクトの概要
- ▶お世話になっている方々
- ▶これまでの活動
  - １．地域公共交通利用促進活動助成金
  - ２．カフェマップ作成
  - ３．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成
- ▶今後の展望
  - １．カフェマップ作成
  - ２．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成

3

チームとしての目的

(1)事態の課題をどう改善・解決すべきか考える力
　＆目的を明らかにする力を得る
→アンケートによる現状分析
(2)相手の立場を理解し、
　自分の意見をわかりやすく説得し、
　伝える力を得る
→様々な方との協力

4

目次

- ▶チームとしての目的
- ▶プロジェクトの概要
- ▶お世話になっている方々
- ▶これまでの活動
  - １．地域公共交通利用促進活動助成金
  - ２．カフェマップ作成
  - ３．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成
- ▶今後の展望
  - １．カフェマップ作成
  - ２．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成

5

プロジェクトの概要

①カフェ巡り宣伝部
バスの利用客を増やす
→「カフェ巡り」マップ作成

＋

②AB革命起こし隊
バスを利用しやすくする
→案内板の作成

6

目次

- ▶チームとしての目的
- ▶プロジェクトの概要
- ▶お世話になっている方々
- ▶これまでの活動
  - １．地域公共交通利用促進活動助成金
  - ２．カフェマップ作成
  - ３．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成
- ▶今後の展望
  - １．カフェマップ作成
  - ２．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成

7

お世話になっている方々

○水戸市役所交通政策課の皆様
○茨城交通株式会社の皆様
○一般社団法人茨城県バス協会の皆様
○常磐大学非常勤講師　小佐原孝幸様
○各カフェ
（カフェ・トロワシャンブル、コーヒーショップ＆Me、プロカフェ、トロピカル、Café　Rin、OMISE、珈琲問屋、フルーツバスケット）
の経営者の皆様
○茨城大学　町田京香さん

誠にありがとうございます

8

目次

- ▶チームとしての目的
- ▶プロジェクトの概要
- ▶お世話になっている方々
- ▶これまでの活動
  - １．地域公共交通利用促進活動助成金
  - ２．カフェマップ作成
  - ３．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成
- ▶今後の展望
  - １．カフェマップ作成
  - ２．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成

9

これまでの活動

１．地域公共交通利用促進活動助成金
２．カフェマップ作成
３．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成

10

これまでの活動

1．地域公共交通利用促進活動助成金

7月21日に茨城県公共交通活性化会議事務局に申請

→MAX30万円獲得

→案内板の作成費用へ

11

これまでの活動

1．地域公共交通利用促進活動助成金

2．カフェマップ作成

3．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成

12

これまでの活動

2．カフェマップ作成①

ターゲット:茨城大学に新しく入る女子学生

デザイン:親しみやすい手書き風

女子学生向けの可愛らしいデザイン

表→カフェの具体的説明　裏→地図

新入生のためのいばっピの説明や乗り場の案内

⇒来年度の入学式での配布を検討

13

初期デザイン案（表）

14

初期デザイン案（裏）

15

これまでの活動

2. カフェマップの作成②（８～９月）

掲載カフェの検討及びお店からの掲載許可を頂くためのカフェ巡り

16

これまでの活動

2．カフェマップ作成②

掲載カフェ

- カフェ・トロワシャンブル
- コーヒーショップ＆Me
- プロカフェ
- トロピカル
- Café　Rin
- OMISE
- 珈琲問屋
- フルーツバスケット

全８店舗

17

これまでの活動

2．カフェマップ作成③（１１月）

茨苑祭でのプリテスト

→入学式での配布（検討中）の前に１年生にマップをみてもらい意見をもらう

→意見を元にデザイン案の修正

18

これまでの活動

2．カフェマップ作成③（１１月）

茨苑祭で挙げられたご意見

（１００人にアンケート）

○良い点

- かわいくて見やすい
- 写真がおいしそう

×悪い点

- 作成意図（バスを利用）が不明確
- 道が分かりづらい
- 画質が悪い
- 表面→枠がなくて見づらい

etc…

19

現時点でのデザイン案（表）

20

現時点でのデザイン案（裏）

21

これまでの活動

1．地域公共交通利用促進活動助成金
2．カフェマップ作成
3．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成

22

これまでの活動

3.水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成①

ターゲット：遠方から来た人
　　水戸駅をあまり利用しない人

聞き取り調査（６月）
→乗り場が分かりにくい。系統が分かりにくい。
→改善！

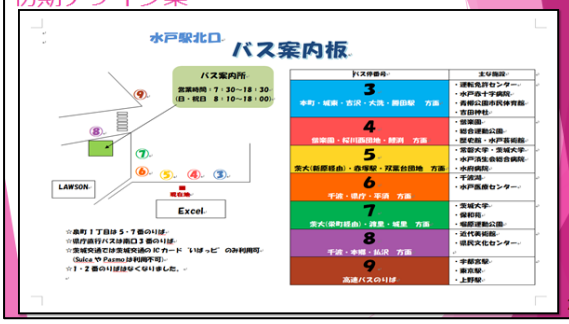
23

既存の案内板

（北口４番乗り場バス案内板）

24

初期デザイン案



25

これまでの活動

3.水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成②

- **茨城県バス協会様のご意見（９月２６日）**

«ご意見»
・南口からの高速バスの情報追加
・記載する施設名の増減→茨城交通様と相談
・施設の場所が分かるようにする

Etc…

26

これまでの活動

3.水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成③

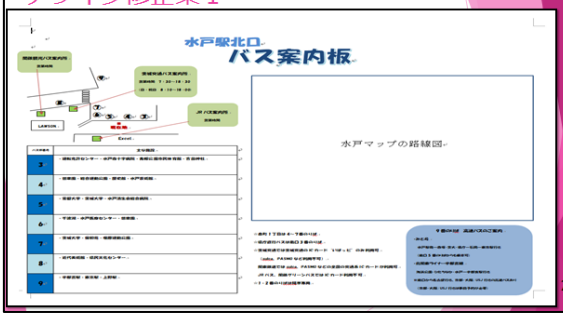
- **茨城交通様からのご意見（１０月５日）**

・バス停乗り場の地図が大きい
・施設名の記載が少ない
・６番乗り場に偕楽園追加
・乗り場の色分け
　→他の地図とリンクした際に混乱？

Etc …

27

デザイン修正案１



28

これまでの活動

3.水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成④

- **小佐原先生からのご指導（１０月１０日）**

・伝えたい情報の優先順位を決める
・項目ごとに色分けする
・特殊な読み方にルビをふる

Etc …

29

これまでの活動

3．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成⑤

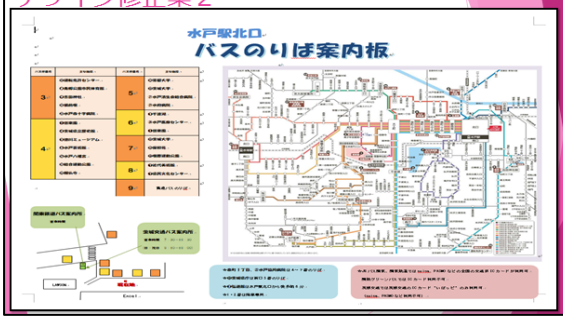
- **水戸市役所様からのご意見(10月11日)**

・乗り場の表を左上に記載すべき
・「みとバスMAP」の路線図記載
　　→あくまで仮
・施設名→「みとバスMAP」に記載されたもの

Etc …

30

デザイン修正案２



31

これまでの活動

３.水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成⑥

- **チームミーティング(10月31日)**
- スクリーンに実際のサイズで映し確認

«問題点»

・文字が小さすぎる

・路線図見づらい

→無駄なスペース省き路線図大きく

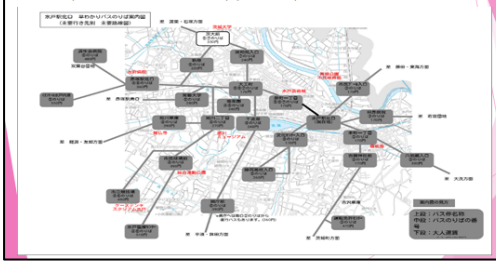
・ICカード説明→表にする

- 水戸市役所様からのアイデア提供

32

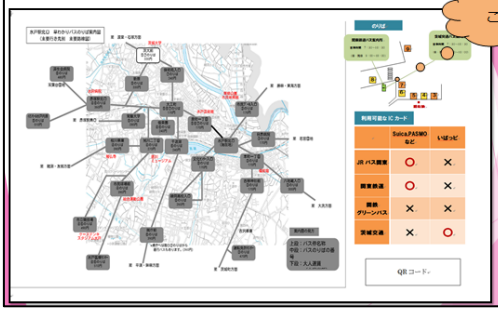
アイデア提供

乗り場表と路線図併合（料金記載）



33

デザイン修正案３



34

目次

▶チームとしての目的

▶プロジェクトの概要

▶お世話になっている方々

▶これまでの活動

１．地域公共交通利用促進活動助成金

２．カフェマップ作成

３．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成

▶今後の展望

１．カフェマップ作成

２．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成

35

今後の展望

１．カフェマップ作成

２．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成

36

今後の展望

1.カフェマップ作成

茨苑祭で得たご意見を元にマップを修正

→来年度の入学式での配布を検討

（現在交渉中）

37

今後の展望

１．カフェマップ作成

２．水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成

38

今後の展望

３.水戸駅北口４番乗り場のバス案内板の作成

12月　イラストレーターを使用しデザイン案完成

小佐原先生、水戸市役所の方々に相談

1月　バス協会様、各バス会社様との交渉

（デザイン及び案内板張り替えの許可を頂く）

2月～3月31日　案内板作成、完成

39

ご清聴ありがとうございました

40

(5)式次第８：茨城県立水戸農業高等学校活動報告

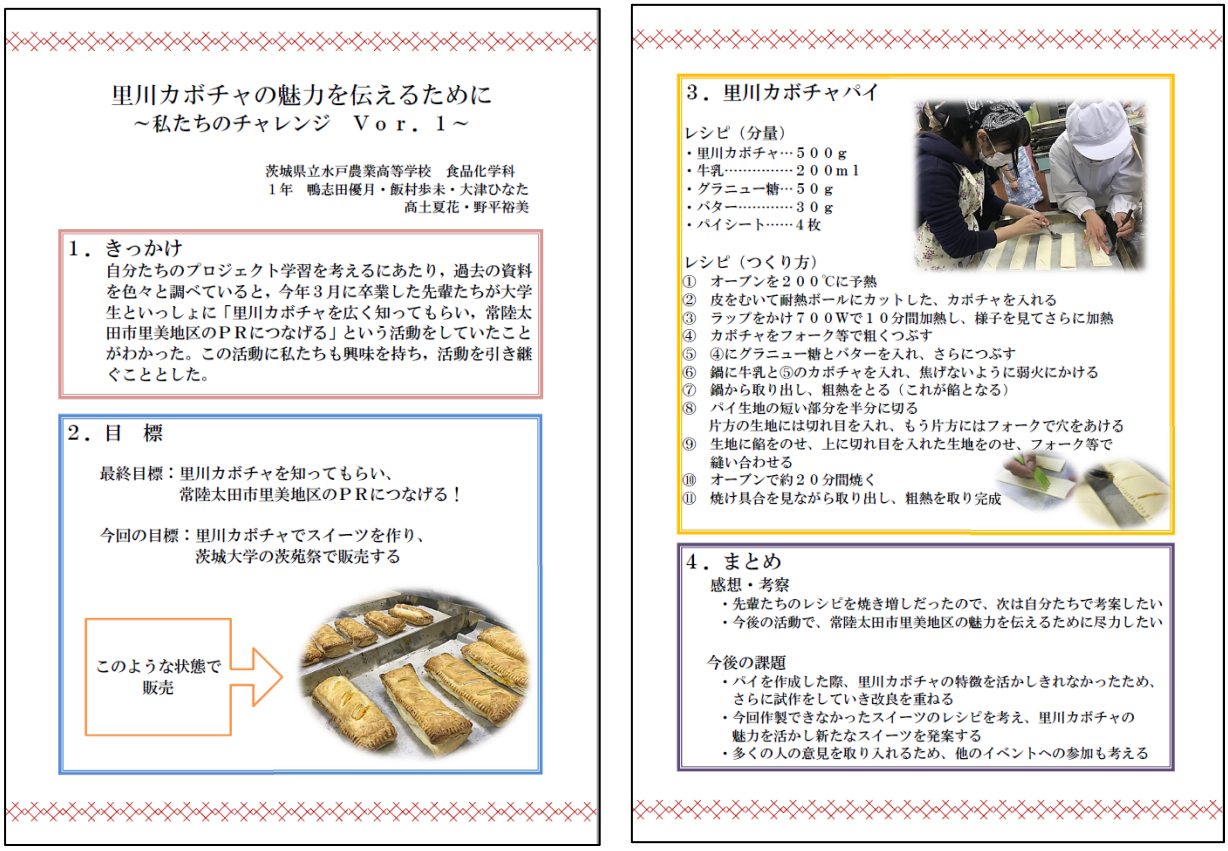
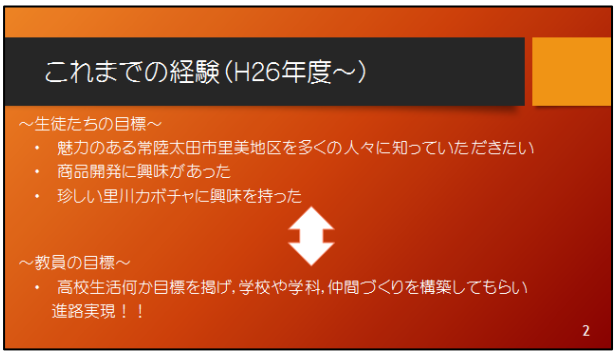


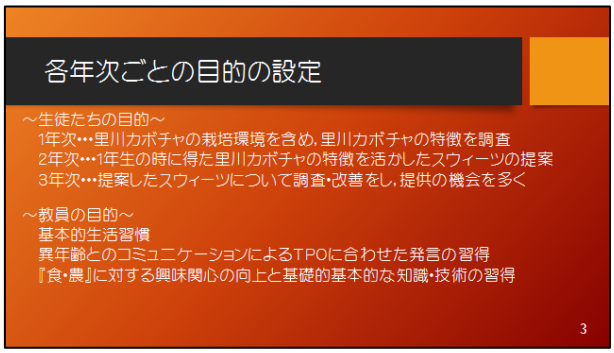
図 26:ポスターパネル(掲示は各 A1 判)

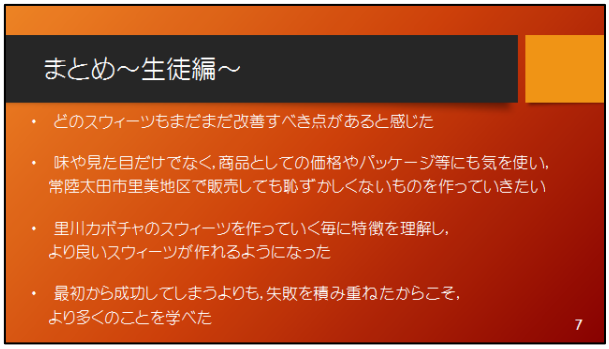
図 27:活動報告会での発表風景

茨城県立水戸農業高等学校からは、まず食品化学科教諭の新堀俊博先生が「4 年の軌跡と今後の課題」と題して、高校側の取り組みの背景についてご説明下さった（図 28・29）。次いで生徒達が、過去 3 年間の先輩たちの取り組みを踏まえて開始した、自分たちの活動について報告した（図 27・30）。

左　図 28：水戸農業高等学校　新堀先生のご説明
下　図 29：水戸農業高等学校　新堀先生 PPT







まとめ～教員編～

平成29年3月卒業　食品化学科　進路決定100%！！

在籍数…38名

『食・農』に関連する進学者⇒30人中　約83%

『食・農』に関連する就職者⇒9名中　約55%

自己満足かもしれませんが，概ね目標を達成したかと思っています

8

今後は…

- 現在の関係を継続し，さらに発展させていくための努力
- さらなる，校内での教員や生徒への周知
- 年間を通じ里川カボチャを活用し実習をさせるための施設設備の工夫
- 『食・農』への興味関心を高め，『食・農』への進学，就職を高める工夫
- 地元地域や茨城県への興味関心を高めるための授業の工夫

9

図 30：水戸農業高等学校食品化学科生徒チーム PPT

里川カボチャの魅力を伝えるために
～私たちのチャレンジVOR.1～

茨城県立水戸農業高等学校―食品化学科― 1年

鴨志田　優月　　飯村　歩未
大津　ひなた　　髙土　夏花　野平　祐美

1

1　はじめに

•先輩が茨城大学人文社会学部とコラボしていた，里川カボチャについての活動を行っていた

•私たちは，里川カボチャに興味を持ち今年度からは，受け継ぐこととした

2

2　目標

最終目標！！

里川カボチャを知ってもらい，常陸太田市里美地区のＰＲにつなげる

↓そのために

今回の目標

里川カボチャを使ったスイーツをつくり，茨城大学の文化祭で販売

3

3　研究内容

6月21日	ミーティング開始	茨城大学との顔合わせ・打ち合わせ
7月　4日	候補決定・班決め	プリン・ポップオーバー・シュークリーム・パイの4つに決定
9月19日	レシピ作製①	
10月10日	レシピ作製②	
10月15日	里川カボチャ収穫	常陸太田市里美地区にて
10月31日	試作品＋試食会	里川カボチャを使ったパイに決定
11月　8日～10日	茨苑祭用パイ作り	8～9日　カボチャ餡作り 10日　パイ310個作製
11月11日～12日	茨苑祭当日	310個のパイを販売（完売！！）

4

里川カボチャパイ材料

材料「約13個分」

生地
- 冷凍パイシート
（短い部分を半分にカット）

カボチャの餡
- 里川カボチャ　500g
- 牛乳　200g
- グラニュー糖　50g
- バター　30g

5

里川カボチャパイつくり方

① カットしたカボチャをレンジで加熱する
② すべての材料を鍋で煮る
③ ②をパイシートにのせる
④ ③に溶いた卵黄をぬる
⑤ 200℃のオーブンで約20分焼く

6

里川カボチャパイ＆ポップオーバー餡のつくり方

①カボチャの皮をむいてカットし，耐熱ボールにカットしたカボチャを入れる
②ラップをし，700Wで約15分加熱する
③柔らかくなったカボチャをフォークでつぶす
④グラニュー糖とバターを入れさらにつぶす
⑤鍋に牛乳とつぶしたカボチャを入れ弱火の火にかけ混ぜる
⑥鍋から取り出し，カボチャの餡の粗熱をとる

7

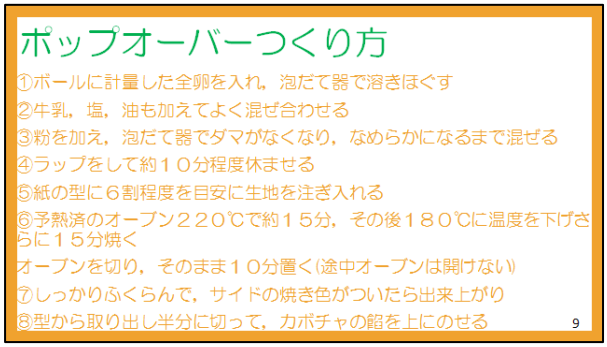
ポップオーバー材料

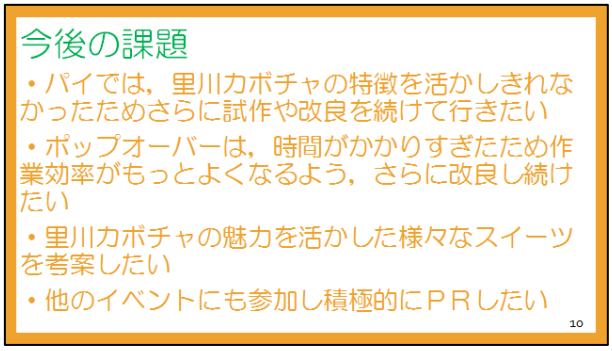
材料『8個分』

生地
- 卵　120ｇ
- 塩　1ｇ
- 油　20ｇ
- 強力粉　50ｇ
- 薄力粉　50ｇ

カボチャの餡（約26個分）
- 里川カボチャ　500ｇ
- 牛乳　200ｍｌ
- グラニュー糖　50ｇ
- バター　30ｇ

8





(6) 式次第 9：講評

2017 年度の授業改善の中核が「総合プレゼン講座」の新設であり、活動報告会のテーマを「取り組む・学ぶ・伝える」とした理由もここにあることは、本章冒頭に記した通りである。夏の集中講義に始まり、12 月 2 日のリハーサルでもご指導を戴いた（本書Ⅰ－2－(2)－②）渡辺しのぶ先生に、ご講評を戴いた（図 31）。ここに録音から文字化した全文を収載する。渡辺先生、ありがとうございました。来年度も引き続きのご指導を、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

図 31：渡辺先生ご講評

渡辺　しのぶ（ラシャンス代表）

渡辺

皆様、長い時間お疲れさまでございました。

ただいまご紹介いただきました渡辺しのぶと申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私からは、講評と申しますよりも感想ということで簡単にお話をしたいと思います。

まず、水戸農業高校の皆さん方、お疲れさまでした。１年生ということだけれども、非常にしっかりとした発表をしてくださって、特に、質疑応答の回答がとてもしっかりしていたので驚きました。堂々としていましたよね。

私がちょっと思ったのは、ポップオーバーってどういうものなのですか。

図 32：新堀先生ご説明

新堀

ポップオーバーなのですが、丸い型に生地を入れまして、オーブンで焼き上げますと膨らんでいきまして、中が空の状態で、軽めのお菓子になっております。その上に本来は里川カボチャの餡を塗って、外から見た状態でもカボチャを使っていますというアピールをしたかったのですが、なかなか膨れ上がるものの高さが統一できなかったのと、中が空洞だというのがなかなか消費者にうけるかどうかなというところがありまして、今回はレシピと試作の段階で中断をしました。

今後、もしかすると、外側からはわからないのですが、中側に里川カボチャの餡を使ってできれば、ポップオーバー商品化をちょっと進めようかなと思っております。以上です（図 32）。

渡辺

ありがとうございました。

私が知識がないのかもしれないのですが、どういう商品かがわからなかったので、写真とかがもしあったらもっとわかりやすくてよかったのかななんていうふうに思いました。

そして、学内での認知がされていないというのは非常にもったいないと思ったので、もっと活発に学内でも広めていくとよろしいのではないかなと思いました。

いいお話をありがとうございました。

大学生の皆様への感想なのですが、まず、今回、皆様方に、私、９月からいろいろとご指導させていただいて、そこで一番お伝えしたかったことというのがプレゼンテーションの語源って何なのかというところでしたよね。プレゼンテーションの語源はプレゼントをするというふうなことで、皆さんが話したいことを話すということではなくて、聞き手が本当に聞きたいと思っていること、もらってうれしいプレゼントをどうぞ送ってあげてほしいといったようなことをお話ししてきたかと思います。そういった意味で、皆様はいかがだったでしょうか。

きょう、いろいろな方々から質問が出ましたよね。その質問が出た内容というのが聞きたいことなわけです。どんな質問が出たかということは、皆さん、しっかりと覚えておいていただいて、メモを取っておいていただいて、次回はその内容を必ず盛り込んでいただきたいなんて思いました。

皆さんが話したいことイコール聞き手が聞きたいことではない。それは、皆さんがこれから就職活動をするときにもつながっていくことだと思うのです。皆さんが売り込みたいことと面接官が聞きたいことは違うというふうなことがありますので、望むものを提供していく、そういったことができると非常にいいのではないかなと思いました。

それから、今回、プロジェクト活動ということだったわけですが、プロジェクトの意味をもう一回捉え直していただきたい。プロジェクトというのは、何らかの目標を達成するために計画をするということを指しています。そして、小さな目標の達成のためのものではなく、大きな目標を集団で実行するということで、それがなっていたでしょうか。単発的にちょっと小さなイベントをやってみようということで終わってはいなかったか。そのあたりも少し考えていただけるといいかなと思いました。

それから、きょう、簡単につくったので、あまり見やすいものではないのですが、問題ということの捉え方です（図 33）。まず、左側のところが現状だとしたら、プロジェクト活動を進めるに当たってこういうふうなことを達成したいという目標をつくるわけですよね。目標とか目的をつくる。現状とその目標にはギャップがあるわけです。そのギャップが問題点であり、その問題点を一つ一つ解決していくというアクションが課題なわけですよね。ですから、もしかしたら目標設定が曖昧な状態だったので、クリアすべき課題・問題というものも不明確になっていたチームもあったのではないかなという気もいたしました。

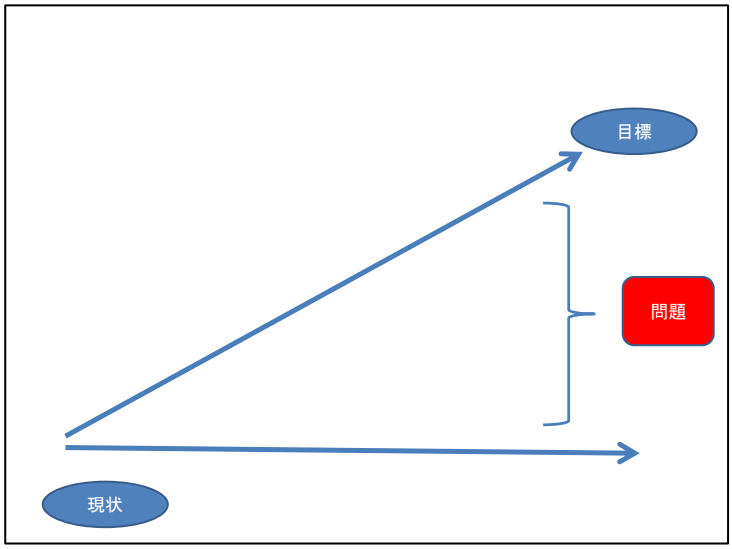


図 33: 渡辺先生の図

というふうなことで、そのあたりも少しまた皆様、振り返りをしていただくとよろしいのではないかと思いました。

全体を通しては、皆様方、発問できていました。発問というのは、発表者の方がギャラリーの方、聞き手の方に向かって投げかけている質問、それをすることで巻き込むことができるということでしたよね。そういったことはとても皆さんよくできていました。

それから、質問を受けたときにも、その質問を要約して復唱をする。そして、間違いがないかどうかの確認をするといったこともできていました。そういったところは非常によくできているなと思いました。

そして、何を学んだかということも、ほとんどのチームがしっかりとプレゼンテーションの中に入れることができていました。

では、簡単に、それぞれのチームごとにお話をいたしますと、まず、KITAIBA Art Project、トップバッターで非常に緊張したのではないかと思います。お疲れさまです。

こちらも笑顔がたくさん出ていましたし、アイコンタクトもたくさん出ていました。そして、成果ということで、90%以上のメンバーが帰属意識を持って、魅力を感じて、継続したいと思ったといったような結果も出ていました。

学びも、マナーを学んだとか、情報共有の重要性がわかったとか、そういったようなことで学びも出ていましたね。きちんとわかりました。

今後の展望も出ていたというところで、よかったかと思います。

強いて言うならばというところですと、頭上建築ですか、被り物を被っていてくれた人はいたのだけれども、どうせだったら皆さんの席の近くに行って見せてみるとか、そういったようなプレゼンも必要だったかなという気もいたしました。

あと、シビックプライドという言葉が出てきたのですが、それもわかる人はわかっても、わからない人は何？というところはあったと思うのです。できるだけ平易な言葉でお話をなさったほうがいいのかなと思いました。

それから、さとみ・あいさんは、6年目の取り組みということで、非常に積み上げてきたという印象がよかったです。全員でプレゼンをやっているという印象も非常によかったなと思います。大きな声で、笑顔もたくさん出ていました。そして、バスツアーであるとか、いろいろなイベントもなさっていたということですね。

実際にご自身たちでおだ掛けをしたお米を販売して、それが完売したといったようなことも実績として出ていましたし、また、糖度が14度というのがメロンと同じだとかといった比較を出していたところも非常にわかりやすいなと思いました。

そして、大きな気づきとしては、学生は注意を引きやすいのだというところに気づいていただいた。そこはとてもいいなと思ったのが、テレビ局から取材とかが来たのですよね。それが今回は受け身で取材を受けていたと思うのですが、注目されやすいということがわかったのであれば、今後はまたどんどん自分たちからテレビ局に売り込むといったようなこともしていただいてもいいのではないかなとも思いました。

それから、D-CEPさんは、アイスブレイクの意味とかをきちんとご説明をしてくださったり、そして異文化交流の重要性ということも伝えていただいた。そして、スライドのつくり方が非常にシンプルで見やすくて、わかりやすくてよかったなと思いました。グラフの活用をしたり、わかりやすい図解を使って表現していたというところもとても好感が持てました。

そして、学んだことということも整理されてお伝えになっていました。

ちょっと惜しかったかなと思ったのは、小学校と高校へのイベントを2つやったということなのですが、1年間のプロジェクト活動としてはボリュームとしてどうだったのだろうかというところなのです。そのあたり、1年を通してやったボリュームなのかな。

それから、質問で出ていた費用はどれくらいかかったのですかとか、費用として問題があったということだったので、そのご質問にもう少し明確に答えていただいたほうがよかったのかななんていうふうにも思いました。

そして、Domaine MITOさんです。商店街の発展のためにということで、こちらも非常にでき上がっているプロジェクトのようなイメージを受けました。社会に出たときにコミュニケーション力をつけたいといったようなことも希望としてお話しなさっていました。

今回行ったことは、リリースパーティー、それから、デパートの企画ものというふうなお話でしたよね。皆さんのプロジェクトとしては、試飲販売会とかリリースパーティー、具体的にどんな企画をしたのでしょうか。Domaine MITOさんのプロジェクトでは。ちょっとそのあたりが見えなかったのです。何となく話を聞いていると、商店街の方のDomaine MITOさんのお店に手伝いに行ってアルバイトをしているといったようなことしか伝わってきていないというところがあるので、実際にどういった企画を手掛けたのか、具体的におっしゃっていただいたほうがよかったかなと思いました。

そして、チームみなと☆ミライさんですね。こちらのほうも、ほしいもぷりんとかほしいも焼きそばということでいろいろとつくっていただいて、取材なども受けていたということで、頑張って活発な活動をなさっていたのだなという印象は受けたのですが、Twitterとかインスタとかでやっていらっしゃるということですが、実際フォロワーがどれくらいいるのかといったような実数とか、そういったものも出していただきたかったですね。

あとは、やはりここも質問で出ていたほしいもぷりんをつくったときのプロセス、どんなふうな苦労をして、どのように業者の方々などと関わり合っていったのか、そこを知りたいというところだと思いました。

そして最後、いばっピ団ですね。こちらも、ターゲットを絞って活動して、そして実際、足を運んで何度も打ち合わせをして意見を反映させてということで物をつくっていったというところはとてもすばらしい活動をなさっていたなと思いました。

アンケートを取った数も100人、ほかのチームは30人とか非常にパイが少なかったのですが、100人ぐらい取っていただくとそれなりの結果が出てくるかなと思いました。

惜しかったところは、何を学んだかといったところが抜けていたのと、チームの目的というところで、相手に伝える

力とか何とかの力をつけることが目的だとおっしゃっていたのですが、それは結果としてついた力だと思うのです。それが逆転している。目的はそこではないのではないかなという気がいたしました。

ということで、簡単ではございますが、私からは以上とさせていただきます。

皆さん、お疲れさまでした。

(7)式次第 7・10：投票－集計－表彰式

①投票－集計

式次第 6 の大学生チームによる報告が終了した時点で、会場スタッフを担当する歴史・文化遺産コースの学生、院生が投票用紙（図 14）の回収を行った。同じく会場スタッフが式次第 8 ならびに第 9 の間に、別室で本章 5-(3)に示した手はずに沿って集計を行った。「◎」を 3 点「○」を 1 点とした合計得点で、90 点を集めたチームみなと☆ミライが第二位、137 点を集めたさとみ・あいチームが第一位となった。

②表彰式

式次第 10 の学部長による総括と閉会挨拶に先立ち、採点結果の発表と上位 2 チームに対する表彰式が行われた。以下に、会場での録音から文字化した遣り取りを記す。

司会

プレゼンテーションの順位が決まりましたので、今から順位を発表いたします。それでは、まず、2 位から発表いたします。2 位のチームは、チームみなと☆ミライさんです。代表者の方はこちらまでお越しください。

佐川

改めまして、学部長の佐川と申します。本日はどうもありがとうございました。表彰に移りたいと思います。2 位と 1 位の表彰をさせていただきます。では、どうぞ（図 34）。

表彰状　チームみなと☆ミライ殿

貴チームは、平成 29 年度茨城大学人文社会科学部 PBL 授業プロジェクト実習活動報告会において、投票の結果、第 2 位となりました。ここにチームの活動を賞します。平成 29 年 11 月 9 日茨城大学人文社会科学部長佐川泰弘。どうもおめでとうございます。

図 34：チームみなと☆ミライ表彰

司会

おめでとうございます。続いて、1 位の発表です。1 位のチームは、さとみ・あいさんです。おめでとうございます。

佐川

では、これも全文読み上げます。表彰状　さとみ・あい殿。貴チームは、平成 29 年度茨城大学人文社会科学部 PBL 授業プロジェクト実習活動報告会において、投票の結果、第 1 位となりました。ここにチームの活動を賞します。平成 29 年 11 月 9 日、茨城大学人文社会科学部長佐川泰弘。おめでとうございます（図 35）。

図 35：さとみ・あい表彰

(8)式次第 10：総括と閉会挨拶

佐川　泰弘（人文学部学部長）

少しだけお時間をいただいて、総括的なお話をさせていただきたいと思います。

先ほど、冒頭に、副学部長、それから鈴木先生、担当いただいています先生方からご挨拶もありましたが、改めまし

て、この授業自体の趣旨というよりは、大学としてみたいなお話を少しさせていただきたいと思います。

恐らく、どこの大学もこういう傾向が今あると思いますが、国を挙げて地方創生というようなことがあって、多くの地方にある大学は、学生に、ある意味、地域志向を植え付けるみたいな、植え付けろみたいなことが目標になっているようなところがあると思います。

図 36:佐川学部長講評

その具体的な中身を申し上げますと、特に、人口が減っていることに起因して、地方創生を政策のパッケージとして打ち出しまして、地方で働く、あるいは地方に住む若者をどうやって増やしていくかということを課題として設定して、茨城県もそれに沿って今動いております。

例えば、東京ではなくて、茨城県に住み、働いてもらう人をどうつくるのかみたいなことです。その文脈で言えば、大学に対しても、ぜひ協力をとか、そういう教育をやってほしいというような要請も受けているところであります。

私たち大学というのは独自の機関でありますから、その要請にストレートに100%応えていくのがそもそもの目的ではありませんが、別に出しておりますように、近年、ディプロマポリシーを定めろという中で、うちの大学も地域活性化志向を持つような学生を育てましょうとか、あるいは、職業人や市民として、さらには、そのためにこういう能力を身につけるということを掲げてやっているところでございます。

171209　プロジェクト実習報告会

1．地方創生と大学の地域志向

・地方創生→人口問題に起因。地方で働く。地方に住む若者を。例えば、東京ではなく、茨城で。大学も協力を。

・茨城大学のディプロマ・ポリシー
学生は卒業後、必ずどこかの地域に住み、働く。その自覚を。
そこから何を売り出すか？（資源）
そこで何をどう売るか？　（ニーズ）
市民・住民として
複数の大学、高校との協働

図 37:佐川学部長スライド(1)

もうちょっと学生の皆さんにもわかるように噛み砕いて言いますと、いつも私、いろいろな場面で申し上げているのですが、皆さん、卒業したら、別に茨城でなくてもいいです、世界のどこかの地域で必ず住むことになるし、必ず働くことになるわけです。それは東京かもしれませんし、外国かもしれませんし、茨城県のどこかかもしれません。いずれにしても、例えば、公務員になろうと、あるいは会社勤めをしようと、地域を見る目が必要だということです。

1つは、そこにいろいろな資源が多分あると思いますから、その資源をもとに、何を皆さんが生かして商品として売ろうとするかといった発想が必要だということ。

それから、2つ目に、例えば、東京の会社に勤めているのだけれども、茨城がマーケットだとすると、茨城で何を売れば売れるのか。つまり、そこの地域を分析する力が必要だということ。

それから、どこに住んでも、そこで市民や住民として頑張っていかなければいけないという側面があります。例えば、自治会とか町内会とかという活動もありますが、どこも主体となっている方々は非常に高齢化していて、その機能を維持することが難しくなっている。そういう中で、市民や住民としてどういう役割を果たしていくかという視点もぜひ持ってもらいたい。

そういう意味で、私たち、あるいは私の学部は教育を行い、あるいは教育の改革を行なってきているわけでございます。

さらに、できればこういったことを一大学一学部ではなくて、地域のいろいろな大学と、それから高校生の皆さんともできればタッグを組んでやっていこうということで、この間、取り組んできています。このことをまずご理解いただければと思います。

その上で、渡辺先生の話と被るところがあるのですが、きょうの皆さんの発表を聞いていて思ったことをお話を少しさせていただきます。

複数の他大学の先生方からも質問がありましたが、この授業の難しさみたいなところで言うと、PBL が、Project Based なのか Problem Based なのかというあたりです。この授業を長年やっていて、そこは非常に悩ましくて、担当いただいている先生にもご苦労をかけているのですが、実は、鈴木先生は中国考古学がご専門、それから神田先生はフランス文学がご専門ということで、私が社会科学系の人間なのですが、ずっとおんぶに抱っこではなくて、おんぶしまくっているような側で大変ご苦労をおかけしているのですが、まちづくりとか公共政策をそもそもご専門にされているわけでもなく、あるいは、そういう学生を集めてまちづくりをどうするかということの授業をやっているのはなく、本

当の専門は別のところにある学生も非常に多い中で、地域活性化志向とか、あるいは、社会にどう出ていくのということを考えてつくってきた授業だということなのです。

その中で、確かにプロジェクトなのだけれども、Problem Based で、問題を本当にどう解決するのというところまで突っ込めているかといったら、なかなか難しいというのが現状で、教員資源をどう生かして、どういう教育をやっていくのかということも含めて、まだまだ悩み多きところだというところでございます。ちょっと言い訳になっていますが。

さらに、これは専門の授業ではなくて、オプションの授業です。オプションの授業だということもありまして、どこまでを授業としての到達目標とするかということも難しいところがございます。

その結果、先生方からの質問も出ていましたが、プロジェクトや授業としての成果はどこなのということよりも、発表の中で学びとしての振り返りみたいなところが結構出ていたと思います。

2．プロジェクト（事業）としての成果 < 学びとしての振り返り

・（他大学の先生方からのご質問のとおり）Project Based か Ploblem Based か。
基本はProject Based。授業の設定自体の難しさ。専門性との関わりは必ずしも追求していない。
・さらに授業であるがゆえに、「プロジェクト（事業）としての成果 < 学びとしての振り返り」という傾向。
・事業自体の成果は何か？さらに、そもそもの課題（最終目標）との関係で。
実質半年、地域の方とは一期一会というところもあり難しいが、成果を示すエビデンスも必要。
各学生にとっては初めての参加であったとしても、継続しているチームは、前年度よりどうバージョンアップしたか。
アウトプット（イベント等事業の直接的な成果）とアウトカム（それが本来の課題解決、大目標にどう寄与したのか）をつなげるロジック。

＝各取組が、大きな問題解決にどうつながるのか（渡辺先生のスライド図）。

図 38：佐川学部長スライド(2)

それは、ある意味、やむを得ないところはあるのですが、これからのために学生の皆さんに少しお話をしておくと、これは渡辺先生がおっしゃったことをもうちょっと別の観点からということになるのですが、いろいろな取り組みをやっていますよね。事業をやっていますが、その成果は何なのかということをばっちり示そう。さらにそれが最終目標とかもっと大きな目標との関係でどう有効なのかというところは考えていますかということです。

実際、この授業でグループをつくって半年ぐらい。さらに、地域の方々との関係では一期一会みたいなところがあるかと思いますが、今、世の中で求められているのは、成果を、できれば数値化も含めて、エビデンス、証拠でもって示していこうという態度を常に忘れないでいただきたいということが一つ。

それから、順不同になりますが、特に、今回優勝したさとみ・あいのチームは長くやっていますが、私は何年も結果だけ聞いている立場からですが、去年はここまで行った、今年の目標はここに設定をしていて、これだけ伸びました、伸ばしましたとか、そういう経年、時間の軸も含めたことも言っていただければよりよかったかなというような感じは持っています。

それと、これも渡辺先生の話と被るのですが、イベントや取り組みをやりました、それでこういうアウトプットを出しました、これは皆さんやられていたと思います。さらに、先ほどの渡辺先生のグラフにあったように、そのこと自体がもっと大きな最終目標との関係でどう寄与しているということになっているのと。

例えば、地域を活性化するいう大きな目標があったときに、私たちがこれをやりました。それ自体はもちろん意味があることなのですが、そのことと大きな目標との関係、ロジックをちゃんと考えて、こうやったことが大目標の解決にこんなふうに寄与していると思いますみたいなことをもうちょっと言えないか、言えるかというところがこれからの勝負どころかという印象を持っております。

そのこと自体は、恐らく、会社に入って、営業とか企画とかをやってくときにプレゼンをするわけですが、こういうことをやったらこんな成果になって、会社の業績もこんなに上がるとともに、社会の皆さんがこんなにハッピーになりますとか、そういうプレゼンをやらなければいけない。公務員になっても、行政もいっぱいいろいろな事業をやるわけですが、このことが将来的にはもっと大きく言えばこういうことにつながっているのですというような関係を説明しなければいけないという場面に恐らく遭遇すると思いますので、そのための訓練だと思って臨んでいただければと思います。

それから、もう一つ、今回、今年の授業の大きな位置づけとして、最終段階、伝えるということだというふうに鈴木先生が冒頭におっしゃいました。そのこととの関係で言えば、「さとみ・あい」は非常に高いレベルに達していて、そのことがこの評価につながったと恐らく思います。

というのは、いろいろなことを一方で極めて具体的に例を出して示す。その上で、それをより一般化・抽象化したらこういう言葉で表現できるというような具体と抽象みたいなところを両方入れて話ができていたのかなと。しかも、それを自分の言葉で。そこが優れていた点であり、評価されて、それで結果を出せたところが高得点につながったのだと感じたところでございます。

本当の最後になりますが、実際、この授業を長くやっていて、ここでこの授業を終えた皆さんの先輩がどうなっているのかという話なのですが、ここにもきょう、院生の方がいらっしゃっていましたが、うちの学部生はご承知かと思い

ますが、別の授業で地域連携なんていう授業がありまして、そこには県の経営者協会の県内の会社の社長さんなんかがよく来られるのですが、そういう方から、うちの会社には何とかさんが来てくれて、すごく今頑張ってくれていますみたいな話があるのだけれども、よく思い出してみると、割と有名な人もいますので、ああプロジェクト実習でこんな場面でこんなことをやっていたあの人だよね、あの人だったら多分どこへ行っても大丈夫だよみたいな感じで、私も学部長を長くやっているといろいろつながってくるところがあります。

というところで、とにかくこういうことをやることが、いろいろ言われて言われて頑張らなければということなのですが、皆さんをどういう職場に行っても活躍できる、通用する人に育てていっていると思います。ですので、ぜひ自信を持って臨んでいって、これからも勉強、あるいは社会に出ていく準備を行なっていただきたいと思います。

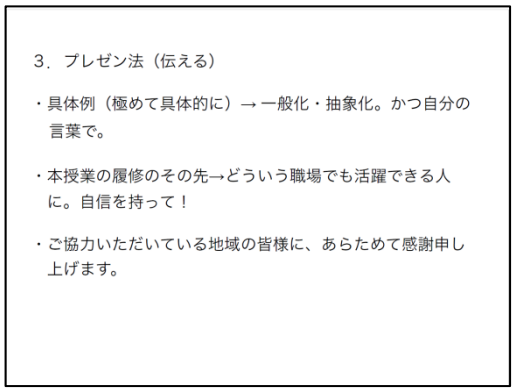


図 39：佐川学部長スライド(3)

それから、最後に、特にこちらにいらっしゃる皆さん方だと思いますが、ずっと長い間ご協力をいただいていて、大変感謝に耐えない、お礼を申し上げたいと思います。

冒頭に副学部長が申し上げましたが、来年度からちょっと授業の名前とかが変わるところはあるのですが、引き続き、こういう性格・性質の授業を、本学部としては続けていきたいと思っておりますので、また懲りずにぜひお付き合いいただければとお願い申し上げます。

それから、いろいろ提案いただいたけれども、お応えしきれなかった事業もたくさんあるということでございますので、もうちょっと教員もここに頑張って入れて、もう少し大規模な形の授業か、あるいはこういう報告会等をできればやっていきたいと私としては考えているところでございますので、また来年度以降もご支援・ご協力いただければ幸いに存じます。

ちょっと時間をオーバーしましたが、以上で、まとめ、講評、閉会の挨拶とさせていただきます。

どうもきょうは長時間にわたりましてありがとうございました。

(9)司会担当

昨年度に引き続き、履修生自身が司会を担当することとした。運用の枠組みも、基本的に昨年度の枠組みを踏襲した。具体的には、以下の通りである。

①会を 4 つのブロックに分けて学生と生徒計 8 人が二人一組で担当する
②単なる呼び出しではなく、チーム発表が終わる度に報告を踏まえたコメントを加える
③人選自体はチームに任せる
④「ペアの構成と担当ブロック」については、筆者が「各ブロックの特性」と「各人の個性」を勘案して割り振る

以下に各ブロックの特性と担当者名を記す。式次第の詳細は、図 6－下を参照されたい。

今年度は、大学生は全員 2 年生、高校生に至っては 1 年生が担当することとなった。教員としては不安なしとしない体制であったが、蓋を開けてみれば各人がしっかりと対応して危なげなく会を運営してくれた。

第一ブロック（開会～評価の観点と投票方法の説明）

責務：会のスタートであり会全体に関わる連絡事項も多いが、遅刻入場者もあって冒頭はざわついている。開会直後は会場の雰囲気も硬い。「明確な開会宣言並びに確実な情報伝達」と「会場のアイスブレイク」という、相反する責務を同時並行でこなさねばならない。

担当：川田綾香（図 40 右・茨城大学 2 年）
山本麻由（図 40 左・茨城キリスト教大学 2 年）

図 40

第二ブロック（プロジェクト実習活動報告第一部）

責務：会場の雰囲気は和らいできている。一方で、3 チームそれぞれの報告の勘所をその場で理解し・ペアの高校生をエスコートしつつ・当を得たコメントを出さねばならない。

担当：小宮山弥来（図 41 右・茨城大学 2 年）
髙土　夏花（図 41 左・県立水戸農業高等学校 1 年）

図 41

第三ブロック（プロジェクト実習活動報告第二部～投票）

責務：休憩を挟み、「第二の開会」とも言える。会場には、ややダレが出てくるタイミングでもある。その中で「会の再起動」並びに第二ブロックと同様に「報告内容の即時理解・然るべきコメント」という大役を担うことになる。

担当：塩畑見咲（図 42 右・茨城大学 2 年）
神田紗帆（図 42 左・茨城大学 2 年）

図 42

第四ブロック（水戸農業高等学校活動報告～表彰式・総括と閉会挨拶）

責務：会全体の締めくくりであり、登壇者も概して「肩書きが重い」。会場にも疲れが見えてくる中、会の終了時刻を睨んで時間調整を強く意識した臨機応変の差配が求められる。

担当：今川菜津美（図 43 右・茨城大学 2 年）
鈴木　真由（図 43 左・茨城大学 2 年）

図 43

(10)報告会を終えて

今年度の活動報告会も、多くの方々のご支援を戴いて盛況の内に終えることができました。皆様に篤く御礼申し上げます。

今年も北は仙台から西は金沢まで、多くの先生方にお越し戴くことができました。今年度から活動報告書が WEB ベースでの刊行となるため、どこまでお名前を記してよいものか判断に迷う所もあり、曖昧な言及となりますことをご諒恕戴ければ幸いです。学部長の総括にもございますように、プロジェクト実習は「本来の専門外の教員が地域とのつながりの中で PBL 授業を運営し、様々な専攻の学生に社会人基礎力を身につけてもらおう」という、かなり無理のある構造の授業です。それにも関わらず、遠路お運び戴き鋭い質問をお寄せいただけましたことは大変ありがたく、心より御礼申し上げます。

プロジェクト課題ご提案者の皆様、ならびに学生チームの活動にご協力下さった皆様、今年度も大変お世話になりました。篤く御礼申し上げます。お陰様で、学生たちは通常の授業では得られない広くて深い学びの場をご提供戴くことができました。それをどこまで活かせるかは、学生それぞれのこの一年間の取組、さらには今後の取組にかかっております。引き続き、暖かく見守ってやって戴ければ幸甚に存じます。

卒業生の皆さん、今年も年末のとりわけ忙しい時期にも関わらず、後輩たちの「晴れの場」に駆けつけて下さり、ありがとうございました。副学部長のお話にもありましたように、プロジェクト実習は来年度から授業としての位置づけや運用形態に変更が生じます。しかし、皆さんの記憶にあるであろう「あの、プロジェクト実習という学びの場のイメージ」はしっかりと継続させていきたいと思っています。今後とも、どうぞ宜しくお願い致します。

まだまだ御礼を申し述べねばならない方々は多いが、もはや紙幅も尽きた。いわゆる「属人的授業」としての足元の弱さという不安は、依然として改善される見込みもないが、幸いにして学内・学外の沢山の方々のご支援がある。引き続き、地道な取り組みを続けて行きたい。

Ⅳ：成果と課題

Ⅳ：成果と課題

鈴木　敦

人文学部は、2017 年 4 月を以て人文社会科学部へと改組された。これに伴い就業力育成支援 PBL 科目「プロジェクト実習」も、「人文学部根力育成プログラム」を構成する一科目から、新たに設定されたサブメジャー専用プログラム「人文社会科学部地域志向教育プログラム」の一科目へと位置づけを改められることとなった。同科目は 2 年次生以上向けの専門科目であることから、今年度が人文学部プロジェクト実習として最後の年となった。

例年この報告書の「成果と課題」の章では、＜当該年度の＞成果と課題を総括して来たが、今年度は上記の事情を踏まえて、初開講以来 6 年間全体を総括する独立の文章を「教育・研究ノート」としてまとめることができた。

（鈴木敦・神田大吾「就業力育成支援 PBL 科目『プロジェクト実習』の 6 年―地域志向教育科目『プロジェクト演習』への移行に向けてー」茨城大学人文社会科学部紀要『人文コミュニケーション論集』第 2 号　2018 年 3 月 http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/bitstream/10109/13525/1/20170213.pdf　）

ついては、今年度の「成果と課題」においては、重複を避けて同文章から第Ⅲ章「プロジェクト実習 6 年間の成果と課題」を切り出して再録することを以て代えることとする。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Ⅲ：プロジェクト実習 6 年間の成果と課題

１：PBL 技法の導入と質の向上を巡って

筆者らが就業力 GP の申請書をまとめていた 2009 年度末の時点では、アクティブ・ラーニングという概念も、その一種である PBL という技法も広く知られているとは言い難い状況であった。しかしその後、2012 年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けてー生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へー」（注 28）において「学士課程教育の質的転換」が求められ、アクティブ・ラーニングの重要性が強調されて以降、日本の高等教育界に急激に広まって今日に至っている。

この流れを受けて、アクティブ・ラーニングの一種である PBL 技法を用いた授業に求められる内容も「曲がりなりにも開講する」段階から「教育内容の充実」段階を経て、いよいよ「成績評価の客観性確保」段階に至っていると認識している。「ディープアクティブラーニング」が語られ「ポートフォリオ」さらに「ルーブリック」の効用が喧伝され・・・と、ここ数年での教育学分野の動きはかつてなく活発であると感じられる。

一方で本学プロジェクト実習は教育学の専門的トレーニングを経ていない教員によって設計・運用され（注 29）、専門家の指導・支援も受けられない環境下にある。「曲がりなりにも開講し」素人なりに「教育内容の充実」への努力を積み重ねて今日に至っているが、「成績評価の客観性確保」に関しては、僅かに学生の相互評価ツール（図 14）（注 30）の改善を進めているに留まる。道のりはなお遠いと認めざるを得ない。

チーム内相互評価表　　評価者名：

この表は「チーム内メンバー同士」での相互評価用です。**自分自身を含めて**貢献度が高いと判断した人から順に氏名と役割分担を記入して下さい。隣接する上位と下位の間隔を、それぞれ1～5の数値で記して下さい。その際、**「同一順位」は厳禁**です。また、最上位から最下位まで間隔が全て同一、というのも通常はあり得ません。評価欄の記述内容と整合が取れるよう十分意を用いつつ、大小のメリハリを効かせた数値を定めて下さい。2位以下の人の評価文には、**「すぐ前の人(2位の人なら1位、3位の人なら2位)との間隔(1～5)の判断根拠」**も必ず記して下さい。

皆さんにとっては、将来「管理者・評価者」として「公平・公正な評価」を下せるようになるためのトレーニングになります。仲良しを贔屓せず、自分のことも変に謙遜せず、ひたすら「公平・公正な評価」に努めて下さい。皆さんから提出された相互評価表の、担当教員にとっての意義は2つあります。1つは、担当教員が評価を下すに当たって、客観性を高めるための参考資料。もう一つは、提出者の「公平・公正な評価能力」を評価するための判断材料です。つまり、**「評価を下した皆さん自身が、自らが下した評価の公平性・公正性によって評価される」**ということです。恐らく、今回の授業で一番イヤ～な作業になると思いますが、頑張ってください！

順位	氏　名	役割分担	評　　価	間隔(1～5)	TOTAL
1(高)					0
2					0
3					0
4					0
5					0
6					0
7(低)					0

＊チームの人数が多くて、この表に収まらない時は、適宜追加して下さい。

図 14:チーム内相互評価表

２：本学水戸キャンパスにおける教育施設整備の進捗

アクティブ・ラーニング、特に PBL 授業においては

①学生のミーティングや各種作業の場

②チーム活動に必要な物品の安全な保管場所

が不可欠である。本学水戸キャンパスでは、厳しい財政事情にも拘わらず図書館へのラーニングコモンズの新設や共通教育棟での教室改造など、①に対応した施設整備が急速に進められている。②に関しても、ことプロジェクト実習に関しては学部内に専用のスペース（約 20 ㎡）が与えられており、現時点では大変恵まれた環境にある。

しかし、今後については予断を許さない。プロジェクト実習の履修生数は開講初期の乱高下の後、緩やかに増加し続けており、2017 年度は約 60 名に達した（注 31）。2018 年度からは今春の改組第一期生が履修生の主力となる。その履修動向は現時点では予想しがたいが、仮にこれまで同様ないしそれ以上の履修生が生じた場合には、歴年の成果物の蓄積と相俟って手狭となって来る可能性が高い。引き続きの施設整備促進を御願いしたい。

３：予算措置

前述の如く、学内の各レベルから戴いたご支援と学生による外部予算獲得の努力により、大学全体が厳しい財政状況にあるにも拘わらず、プロジェクト実習は一般的な授業に比して恵まれた予算額を背景に運営されている。

しかし、これらの予算の多くは担当教員が毎年多大な労力を投入して各種申請を行い「かき集めて来た」ものであり、社会情勢の変化や申請書の出来不出来によって容易に激減しうる危うさを内包している。これまでそれなりの「予算額」を確保できている一方で、プロジェクト実習が安定した「財政基盤」を持っているとは言い難い状況である。2018 年度からの授業の位置づけ変更により、純然たる人文社会科学部の授業となることもあり、今後は学部として安定した財政基

盤を保証して戴きたい所であるが、その困難さもまた容易に想像しうる。今暫くは、足元に不安を抱えながらの運用に耐えてゆく必要があろう。

４：外部協力者との関係

幸いにしてご理解ある多くの外部協力者に恵まれ、この 6 年間で様々なレベルでの建設的な連携関係を構築することができた。プロジェクト課題ご提案者の皆様については本稿Ⅱ－１－(6)、連携大学・高校については同(7)の記述に譲り、ここでは常陸太田市ならびに同市里美地区の方々との関係に絞って記す。

常陸太田市里美地区との連携開始の事情は、既に本稿Ⅰ－4 に記した。蜂屋准教授の転出後を引き継いだのが鈴木であり、以来今日まで常陸太田市役所ならびに里美地区住民の皆様との緊密な関係が維持されている。この間、取り組みの対象は里川町の在来作物である里川カボチャのブランド化（注 32）に加えて、2016 年度からは大中町での稲作ならびに納豆用藁の生産へと拡大した（注 33)。同地区をフィールドとするプロジェクト実習 B「さとみ・あいチーム」はプロジェクト実習開講時から現在まで、メンバーが入れ替わりながら途切れることなく継続している。ご多分に漏れず、ここでも「貢献」より協力者の方々に「お世話になる」局面の方が多いのであるが、現地の方々と学生たちの間には「授業」の枠組みを超えた、あたかも祖父母と孫たちのような親密なお付き合いが生まれている。「大学生」という「永遠に老けず・急激な人口減少も生じない特異な若者集団」が持つ地域貢献の可能性について、様々な角度から再認識する場となっている。

５：運営体制　－「地域の信頼」の視点から－

いくつかのリスク要因を抱えつつも、概して順調に歩みを進めて来たプロジェクト実習であるが、未解決にして最大の課題は「組織としての運営体制の欠如」、換言すれば「プロジェクト実習の属人授業化」である。

プロジェクト実習運営の中核を担ってきたのは、就業力 GP 以来の流れで根力育成プログラム廃止後も担当を続けている鈴木と、かつて鈴木の窮状を見かねて加わってくれ、そのまま今に至っている神田の二名である。副担当教員や顧問教員としてご協力下さっている先生方は、過去においてもまた現在にあっても、神田・鈴木の「個人的な」依頼を容れて下さっての「ボランティア」である。担当者の処遇と補充について大学組織としての正式な取り決めはなく、神田・鈴木のいずれかに「事故」があれば忽ち運営が頓挫するという典型的な「属人授業」状態のまま、今日に至っている。

茨城大学に限らず、昨今の大学においては教員数の削減圧力が高く、教員の転出や定年退職後に後任が補充されず、当該教員が担っていた教育・研究分野がその大学から消滅してしまうことも決して珍しくない。学生にとって、また大学組織にとって大きな痛手であることは言を俟たないが、敢えて乱暴な言い方をすれば、学内完結型の一般的な授業であれば、それは所詮「学内問題」の域を出ない。

一方で、プロジェクト実習を含め、近年多くの大学で盛んに開講されるようになったいわゆる「地域連携型授業」は、地域の方々の当該大学に対する信頼感に裏打ちされたご協力があって初めて成立するものである。担当教員の喪失等「大学の都合」による突然の中断は、それまで協力して下さった地域の方々の「思い」を裏切り、大学に対する地域の信用を大きく傷つけるという事態を招く。地域連携型授業は、「大学の授業」ではあるが決して「大学だけの授業」ではないのである。「地域と共に」という姿勢を強く打ち出している地方国立大学においては、このことをとりわけ深刻に認識しなければならない。

注 8 所引の聖泉大学・学びのフリーマーケットに、鈴木はかつて二度に亘って足を運んだ。JR の無人駅から人気のない小さな町に降り立ち、一面の水田の中をとぼとぼと歩いて辿り着いた小さなキャンパスには、一転して地域の方々の笑顔と熱気が溢れ、学生達がきびきびと動き回っていた。学びのフリーマーケット廃止を受けての、域－学関係のその後が気掛かりである。

プロジェクト実習に止まらず、今後本学が地域連携型授業を新設－継続－発展させて行くに当たっては、その不可欠の前提である「組織的運営体制の整備」を強力に推進されることを、切に御願いするものである。

注

8：有山教授が創始された「地域力循環型キャリア教育プログラム（CLCP）」は、地方の小規模私立大学における地域連携型キャリア教育のモデルとも言うべき存在であった。しかし同教授の転出から僅か 2 年後の 2014 年度を最後に、カリキュラムの中核を成す「学びのフリーマーケット」が廃止され、基本的に学内で完結する体制へと大きく変容してしまった。
http://shinken-ad.co.jp/between/backnumber/pdf/2011_10_tokushuu04.pdf
http://inamachi.blog.fc2.com/blog-entry-236.html
http://ci.nii.ac.jp/els/contentscinii_20171029110407.pdf?id=ART0010028096
http://ci.nii.ac.jp/els/contents110009841852.pdf?id=ART0010355646

28：中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて－生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ－」（2012 年 8 月 26 日）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1319183.htm
具体的には、社会情勢の変化ならびに大学のユニバーサル化を踏まえて「学士課程教育の質的転換」が求められるとし、「質の高い学士教育」像を「教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生同士が切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）によって、学生の思考力や表現力を引き出し、その知性を鍛える双方向の講義、演習、実験、実習や実技等の授業を中心とした教育」と規定している。

29：神田の専門はフランス文学であり、鈴木の専門は中国考古学である。副担当教員・顧問教員を含め、これまでプロジェクト実習に教育学の専門家の本格的な参加が得られた例は、残念ながら皆無である。

30：2017 年度改訂の最新版を示す。

31：連携する茨城キリスト教大学、常磐大学からの単位互換学生、ならびに茨城キリスト教大学開講の本学プロジェクト実習 C 相当授業の受講生を含む。

32：里川カボチャならびにさとみ・あいチームの活動については、これまで幾度もマスコミで報道されている。ここではプロジェクト課題である「里川カボチャのブランド化」にとって一つの到達点と言える、『いばらき食彩カタログ』21 ページへの掲載を以て代表例とする。
http://www.ibaraki-shokusai.net/season/2016/0330/digitalbook/#target/page_no=21

33：「納豆向けのわら作り　常陸太田　大学生ら＜おだ掛け＞」『茨城新聞』2016 年 10 月 1 日
「納豆の稲わら不足　危機感　確保へ協議会設立」『朝日新聞』茨城版 2017 年 7 月 21 日

おわりに

神田　大吾

学生は、大学に入って初めて「他者」と出会います。高校までの同質な世界とは異なり、出身県も異なれば、年齢も違い、授業ごとに異なる「同級生」たちに囲まれて、緊張に顔をこわばらせながら、少しずつ新たな環境に慣れていきます。そして 2 年次になって履修するプロジェクト実習では、社会で働いている「大人」と接し、意見を交換し、チームで取り組んだ課題に成果を出さなければなりません。こうして彼らは社会人となる心の準備をしていくのです。

2017 年度は北茨城市、常陸太田市、日立市、水戸市、ひたちなか市において、プロジェクト実習 A～D の学生たちは多彩な活動を行いました。中には前年度から継続の活動もありましたが参加メンバーは大きく入れ替わり、全てが新しい活動であったと言えます。いずれの活動におきましても、学生たちは真摯にプロジェクト課題に取り組みつつも、行きつ戻りつ、試行錯誤を繰り返しました。それでも一定の成果を収めることができましたのは、ひとえに大学内外のご協力者の皆様方のご理解とご支援の賜物です。PBL 授業の趣旨に沿って、辛抱強く学生チームの活動を支えて下さいましたことに、担当教員一同、厚く御礼申し上げます。

茨城大学では 2017 年度入学生よりカリキュラムが大幅に変わり、就業力育成支援事業と根力（ねぢから）育成プログラムはその役割を終えることとなり、同プログラムに位置するプロジェクト実習も 2017 年度が最後の年となりました。2018 年 4 月からは新カリキュラムのサブメジャーの一つ、人文社会科学部地域志向教育プログラムに位置する「プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」が新たに開講されます。過去 6 年間に「プロジェクト実習」で積み重ねた経験をこの科目に継承しつつ、新しい教育課程に対応してどこまで実り豊かな教育を行えるか、担当教員はまさに正念場を迎えます。関係の皆様の引き続きのご協力とご助力を何卒よろしくお願い申し上げます。

2017 年度　根力育成プログラム

「プロジェクト実習」

活動報告書

平成 30 年（2018）3 月 30 日刊行

編集　神田大吾　鈴木敦
発行　茨城大学人文社会科学部根力育成プログラム小委員会

〒310-8512　茨城県水戸市文京 2-1-1
茨城大学人文社会科学部
e-mail　atsushi.suzuki.8115@vc.ibaraki.ac.jp